

—甲府盆地西部における弥生時代後期方形周溝墓群—

十五所遺跡

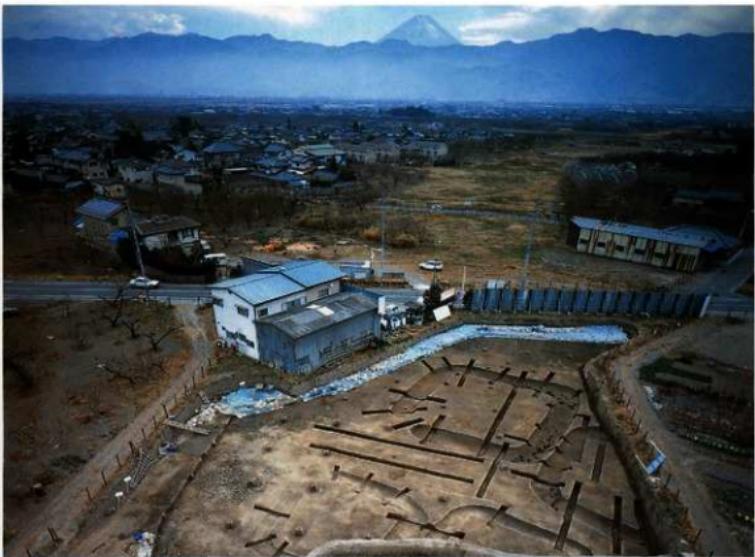
一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999・3

山 梨 県 教 育 委 員 会
建 設 省 甲 府 工 事 事 務 所
日 本 道 路 公 団 東 京 建 設 局



十五所遺跡遠景(北から)



I 区南方形周溝墓群(北から)

巻頭図版 2



9号方形周溝墓・3号住居跡(東から)



10号方形周溝墓(南から)



III区全景(北から)



12号住居跡錐形土器出土状況

巻頭図版 4



10号方形周溝墓主体部(西から)



10号方形周溝墓主体部西側(南東から)



十五所遺跡出土壺形土器



十五所遺跡出土小型壺形土器

巻頭資料 1

発掘調査範囲の耕作された土を重機で削ります。地面に凸凹が無く平らに削れるかどうかが、重機の運転手(オペレーター)の腕の見せ所です。



重機で削った地表をジョレン(鋤籠)やテガンナ(手鉋)などで更に平らに削って、墓跡や住居跡の痕跡を見つけます。

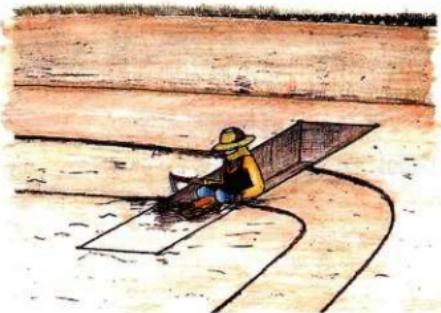


墓跡や住居跡のおおよその形が判ったら、作業員が作業しやすいようにするために白いスプレー・ペンキや白いテープなどを使って地面に形を示します。

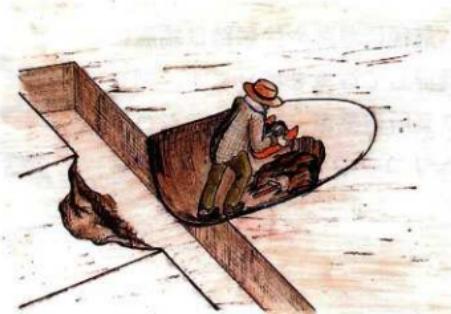


発掘調査の手順(1)

いろいろな種類の土が複雑に堆積しているので、墓跡や住居跡の深さや断面の形を間違えないようにするために、確認用の溝(トレンチ)を掘ります。



トレンチで墓跡や住居跡の深さや断面の形が明らかになったら、上面か徐々に掘り下げていきます。発見された土器はその場に残しておきます。



必要に応じて溝跡などの断面の土の状態を図面にとり、その溝跡などの埋まり方を考える材料にします。



発掘調査の手順(2)

巻頭資料 3

墓跡や住居跡を全部掘り終わったら、それらの形や掘り出された土器などを測量機材を使って図面に記録します。



最後に墓跡や住居跡は綺麗に清掃して写真を撮ります。脚立や高所作業車、時にはラジコンヘリコプターなども利用します。



発掘調査の手順(3)



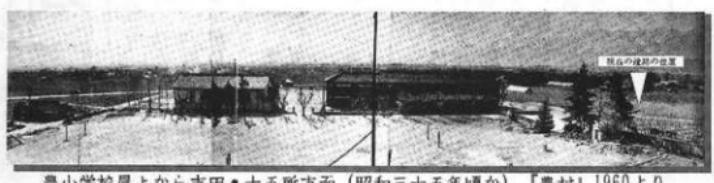
十五所物語

豊小学校屋上から吉田・十五所方面
昭和三十五年頃か

十五所の由来

平成六年五月上旬から中巨摩郡柳町十五所（旧豊村十五所）で国道五十二号甲西バイパスの建設に伴う遺跡の発掘調査が開始された。この遺跡を「十五所遺跡」と呼ぶ。「十五所」とは不思議な名前だが、我々が「じゅうごしょ」と読むのに対して発掘に参加してくれてゐる地元の方々は「じゅうごせ」と發音する。その二つの發音が示すように地名には二つの由来がある。豊村の郷社である諏訪神社と他の十四柱の神を合祀して十五所明神としたことによるという説、御駒後川の氾濫で十五条の瀬を生じたことによるという説。実際に遺跡を覆う土を剥いで膨大な量の砂利の堆積を目あたりにしたり、また地元の方々の自然な「せ」という発音から考へると素人考へながら「瀬」説に気持ちかなびく。そう、今からは「じゅうごせ」と呼ぶことにしたい。この地域は下の写真を見ておも、昔は桑畠しかなく、砂利が多いあまり豊かではない屬状地帯だったようだ。古代からの人々の苦勞が偲ばれる。さて「じゅうごせいせき」とは、如何なる遺跡なのだろうか。（続く）

（続く）



豊小学校屋上から吉田・十五所方面（昭和三十五年頃か）『豊村』1960より

十五所物語

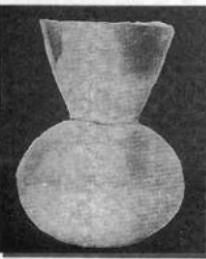
豊小学校屋上から吉田・十五所方面
昭和三十五年七月七日

初の十五所遺跡をよめて（一上）

昭和三十四年三月二十七日夜半、豊小学校は火災により焼失します。しかし同年八月には新校舎の基礎工事を着工することとなりました。その際「地表から約一メートル位下」（中略）此地方で瓦の原料とする粘土状の地質学上の洪積層の上部から、底の裏側に木葉の押紋がある土器の底部と、他に數箇の箇痕の土器片が出土した。そして「土器を見るに、東京都板橋区前野町遺跡から出土した土器、即ち、前野町式土器に似て十五所明神としたことによる」という説、御駒後川の氾濫で十五条の瀬を生じたことによるという出来事があつたようです。これが十五所遺跡が初めて紹介された例でしよう。更に同じ文献の中で「十五所の古屋敷から古墳時代の板部土器（須恵器の俗称）は土器は、弥生文化の最後に置かれていた」（昭和三十五年刊『豊村』より）という出来事があつたようです。これが十五所遺跡が初めて紹介された例でしよう。更に同じ文献の中で「十五所の古屋敷から古墳時代の板部土器（須恵器の俗称）は土器（著者の勘違いか）の最も古い時期の始が出土している」として土器の写真が載せられています（図版参照）。

どうやら十五所遺跡は弥生時代末から古墳時代初めの遺跡のようです。しかしこの遺跡が再び注目されるのは、それから三十年後のことつまりこの地域に甲西バイパスの建設が決まつてからのことになります。

わが県埋蔵文化財センターの遺跡探査部隊がこの十五所地域の甲西バイパス建設予定地に調査のメスを入れるのは、平成元年の寒風吹きささぶ十二月末のことでした。



十五所古屋敷出土の壺形土器

発掘調査時の調査速報(1)

十五所物語

其ノ參

幻の十五所遺跡を求めて（中）

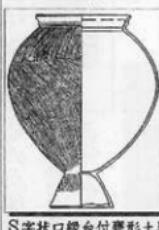
豊小学校から西へ約百メートル、甲西バイパスはそこを南北に走ります。豊小学校の校舎地点を本来の十五所遺跡とするならば、バイパス建設予定地はかなりの距離で離れていることがあります。果たして道路予定地が広がっているのかどうかが問題でした。平成元年十二月二十二日、県埋蔵文化財センターの遺跡探索部隊は人力掘り下げ隊と中型重機一台を從えて十五所の地に足を踏み入れました。

開国橋から続く県道の北側（①の地点）で、地上から深さ一メートル

前後で古墳時代前（約千六百年ほど前の）の多量の土器片と住居跡と考えられる落ち込みを確認しました。しかしその状態は北側に向かって統一感ではなく、土器の出土はすぐさまに絶えました。再び土器が確認されたのは調査区域を南北に二分する町道の北側でした（②の地点）。「古墳時代前期の土器が足の踏み跡もないほど出土した」

（隊員談）この地点が最も豊小学校に近い地点で現在発掘現場のフレハブが建っている場所なのです。ここで言う古墳時代前期の土器とは、その口の形状から

「S字状口縁台付甕形土器」と言われるもののです（図参照）。この試掘調査から五年が過ぎ、今回本格的な調査が開始されました。果たしてその結果は如何に…。（続く）



S字状口縁台付甕形土器



十五所物語

其ノ四

幻の十五所遺跡を求めて（下）

平成六年五月上旬十五所遺跡。五年前の試掘坑の確認は困難を窮めた。「いったい何處を掘ったのかな？」当時の試掘に参加した者も現在の発掘スタッフの中にいるが、尋ねても五年も前のこと、やはり記憶が曖昧になる。大凡の位置は當時の図面で判るが、試掘調査では通常あまり詳細な位置図は作らないので、現地での正確な照合が難しい。

やつと県道の北側部分（古墳の附近）で地表から約一メートルの深さまで、土器の色を層別して砂利混じり

の黒褐色（くろいろ）の土器片が、多くなってきました。また、N-E-K道の小穴オベレーグー（油紙土）の指痕（しんこん）（小穴穴の横には、アーチ状で背中を搔いていた跡）が、かなり多い。この黒褐色の土面と重機で造られた土面との間に所々、白い土面が全くないのは広がっています。この重機は北側の坑から土を取り除いていたのが、よく見えます。黒褐色の土が存在しない範囲、褐色粘質土の面で四角形の砂利混じりの土が入っています。辺は約五メートルのS字状口縁の破片が散らばる明らかに住居跡だ。軒は三軒、壁は、築地（ちくじ）で、この砂利地の住居跡の埋没状態は、平成二年度の柳形町七ツ打C遺跡（ひづき）で、五年度の若町新居道下遺跡等我が調査隊が甲西バイパスの遠峰群で常に見慣れてきたものだ。

戦後開闢の末、ここ十五所遺跡で初めて住居跡が確認できたわけである。まずは正面など主担当者としてホツとしたが、果たして古墳時代以外の時代、住居跡以外の遺構は存在しないのだろうか。まだまだ頭痛の種は尽きない。（続く）



十五所物語

イバ又瓦版
孟子大章句
其ノ五

十五所物語

壬午八月十二日

ヨリヨリは古墳時代だけではなかつた
愚悲苦闘の結果発見された古墳時代の住居跡は、二軒ども
圍炉裏の跡は大層貧弱な焼土だけ柱の穴さえも見つからなかつた。遺物の量も県内の古墳時代前期の住居跡からは普通
あまり多く出土しないが、この十五所の遺跡も例外ではなかつたようだ。壺形土器・高杯形土器・壺形土器などの大小の破片
がほとんどで、完全な形を留めるものは一号住居跡出土の小形
の壺形土器以外に存在しなかつた。これら二軒の住居跡の南
に、大きな溝が南北に走つている。どうも川跡のようで底も壁
もはつきりしないし途中で幅が大きく減がつて形が判らなくな
なつてしまふ。“この溝は住居跡たちが掘り込まれていて褐色の
粘質土で覆われているため、住居跡たちよりは古い時代のもの
である。溝を埋めているのは大部分が砂利と砂であるが、その
中から十片ほどの土器片が発見された。すべて私たちが弥生時代
中期中葉（およそ二千年前）のものと考えてゐる頃の長い壺
形土器の一部分であつた。遺存状態もよく、付近に弥生時代の
何かの遺構が存在することを予感させた。（続く）

《參考資料》

神奈川県秦野市平沢遺跡出土土器
高さ約50センチのこの土器は十五所遺跡で発見された土器群に亘る二つの例と考えられる。瓶片の振本は十五所のもので、全体の中の難音する箇所を示している。この器の長い表は、墓跡から発見されることが多いが、本系ではまだ明確な発見例はない。

遺体は、四角形の溝で囲まれた範囲の中心部分、盛り土の最も高い部分に穴を掘って埋めたようです。遺体と一緒に埋められた品々（副葬品）が発見される場合もありますが、やはり盛り土が残っていないと発見は難しくなります。

そんな前口上はさておき、十五所遺跡で方形周溝墓群が発見されつつあります。現在進行形です。今のところ四つ見つかりましたが、まだ出そうです。時代は、既に皆さんにはお馴染みの古墳時代の始め「S字形状縦台付覆形土器」を伴う時期のものです。方形周溝墓の発見は狭西地域では初めてのことになります。さて、その実体はどんなものでしょう？（続く）



出土最大規體を誇る中道町上の平道跡の方形周溝墓群（最大のもので一辺約30m）

そんな前口上はさておき、十五所遺跡で方形周溝基群が発見されつつあります。現在進行形です。今のところ四つ見つかりましたが、まだ大出そうです。時代は、既に皆さんにはお馴染みの古墳時代の始め「S字状口縁台付鏡形土器」を伴う時期のものです。方形周溝基の発見は狭西地域では初めてのこととなります。さて、その実体はどんなものでしょう？（続く）



屋内最大規模を誇る中庭頂上の平面図の方形園遊施設（最大のもので一辺約30m）

十五所物語

平成廿一年七月十八日
其ノ七

発掘担当者の要請

どもかく十五所遺跡の土はむずかしい土である。なかなか姿を見せてくれない方形周溝墓の検出に夢中になり、金神経を使い、調査担当者は昨年の八月以来この瓦版の発行が放置したままであった。情けない限りである。その上はじめは方形周溝墓は古墳時代のものと考えていた（瓦版其ノ六参照）が、調査が進むにつれて墓跡から発見される土器類も形のわかる優品が増え、その時代も更に古い弥生時代の後期（約一八〇〇年前）であることが明らかになった。大きな誤認である。平成七年七月末現在で発見された方形周溝墓の数も九基と増えた。まだ調査区域の中に一・二基存在すると思われるのだが、今だに担当者の眼には形が見えない。これほど悔しく切ないことはない。しかし昨日まで見えなかった墓跡の姿が見えた時、その喜び、快感は言葉では表現できない。ややこしい遺跡の調査はまだまだ十二月まで続くのである。また明日から新しいトレンチ土層断面との眺めっこが始まる。（続く）



遺跡最大の6号方形周溝墓の測量風景

十五所物語

平成廿一年七月二十一日
其ノ八

遺跡の遺跡を撮る（上）

今年十五所遺跡の発掘を始めたのは四月七日からで昨年の続きの作業です。ここメインは何といっても釜無川以西では、初めて発見された方形周溝墓ではないでしょうか。昨年は七基、今年になつて更に二基を発掘しました。一番大きいものは溝の内側が東西約十一メートル、南北約十メートル、溝は幅約三メートル深さ約一メートルあります。他の八基と比較してその大きさは歴然としています。六月末に、この墓跡の盛り土を発掘で出る土を利用して復元してみました。私たちは普段平面的にしか方形周溝墓を見ることができないので、非常に興味ある試みでした。他の遺跡での実例ど埋蔵文化財センターの所長さんの助言で傾斜や高さを決めたのですが、溝を掘って出土しただけでは盛り土の土量は圧倒的に足りないことが明らかになりました。私たちは簡単に盛り土を造ってしましましたが、弥生時代には何日要し、またその盛り土の上でどの様な儀式が行われたことでしょう。

この辺は有名な扇状地の中心、簡単に発掘させはくれませんでこの方形周溝墓群の中心、簡単には発掘させはくれませんでました。溝が一度に流れ込むと地層がはつきり残りますが、水が先に流れ込むとその辺の同質の土砂を壅地にしあふ。土層が見分けにくくなるのです。表面を削り取つてもハッキリしない。従つて土層観察用のトレンチの数も多くなります。このトレンチの断面を一目見て速断発掘できる様な場所ではないので、発掘担当者の苦労も大抵ではないようです。（続く）

二宮明雄

中日新聞社十五所遺跡公 告白バイバ久見版

十五所物語

昭和二十九年七月九日

馬鹿塚の遺跡を掘る(下)

二宮明雄



盛り土が復元された6号方形周溝墓

方形周溝墓の周溝の中に流れ落ちたと見られる幾つかの土器は割れている物もありましたが、私の印象では小さな壺などは、その作りの類似から各々一对で儀式に使用されていたように感じました。現在でも祭祀用に見ることができる「村」の伝統は既に遠い弥生時代に確立していたのではないですか。

九号方形周溝墓の溝の内側には、弥生時代の住居跡があり、規模は南北四メートル東西三メートルの小判形です。圍炉裏の跡や垂木を支えた柱の穴が四カ所発見されました。生活に必要な土器が見当らないことから、この墓造りのため立ち退いたものではないかと考えられます。この十五所遺跡では集落跡の発掘と違い、古代人が使った多様な土器や木製品の出土は期待できないでしよう。

これからもまだ難しい石の多い扇状地の発掘は続きます。古代の歴史に興味を持つ私には、こうした発掘作業は大いに参考になりロマンた時、その日の疲れを忘れてくれます。私の密かな推測が調査担当者の説明と一致した時、その日の疲れを忘れてくれるのです。(完)

十五所物語

昭和二十九年八月八日

遺跡見学会を終わって

十五所遺跡では去る七月三十日に遺跡の発掘が始まって以来初めての見学会が盛大に実施されました。調査関係者及びマスコミ関係者を除いて百五名という多くの見学者が三十七度をこえる猛暑の中で調査担当者の説明に耳を傾けました。その中で二例ほど強く印象に残った見学者の方々のことを取り上げます。まず今年の三月まで九号方形周溝墓と三号住居跡の真上で自動車整備工場を営んでおられた「花輪自工」の方々の様子です。昨年発掘の最中から「うちの下にも墓跡があるのかな」と強く興味をお持ちで、今回工場移転後初めて現場に降りたわけです。墓跡の上で笑顔を浮かべて家族で記念写真を撮られている姿が、担当者としてとても嬉しく感じました。次に一人の老人のお話です。この墓跡は何年前のものだつて?「約一千八百年前です」「何だ、それじゃ神武天皇の即位よりずっと後じやなー」「。。。そうですね、万が一、神武天皇が紀文時代の終わりに生まれていればそういうことになりますね」「ぐん・。。」明訓



見学者でにぎわう6号方形周溝墓

中日新聞社十五所遺跡発見記念版

十五所物語

平成八年四月十九日
其ノ十一

十五所遺跡と村前東遺跡

十五所遺跡は平成六年度から調査を開始し、今年で三年目の調査となりました。今年度で調査を終了する予定ですが、最後の年にふさわしく現時点でも過去二年間を上回る成果をあげています。

十五所遺跡の主人公となった弥生時代の方形周溝墓も四月以降既に九基確認され合計十八基となりました。今後更に多くの方形周溝墓が調査され数を増していくでしょう。

さて十五所遺跡の最南端に立つ南を望むと幅四メートルの舗装道

路を隔ててすぐそこに村前東遺跡が存在しています。村前東遺跡は五所の遺跡の境は何處なのでしょうか。やはり舗装道路が境でしよう

かりまあ弥生時代に舗装道路は無かつたでしょうし、そもそも境など

無いと考えるのが妥当でしよう。このよう考古学業界で「何々遺跡」と呼ばれるものは実際のところ実態が非常に曖昧なものです。はつきり言つて色々な手続上で必要となるため遺跡の名稱を付けていたと思つていいだければ惜しまず眠れると思います。

しかし「折角」十五所」と「村前東」の二つの遺跡に分けたのですから無理矢理それぞれの特徴を上げることにしましよう。決定的に異なる特徴はただ一つです。十五所では多くの方形周溝墓が発見されてい

るのに村前東では全く確認されていないことです。弥生時代後期（今から約千七百から千八百年くらい前）に限つて言えば、村前東が弥生人の居住地域で十五所がその村の有力者達の墓地だったのでしょうか。

か。やはりこの二つの遺跡は一心同体と考えて良いのでしょうか。

さて次回は、墓地であった十五所遺跡発見の県内初いや東日本初いや全国初かも知れない特殊な墓跡について触れてみることにします。

しよう。お楽しみに。（続く）

中日新聞社十五所遺跡発見記念版

十五所物語

平成八年四月二十日
其ノ十二

方彌生時代の墓穴と柱穴

さて十五所遺跡の十号方形周溝墓は南北に土橋を持つ一辺約十六メートルの四角い墓跡です。その中心よりやや西寄りに遺跡を埋葬したと思われる風変わりな墓穴

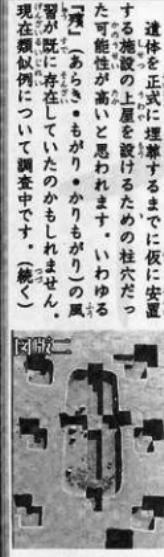
（幅約一メートル、長さ約三メートル）が本遺跡の方形周溝墓としては初めて確認されました（国版二）。内部の底や壁は一部が焼けた赤くなっていますし板状の炭化物（棺の一部か、敷物かは不明）もまとめて残っていました。出土した遺物は残念ながら

弥生土器の破片のみでした。

ところでこの墓穴が風変わりというのは、六の周囲に六つの四角い柱穴を伴つことでした（国版二）。墓穴の南北に三つずつ造られた穴はその中心から腰の穴の中心までの距離が二メートル丁度です。それら六つの柱穴（柱穴六）は離れて別に二つの四角い柱穴も確認されました。県埋蔵文化財センターの大堀初所長は「方形周溝墓の主体部（II基穴）で柱穴を伴うものは東日本では初めてではないか。西日本でも四角い柱穴は例がないかもしない。そうだとしたら金國で初めての例になる」という貴重な感想を述べられました。

遺跡を正式に埋葬するまでに仮に安置する施設の上層を設けるための柱穴だつた可能性が高いと思われます。いわゆる「横（あらき・もがり・かりもがり）の風習」が既に存在していたのかもしれません。

現在類似例について調査中です。（続く）



—甲府盆地西部における弥生時代後期方形周溝墓群—

十五所遺跡

一般国道52号改築工事および中部横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999・3

山梨県教育委員会
建設省甲府工事事務所
日本道路公団東京建設局

序

十五所遺跡は、甲府盆地西部の山梨県中巨摩郡攝形町十五所および吉田に所在し、すぐ西には櫛形山を望む国内でも最大級の扇状地と言われる御動使川の大扇状地扇端部に位置しております。

本遺跡の発掘調査は、一般国道52号(甲西バイパス)改築工事および中部横断自動車道建設工事に伴い、平成6年度から平成8年度の3年間にわたって実施されました。もっとも古い時期の遺構・遺物としては、弥生時代中期の石器製作場跡と考えられる焼土群の周囲から石器や土器片が多量に確認されております。県内でも珍しい類例と思われます。次の時期として、この十五所遺跡で最も中心となる弥生時代後期の方形周溝墓群があげられます。調査区域内から18基発見されておりますが、周囲には更に多くの墓跡が拡がっているものと考えられます。甲府盆地西部の峠西地域で、これほどまとまって方形周溝墓が発見されたのは本遺跡が初めてのことあります。また方形周溝墓の中の1基からは墓坑とそれに伴う柱穴群が発見されましたが、全国的にも極めて特殊な例として注目されます。なおこれらの方形周溝墓と同時期と思われる住居跡が10基確認されております。

弥生時代以外の遺構としては、古墳時代前期の住居跡3基と平安時代の住居跡2基が発掘されました。

本遺跡における方形周溝墓群の発掘成果は、峠西地域のみならず県内における弥生時代墓制研究で重要な位置を占めるものになるであります。

この報告書が多くの方々の研究の一助になれば幸甚であります。末筆ながら、種々ご協力を賜りました関係機関各位、地元の方々並びに直接に調査整理に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。

1999年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚 初重

例　言

- 1.本報告書は、山梨県中巨摩郡櫛形町十五所および吉田に所在する十五所遺跡の発掘調査報告書である。
- 2.本調査は、一般国道52号(甲西バイパス)および中部横断自動車道建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が建設省より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
- 3.本書の編集は米田明訓(県埋蔵文化財センター・主査文化財主事)が行った。なお執筆分担は以下のとおりである。
第4章第2節・・・・保坂一英(県埋蔵文化財センター・主査文化財主事)
第5章第1節・・・・保坂康夫(県埋蔵文化財センター・主査文化財主事)
上記以外・・・・・・米田明訓
- 4.本報告書に係わる出土品および写真、記録図面等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管している。

凡　例

- 1.挿図の縮尺は原則として次の通りである。
地形図—1/3000・1/3200　周辺遺跡分布図—1/40000　全体図—1/800・1/600　住居跡—1/80
方形周溝墓—1/150　土坑—1/20・1/80　溝跡—1/80・1/160　土器実測図—1/4　土器拓本—1/2
- 2.遺構断面図の数値表示は基準線の標高を示している。
- 3.同一挿図内の水糸レベルはすべて同一である。
- 4.土器の中で赤色塗彩ものについては、土器実測図中でその範囲にスクリーントーンを添付してある。

目 次

序

例言

はじめに

第1章 調査の経緯と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の概要	1
第2章 地理的環境	4
第1節 遺跡の立地	4
第2節 周辺の遺跡	4
第3章 遺跡の概要と時代変遷	8
第4章 発見された遺構と遺物	9
第1節 住居跡と出土遺物	9
第2節 方形周溝墓と出土遺物	27
第3節 土坑と出土遺物	67
第4節 溝跡と出土遺物	73
第5節 その他の遺構と出土遺物	85
第6節 グリッド等出土土器	90
第5章 まとめ	92
第1節 十五所遺跡出土の弥生時代中期前半の石器群	92
第2節 十五所遺跡の方形周溝墓をめぐる問題点	100
付編 自然科学分析	109
第1節 10号方形周溝墓における木材同定・土壤分析・リン分析	109
第2節 十五所遺跡出土の赤色物質について	112
第3節 十五所遺跡出土の黒曜石産地推定報告	113
出土土器一覧表	118

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査に至る経緯

一般国道52号は、静岡県清水市から山梨県韮崎市まで、太平洋側と長野・新潟方面を結ぶ重要な幹線道路である。しかし甲府盆地より南側の富士川に沿って進む箇所は、カーブがきわめて多い上に高低差も激しい。その上降雨量も多いために土砂崩れの危険箇所が数多く存在し、実際に通行止めとなることも少なくはない。また輸送の幹線道路であるにもかかわらず甲府盆地に入ると商店街や住宅地の中心を走ることが多く、大型自動車等の頻繁な通行は周辺住民の生活にも少なからず影響を与えている。そのため商店街や住宅地を避けてスムーズな通行を確保するバイパス建設が計画された。それと同時に太平洋側と日本海側を結ぶ自動車専用道路(中部横断自動車道)の建設も並行して計画されることになったわけである。

まず、中巨摩郡白根町在家塚から南巨摩郡增穂町大門間の全長約8kmにわたる建設工事が着工されることになり、この区間内の試掘調査を平成元年度から実施して10箇所の遺跡を確認した。この十五所遺跡では試掘調査によって当初から古墳時代初頭の集落跡の存在が予想されていた。調査は平成6年度に開始され、平成8年度まで3年間実施された。

第2節 発掘調査の概要

発掘調査の経過(第1図・第2図)

遺跡は発掘区域のちょうど中央を東西に走る県道を境に北側をI区・II区(合計約13,300m²)、南側をIII区・IV区(合計約12,000m²)とし、平成6年5月9日～同年12月27日までの間I区の約3分の2を、平成7年4月10日～同年12月26日までの間I区の約3分の1とII区を、平成8年4月15日～同年12月26日までIII区・IV区を調査した。

本遺跡の土層、特に遺構が存在する比較的浅い範囲(地表下1～2m)は扇状地独特の複雑な土壤堆積状態を示し、安定した堆積状態は全く見ることができなかった。そのため遺構プランの検出は困難を極め、前段で触れたように、数多くのトレーナー設定による平面プランおよび断面プランの確認を行わざるを得なかった。この方法は調査期間の3年間を通して実施された。遺構の僅かな破壊のデメリットよりも、遺構の見落としやプラン誤認のデメリットを恐れたためにとった方針で、当遺跡の調査では最も適切な方法であったと考えている。

本遺跡は当初試掘の結果では、古墳時代前期の集落遺跡と判断されていたが、実際に調査を進める過程で、試掘で古墳時代の住居跡と把握されていたものが、ことごとく弥生時代の方形周溝墓の一部であったことが判明した。弥生時代の包含層の上に、薄い古墳時代の包含層が存在していたこと等によるもので、本遺跡の複雑な土壤堆積から見て、また試掘の規模(1.5m×1.5mの試掘坑)から見て、仕方のない判断だったと思われる。

表土の剥ぎ取りについては、古墳時代包含層の直上まで重機を利用し、以下は人力で掘り下げた。トレーナー掘りも当然すべて人力で行った。グリッドの配置はすべて5m×5mである。

調査機関・協力者等

年度別の担当者等は下記の通りである。発掘作業員および整理作業員は一括して明記した。

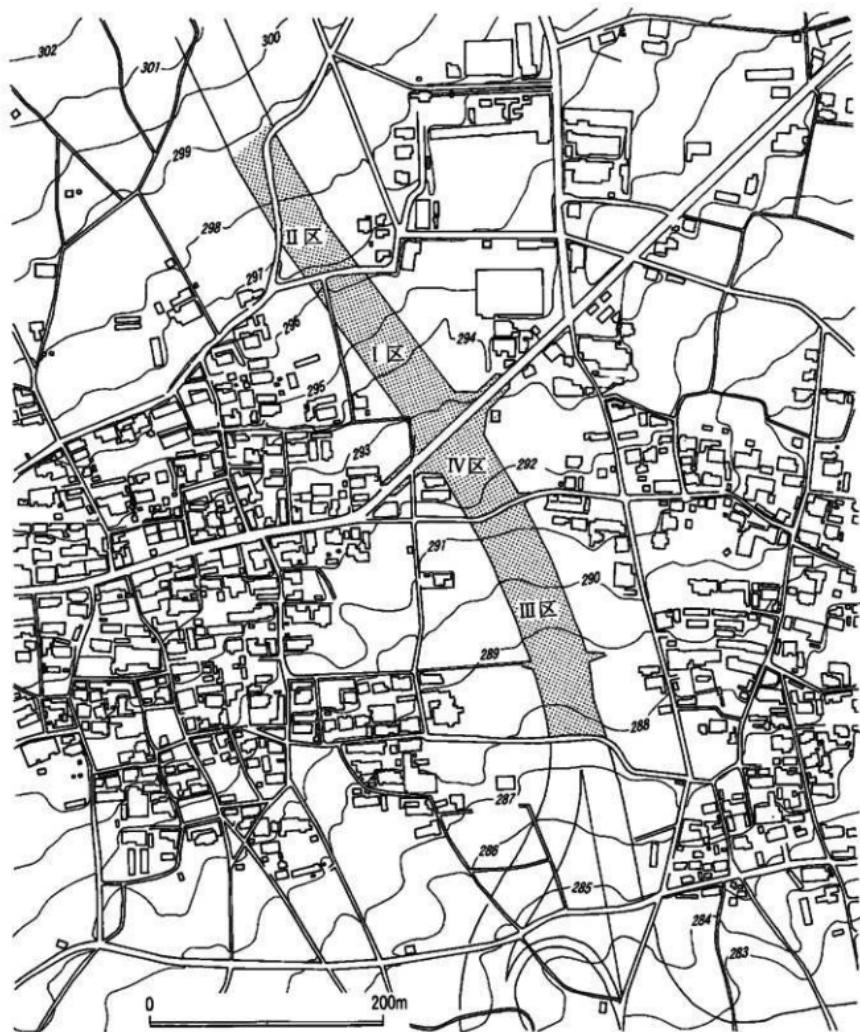
平成6年度調査

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 米田明訓(山梨県埋蔵文化財センター副主査文化財主事)

大庭 勝(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)



第1図 発掘区域図(1)(S=1/3000)

平成 7 年度調査

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 米田明訓(山梨県埋蔵文化財センター主査文化財主事)
大庭 勝(山梨県埋蔵文化財センター文化財主事)

平成 8 年度調査

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 米田明訓(山梨県埋蔵文化財センター主査文化財主事)
保坂一英(山梨県埋蔵文化財センター主査文化財主事)

発掘作業員

青木文治、秋山松義、雨宮朝子、雨宮みつ枝、有泉誠子、
石川茂子、石原敬子、井上千恵子、遠藤正美、大法ひろ子、
大法正悟、小野一光、小野俊一、小野幸江、小沢和樹、
河西恵、河西武子、風間郁子、木下和子、功刀とよ子、
河野節子、河野とく、齊藤幸子、齊藤洋平、齊藤玲子、
坂井勉、坂井美代子、佐久間春江、佐久間等、沢登郁江、
沢登五恵、沢登タツ江、沢登よね、嶋津志す枝、嶋津忠義、
清水一郎、清水千三、清水正宏、清水裕子、志村むつみ、
田中市平、千野ふみよ、塙田ひろ子、都築いつみ、
時田わか、内藤春江、中込慎也、中込真一、中込ともゑ、
中込久子、中込二三子、中込みつえ、中村広勇、名取清子、
二宮明雄、花輪壽枝、花輪操、原伊津子、深沢一也、
北條貴人、保坂よし、三村直子、望月重哉、望月泰司、望月祐子、山本直人

整理作業員

遠藤正美、大法ひろ子、風間郁子、河野節子、齊藤玲子、
坂井美代子、志村むつみ、平重藏、高野真寿美、中込久子、
中込二三子、望月祐子

遺物写真撮影 塚原明生(日本写真家協会)

口絵イラスト 望月祐子

発掘調査から整理作業にあたっては以下の方々より多大な御助言、御協力を賜った。記して感謝の意を表します。(敬称略)

佐藤允彦・高橋克嘉(奈良国立文化財研究所)、清水博(柳形町教育委員会)、渡辺真幸(島根大学教授)

(なお、十五所遺跡の地元、柳形町教育委員会の清水博氏は、平成11年1月13日に49歳の若さで急逝されました。氏には発掘調査実施中より多くのアドバイスを頂戴し、また町で遺跡調査の成果発表の機会も設定していただいたりもしました。公の紙面の上であります、謹んで哀悼の意を表したいと思います。)



第2図 発掘区域図(2) (S=1/3200)

第2章 地理的環境

第1節 遺跡の立地(第3図)

十五所遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町十五所および吉田に位置する。本遺跡は、甲府盆地の西縁を南北に走る国道52号の東側にあり、西方には櫛形山を前衛として北岳が主峰の白峰三山や鳳凰三山などの南アルプスの山塊を仰ぎ見ることができる。標高は約288m～299mを測る。

南アルプスの唐松峠・ドノコヤ峠付近を源とする御動使川が形成する扇状地は、県の陝西地域の北部を飲み込み、南は甲西町田島にまで達している。この扇状地は国内でも屈指の巨大な扇状地である。遺跡は扇状地扇端部に形成された北西から南東方向へのびる微高地に展開する。この扇端部にあたる地域には水量の豊富な湧水帯が存在している。過去に実施されたこの周辺の試掘調査の結果では、本遺跡北側の区域では御動使川の氾濫で運ばれた疊層が厚く堆積しており、南側の区域では泥炭層が堆積していることが明らかになっている。湧水帯の存在を証明するように当遺跡より南側に位置する若草町十日市場を東西に走る県道を境に、その南側の地域には広大な水田地帯が広がっている。

第2節 周辺の遺跡(第3図)

十五所遺跡が存在する櫛形町地内では、今日までに数多くの遺跡が発掘されて、それぞれ多大な成果をあげてきている。重要文化財指定物件を出土している縄文時代の鋸物師屋遺跡、陝西地域最古の古墳である県指定史跡の物見塚古墳などの発掘調査などは特に有名な例で、研究者のみならず一般の町民、県民に注目されている。しかし弥生時代の遺跡に関しては、多くの遺跡の調査に伴ってその遺跡の最下層部分から弥生時代中期の土器片などが発見される例のみが多く、まとまった遺構、遺物等は検出されていなかった。

十五所遺跡の存在は、その名称は付けられていなかったものの、昭和34年の豊小学校新築時に出土した土器から弥生時代から古墳時代の遺跡として把握されていた。遺跡周辺で大規模な組織的な調査が開始されるようになるのは、甲西バイパス建設に伴う発掘調査が実施されるようになってからのことである。

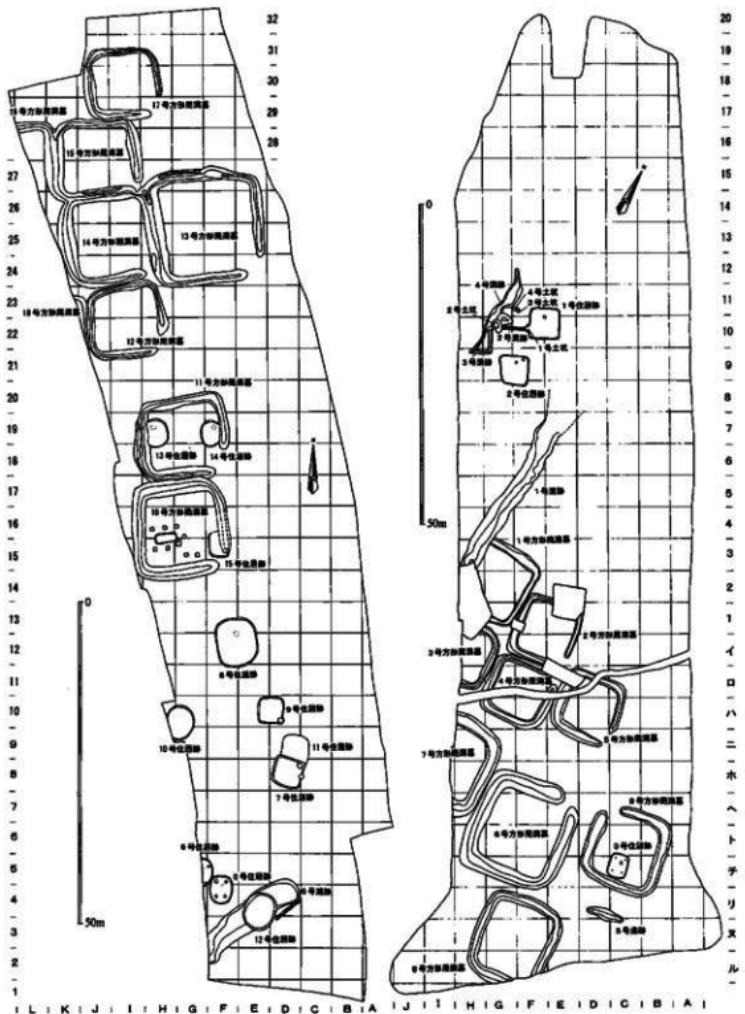
この陝西地域での時代別の遺跡分布の状況は、旧石器時代のものについては明確なものの存在が把握されていないが、縄文時代になると西部の丘陵地帯や山地の傾斜面の所々に見られる平坦地に集落が営まれるようになる。これに対して弥生時代になると扇状地上や氾濫原に接する湧水地帯に集落遺跡や水田跡が広く展開するようになる。この傾向は以後の時代も長く維持するようであり、甲西バイパスに隣接する遺跡群は、まさにこのような湧水地帯に展開しているわけである。

これら甲西バイパスに隣接する遺跡群の中で、大師東丹保遺跡で発見された古墳は、従来陝西地域で最古と考えられていた櫛形町物見塚古墳に近い時代のものである。扇状地上に県内でも極めて古い段階の古墳が存在したことは従来考えられなかつたことで注目に値する。また十五所遺跡の南に隣接する村前東遺跡は、古墳時代前期の県内でも最大規模の集落遺跡が発見され、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての当該地域の社会推移を考える上で重要な位置を占める。

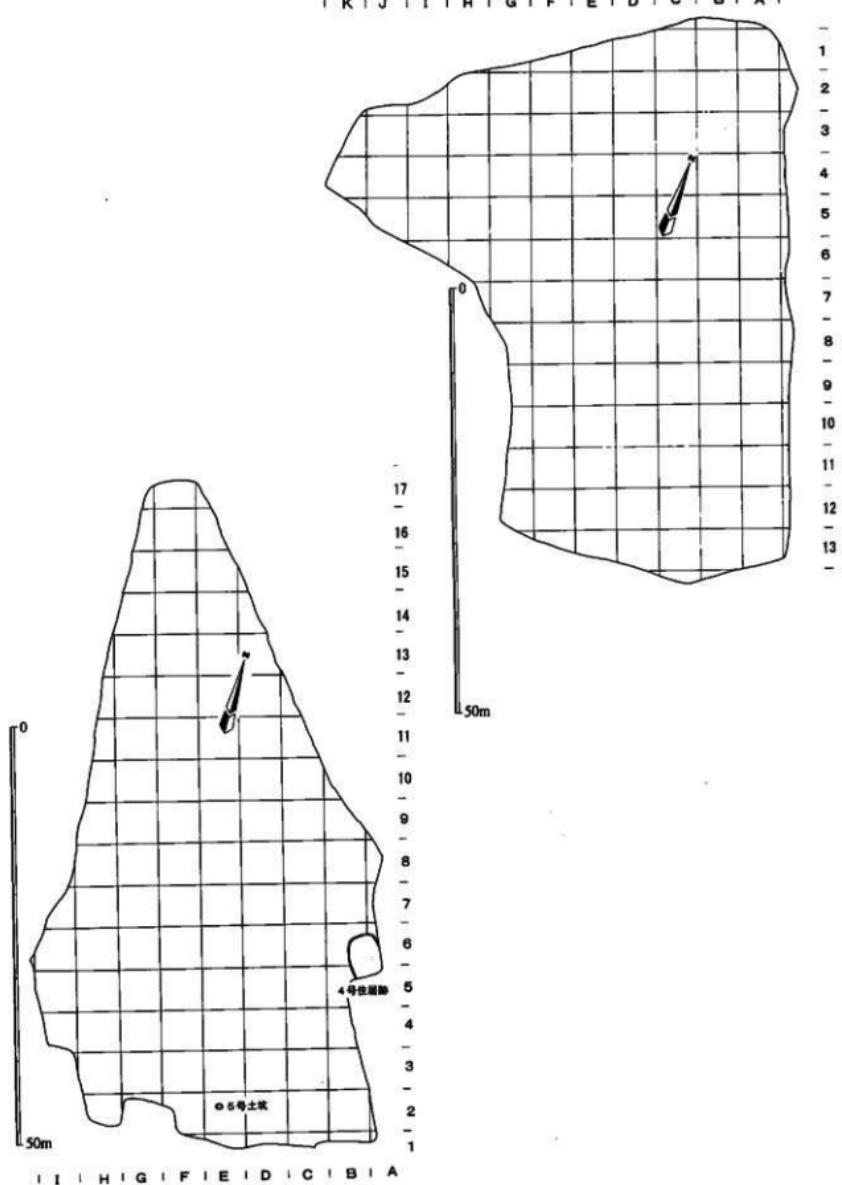
- 1 七ツ打C遺跡(近世、溝跡：甲西バイパス関連)
- 2 十五所遺跡Ⅰ・Ⅱ区(弥生・古墳、住居跡・方形周溝墓等：甲西バイパス関連)
- 3 十五所遺跡Ⅲ・Ⅳ区(弥生・古墳・平安、住居跡・方形周溝墓等：甲西バイパス関連)
- 4 村前東遺跡Ⅱ・Ⅴ区(弥生・古墳・平安、住居跡等：甲西バイパス関連)
- 5 村前東遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区(弥生・古墳・平安、住居跡・水田跡・掘立柱建物跡等：甲西バイパス関連)
- 6 新居道下遺跡(弥生・古墳・奈良・平安、住居跡・溝跡・土坑・柵列跡・方形周溝墓等：甲西バイパス関連)
- 7 二本柳遺跡(中世、水田跡・墓跡：甲西バイパス関連)
- 8 向河原遺跡(弥生・中世・近世、水田跡・杭列・溝跡等：甲西バイパス関連)
- 9 油田遺跡(弥生・古墳・平安、祭祀場跡・水田跡等：甲西バイパス関連)



第3図 周辺道路分布図 (S=1/40000)



第4図 I区(右侧)・III区(左侧)全体図($S=1/800$)



第5図 II区(左側)・IV区(右側)全体図($S=1/600$)

- 10 中川田遺跡(弥生・古墳・平安・中近世、水田跡・溝跡：甲西バイパス関連)
- 11 住吉遺跡(弥生、方形周溝墓？)
- 12 大師東丹保遺跡(弥生・古墳・中世、水田跡・円墳・建物跡・水路跡・杭列跡等：甲西バイパス関連)
- 13 宮沢中村遺跡(中世・近世・近代、民家跡・寺跡・水田跡等：甲西バイパス関連)
- 14 鑄物師屋遺跡(縄文、住居跡)
- 15 メ木遺跡(縄文・奈良・平安、住居跡・掘立柱建物跡等)
- 16 六科丘遺跡(旧石器・古墳・円墳・住居跡・土坑・集石遺構)
- 17 長田口遺跡(旧石器・縄文・弥生・古墳・中世、住居跡・土坑・集石遺構等)
- 18 上の山遺跡(縄文)
- 19 上ノ東遺跡(縄文・弥生、住居跡等)
- 20 昼喰場遺跡(縄文)
- 21 御前山遺跡(弥生)
- 22 土居平遺跡(縄文、住居跡？)
- 23 物見塚古墳(前方後円墳)

第3章 遺跡の概要と時代変遷

十五所遺跡の主体を為す遺構は住居跡と方形周溝墓である。住居跡は合計15基で時代別の内訳は、弥生時代後期のものが11基、古墳時代前期のものが2基、平安時代のものが2基である。方形周溝墓は総数18基が確認されており、すべて弥生時代後期と考えて良いものである。11基の住居跡と時代的に呼応している。他に溝跡が5条、土坑が5基検出されている。(第2・4・5図)

発見された遺構を中心に調査区別の概要を記す。

I区では弥生時代後期の住居跡1基および方形周溝墓9基、古墳時代前期の住居跡2基、その他に溝跡5条と土坑4基が発見された。1基の弥生時代住居跡は方形周溝墓造営時に廃棄されたものと考えられる。古墳時代前期の住居跡は南北に並んで確認された。本遺跡では古墳時代前期の住居跡は他には確認されていない。南隣接する村前東遺跡と比較すると対照的である。

II区は過去古墳時代前期の土器が出土した豊小学校に最も近接した場所であるが、弥生時代後期の住居跡1基のみが確認された。周辺を精査したが他に遺構は確認できなかった。

III区では弥生時代後期の方形周溝墓が9基確認された。その中の1基から主体部とそれに付随すると思われる方形プランの柱穴群が発見された。本遺跡では他に類似した例は確認できなかった。弥生時代後期の9基の住居跡のうち、方形周溝墓と重複する3基の住居跡については、I区の場合と同様で住居廃棄後に墓跡が造営されている。これら弥生時代の遺構とは別に平安時代の住居跡が2基発見された。

IV区はI区とIII区の間に位置する場所で、I区とIII区の南北に展開する方形周溝墓群の関連性を考える上で調査結果が期待されていた場所であった。しかし弥生土器が所々で出土したものの、明確な遺構は発見されなかつた。基本的には、ほぼ無遺構の空間であったと考えるのが妥当と思われる。つまり十五所遺跡の方形周溝墓群はIV区の無遺構部分を境に、I区とIII区の南北の二つの墓群に分かれている可能性が高い。

以上にあげた明確な遺構とは別に、本遺跡の中で最も古い時代の遺構と考えられるものとして、I区中央よりやや北側で調査範囲最下層(地表下約2~3m)より弥生時代中期の焼土群と石器製作場跡と思われる遺構が発見されている。土器については完全な形の物は無いが、相当数の大小の破片が出土している。石器類も黒曜石を原材料とするものを主に數多く発見されている。さらに赤色の顔料と思われるものが織まって確認されている。同じI区の南端でも土器と焼土を主体とした同様な出土状態を示す箇所が認められた。これらの焼土群や石器群が伴うかどうかは別として、地元櫛形町内の多くの遺跡から、その最下層部分で弥生時代中期の土器片が出土する例が多いことを清水博氏から御教示を受けた。本遺跡の例も清水氏の指摘を証明する実例であろう。

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 住居跡と出土遺物

1号住居跡(第6・7図)

- (形状) 隅丸方形プランを呈する。
(規模) 東西490cm×南北510cmを測る。
(主軸) N-27° -W
(床面) ほぼ平坦であるが、西方向がやや低くなっている。
(壁) ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は16~20cmを測る。
(柱穴) 確認できなかった。
(周溝) 確認できなかった。
(炉) 地床炉であり、住居跡中央部よりやや北寄りに設けられている。東西40cm×南北40cmの範囲で焼土がみられる。
(出土遺物) 土師器の壺形土器、壺形土器、台付壺形土器が出土している。

2号住居跡(第8・9図)

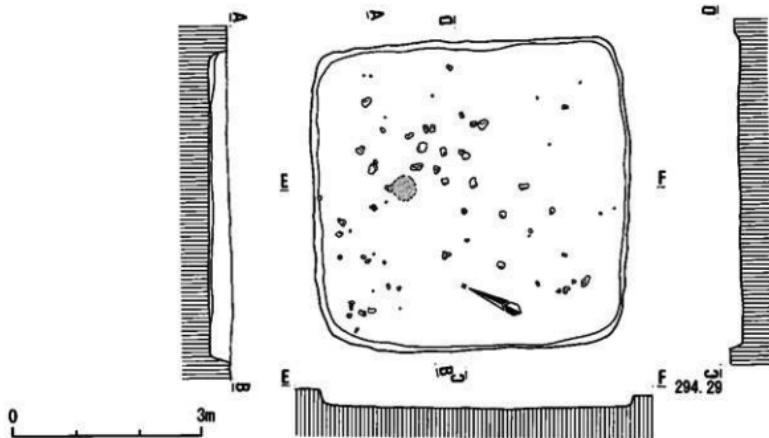
- (形状) 南東隅が擾乱を受けているが隅丸正方形プランを呈する。
(規模) 東西450cm×南北440cmを測る。
(主軸) N-23° -W
(床面) ほぼ平坦だが南側がやや低い。
(壁) ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は8~12cmを測る。
(柱穴) 確認できなかった。
(周溝) 確認できなかった。
(炉) 地床炉であり、住居中央よりやや北東により位置する。20cm×22cmの範囲で焼土が見られる。
(出土遺物) 土師器の壺形土器、壺形土器、台付壺形土器、高壺形土器が出土している。
(備考) 住居北東隅に直径約37cm深さ40cmの小竪穴が存在する。

3号住居跡(第10・11図)

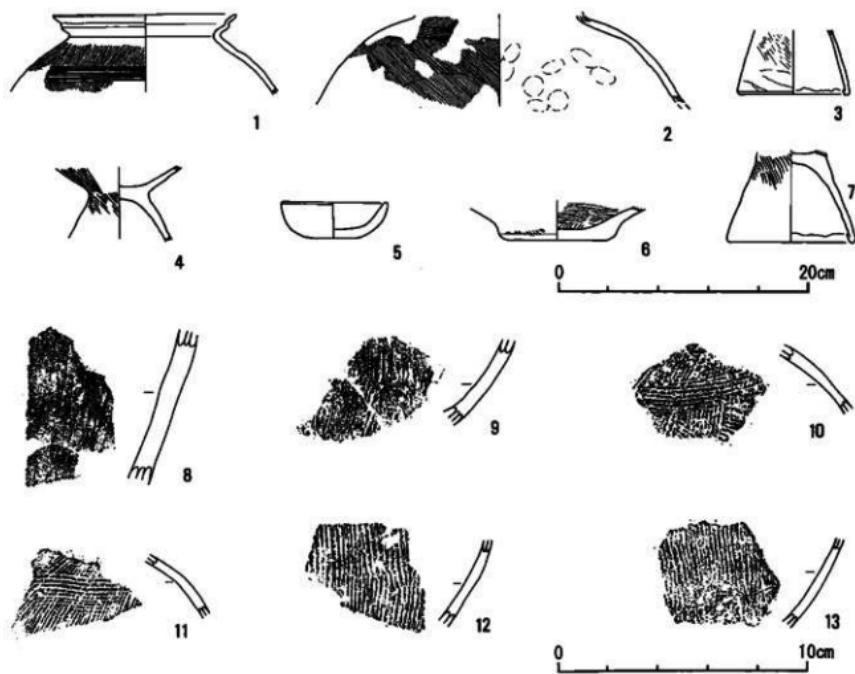
- (形状) 小判形に胴張りの近い隅丸方形プランを呈する。
(規模) 東西約320cm×南北約410cmを測る。
(主軸) N-8° -W
(床面) ほぼ平坦であるが、炉のある中心部分が周囲よりやや高くなっている。
(壁) ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は12~16cmを測る。
(柱穴) 主柱穴が4基確認されている。4基とも直径20cm前後、深さ20cm前後である。
(周溝) 確認できなかった。
(炉) 地床炉であり、住居の中心より僅かに北寄りに設けられている。東西32cm×南北40cmの範囲で焼土が見られる。
(出土遺物) 住居南東隅から大型の壺形土器が出土した。他に壺形土器が出土している。
(備考) 覆土中および床面に木炭片が多量に見られた。住居自体が火を受けている印象持てる。

4号住居跡(第12図)

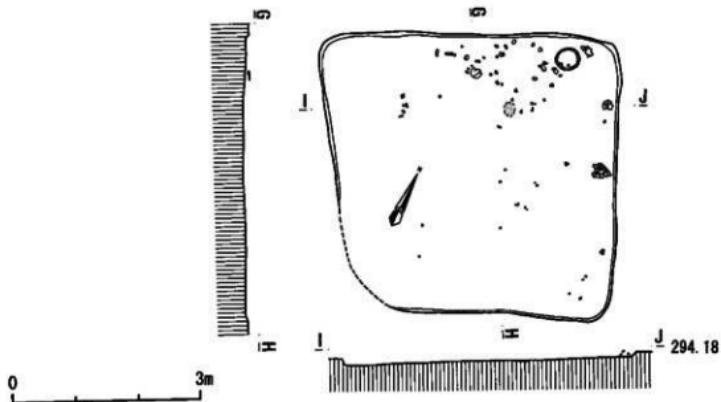
- (形状) 東側と南側が発掘調査区域外のため全体の正確な形状は不明であるが、およそ小判形の楕円形プランを呈するものと思われる。
(規模) 東西450cm(推定)×南北550cmを測るものと思われる。



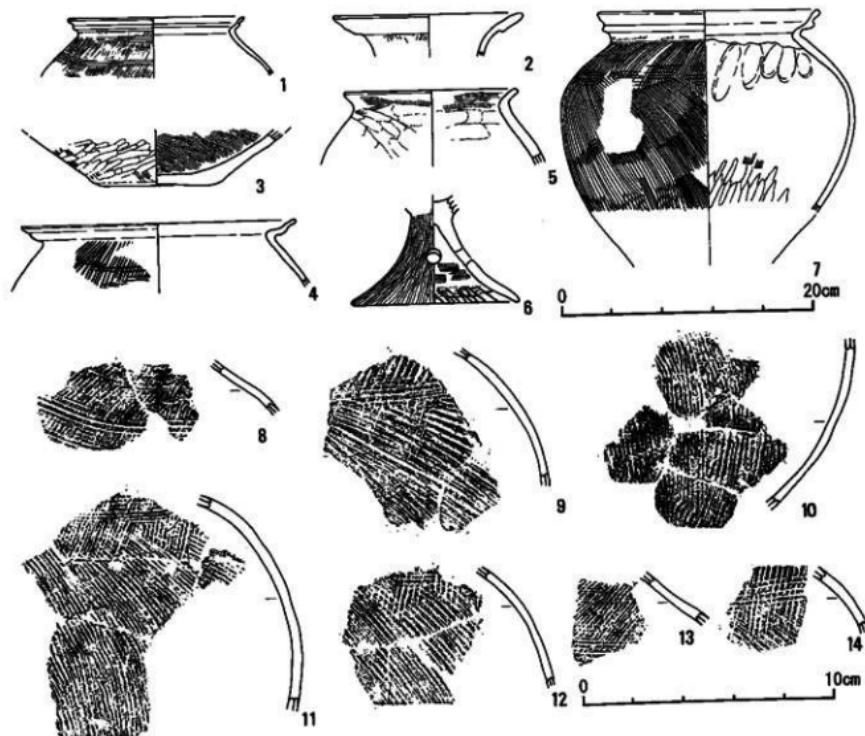
第6図 1号住居跡(S=1/80)



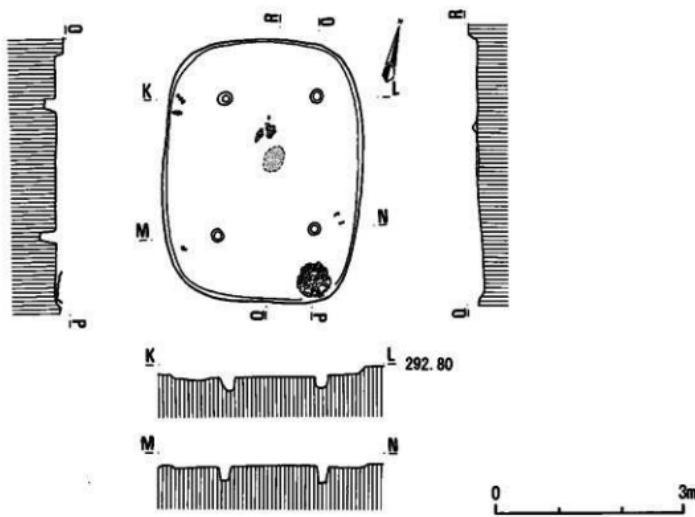
第7図 1号住居跡出土遺物(S=1/4・1/2)



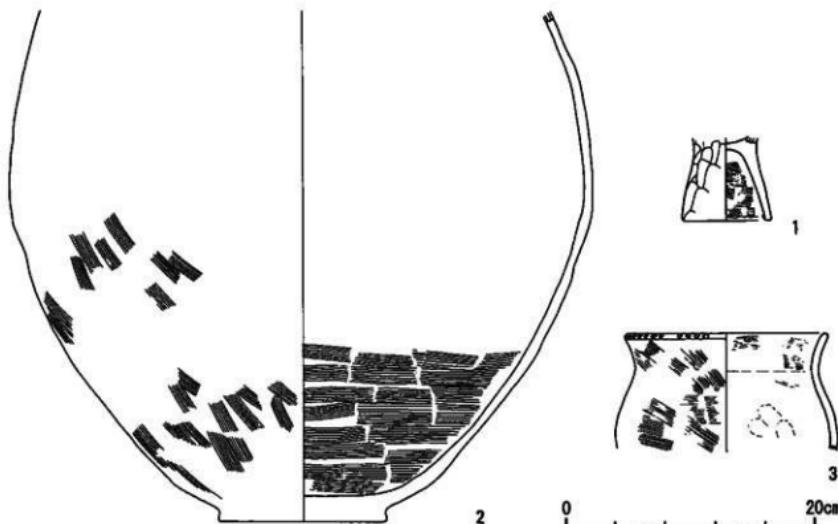
第8図 2号住居跡 ($S=1/80$)



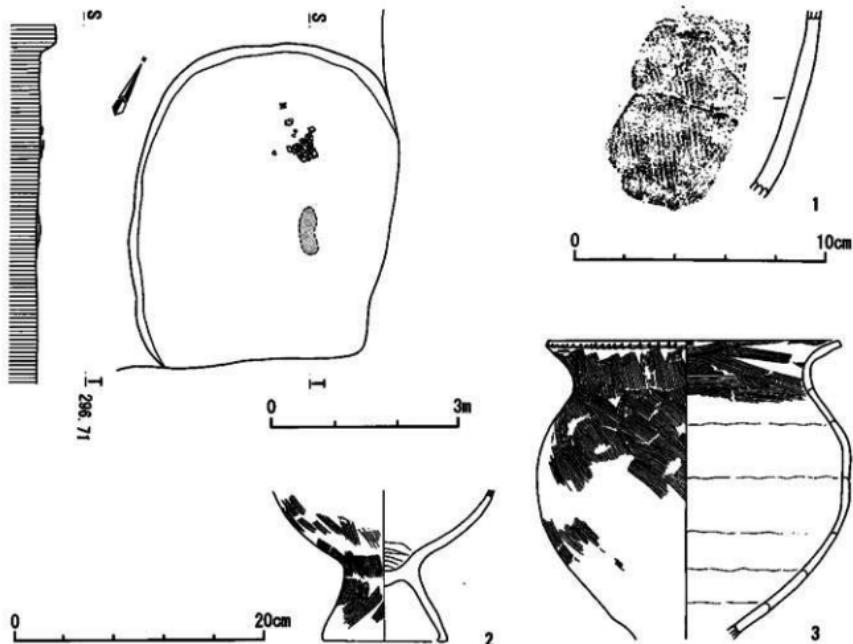
第9図 2号住居跡出土遺物 ($S=1/4 \cdot 1/2$)



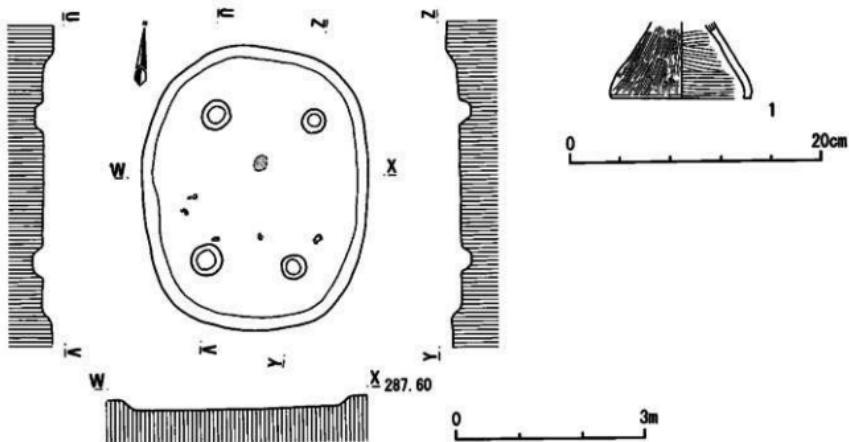
第10図 3号住居跡 (S=1/80)



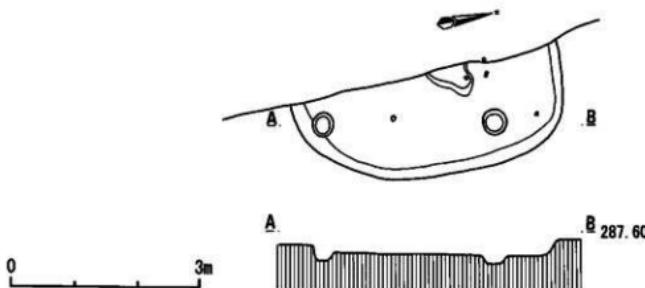
第11図 3号住居跡出土遺物 (S=1/4)



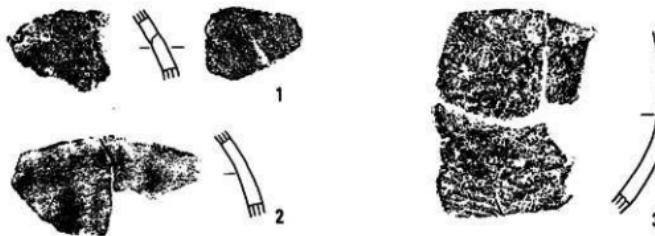
第12図 4号住居跡(S=1/80)・同出土遺物(S=1/4・1/2)



第13図 5号住居跡(S=1/80)・同出土遺物(S=1/4)



第14図 6号住居跡 (S=1/80)



第15図 6号住居跡出土遺物 (S=1/2)

(主軸) N-25° -W

(床面) ほぼ平坦である。

(壁) ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約24cm前後を測る。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(炉) 地床炉であり、住居中心よりやや東寄りに設けられている。東西24cm×南北76cmほどの範囲に焼土が見られる。

(出土遺物) 豊形土器と台付豊形土器が出土している。

5号住居跡(第13図)

(形状) 楕円形プランを呈する。

(規模) 東西360cm×南北450cmを測る。

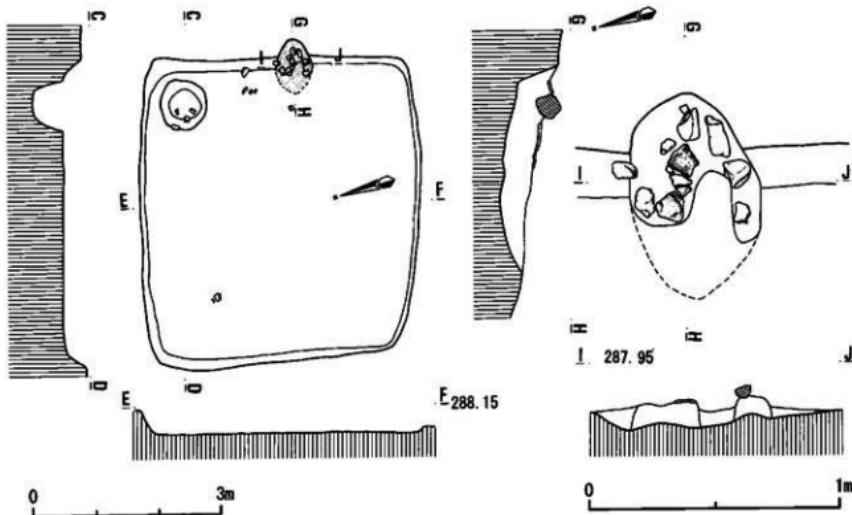
(主軸) N-4° -E

(床面) ほぼ平坦である。

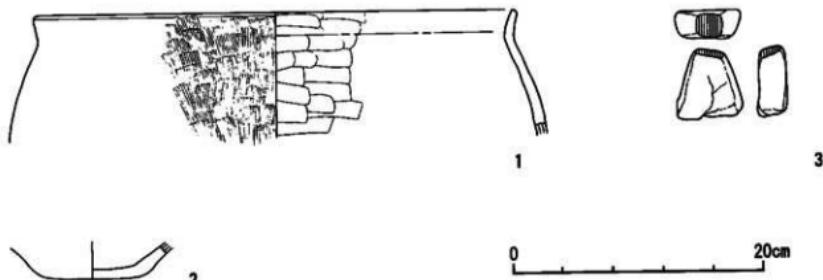
(壁) 壁はなだらかに立ち上がり、壁高は16~18cmを測る。

(柱穴) 主柱穴が4基確認されている。4基とも直径40cm前後、深さ16cm前後である。

(周溝) 確認できなかった。



第16図 7号住居跡(S=1/80)・同カマド(S=1/20)



第17図 7号住居跡出土遺物(S=1/4)

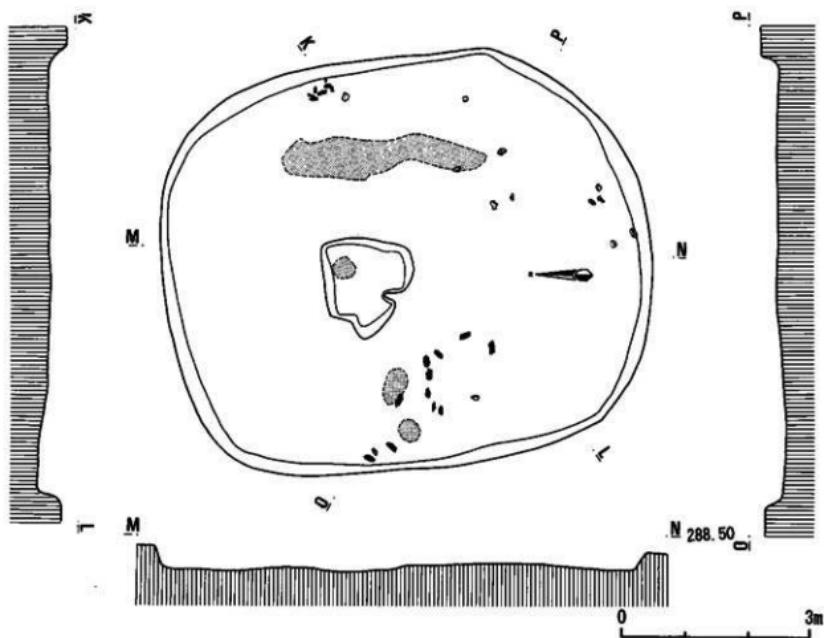
(炉) 地床炉であり、住居中央よりやや北寄りに設けられている。東西20cm×南北24cmの範囲で焼土が見られる。

(出土遺物) 台付壺形土器の脚部が出土している。

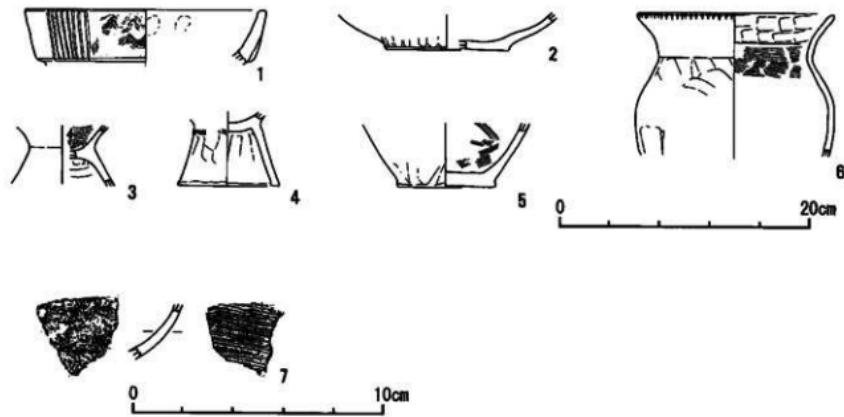
6号住居跡(第14・15図)

(形状) 西側および半分が発掘調査区域外のため正確な形状は不明であるが、楕円形プランを呈すると思われる。

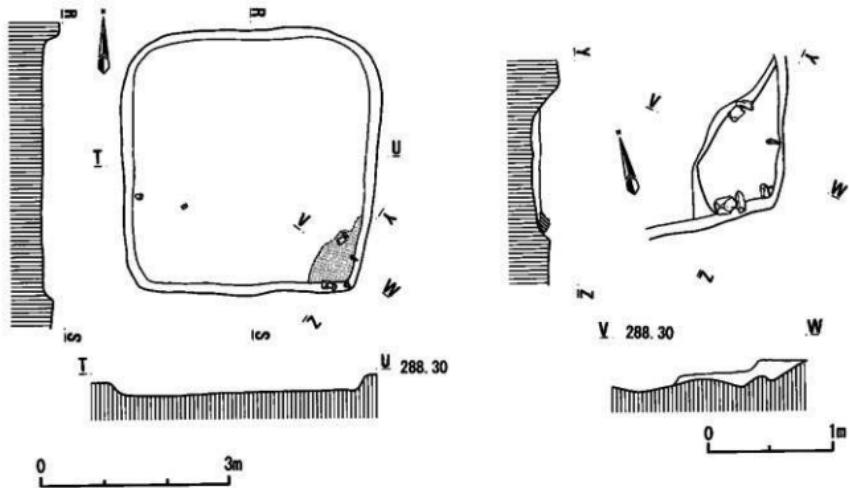
(規模) 東西350cm(推定)×南北440cmを測る。



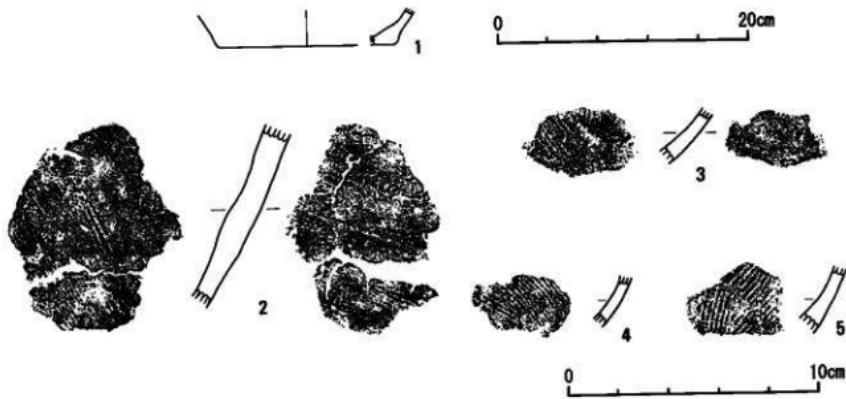
第18図 8号住居跡 (S=1/80)



第19図 8号住居跡出土造物 (S=1/4・1/2)



第20図 9号住居跡 ($S=1/80 \cdot 1/40$)



第21図 9号住居跡出土遺物 ($S=1/4 \cdot 1/2$)

(主軸) N-2° - E

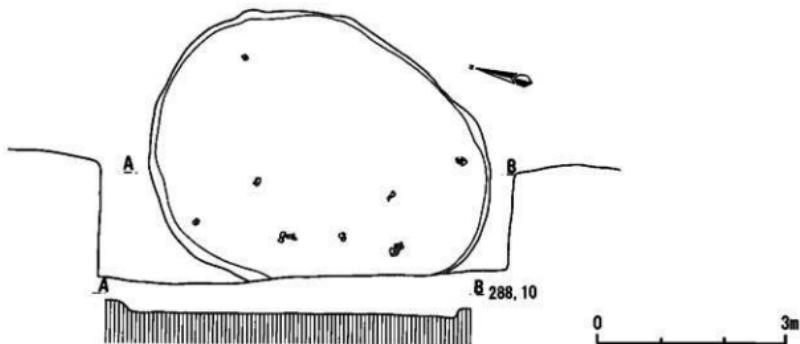
(床面) ほぼ平坦である。

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は16cm～20cmを測る。

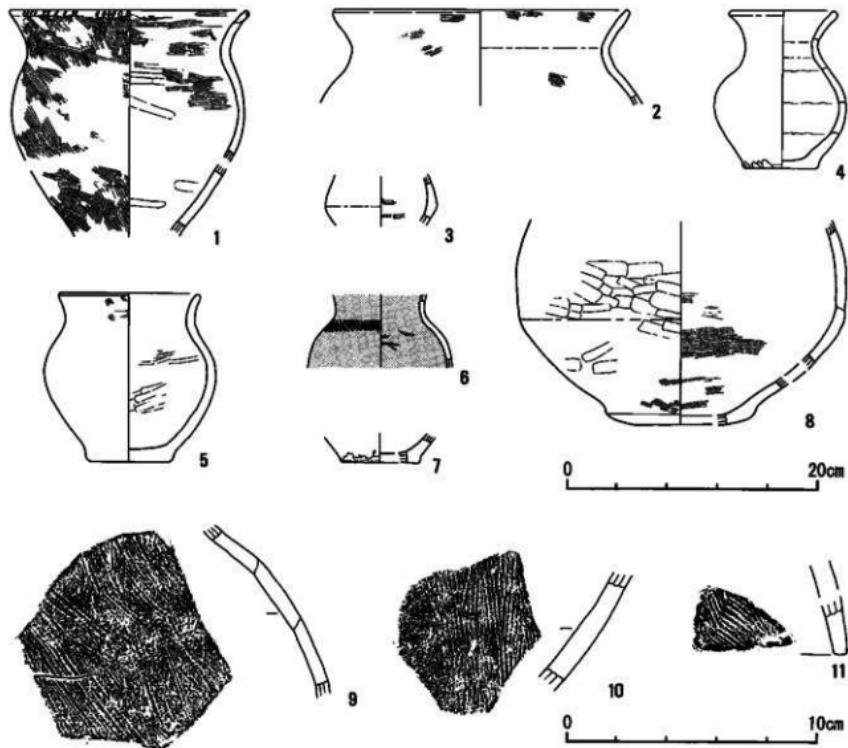
(柱穴) 主柱穴と考えられるものが2基発見されている。2基とも直径32cm前後、深さ20cm前後を測る。

(周溝) 確認できなかった。

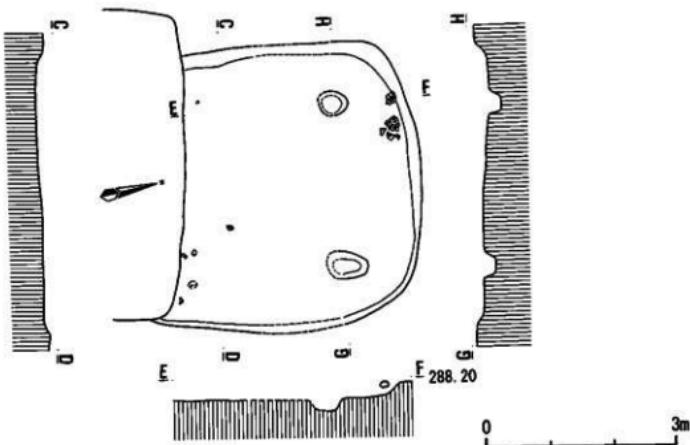
(炉) 住居中心よりやや北寄りに浅い皿状の落ち込みがあり炉のように考えられるが、焼土は発見されていない。



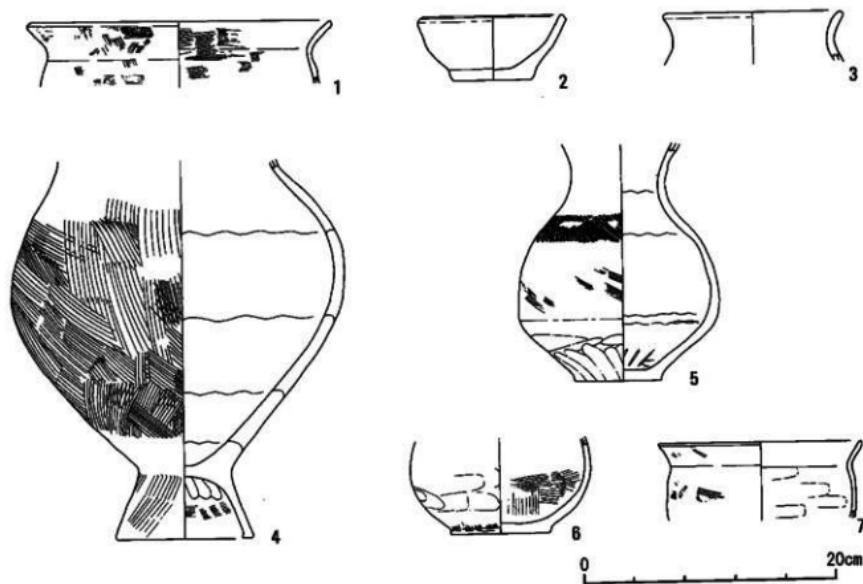
第22図 10号住居跡 (S=1/80)



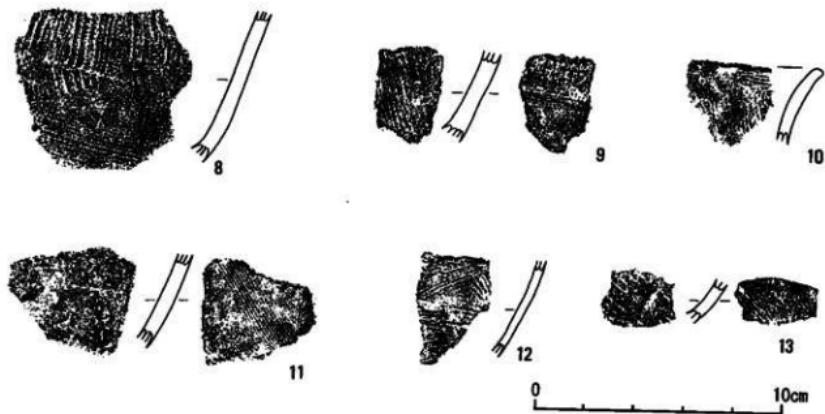
第23図 10号住居跡出土遺物 (S=1/4・1/2)



第24図 11号住居跡 (S=1/80)



第25図 11号住居跡出土遺物(1) (S=1/4)



第26図 11号住居跡出土遺物(2)(S=1/2)

(出土遺物) 壺形土器片が出土している。

7号住居跡(第16・17図)

(形状) 開丸方形プランを呈する。

(規模) 東西490cm×南北440cmを測る。

(主軸) N-105°-E

(床面) ほぼ平坦である。

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は28~30cmを測る。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(カマド) 東壁の中央よりやや南寄りに設けられている。石組カマドであったと思われ、僅かに石組が残存している。60cm×84cmの範囲に焼土が見られ、一部焚口のような形状を残す。

(出土遺物) 土師器の壺形土器と砥石が出土している。

8号住居跡(第18・19図)

(形状) 不整齊円形プランを呈する。

(規模) 東西660cm×南北790cmを測る。

(主軸) N-12°-W

(床面) 全体的にはほぼ平坦であるが、所々に凹凸が見られ、西側が僅かに低くなっている。

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は28cm~36cmを測る。

(柱穴) 確認できなかった。

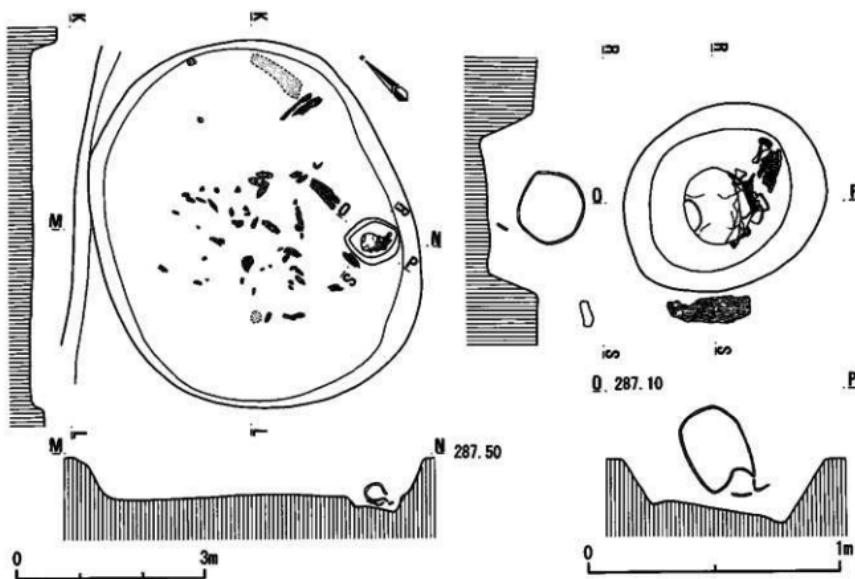
(周溝) 確認できなかった。

(炉) 住居中心よりやや北寄りに浅い落ち込みを伴う炉が確認された。焼土は落ち込みの底の部分に32cm×36cmの範囲で認められた。

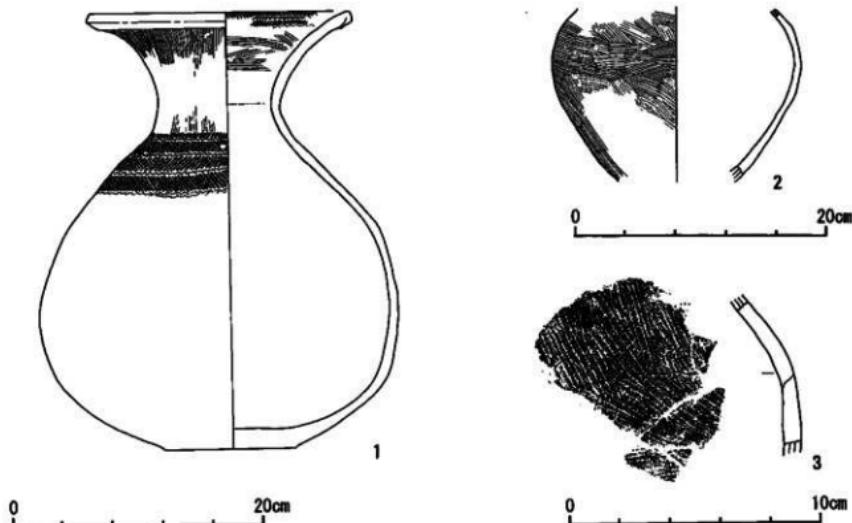
(出土遺物) 壺形土器、壺形土器、台付壺形土器が出土している。

(備考) 住居跡全体に焼土と木炭が括がっており、火を受けたことは明白である。

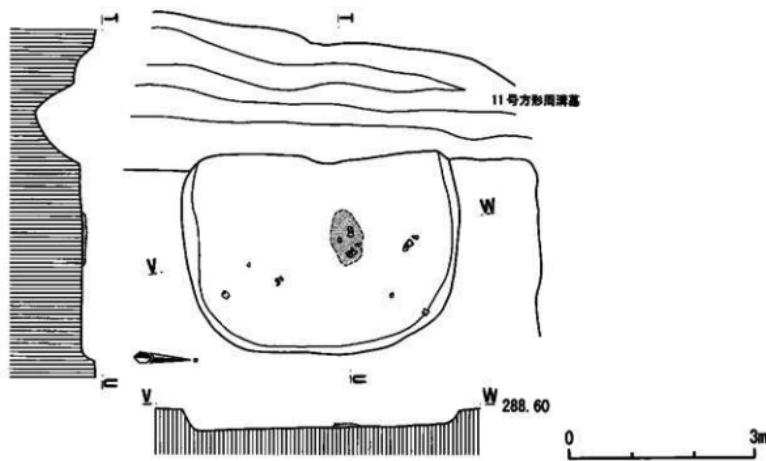
9号住居跡(第20・21図)



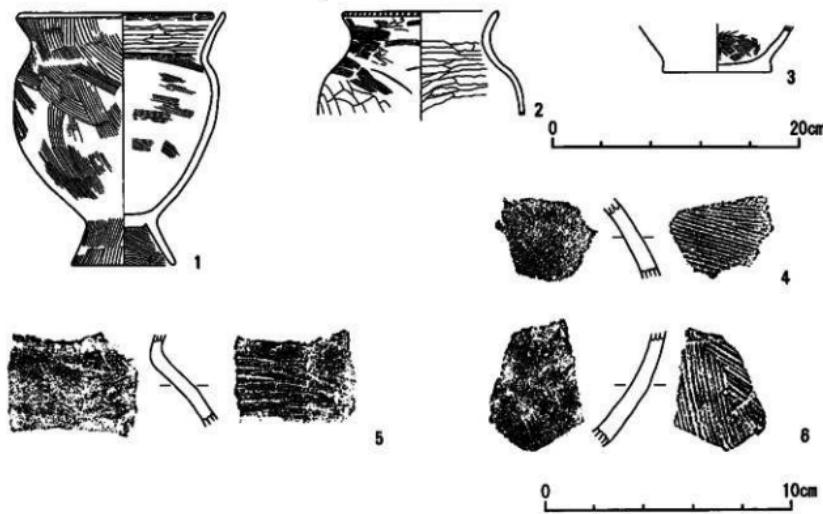
第27図 12号住居跡(2)(S=1/80)・同小竪穴(S=1/20)



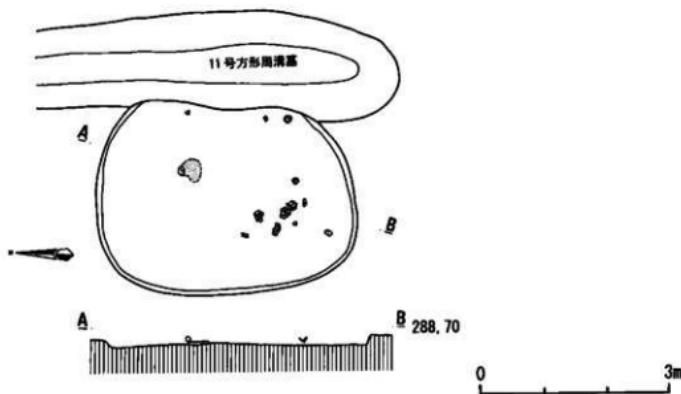
第28図 12号住居跡出土遺物(S=1/2・1/4)



第29図 13号住居跡 (S=1/80)



第30図 13号住居跡出土遺物 (S=1/4・1/2)



第31図 14号住居跡(S=1/80)

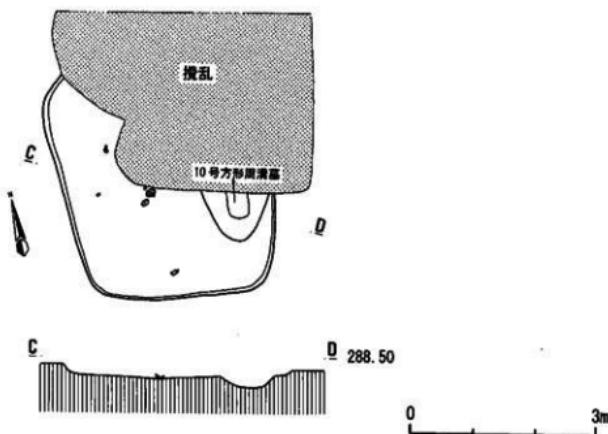


第32図 14号住居跡出土遺物(S=1/4)

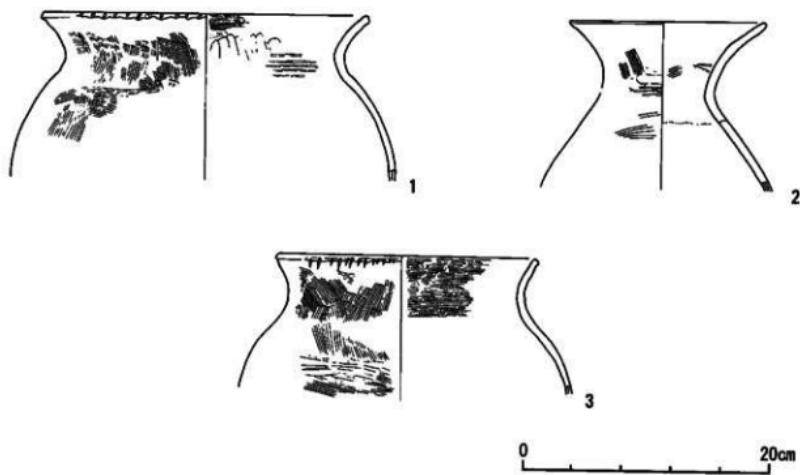
- (形状) 隅丸方形プランを呈する。
- (規模) 東西410cm×南北420cmを測る。
- (主軸) N-91° -E
- (床面) ほぼ平坦である。
- (壁) 壁は緩やかに立ち上がり、壁高は20cm～24cmを測る。
- (柱穴) 確認できなかった。
- (周溝) 確認できなかった。
- (カマド) 南東隅に設けられている。焼土と少ない石組が残っており、本来は石組カマドであった痕跡が見られる。
- (出土遺物) わずかに土師器の変形土器の破片が出土している。

10号住居跡(第22・23図)

- (形状) 住居跡西南部分の一部が発掘調査区域外であるが、楕円形プランを呈するものと思われる。
- (規模) 東西440cm×南北560cmを測る。
- (主軸) N-12° -E
- (床面) ほぼ平坦であるが南側が若干低くなっている。



第33図 15号住居跡 (S=1/80)



第34図 15号住居跡出土遺物(1) (S=1/4)

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は16cm～20cm程度である。

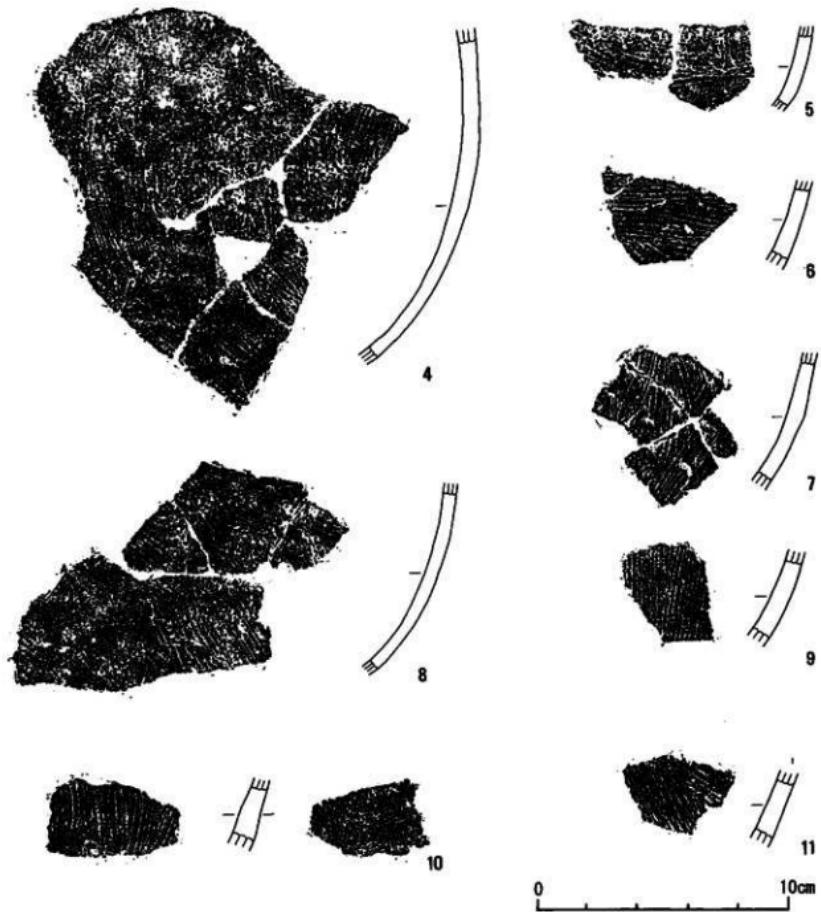
(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(炉) 確認できなかった。

(出土遺物) 壺形土器、小型壺形土器、變形土器等が出土している。

(備考) 柱穴、炉などは確認できなかったものの、平面プランの形状や遺物の出土状況などから見て住居跡と考えた。この住居跡も含め、本遺跡で弥生時代の住居跡で柱穴等を確認することは極めて難しい例が多くかった。何か意味があることなのかもしれない。



第35図 15号住居跡出土遺物(2) (S=1/2)

11号住居跡(第24～26図)

(形状) 南側は7号住居跡に切られており、また残存している部分の中央を試掘トレンチにより掘り抜かれており、遺存状態の良くない住居跡である。正確な形状は不明であるが、胴張り隅丸方形プランを呈するものであろう。

(規模) 東西380cm×南北450cm(推定)の規模であったと思われる。

(主軸) N-10°-E

(床面) ほぼ平坦であるが、わずかに中心部分が高くなっている。

(壁) 壁はなだらかに立ち上がり、壁高は12cm～20cmを測る。

(柱穴) 北寄りの主柱穴と考えられるものが2基確認されている。2基とも直径が40cm前後、深さが約30cmを測る。

(周溝) 確認できなかった。

(炉) 確認できなかった。

(出土遺物) 龍形土器、台付龍形土器、小型壺形土器、楕円形土器等が出土している。

12号住居跡(第27・28図)

(形状) 6号溝跡を切って構築された住居跡で、小判形の楕円形プランを呈する。

(規模) 東西500cm×南北600cmを測る。

(主軸) N-26° -E

(床面) ほぼ平坦である。全体に焼けて焼土化している。木炭も床面および覆土中に多く遺存している。

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は24cm~60cmを測る。床面と同様に焼けて焼土化している。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(炉) 住居内全体が焼けて焼土化していることもあるが、明確な炉は確認できなかった。

(出土遺物) 住居跡内東壁際の小豎穴の中から完形の壺形土器が発見された。その他の遺物は極めて少なかった。

13号住居跡(第29・30図)

(形状) 西壁を11号方形周溝墓に切られているが胸張り隅丸方形プランを呈するものと思われる。

(規模) 東西400cm(推定)×南北450cmを測る。

(主軸) N-10° -W

(床面) ほぼ平坦である。炉の焼土部分がわずかに高くなっている。

(壁) 壁高は20cm~32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(炉) 地床炉であり、住居跡中心よりやや北寄りに設けられている。52cm×88cmの範囲で焼土が見られる。

(出土遺物) 龍形土器、台付龍形土器等が出土している。

14号住居跡(第31・32図)

(形状) 東壁を11号方形周溝墓に切られているが楕円形プランを呈するものと思われる。

(規模) 東西350cm(推定)×南北420cmを測る。

(主軸) N-7° -W

(床面) ほぼ平坦であるが、中心部分がやや高くなっている。

(壁) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は13cm~20cmを測る。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(炉) 地床炉であり、住居跡中心よりやや北東寄りに設けられている。焼土が32cm×32cmの範囲で残っている。焼土の北端に礫が1個見られるが、炉に伴うものとは思えない。

(出土遺物) 龍形土器、台付龍形土器脚部等が出土しているのみである。

15号住居跡(第33~35図)

(形状) 規模の大きな搅乱と10号方形周溝墓によって全体のおよそ半分ほどが破壊されている。わずかに胸張りの隅丸方形プランであるものと思われる。

(規模) 東西330cm(推定)×370cm(推定)ほどの規模であるものと思われる。

(主軸) N-1° -E

(床面) ほぼ平坦であるが住居跡中心部分が若干深くなっている。

(壁) 壁はだらかに立ち上がり、壁高は12cm~16cmを測る。

(柱穴) 確認できなかった。

(周溝) 確認できなかった。

(炉) 確認できなかった。

(出土遺物) 变形土器、壺形土器が出土している。

第2節 方形周溝墓と出土遺物

1号方形周溝墓(第36・38図)

(位置) 1号方形周溝墓は、県道より北の調査区域にあるI区(F～G-1～3)グリッドに位置する。十五所遺跡の方形周溝墓群並びにI区方形周溝墓群の最北端に存在する。2号方形周溝墓が東側に、3号方形周溝墓が南側に隣接する。特に2号方形周溝墓とは周溝を近接させている。また、1号方形周溝墓は扇状地上に位置する十五所遺跡の方形周溝墓群中、最も高い場所にあり、方台部の中心付近で標高293mを測る。

(規模と形態) 1号方形周溝墓では、東溝は全体を発掘することができたが、北溝はごく一部であるが西側を南北の流路跡によって切られ、南溝は大半を擾乱坑によって破壊され、西溝は流路と擾乱坑によってまったく確認することができなかった。その結果、東西の規模を測ることはできないが、南北規模の確認は可能で、周溝を含む外側で11.7m、周溝を含まない内側の方台部で9.2mを測る。この規模は、遺跡全体の周溝墓の平均的規模と比較すると若干小さいが、I区に限って見ると平均的な大きさである。また、1号周溝墓の方位は十五所遺跡のすべての周溝墓の方位と同様に、方台部の4辺が東西南北に沿った方向で存在している。

確認された溝幅では、北溝の溝幅が特に広いことが特徴的で、最大溝幅の1.7mは東溝・南溝のそれの約2倍である。確認された溝の深さも、北溝が最も深く、30cmを超えており、また、周溝の断面はU字形であるが、立ち上がり角度は方台部への立ち上がり角度の方がやや急である。溝底は平坦ではほぼ水平であるが、北溝の溝底は西にわずかに低く傾いている。墳丘と主体部は耕作等で削平されており、検出されない。また、陸橋についても、他の周溝墓から察すると北西隅か南西隅に存在すると思われるが、上記の通りの流路跡と擾乱坑によって確認されない。

土器の破片は周溝のうち、北溝に偏った状態で出土した。北溝では東部から西部まで土器の破片が存在したが、特に東部に集中して出土した。

2号方形周溝墓(第37・39図)

(位置) 2号方形周溝墓は、前出の調査区域であるI区(E～F-1～イ)グリッドに位置する。I区の方形周溝墓群の中では北端部にある。1号方形周溝墓が西側に、4号方形周溝墓が南側に、周溝を近接するような状態で隣接する。また、2号方形周溝墓は1号方形周溝墓と同様、扇状地上に位置する十五所遺跡の方形周溝墓群の中では最も高い場所にあり、標高も方台部の中心付近で1号方形周溝墓と全く同じ293mを測る。

(規模と形態) 2号方形周溝墓では、北東部と西部にある試掘のトレンチと南東部にある畑かん施設跡の土坑によって、周溝と方台部の一部が切られている。そのため、東溝だけはほぼ全体を発掘することができたが、北溝は西部、西溝は中央部の一部を除いた部分、南溝は西部と中央部を確認するに留まった。しかし、方形周溝墓の完全な規模を測ることはできないまでも、2号方形周溝墓の特徴や形態を知るために測量には十分可能な範囲での発掘であった。確認された遺構からすると、2号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西10.1m・南北10.3m、周溝を含まない内側の方台部で東西8.0m・南北8.3mを測る。この測量値から明らかのように、2号方形周溝墓はほぼ正確な方形をしている。また、この規模は、遺跡全体の周溝墓の平均的規模と比較すると2mほど小さく、平均的規模がII区よりも小さいI区に限って見ても最小の部類にはいる。2号周溝墓の方位も他の周溝墓の方位と同様に、方台部の4辺が東西南北に沿った方向で存在している。

確認された周溝は、西溝の南部から南溝の溝幅が広く、南西隅で最大溝幅1.7mを測る。溝の深さは、

4辺の溝とも大差なく、20cm前後である。また、周溝の断面はU字形であるが、立ち上がり角度においては東溝の立ち上がり角度が他の3辺に比較してなだらかである。溝底はほぼ平坦であるが、東溝と西溝の溝底が南にわずかに低く傾いているのが特徴である。墳丘と主体部は耕作等で削平されており、検出されない。また、陸橋は南東隅に存在することは確認できるが、陸橋部の南部が畠かん施設跡の土坑に破壊されているためにその規模等は測れない。土器破片の出土数が少ないことが2号方形周溝墓の特徴であるが、北溝では西部から、西溝では南部から主に出土した。

3号方形周溝墓(第40・43図)

(位置) 3号方形周溝墓は、I区(G~H-1~ロ)グリッドに位置する。I区の方形周溝墓群最北端に位置する1号方形周溝墓の南側にある。さらに、4号方形周溝墓が東側に、周溝を近接するような状態で隣接する。また、3号方形周溝墓は、扇状地上に位置する十五所遺跡の方形周溝墓群の中では比較的高い場所にあり、標高は方台部の中心付近で高度293mを測る。この数値は最高度を測った1号方形周溝墓と同じである。

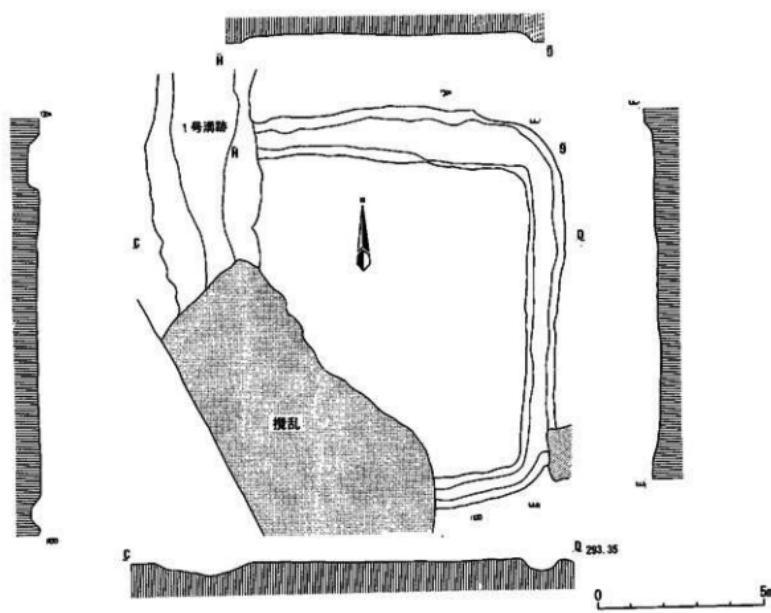
(規模と形態) 3号方形周溝墓は、北部にある砂利層と西部に広がる調査区域外の地域によって周溝と方台部の一部が切られしており、東溝だけはほぼ全体を発掘することができたが、北溝と南溝は東部を確認するに留まり、西溝は全く存在を認めることができなかった。そのため、3号方形周溝墓の規模を知るための完全な測量はできなかったが、南北規模の確認ができ、周溝を含む外側で南北10.5m、周溝を含まない内側の方台部で南北8.1mを測る。この測量値から3号方形周溝墓の規模を推定すると、3号方形周溝墓は遺跡全体の周溝墓の平均的規模より外側3m・内側で2mほど小さく、平均的規模がII区より小さいI区に限って見ても外側2m・内側で1mほど小さいため、遺跡全体でも最小の部類にはいる。3号周溝墓の方位は、方台部3辺の確認だけからではあるが、他の周溝墓の方位と同様に、方台部の4辺が東西南北に沿った方向で存在していると推定される。

確認された3辺の周溝は、どの溝幅も1.1mから1.2mを測り、周溝の場所によっての広狭がありない。溝の深さは、東溝と北溝が40cm、南溝が30cmほどで、南溝が若干ではあるが浅くなっている。また、周溝の断面はU字形であるが、立ち上がり角度が前出の1・2号方形周溝墓に比較するとなだらかである。溝底はほぼ平坦であり、溝底の傾きもあまりない。墳丘と主体部は耕作等で削平されており、検出されない。また、陸橋部については、周溝の南北隅と南東隅を確認することができたが、砂利層と調査外区域のために周溝の北西隅と南西隅を発掘することができなかつたので、陸橋部は北西隅か南西隅のどちらかに存在すると推定される。土器破片の出土は數少ないと、東溝と北溝で出土した。なかでも北溝から集中して出土した。

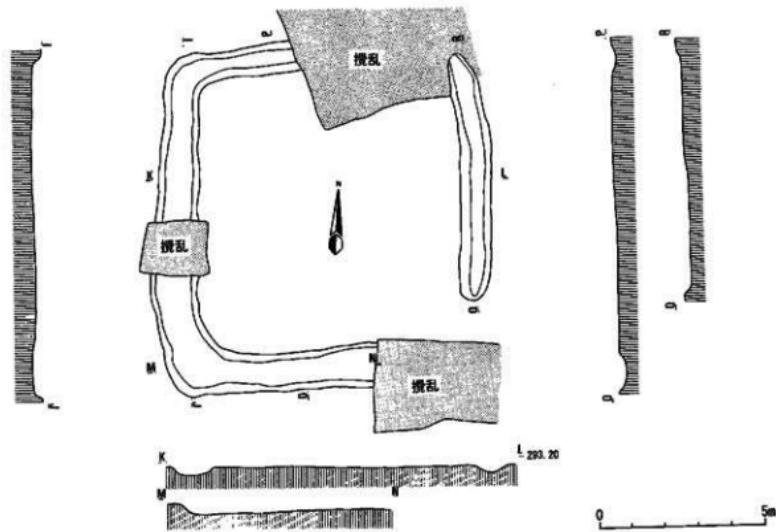
4号方形周溝墓(第41・44図)

(位置) 4号方形周溝墓は、I区(E~G-イ~ハ)グリッドに位置する。I区の方形周溝墓群最北端に位置する1号方形周溝墓の南東側にある。さらに、2号方形周溝墓が北側に、3号方形周溝墓が西側に、5号方形周溝墓が東側に、3方を相互に周溝を近接するような状態で隣接する。また、扇状地上に位置する十五所遺跡の方形周溝墓群の中で最も高度の高い場所にある1~5号方形周溝墓の中の一つが4号方形周溝墓で、標高は方台部の中心付近で高度293mを測る。この数値は1~5号方形周溝墓の方台部の高さと同じで、十五所遺跡の方形周溝墓群中の最高度である。

(規模と形態) 4号方形周溝墓は、周溝のほぼ全体を確認発掘することができたが、周溝の北東から南西にかけての畠かん水路と北部の畠かん付属施設のために、狭い範囲ではあるが、東溝の北部と西溝の南部北溝の東部、方台部の中央部が切れ、一部分ずつを発掘することができなかつた。しかし、4号方形周溝墓の規模や形態を知るために十分な測量ができた。その結果、4号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西11.0m・南北10.1m、周溝を含まない内側の方台部で東西8.1m・南北7.8mを測る。この測量値からわかるように、4号方形周溝墓の方台部は正確な方形をしていることが特徴である。また、4号方形周溝墓の規模は、遺跡全体の周溝墓の平均的規模より外側で東西2.7m・南北3.2m、内側で東西2m・南北2.2mほど小さく、平均的規模がII区より小さいI区に限って見ても外側で東西1.4m・南北2.5m、内側で

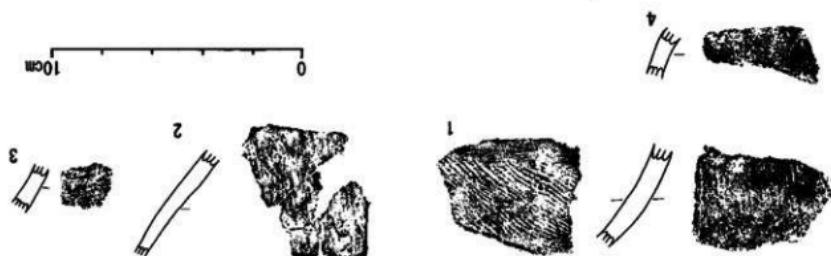


第36図 1号方形周溝墓 ($S=1/150$)

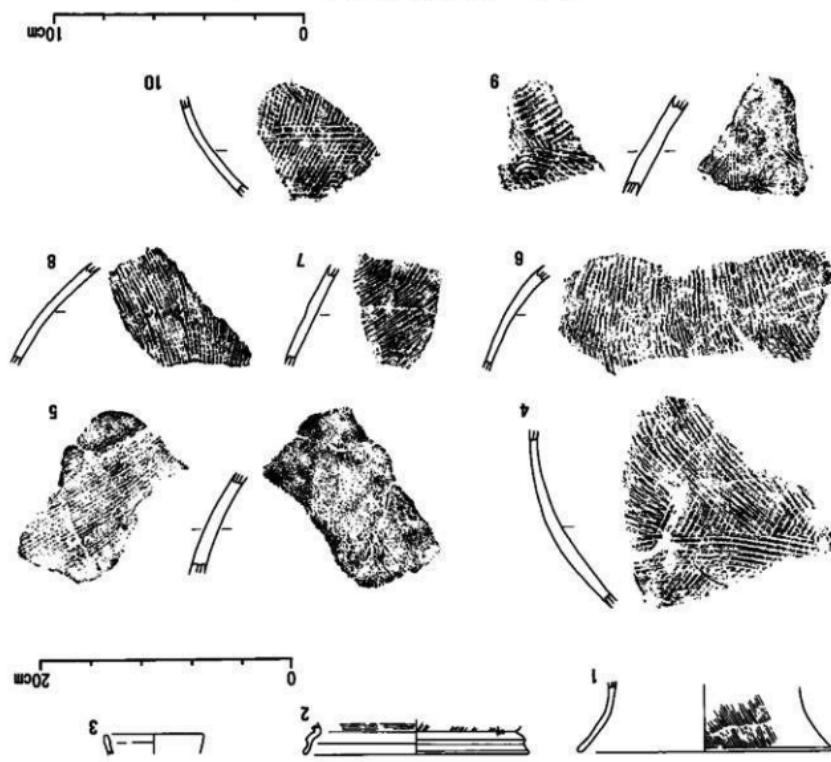


第37図 2号方形周溝墓 ($S=1/150$)

第39圖 2號方形圓窯墓出土遺物(S=1/2)



第38圖 1號方形圓窯墓出土遺物(S=1/4·1/2)



東西0.9m・南北1.7mほど小さいので、遺跡内では比較的小型の方形周溝墓であると言える。4号周溝墓の方位は、他の周溝墓の方位と同様に、方台部の4辺が東西南北に沿った方向で存在している。

確認された周溝では、北溝において溝幅1m・深さ20cmを測り、他の3辺の平均溝幅1.3m・平均深さ35cmよりも少しずつ狭くて浅いことが特徴として上げられる。また、周溝の断面はU字形で、立ち上がり角度は比較するとなだらかである。溝底は隣接する方形周溝墓と同様にほぼ平坦であり、4辺の溝とともに溝底の傾きもあまりない。

4号方形周溝墓においては、十五所遺跡の方形周溝墓群の中で唯一、墳丘が確認できた。本周溝墓は、前述のように畠かん施設によって北東から南西に向かって、周溝・方台部・周溝の順に切られている。そのために、畠かん施設を挟んで幅1.2mほどの部分が削平されずに残存していた。発掘の際に、その部分の断面を観察したところ、高さ30cmの墳丘が確認できた。主体部は耕作等で削平されており、検出されない。また、陸橋部については、四隅の中で北東隅だけに確認することができた。北溝と東溝に挟まれた陸橋部の幅は1.5mを測る。土器の破片の出土は、東溝と西溝で出土した。なかでも西溝からの出土が多い。また、方台部の中央部分からも土器片が出土し、4号方形周溝墓の遺物出土を特徴的なものにしている。

5号方形周溝墓(第42・45・49図)

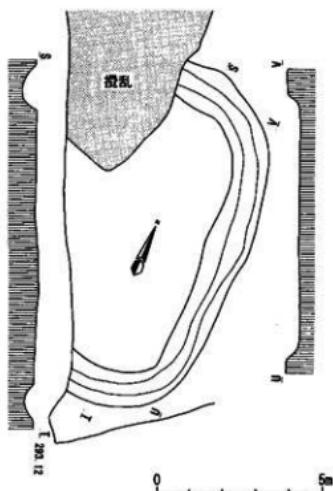
(位置) 5号方形周溝墓は、I区(C~E-ローニ)グリッドに位置する。I区の方形周溝墓群最北端に位置する2号方形周溝墓の南東側に、2号墓の陸橋部を間に存在するとともに、4号方形周溝墓とは周溝を近接する状況で隣接する。さらに、南側には6号方形周溝墓が、墓道と思われる区域をはさんで存在する。また、扇状地上に位置する十五所遺跡の方形周溝墓群の中で最も高度の高い場所にある1~5号方形周溝墓の中の一つで、標高は方台部の中心付近で高度293mを測る。この数値は1~5号方形周溝墓の方台部の高度と同じで、十五所遺跡の方形周溝墓群中の最高度である。

(規模と形態) 5号方形周溝墓は周溝のほぼ全体を確認発掘することができたが、4号方形周溝墓を貫いていた畠かんが5号方形周溝墓においても同様に周溝の北側中央部から西側中央部にかけて存在するとともに、それに付随した施設が北西部にあり、それぞれ狭い範囲ではあるが、北溝の中央部と西溝の北部・中央部が切れられ、一部分ずつを発掘することができなかった。しかし、発掘できた範囲だけに5号方形周溝墓の規模や形態を知るには十分で、5号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西11.1m・南北10.9m・周溝を含まない内側の方台部で東西7.8m・南北8.0mを測る。この測量値からは、5号方形周溝墓の方台部は正確な方形をしていることが推察されるが、周溝の北西隅が畠かん施設によって切られているために確定はできない。また、5号方形周溝墓の規模は、遺跡全体の周溝墓の平均的規模より外側で東西2.6m・南北2.4m、内側で東西2.3m・南北2mほど小さく、平均的規模がII区より小さいI区に限って見ても外側で東西1.3m・南北1.7m、内側で東西1.2m・南北1.5mほど小さいので、遺跡内では比較的小型の方形周溝墓であると言える。5号周溝墓の方位は、他の周溝墓の方位と同様に、方台部の4辺が東西南北に沿った方向で存在している。

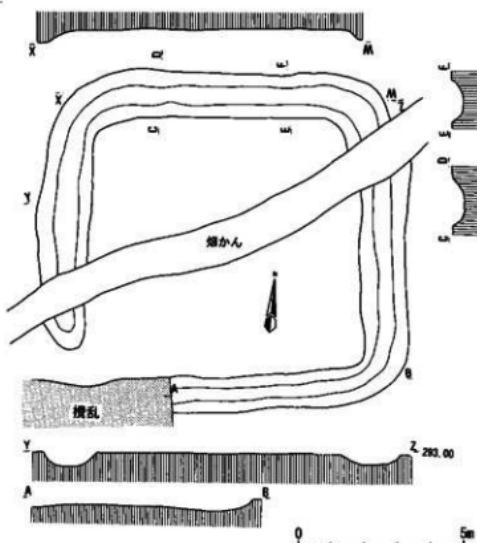
確認された周溝では、西溝と南溝の溝幅が2.0~2.3mを測り、東溝と北溝の溝幅よりおよそ1mほど広い。また、深さも西溝と南溝では40cmを測り、東溝と北溝の深さのおよそ2倍で、5号方形周溝墓の特徴となっている。周溝の断面はU字形で、溝底はほぼ平坦であるが、西溝と南溝の溝底高度が東溝と北溝の溝底高度よりも10~25cmほど低くなっている。陸橋部は、南東隅だけに1カ所だけを確認することができた。東溝と南溝に挟まれた陸橋部の幅は2.3mを測る。土器は、南西隅を中心とした部分でほとんどが出土した。

6号方形周溝墓(第46~48・50図)

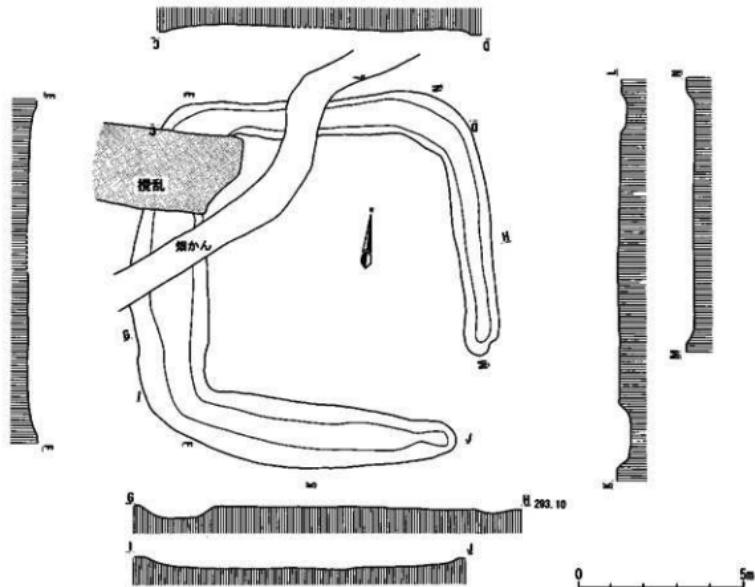
(位置) 6号方形周溝墓は、I区(E~H-ホーチ)グリッドに位置する。I区の方形周溝墓群は、東西に走る墓道を境にして、北側に位置する1~5号方形周溝墓グループと南側に位置する6・7号方形周溝グループの2グループに大別することができ、6号方形周溝墓はそのうちの南に位置するグループに属する。また、6号方形周溝墓は、東側を9号方形周溝墓に、西側を7号方形周溝墓に、南側を8号方形周



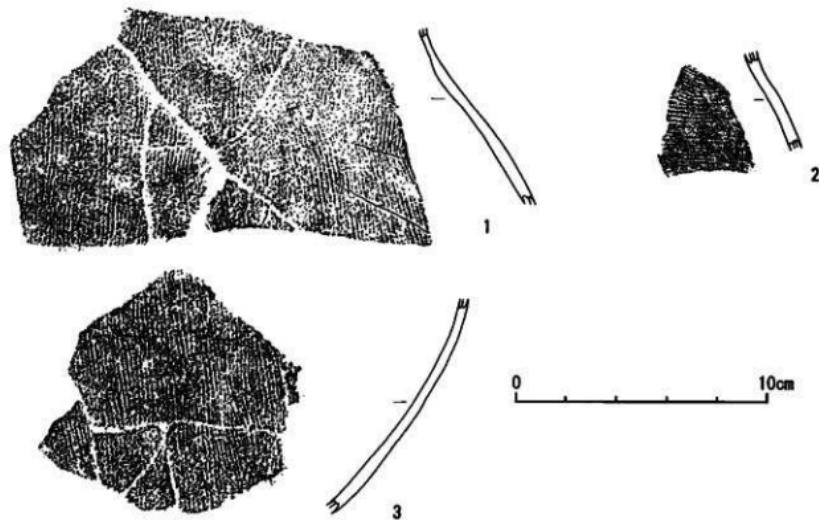
第40図 3号方形周溝墓 ($S=1/150$)



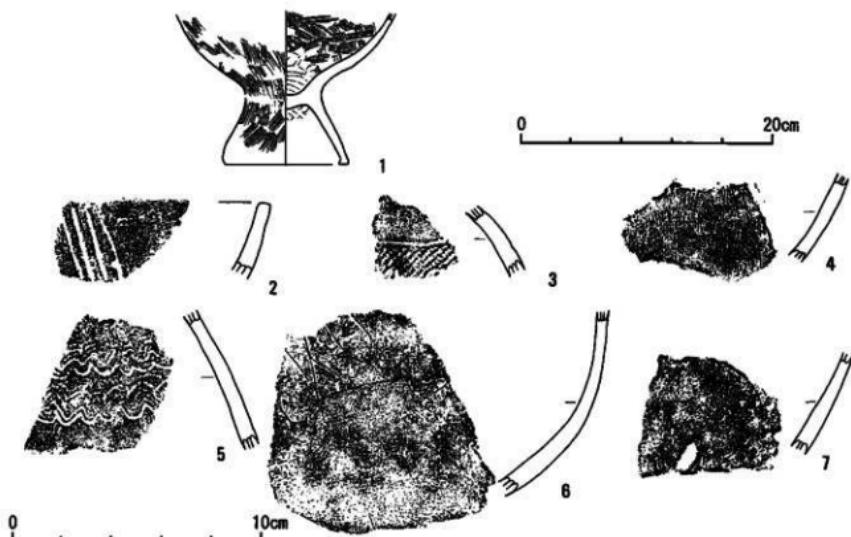
第41図 4号方形周溝墓 ($S=1/150$)



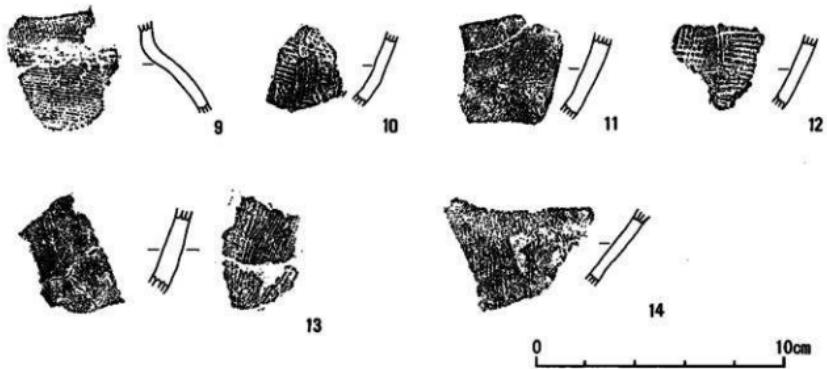
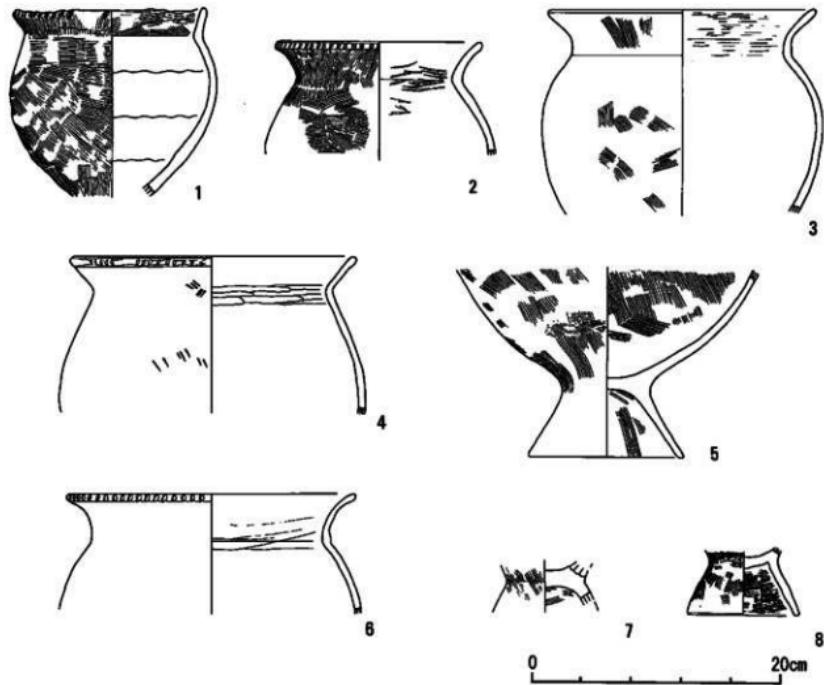
第42図 5号方形周溝墓 ($S=1/150$)



第43図 3号方形周溝墓出土遺物 ($S=1/2$)



第44図 4号方形周溝墓出土遺物 ($S=1/4 \cdot 1/2$)



第45図 5号方形周溝墓出土遺物(S=1/4・1/2)

溝墓によって囲まれ、北側を墓道が走っている。なかでも、7号方形周溝墓とは周溝を近接する状況で隣接する。また、扇状地上に位置する十五所遺跡の方形周溝墓群の中で最も高度の高い場所にあり、標高は方台部の中心付近で高度293mを測る。

(規模と形態) 6号方形周溝墓は幸いにも周溝の全体を発掘することができ、6号方形周溝墓の規模や形態を完全に知ることができる。6号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西16.6m・南北17.4m、周溝を含まない内側の方台部で東西11.4m・南北12.2mを測る。この測量値から、6号方形周溝墓の方台部は外側も内側もほぼ正確な方形をしていることがわかる。6号方形周溝墓の規模は、遺跡全体の周溝墓の平均的規模より外側で東西2.9m・南北4.1m、内側で東西1.3m・南北2.2mほど大きく、平均的規模がⅡ区より小さいⅠ区に限って見ると外側で東西4.2m・南北4.8m、内側で東西2.4m・南北2.7m余り大きい。遺跡内の他の方形周溝墓の規模と比較すると、大型の方形周溝墓と言え、Ⅰ区では最大である。6号周溝墓の方台は、他の周溝墓の方台と同様に、方台部の4辺が東西南北に沿った方向で存在している。

大型で正確な方形をした6号周溝墓の周溝は、溝幅も広く、およそ2.5~3.0mを測り、部位によっての溝幅のばらつきもほとんどない。また、溝の深さは60~70cmを測り、溝幅と同様にほぼ一定している。周溝の断面はU字形で、溝底は平坦に近く、周溝の溝底高度は南へ向かって低くなり、北溝と南溝の溝底高度差は30~40cmほどである。

陸橋部は北東隅だけに1カ所だけを確認することができ、東溝と北溝に挟まれた陸橋部の幅は1.5mを測る。土器は、西溝の北部分と南溝の西部分からほとんどが出土した。

7号方形周溝墓(第51・53・57図)

(位置) 7号方形周溝墓は、Ⅰ区(F~H一ロ~ヘ)グリッドに位置する。前述のように、Ⅰ区の方形周溝墓群は、東西に走る墓道を境にして、北側に位置するグループと南側に位置するグループの2グループに大別することができ、7号方形周溝墓はそのうちの南に位置するグループに属する。の中では、7号方形周溝墓は、東側を9号方形周溝墓と周溝を密着する形で隣接し、北側を墓道が走っている。

また、扇状地上に位置する十五所遺跡の方形周溝墓群の中で最も高度の高い場所にあり、標高は方台部の中心付近で高度293mを測る。

(規模と形態) 7号方形周溝墓のうち、完全に発掘できた周溝は東溝のみで、北溝は西側のおよそ1/2が確認できず、南溝では東端のごく一部を除いたほとんど、西溝においてはまったく確認できなかった。

そのため、7号方形周溝墓の規模と形態は、確認できた部分から推察するにとどまる。7号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で南北14.5m、周溝を含まない内側の方台部で南北10.3mを測る。6号方形周溝墓の規模は、遺跡全体の周溝墓の平均的規模より外側で南北1.2m、内側で南北0.3mほど大きく、平均的規模がⅡ区より小さいⅠ区に限って見ると外側で南北1.9m、内側で南北0.8m余り大きい。7号方形周溝墓も、遺跡内の他の方形周溝墓の形態から推察されるような形態を呈していたと思われ、その上で規模を比較すると、平均的大きさを僅かに上回る規模の方形周溝墓と言える。7号周溝墓の方台は、他の周溝墓の方台と同様に、方台部の4辺が東西南北に沿った方向で存在していることが推察される。

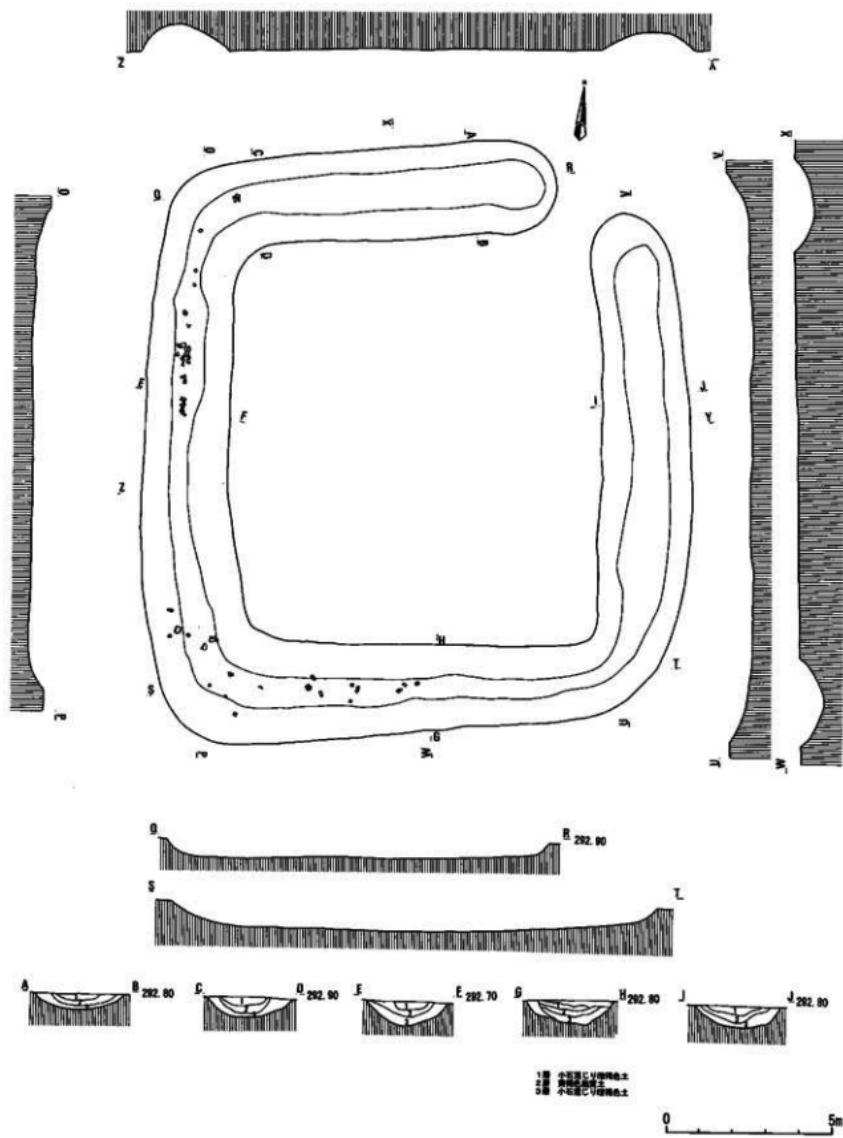
7号墓において確認された東溝全体と北溝・南溝の一部分の溝幅は、どの部分もおよそ2.0mを測る。また、深さにおいてもどの部分もほぼ同様の規模で、およそ50cmを測る。周溝の断面はU字形で、溝底はほぼ平坦であるが、全体が確認できた東溝をみると、北端と南端ではおよそ20cmほどの高低差があり、南端に向かって低くなっている。

陸橋部は確認することができなかった。

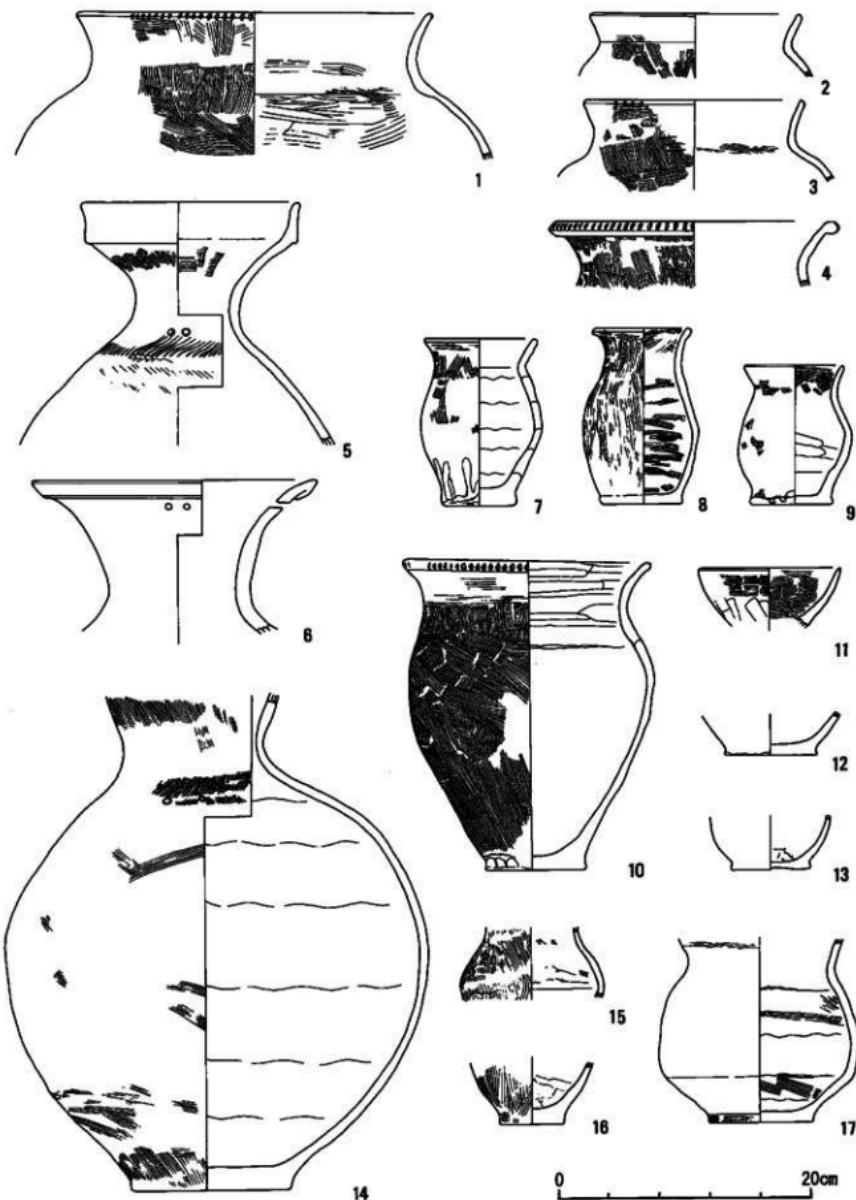
土器は、北東隅を中心とした部分でほとんどが出土した。

8号方形周溝墓(第52・54~56・58図)

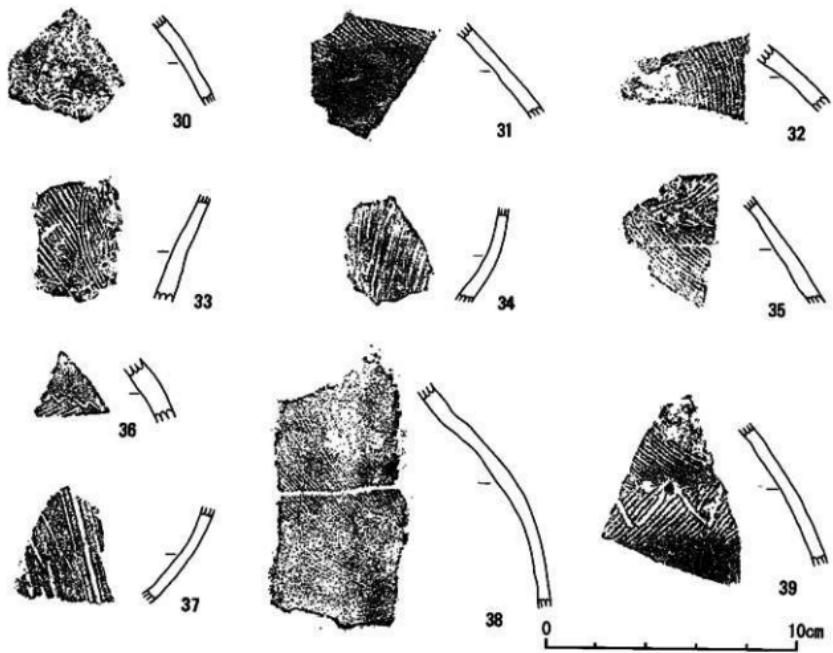
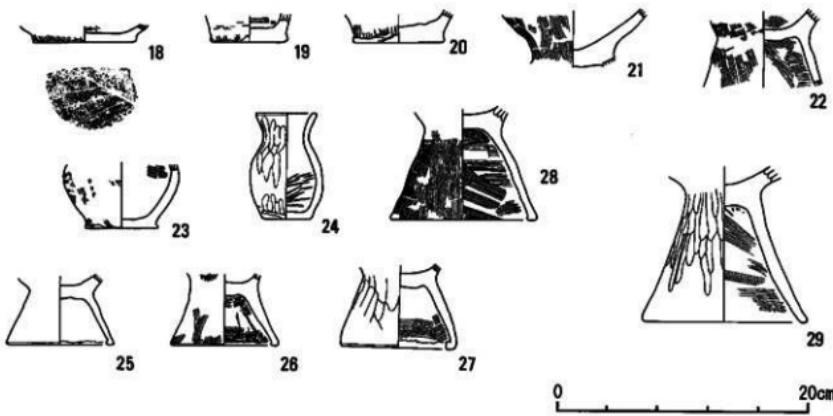
(位置) 8号方形周溝墓は、Ⅰ区(D~H一チール)グリッドに位置する。Ⅰ区の方形周溝墓群は、前述のように北側に位置するグループと南側に位置するグループの2グループに大別することができ、8号方形周溝墓はそのうちの南に位置するグループに属するとともに、最も南に位置する。そのため、8号方形周溝墓は、北側を6号方形周溝墓と隣接し、南側を墓道が走っている。また、東側と西側には周溝



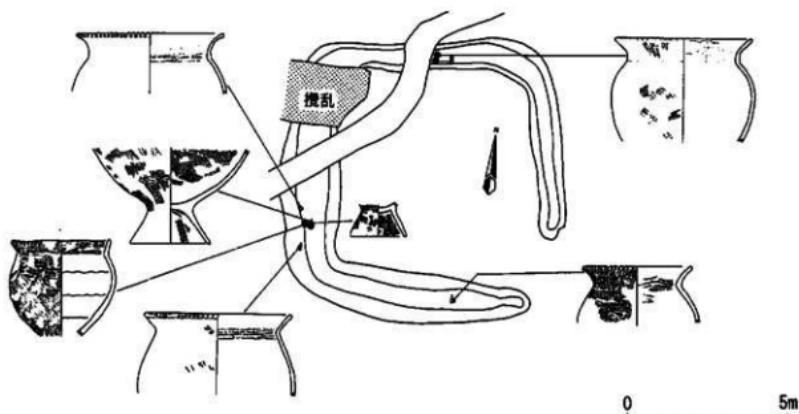
第46図 6号方形周溝墓 ($S=1/150$)



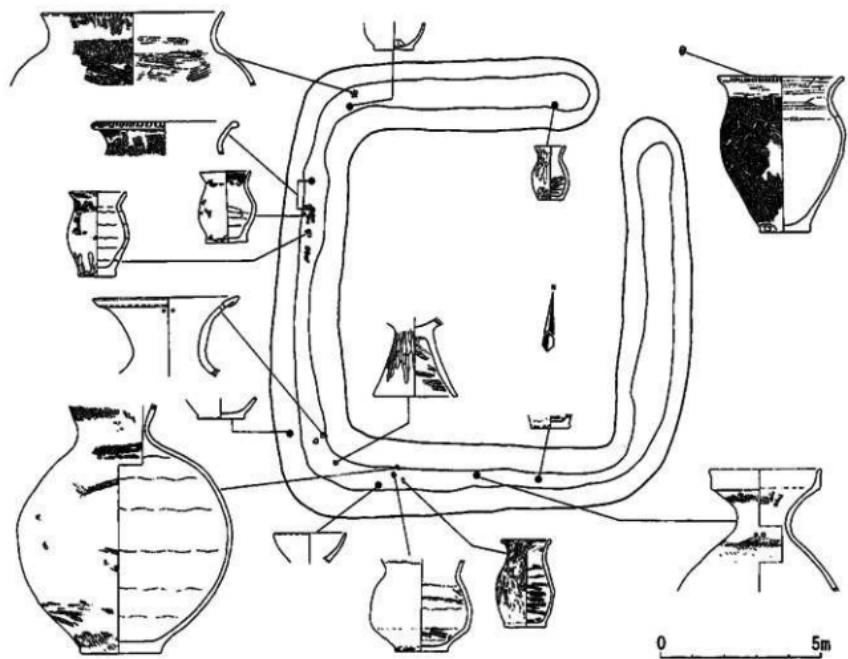
第47図 6号方形周溝墓出土遺物(1) (S=1/4)



第48図 6号方形周溝墓出土遺物(2) (S=1/4・1/2)



第49図 5号方形周溝墓遺物出土位置図



第50図 6号方形周溝墓遺物出土位置図

墓ではなく、南側は調査区外のために存在有無の確認はできなかった。なお、8号方形周溝墓の東側には5号溝があり、土器1点が出土している。

標高は方台部の中心付近で高度293mを測る。

(規模と形態) 8号方形周溝墓は、東溝の南端と南溝の東端のそれぞれ一部分が調査区外となるために発掘調査をすることができなかったが、それ以外の部分は完全に確認できたので、陸橋部を除いてはその規模と形態を知ることができた。8号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西12.9m・南北15.9m、周溝を含まない内側の方台部で東西9.6m・南北11.4mを測る。この測量値から、8号方形周溝墓は若干南北に長い長方形であることがわかる。本遺跡内の他の方形周溝墓がほぼ正方形をしていることから考えると、この形態は8号方形周溝墓の特徴と言える。また、8号方形周溝墓の規模を遺跡内の方形周溝墓全体から見ると、平均的規模との比較では外側で東西が0.8m小さく、南北が1.7m大きい。内側では東西が0.5m小さく、南北が1.4m大きい。一方、I区に限って見ると、外側の東西・南北でそれぞれ0.5m・2.4m大きく、内側の東西・南北でそれぞれ0.6m・1.9m大きい。つまり、8号方形周溝墓は、東西方向では平均的な規模であるが、南北の長さが平均を上回る規模であると言える。8号方形周溝墓の方位は、他の周溝墓の方位と同様に方台部の4辺が東西南北に沿っている。

8号方形周溝墓の周溝は、南溝で2.0mの溝幅を測るが、他の部分は1.6m~1.9mの溝幅である。全体的には大きな広狭はない。溝の深さは、西溝・南溝・北溝で40cm程であるが、東溝は溝の外側と内側に標高差があるため、溝の外側から測ると他の溝と同様に40cm、方台部から測ると60cmを測る。周溝の断面はU字形で、溝底は平坦に近いが、溝底の標高は東溝のみ他の溝底より40cm~50cm低い。

陸橋部の確認はできなかったが、I区の他の周溝墓の形態から推し量ると、調査区外であった東溝と南溝に挟まれた南東隅に存在していることが推察される。

土器は、西溝の中央部分から集中して出土した。

9号方形周溝墓(第59・60・65図)

(位置) 9号方形周溝墓は、I区(B~D~E~H~C)グリッドに位置する。前述のように、墓道を境にして南北の2グループに大別することのできるI区の方形周溝墓のうち、9号方形周溝墓は南側のグループに属し、その東端に位置している。9号方形周溝墓の北側には墓道が走り、西側に6号方形周溝墓、南側に5号溝がある。また、調査区が9号方形周溝墓の東側で終わるために、完全な範囲の確認ではないが、I区の方形周溝墓群は9号方形周溝墓の存在をもって東端であると思われる。

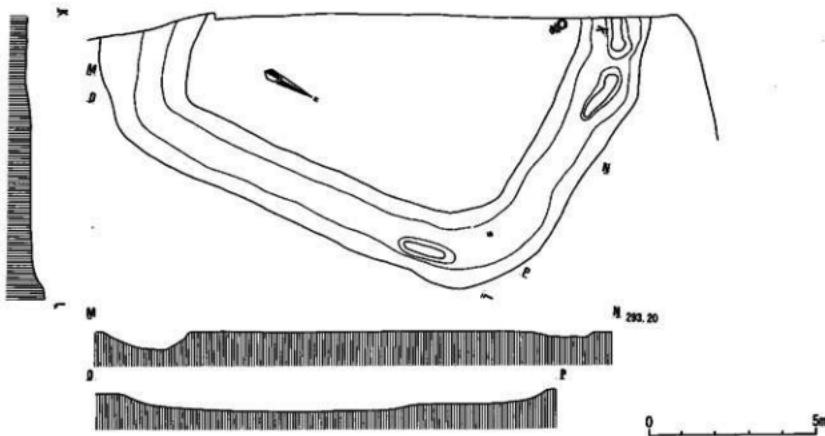
標高は方台部の中心付近で高度293mを測る。

(規模と形態) 9号方形周溝墓はほぼすべての周溝を発掘調査することができ、十分その規模と形態を確認することができた。9号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西12.9m・南北15.0m、周溝を含まない内側の方台部で東西9.6m・南北11.4mを測る。この測量値からすると、9号方形周溝墓は正確な方形よりも南北に約2m長い長方形に近いことがわかる。また、その規模を他の方形周溝墓と比較すると、全体の平均値より、外側の東西で0.8m小さく、南北で1.7m大きい。また、内側の東西では0.5m小さく、南北では1.4m大きい。一方、全体の平均値よりやや小さい平均値をもつI区の方形周溝墓群の規模と比較すると、外側の東西で0.5m・南北で2.4m、内側の東西で0.6m・南北で1.9mそれぞれ大きい。つまり、9号方形周溝墓においては、東西は平均的規模であるものの、南北はそれを上回る規模であると言えよう。一方、9号方形周溝墓の方位は、方台部の4辺がそれぞれ東西南北に沿った方向で存在している。

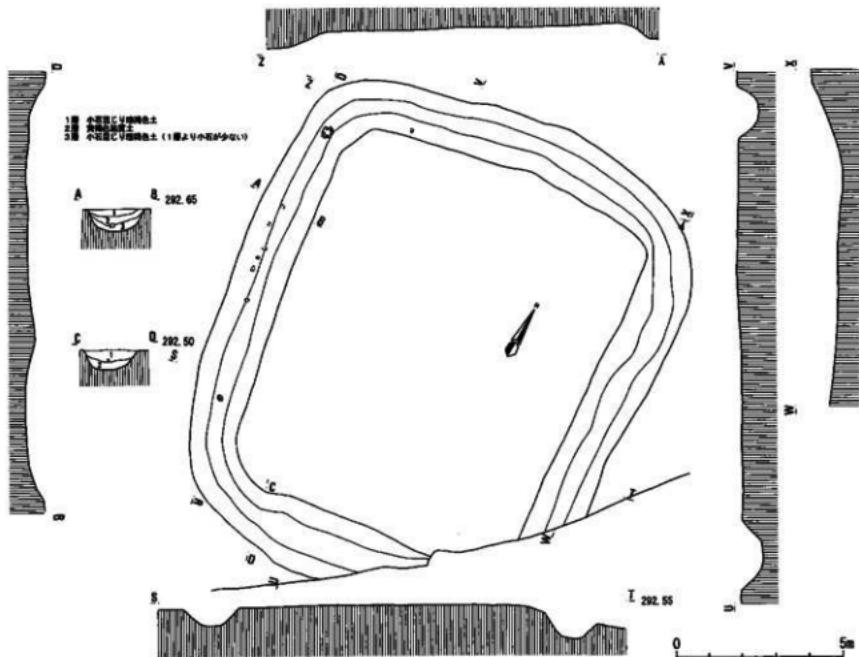
9号方形周溝墓の溝幅は、東溝と西溝・北溝と南溝がほぼ同じで、前者が約2.0m、後者が約1.5mを測る。周溝の深さは周溝縁と溝底との差を意味するものである¹、9号方形周溝墓では周溝縁と溝底は一定の標高ではなく、周溝縁の標高は東溝と北溝が高く、西溝と南溝が低い。他方、溝底の標高は、北溝と西溝で高く、東溝と南溝で低い。その結果、周溝の深さは、東溝で約50cm・西溝で約30cm・南溝で約35cm・北溝で約25cmを測る。周溝の断面はU字形で、溝底は平坦であり凹凸もない。溝底の標高は上記の通りであり、北東隅から南西隅に向かって傾斜している。最も低い部分は南溝の東部域である。

陸橋部は、北西隅で確認した。その幅は推定であるが、約2.2mである。

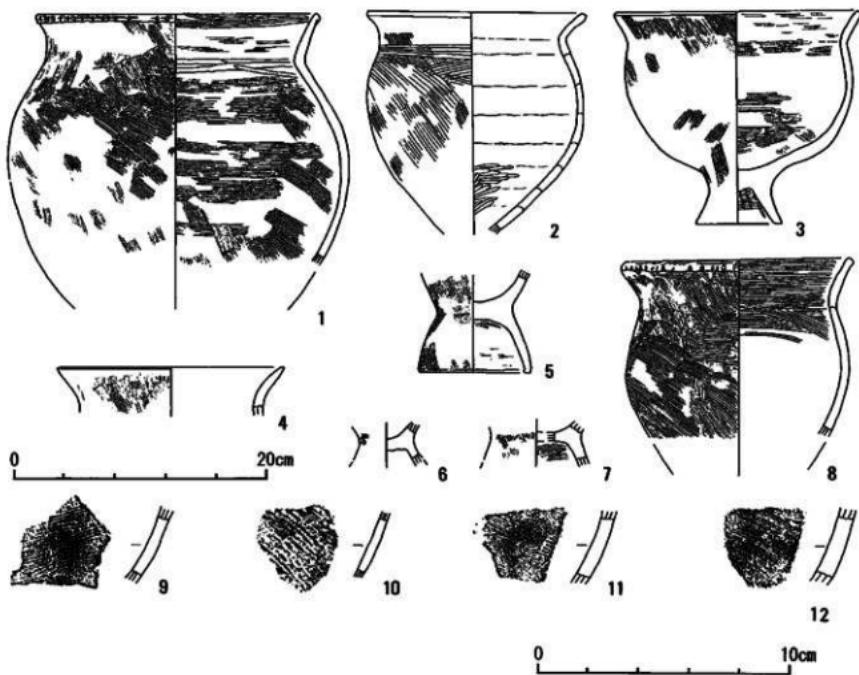
土器は、西溝の北端部分と南端部分、南溝の東端部分から出土している。



第51図 7号方形周溝墓 ($S=1/150$)



第52図 8号方形周溝墓 ($S=1/150$)



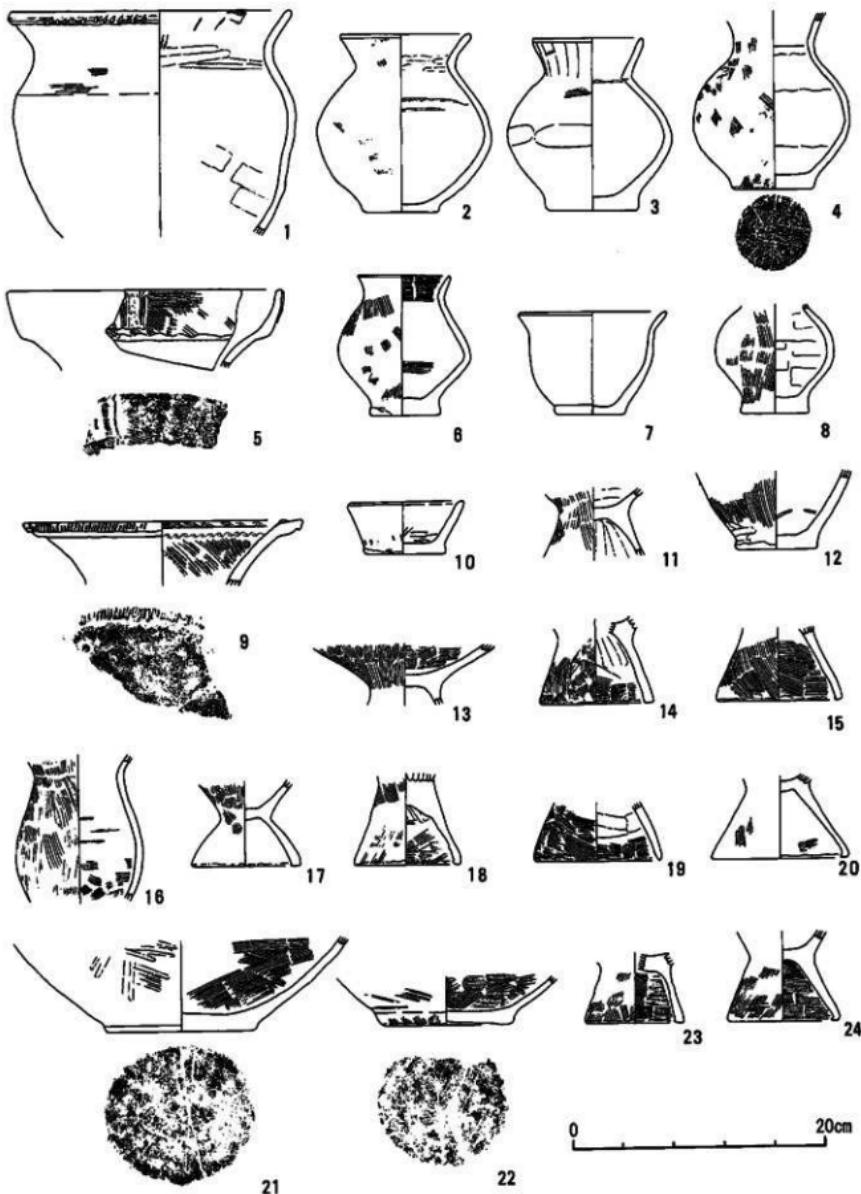
第53図 7号方形周溝墓出土遺物 (S=1/4 · 1/2)

10号方形周溝墓(第61~64・66図)

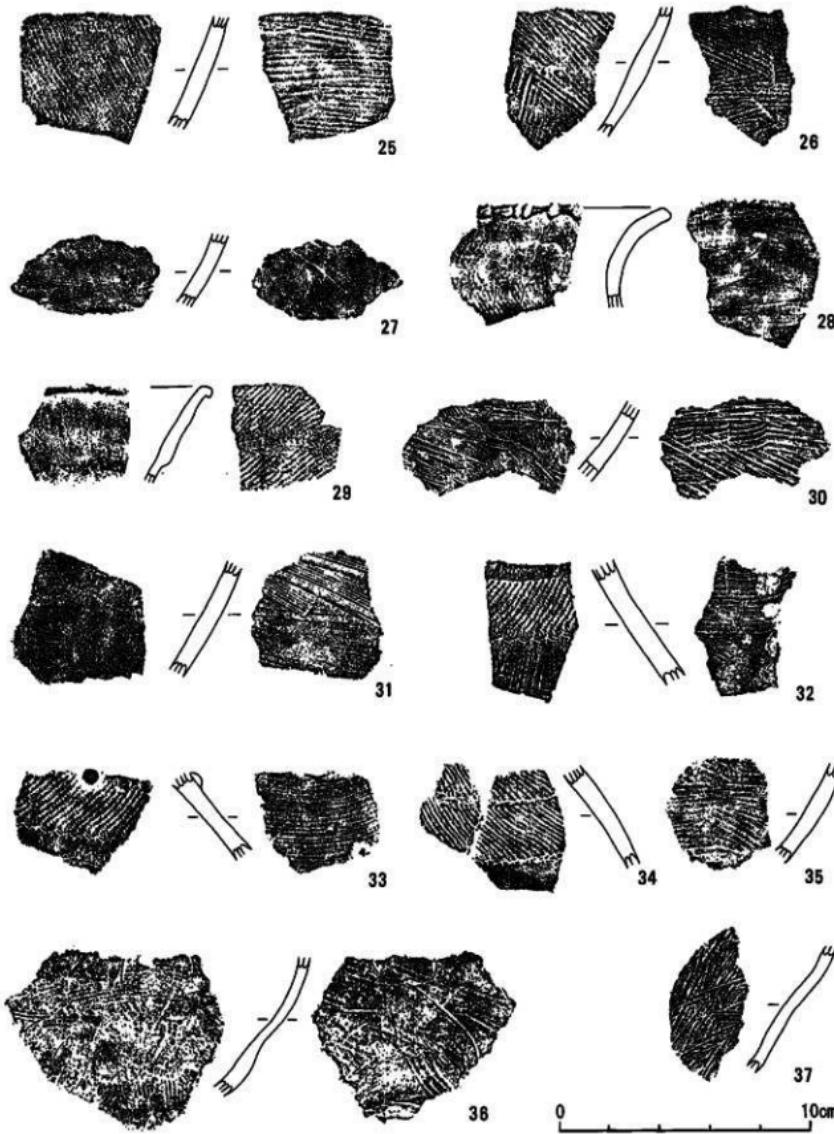
(位置) 10号方形周溝墓は、Ⅲ区(F-I-15-17)グリッドに位置する。Ⅲ区の方形周溝墓群は、11号方形周溝墓と12号方形周溝墓の間を走る墓道によって、10号周溝墓と11号周溝墓が属する南側のグループと、12~18号周溝墓が属する北側のグループに大別することができる。確認できた方形周溝墓の数は10号方形周溝墓の属する南側のグループの方が多いが、墓域は西側に広がると考えられるので一概には数の比較はできない。また、10号方形周溝墓の北側には11号方形周溝墓と13・14号住居がある。特に、11号方形周溝墓とは周溝を密着させる形で接している。西側は調査区域外となるために、発掘調査しての遺構確認はできなかった。南側には8m程離れた位置に8号住居があるが、方形周溝墓の存在は認められず、確認できた方形周溝墓の群の中では10号方形周溝墓が最南端にあることがわかる。東側においては、東溝より20mの間にいざれの方形周溝墓も確認できなかつたので、10号方形周溝墓がⅢ区南グループの東端なると言える。

標高は方台部の中心付近で高度288.5mを測る。

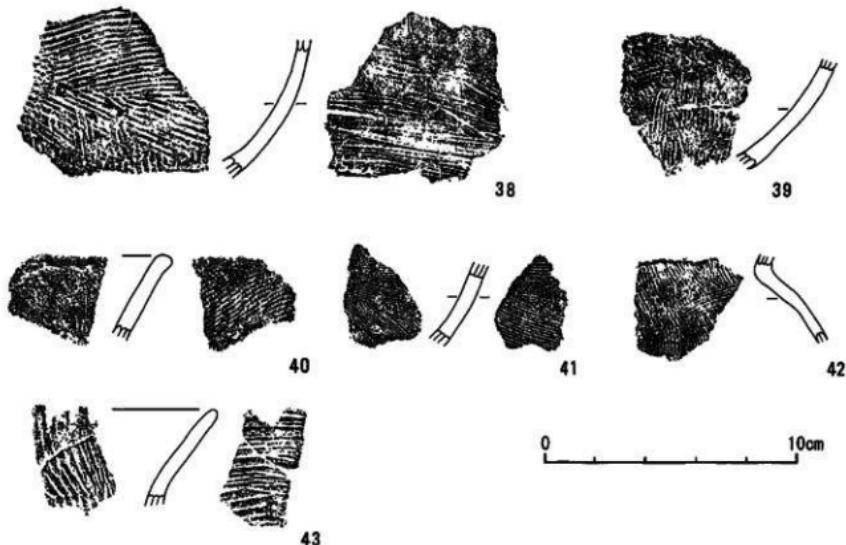
(規模と形態) 10号方形周溝墓はその東溝の南部分が攪乱されているために完全な確認はできなかつたが、その規模と形態は十分に知ることができた。10号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西14.9m・南北15.7m、周溝を含まない内側の方台部で東西11.6m・南北11.0mを測る。この測量値は、10号方形周溝墓がほぼ正確な方形であることを示している。十五所遺跡の他の方形周溝墓と10号周溝墓の規模を比較すると、全体の平均値より、外側の東西で1.2m・南北で2.4m大きく、内側の東西で1.5m・南北で1.0m大きい。一方、Ⅲ区に限ってみると、外側の東西で0m・南北で1.7m大きく、内側の東西で0.5m・南北で0.3m大きい。それらの測量値からすると、10号方形周溝墓は、遺跡全体の方形周溝墓との比較では、



第54図 8号方形周溝墓出土遺物(1) ($S=1/4$)



第55圖 8號方形圓溝墓出土遺物(2) (S=1/2)



第56図 8号方形周溝墓出土遺物(3)(S=1/2)

平均値より若干大きいが、Ⅲ区の中での比較ではほぼ平均的規模であると言える。10号方形周溝墓の方位は、遺跡内の他の周溝墓の方位と同様に方台部の4辺がそれぞれ東西南北に沿って存在する。

10号方形周溝墓の周溝幅は、東西南北の溝で少しづつ差があり、東溝で約1.5m・西溝で約1.9m・南溝で約2.1m・北溝で約2.5mを測る。溝の深さは、西溝と北溝で約70cmであるが、東溝ではそれより浅く約50cm、南溝ではそれより深く約80cmを測る。周溝の断面はU字形であるが、溝底は平坦な部分と丸みをおびた部分がある。溝底の標高は、南溝が他の溝より全体的に低い。

陸橋部は、南東隅に1カ所だけを確認できる。東溝と南溝に挟まれた陸橋部の最も狭い部分で、1.9mを測る。

土器は、東溝・南溝・北溝の広範囲より出土している。

なお、10号方形周溝墓では、方台部内に主体部(埋葬部)とそれに伴う柱穴らしき遺構が確認できる。これらは、十五号遺跡発掘において最も注目に値する遺構であり、その意義付けは遺跡全体の存在をも左右するほどの価値があると思われている。詳細については『まとめ』の章で後述する。

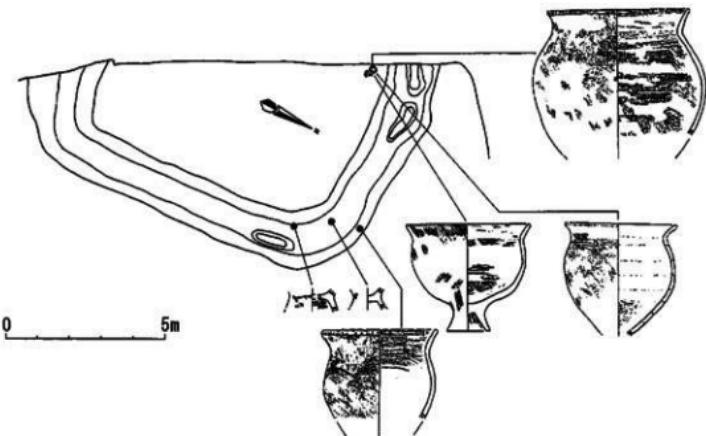
また、10号方形周溝墓の東溝は15号住居跡を切っている。そのことから、15号住居跡より10号方形周溝墓のほうが後から形作られたことがわかる。

11号方形周溝墓(第67・69・70図)

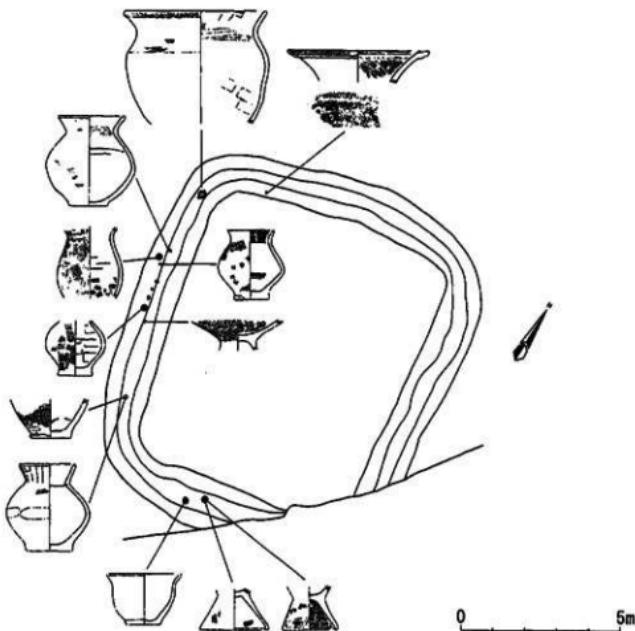
(位置) 11号方形周溝墓は、Ⅲ区(F~I-18~20)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では、南側のグループに属する。11号方形周溝墓は北側に墓道が走り、南側は10号方形周溝墓と周溝を接する位置にある。また、11号方形周溝墓の西溝より西へ最大5mの範囲では遺構を確認できず、反対側でも東溝より東へ最大15mの範囲で遺構確認ができなかった。南北に密着する10号方形周溝墓からも推察すると、11号方形周溝墓は10号方形周溝墓と同様にⅢ区南側グループの東端に位置すると考えられる。

11号方形周溝墓方台部の東西の端には、それぞれ13・14号住居跡がある。

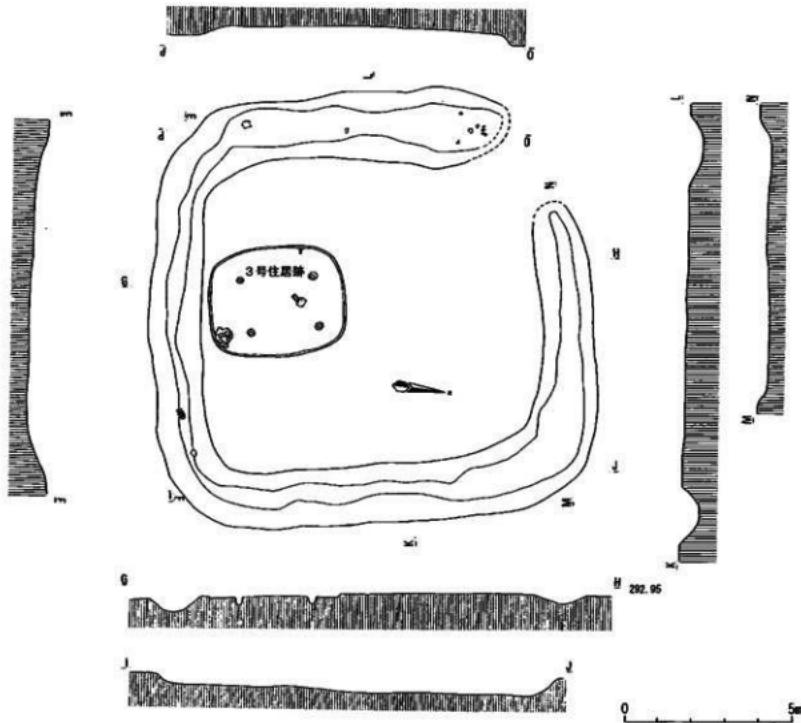
標高は方台部の中心付近で高度288.5mを測る。



第57図 7号方形周溝墓遺物出土位置図



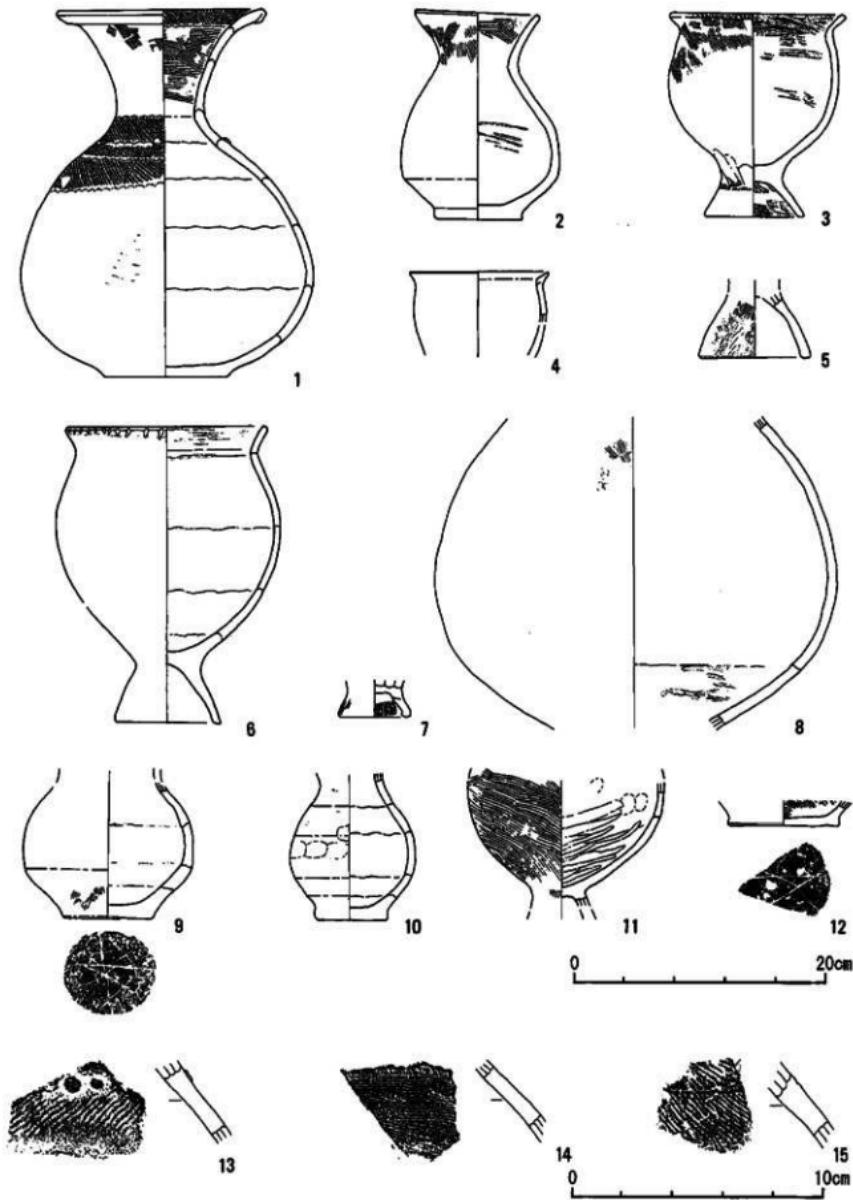
第58図 8号方形周溝墓遺物出土位置図



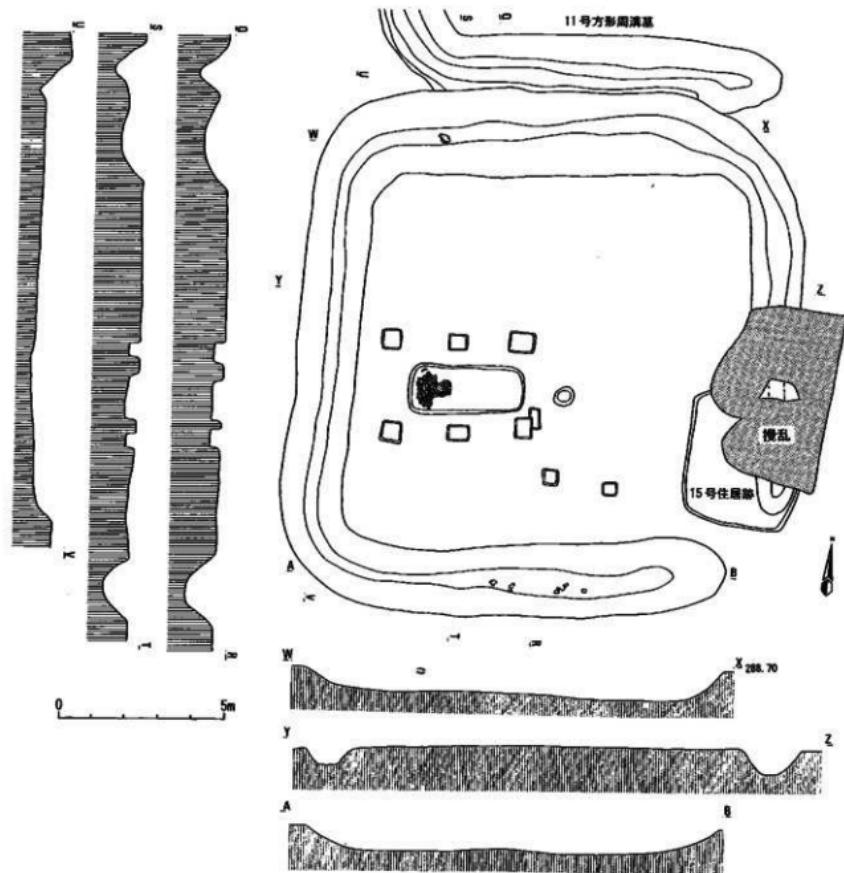
第59図 9号方形周溝墓 (S=1/150)

(規模と形態) 11号方形周溝墓は四方向の溝が完全に確認できたので、その規模と形態は全体から細部にわたるまで十分に知ることができた。11号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西15.0m・南北13.1m、周溝を含まない内側の方台部で東西11.2m・南北9.8mを測る。この測量値は、11号方形周溝墓が東西方向に幾分長い形態の方形周溝墓であることを示している。また、11号周溝墓と十五所遺跡の他の方形周溝墓の規模を比較すると、全体の平均値より、外側の東西で1.3m・南北で0.2m大きく、内側の東西でも1.1m大きいが、南北では0.2m小さい。一方、Ⅲ区に限ってみると、外側の東西では0.1m大きいが、南北で0.9m小さい。また、内側の東西では0.1m大きいが、南北では0.9m小さい。それらの測量値から比較すると、11号方形周溝墓は、遺跡全体の中では、平均値よりいくぶん大きいが、Ⅲ区の中ではほぼ平均的規模であると言える。さらに、11号方形周溝墓の形態を細部にわたって見直すと、方台部の形状に特徴を見出すことができる。十五所遺跡の方形周溝墓群の方台部はほぼ正確な方形を呈しているが、11号方形周溝墓の方台部は台形状に存在している。上記の方台部の測量値は方台部のほぼ中央のもので、東西の方が長いことが分かるが、方台部の北辺と南辺の長さがほぼ同値であるのに対して、東辺は10.0m・西辺は9.4mを測る。11号方形周溝墓の方位は、遺跡内の他の周溝墓の方位と同様に方台部の4辺がそれぞれ東西南北に沿って存在する。

11号方形周溝墓の周溝は、西溝において特徴がある。東溝・南溝・北溝はおよそ溝幅が定まっており、東溝で約1.3m・南溝で約1.8m・北溝で約1.5mを測るのに対して、西溝は南半分に大きな膨らみを持つ。西溝幅の最も広い部分は3.0mを測るが、両端はそれぞれがつながる溝の幅に収束している。溝の深さ



第60図 9号方形周溝墓出土遺物 (S=1/4・1/2)



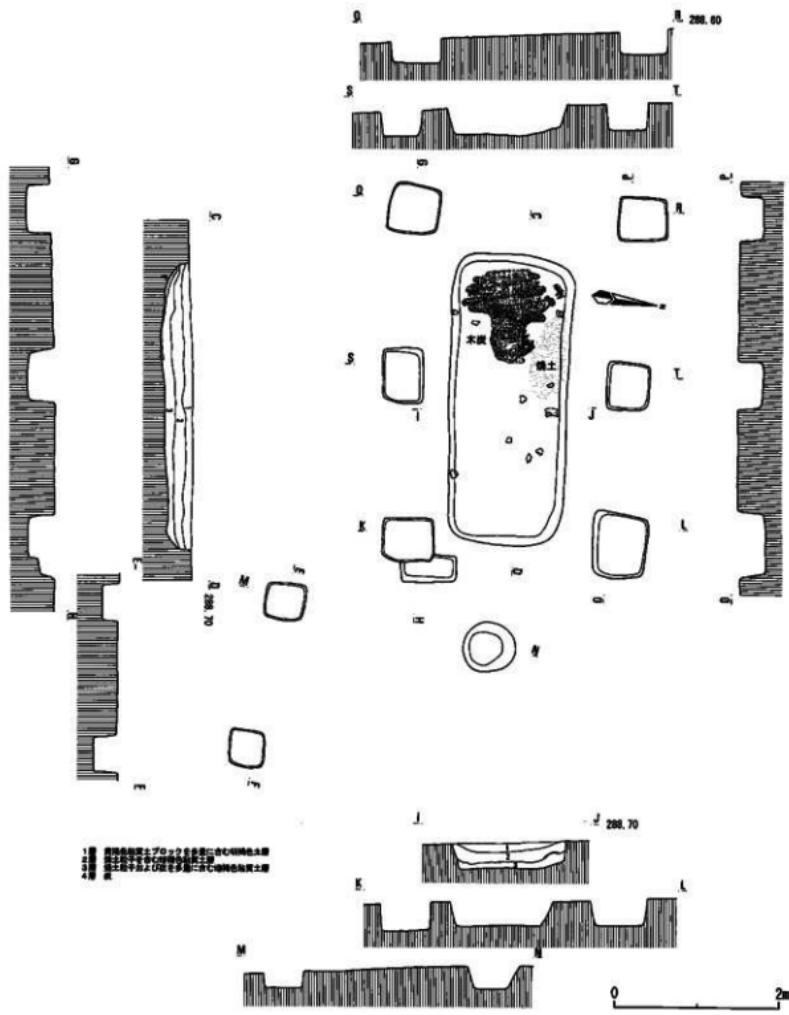
第61図 10号方形周溝墓(S=1/150)

は、東溝が30cm前後で最も浅いことが特徴的で、西溝・南溝・北溝ではそれぞれ最高深度95cm・80cm・100cmを測る。11号方形周溝墓の周溝断面は他の周溝墓に比すると特筆される点がある。11号方形周溝墓西溝の西壁面は階段状の様相を呈するとともに、南溝はさらに複雑化し、その一部は階段状の側壁をもった溝とV字形をした溝の二条からなる複線形の形状をしている。

陸橋部は、南東隅に1カ所だけを確認できる。東溝と南溝に挟まれた陸橋部の最も狭い部分で、3.3mを測る。遺物は東溝を除いて出土しているが、その数は少ない。また、11号方形周溝墓は13・14号住居をそれぞれ西溝と東溝で切っている。そのことから、13・14号住居より11号方形周溝墓のほうが後から形作られたことがわかる。

12号方形周溝墓(第68・71図)

(位置) 12号方形周溝墓は、Ⅲ区(H~J-22~23)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では、北側のグループの南端にある。北側を14号方形周溝墓と、西側を18号方形

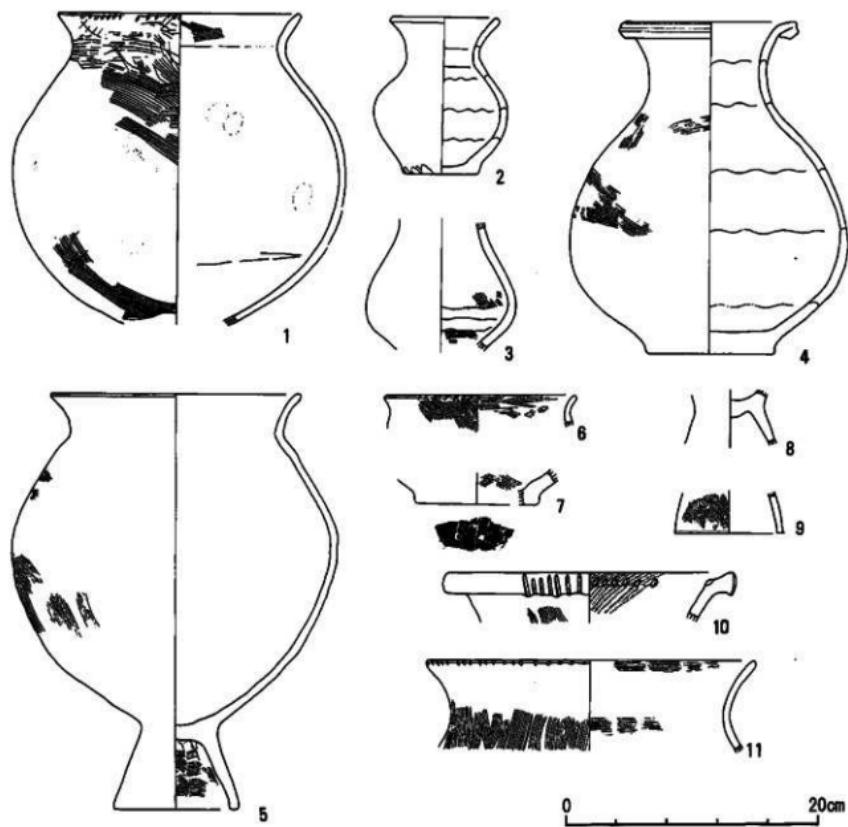


第62図 10号方形周溝墓主体部・竪穴群 (S=1/60)

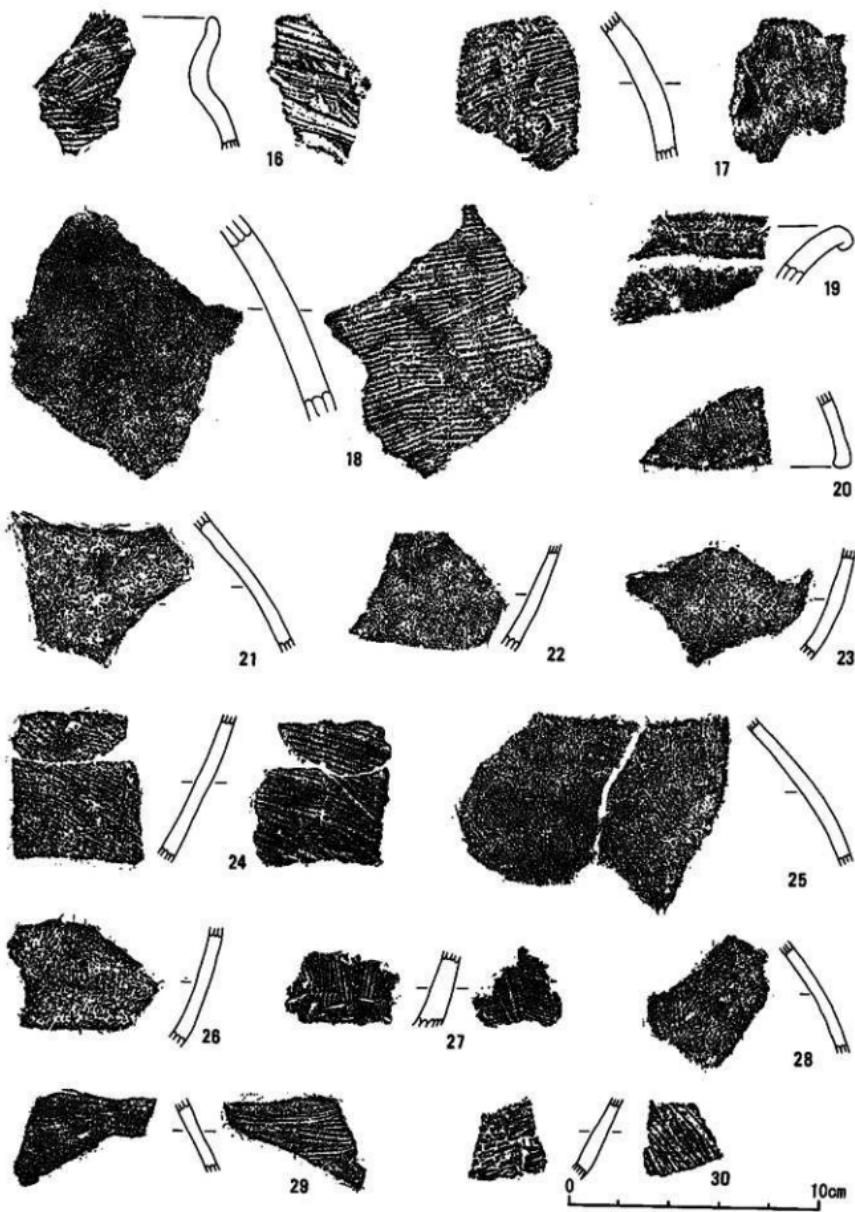
周溝墓とそれぞれ周溝を密着して隣接し、南側を走る墓道をはさんで11号方形周溝墓と相対峙している。

標高は方台部の中心付近で高度289mを測る。

(規模と形態) 12号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西12.2m・南北11.7m、周溝を含まない内側の方台部で東西10.0m・南北9.2mを測る。この測量値は、12号方形周溝墓が11号方形周溝墓と同様に東西方向に幾分長い形態の方形周溝墓であることを示している。また、12号周溝墓を十五所遺跡の他の方形周溝墓の規模と比較すると、全体の平均値より、外側の東西で1.5m・南北で1.6m小さく、内側の東西



第63図 10号方形周溝墓出土遺物(2) (S=1/4・1/2)



第64図 10号方形周溝墓出土遺物(2) (S=1/2)

では0.1m大きいが、南北では0.8m小さい。一方、Ⅲ区に限ってみると、外側の東西で2.7m・南北で2.3m小さく、内側の東西で1.1m・南北で1.5m小さい。それらの測量値を他の方形周溝墓と比較すると、遺跡全体の中での12号方形周溝墓は、方台部はほぼ平均的な規模であるが、周溝を含めた規模では幾分小さい。平均的規模の大きなⅢ区の中では、方台部の規模も周溝を含めた外側の規模でも小型であるといえる。さらに、12号方形周溝墓の形態を細部にわたって見ると、方台部の形状に11号方形周溝墓と同様の特徴を見つけることができる。前述したように十五所遺跡の方形周溝墓群の方台部はほぼ正確な方形を呈しているが、12号方形周溝墓の方台部は台形状である。上記の方台部の測量値は方台部の中央のもので、東西の方が南北より若干長いことが分かるが、方台部の北辺と南辺の長さはほぼ同値であるのに対して、東辺は9.5m・西辺は8.0mを測る。つまり、方台部は西辺より東辺に向かって広がっている台形である。12号方形周溝墓の方位は、遺跡内の他の周溝墓の方位と同様に方台部の4辺がそれぞれ東西南北に沿って存在する。

12号方形周溝墓の周溝は、東溝に特徴がある。西溝・南溝・北溝での溝幅はどこも1.3~1.5mであるが、東溝は北部分で0.8m・南部分で1.7mを測る。陸橋部につながる溝の先端部での溝幅拡大は特記に値する。溝の深さは溝幅と同様の傾向を示し、西溝・南溝・北溝では20~37cmであるが、東溝全体と南溝の東端では40cm以上、東溝の最も深い部分は66cmを測る。12号方形周溝墓の周溝断面は他の周溝墓と同様に、U字形である。

陸橋部は、南東隅に1カ所だけを確認できる。東溝と南溝に挟まれた陸橋部の最も狭い部分で、2.1mを測る。

遺物は、ほとんど出土していない。

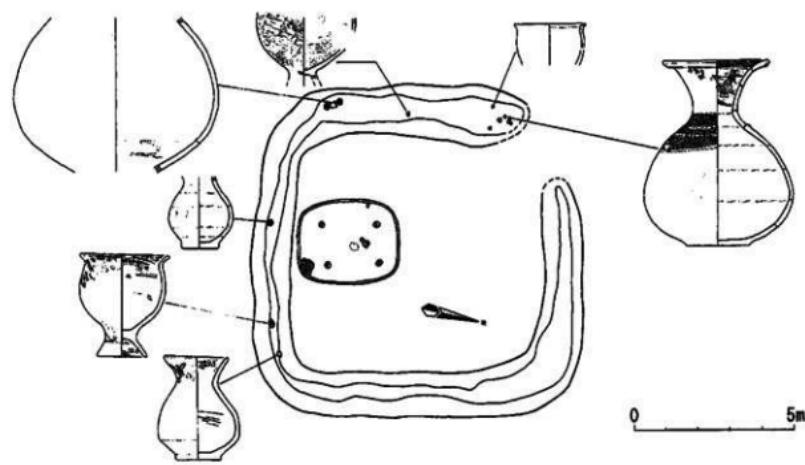
13号方形周溝墓(第73・75図)

(位置) 13号方形周溝墓は、Ⅲ区(E~H-24~27)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では、北側のグループの東端にある。また、北側と南側にも方形周溝墓はないが、西側を18号方形周溝墓とそれぞれ周溝を共用して隣接している。

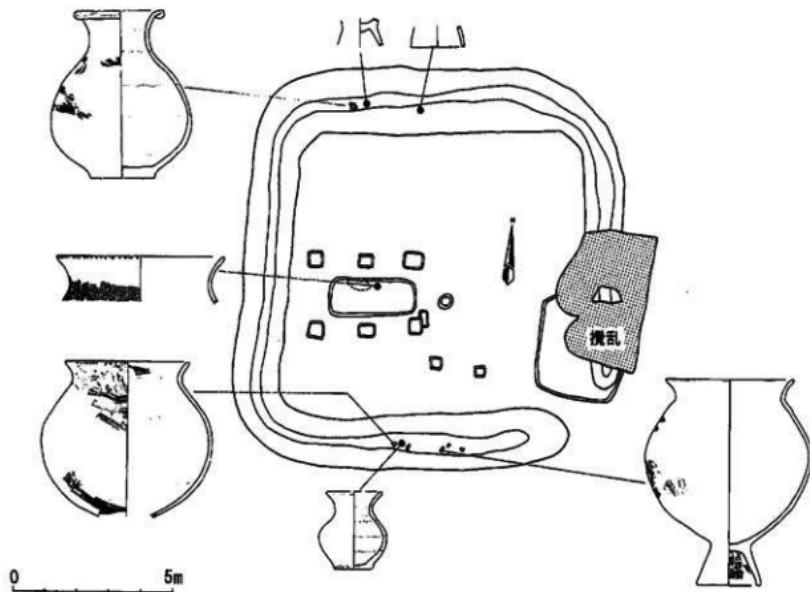
標高は方台部の中心付近で高度289mを測る。

(規模と形態) 13号方形周溝墓は、十五所遺跡の方形周溝墓群最大の規模を誇る。その規模は、周溝を含む外側で東西18.2m・南北18.7m、周溝を含まない内側の方台部で東西14.0m・南北14.8mを測る。その測量値を十五所遺跡の他の方形周溝墓と比較すると、遺跡内の全周溝墓の平均値より、外側の東西で4.5m・南北で5.4m、内側の東西で3.9m・南北で4.8m大きい。また、平均的規模が遺跡内でもっとも大きいⅢ区だけに限ってみても、外側の東西で3.3m・南北で4.7m、内側の東西で2.9m・南北で4.1m大きい。さらに、13号方形周溝墓の形態を細部にわたって見直すと、方台部の形状に特徴を見い出すことができる。13号方形周溝墓の方台部の南辺と東辺はそれぞれ東西・南北に沿っているが、西辺と北辺は北西方に向いていている。方形状の方台部であれば本来あるべき北西隅が外側に開いているのである。そのためには、西辺は東辺より0.5m、北辺は南辺より0.8m長い。

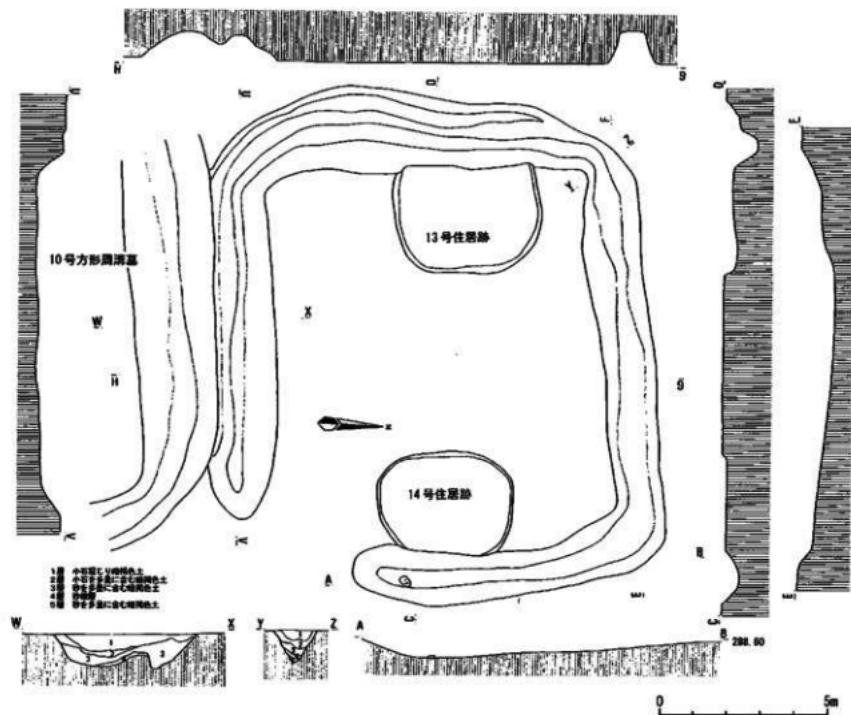
13号方形周溝墓の周溝は、西溝において三つの特徴がある。一つの特徴は、周溝を隣接する14号方形周溝墓と周溝を共用していることである。周溝の共用とは一つの底部を持つ溝を二つの周溝墓がそれぞれの周溝の一部としていることをいう。1本の溝ではあるが、底部が二つある場合には共用には当たらぬ。二つ目の特徴は周溝の共用がその要因であると考えられるもので、溝幅の特徴である。東溝・南溝・北溝の溝幅は、東溝のごく一部を除くと1.5~1.8mであるのに対して、西溝は2.7~3.0mを測る。つまり、西溝は他の3辺の周溝のおよそ2倍近くの溝幅を誇っている。また、溝の深さにおいても、東溝・南溝・北溝が70~90cm前後であるのに対して、西溝はどこも110cm以上で、最高深度は119cmを測る。これも周溝の共用によるものであると考えられる。一方、周溝断面は西溝と北溝において特筆される点がある。14号方形周溝墓と周溝を共用している西溝の南部には、14号方形周溝墓の東溝の収束点で、南東隅の陸橋部を形成する部分が存在するかのように見られるが明らかにはできなかった。その状態から14号方形周溝墓の周溝収束点が13号方形周溝墓によって破壊されていると考えると、13号方形周溝墓の方が新しい遺構であると想像される。さらに、前述したように、方台部の西辺が本来の方向からはずれていること



第65図 9号方形周溝墓遺物出土位置図



第66図 10号方形周溝墓遺物出土位置図



第67図 11号方形周溝墓(S=1/150)

も13号方形周溝墓が14号方形周溝墓の周溝を利用して造られたことにその原因があると考えられる。また、北溝の北壁面はテラス状の様相を呈している。そのテラス状の壁面は北溝中央やや東にある溝幅の急激な膨らみによってなくなっている。そのような状況から、発掘当時は13号方形周溝墓の北側に隣接する方形周溝墓を予想して精査をおこなったが、遺構の存在は認められなかった。陸橋部は、南東隅に1カ所だけを確認できる。東溝と南溝に挟まれた陸橋部の最も狭い部分で、2.7mを測る。遺物の出土数は少ない。

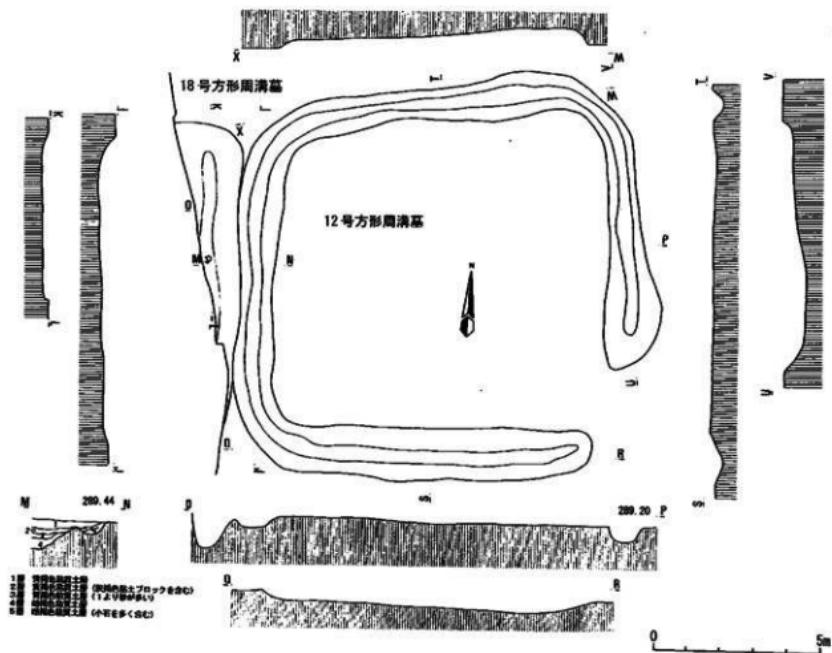
14号方形周溝墓(第74・76図)

(位置) 14号方形周溝墓は、Ⅲ区(H-K-24~26)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では、北側のグループにある。東側には周溝を共用して13号方形周溝墓があり、南側を12号方形周溝墓と、北側を15号方形周溝墓とそれぞれ周溝を密着して隣接している。西側は調査区域外で遺構の確認はできなかった。

標高は方台部の中心付近で高度289mを測る。

(規模と形態) 14号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西16.8m・南北15.2m、周溝を含まない内側の方台部で東西11.2m・南北11.9mを測る。この測量値は、14号方形周溝墓の周溝を含む外側の規模は東西に長いが、方台部はほぼ正方形であることを示している。

方台部を形成する東西南北の各辺は、凹凸の少ない直線に近いきれいな線となっている。また、14号周溝墓の規模を十五所遺跡の他の方形周溝墓と比較すると、全周溝墓の平均値より、外側の東西で3.1m・



第68図 12号・18号方形周溝墓(S=1/150)

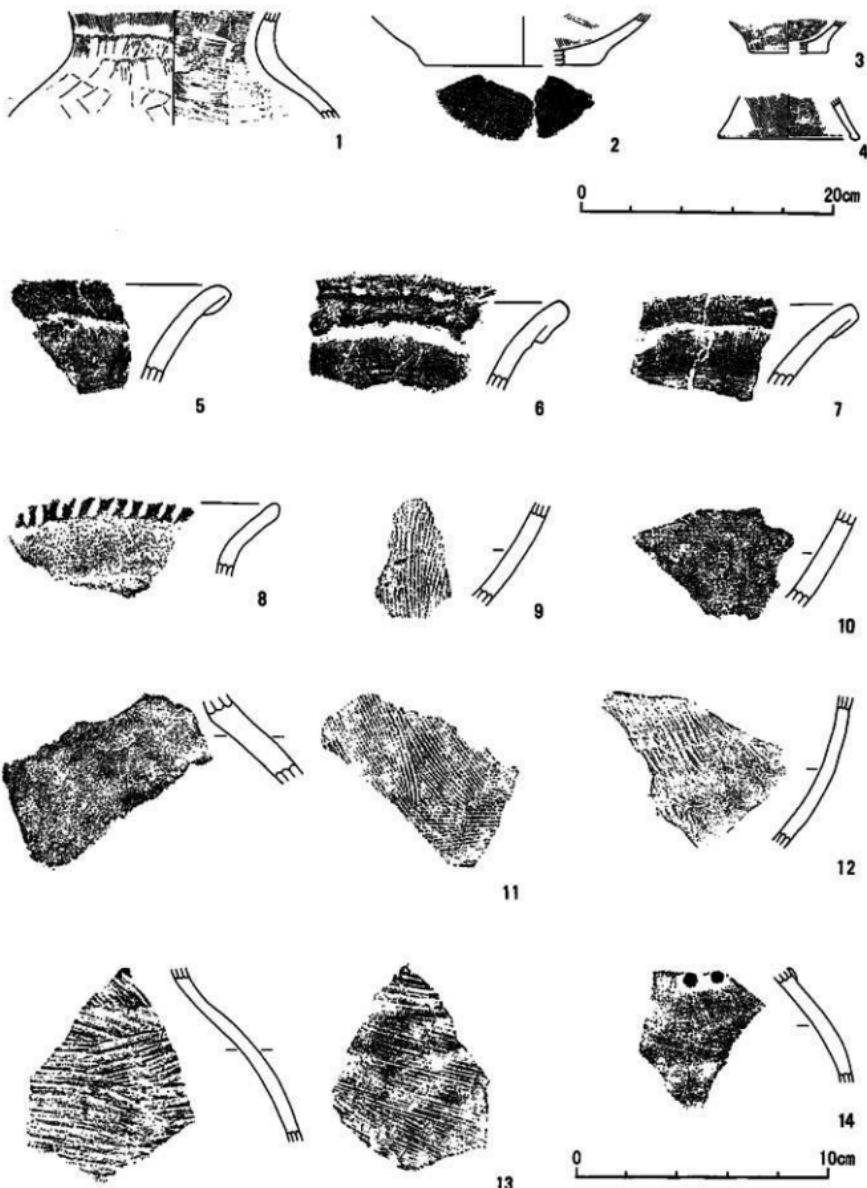
南北で1.9m、内側の東西で1.1m・南北で1.9m大きい。一方、Ⅲ区内だけの周溝墓の平均値に比較すると、外側の東西で1.9m・南北で1.2m、内側の東西で0.1m・南北で1.2m大きい。測量値と比較値からすると、14号方形周溝墓は、遺跡全体の中では、平均値よりいくぶん大きいが、Ⅲ区の中ではほぼ平均的規模であると言える。

14号方形周溝墓の方位は、東西南北に対して若干ではあるが左に回転して存在している。

14号方形周溝墓の周溝は、東溝・西溝・北溝においてそれぞれ特徴がある。東溝は、前述したように周溝を13号方形周溝墓と共に用いていることに大きな特徴がある。詳細については13号方形周溝墓を参照されたい。西溝はその形態に特徴がある。西溝は方台部を形成する東壁はおおよそ直線であるのに対して、周溝の外側にある西壁は西溝の中央部分になるにしたがって外側に大きく彎曲している。周溝の北西隅と南西隅はどちらも1mほどの溝幅であるのに対して、西溝中央部分は2.8mを測る。これほどの彎曲は、他の周溝墓では見当たらない。北溝は、15号方形周溝墓との周溝の共用と深さに特徴がある。北溝の北壁はテラス状の形状である。このようになった原因は、周溝の共用にあると考えられる。つまり、15号方形周溝墓の南溝がすでに存在していたのに対し、新たにその一部を利用して14号方形周溝墓の周溝を掘ったために15号周溝墓の周溝の一部がテラス状に残存したのであろう。

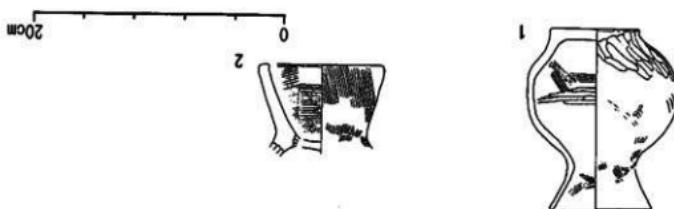
また、深さにおいても北溝での最高深度は137cmを測り、遺跡内の全方形周溝墓の周溝で最も深い。テラス状になった部分はおよそ70cmの深さである。西溝と南溝の深さは、55~65cmにすぎず、13号方形周溝墓において記述したように、周溝を共用している部分においては深さが他の部分のおよそ2倍であることがここでも言える。

陸橋部は、南東隅に1カ所だけを確認できる。東溝と南溝に挟まれた陸橋部の最も狭い部分で、1.0mを測る。遺物はほとんど出土していない。



第69図 11号方形周溝墓出土遺物(1) ($S=1/4 \cdot 1/2$)

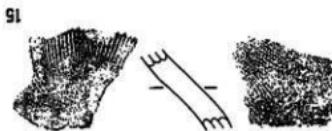
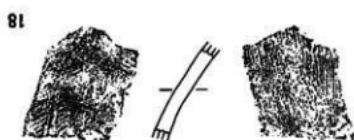
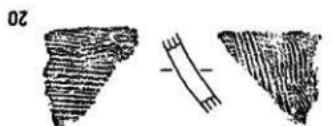
第72圖 18号方形圓溝墓出土遺物(S=1/4)



第71圖 12号方形圓溝墓出土遺物(S=1/4 · 1/2)



第70圖 11号方形圓溝墓出土遺物(2)(S=1/2)



15号方形周溝墓(第77・80図)

(位置) 15号方形周溝墓は、Ⅲ区(I~K-27~29)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では、北側のグループにある。北側を14号方形周溝墓が周溝を密着して隣接し、南側を14号方形周溝墓が周溝を共用する形で存在する。標高は方台部の中心付近で高度289mを測る。

(規模と形態) 15号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西15.0m・南北13.0m、周溝を含まない内側の方台部で東西10.4m・南北9.7mを測る。この測量値からすると、15号方形周溝墓の方台部はほぼ正方形であるが、周溝を含んだ外側を見ると東西方向に幾分長い形態の方形周溝墓であることを示している。この外側の測量値は西溝を16号方形周溝墓と共用しているため、西溝の溝幅を半分に減ずると、外側の形態もおおよそ正方形となる。

15号周溝墓の規模を十五所遺跡の他の方形周溝墓と比較すると、全方形周溝墓の平均値より、外側の東西では1.3m大きいが、南北では0.3m小さい。内側の東西では0.3m大きいが、南北では0.3m小さい。一方、Ⅲ区の方形周溝墓に限ってみると、外側の東西では0.1m大きいが、南北で1.0m小さい。内側の東西では0.7m大きいが、南北では1.0m小さい。それらの測量値と比較値からすると、15号方形周溝墓は、遺跡全体の中では、平均値より若干大きいが、Ⅲ区の中ではほぼ平均的規模であると言える。

さらに、15号方形周溝墓の形態を細部にわたって見直すと、方台部の形状に特徴を見い出すことができる。十五所遺跡の方形周溝墓群の方台部はほぼ正確な方形を呈しているが、15号方形周溝墓の方台部は隅が少しづつ突出している。しかし、方台部の隅の突出に対して、周溝の外側のラインは外側へ突出はしていない。そのため、周溝の幅が周溝のコーナーで狭くなっている。

15号方形周溝墓の方位は、正方形の方台部が東西南北に対して若干左に回転している。

15号方形周溝墓の周溝は、東西南北の周溝それぞれに特記すべき点がある。東溝は方台部隅の突出の裏返しで、北東隅の溝幅は1.0m程しかないが、そのすぐ南部分は2.0mを測るほど拡幅している。西溝は16号方形周溝墓と共用の周溝であり、共用部の共通の特徴に違わず、広い周溝幅を誇る。周溝の密接や共用のない北溝の西部分の溝幅が1.5mであるのに対して、西溝はちょうど2倍の3.0mを測る。南溝は14号方形周溝墓と共用の周溝である。詳細については、14号方形周溝墓を参照されたい。北溝は東部分と西部分の溝幅に大きな差がある。東部分の溝幅は90cm、西部分は1.6mを測る。北溝がこのような形態になった要因は、17号方形周溝墓にあると思われる。北溝の東部分には北から17号方形周溝墓の周溝が迫っている。そのために、北溝の溝幅が狭くなったように見られる。つまり、15号方形周溝墓は17号方形周溝墓構築の後に造られたと想像される。

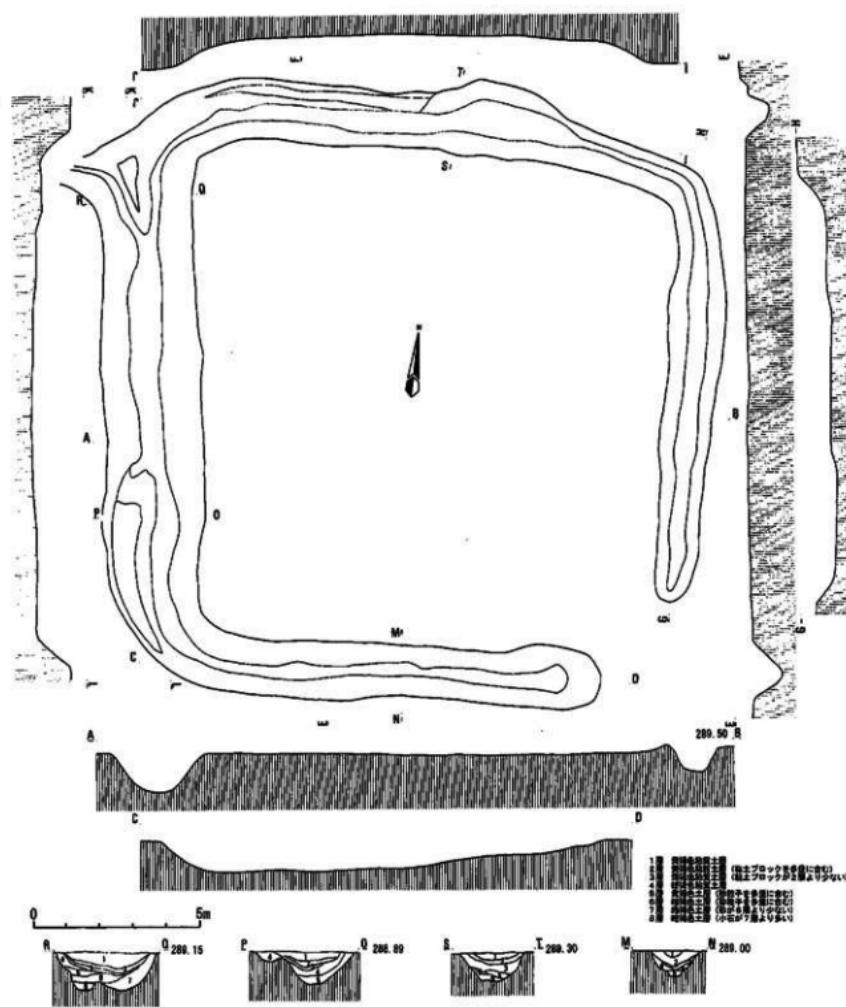
陸橋部は、南東隅に1カ所だけを確認できる。トレンチで最も狭い部分は確定はできなかったが、周溝の認められた部分から推定すると、東溝と南溝に挟まれた陸橋部は1.0m程であると思われる。遺物はほとんど出土していない。

16号方形周溝墓(第78・81図)

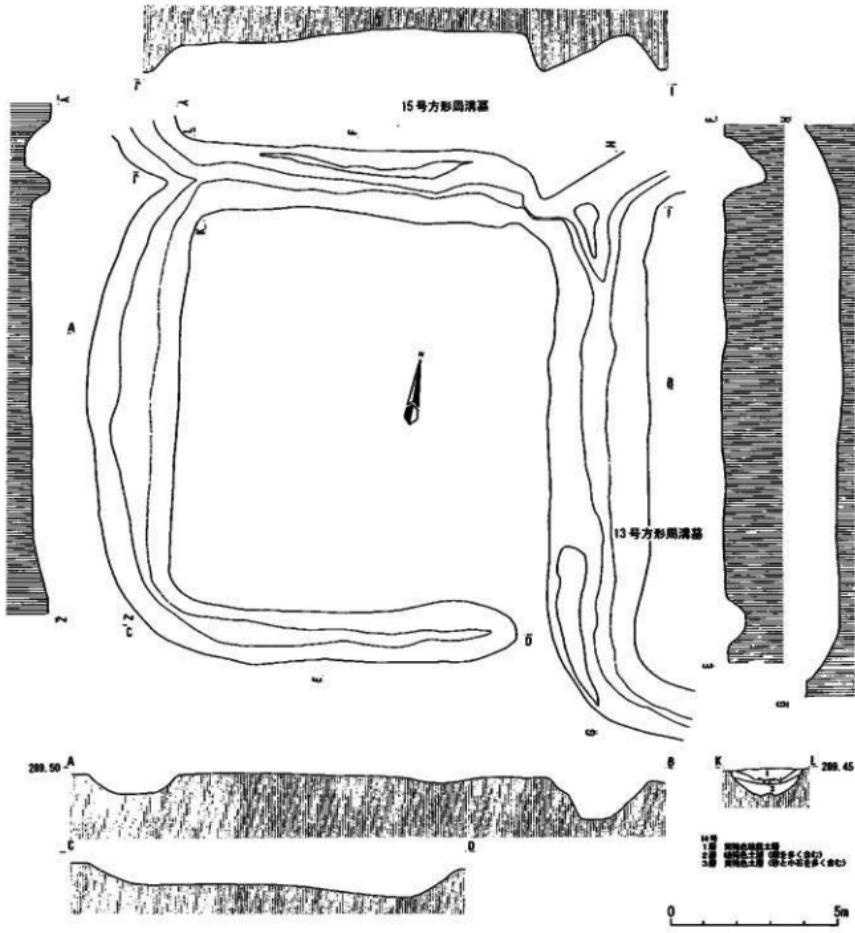
(位置) 16号方形周溝墓は、Ⅲ区(K~L-27~29)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では北側のグループに属し、Ⅲ区内での確認できた方形周溝墓群の中では最も西端にある。東側を15号方形周溝墓と周溝を密着して隣接しているが、北側には方形周溝墓の存在は認められず、西側と南側は調査区域外で遺構の検出はできなかった。

16号方形周溝墓は方台部の東部分しか確認できなかったので、方台部の中央ではないが、最も中央部に近いと考えられる部位で標高は高度289mを測る。

(規模と形態) 上記のように16号方形周溝墓は方台部の東部分しか確認できなかったため、正確な規模と形態は把握できない状況である。しかし形態の点から考えると、このⅢ区の方形周溝墓群の他の墓跡と同じように、陸橋部は南東隅に有するものと考えて間違いないものであろう。その陸橋部の幅も2.0m以上を測る規模である。また東側に位置する15号方形周溝墓の西溝と16号の東溝は共用関係にあり、その幅も最も広いところで3.0mを越えている。また唯一確認されている北東の隅は、きわめて美しい形態で直角に屈折している。また約5.0mの範囲で確認されている北溝も、直線的に掘られている。

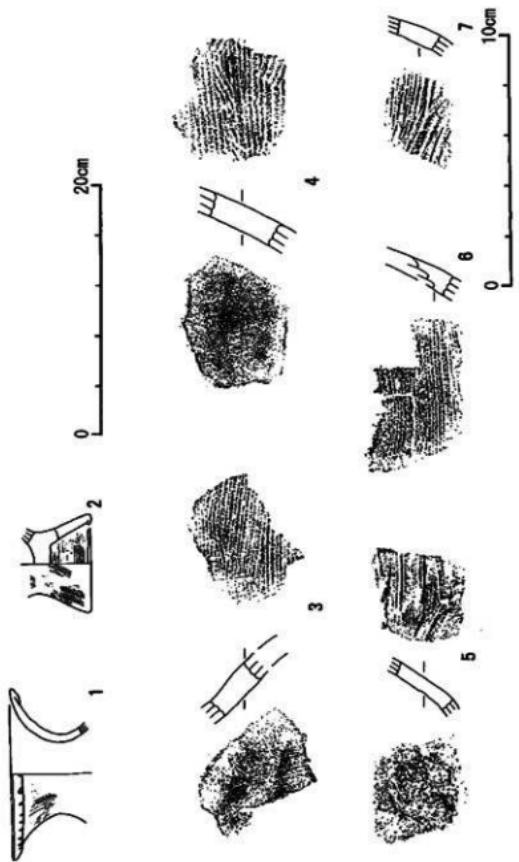


第73圖 13号方形周溝基 ($S=1/150$)

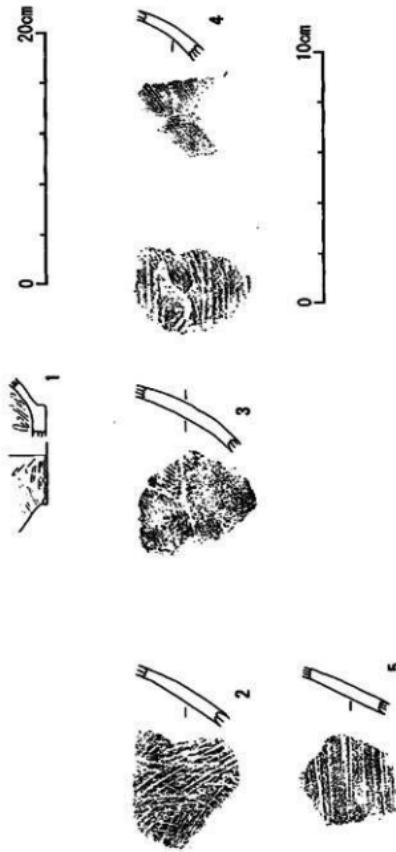


第74図 14号方形周溝墓 ($S=1/150$)

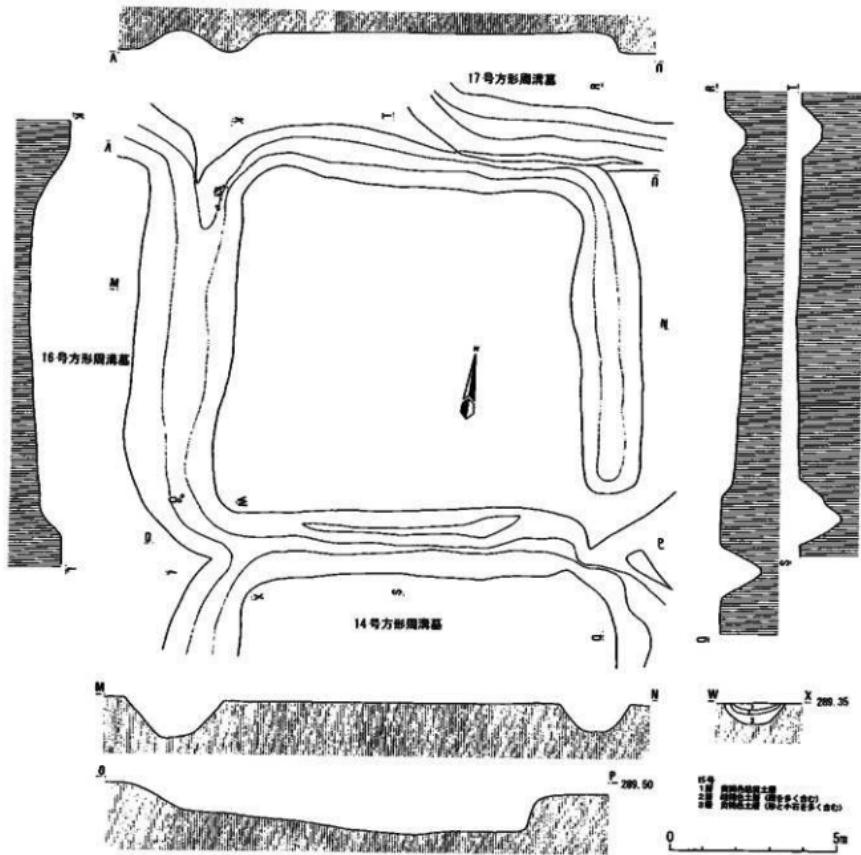
規模の点から見ると、唯一東溝が完掘されているものの、15号方形周溝墓の西溝と共有関係にあるために、確実な16号方形周溝墓の東溝の範囲は確定できない。平面の形状を細かく観察すると16号方形周溝墓の陸橋部に当たる部分にわずかな括れを確認することができる。ここをもって16号方形周溝墓東溝の先端部分と考えれば、周溝を含む外側で南北約12.0mを測ることになる。実際にはこの範囲の外側に陸橋部の範囲と南溝の幅も含めることになるため、南北の規模はさらに3.0m前後増えるものと考えられる。つまり16号方形周溝墓の推定規模は南北約15.0mの規模になるものであろう。北溝の幅は約1.5m、深さは約1.2mを測る。



第75圖 13号方形周溝墓出土遺物(S=1/4·1/2)



第76圖 14号方形周溝墓出土遺物(S=1/4·1/2)



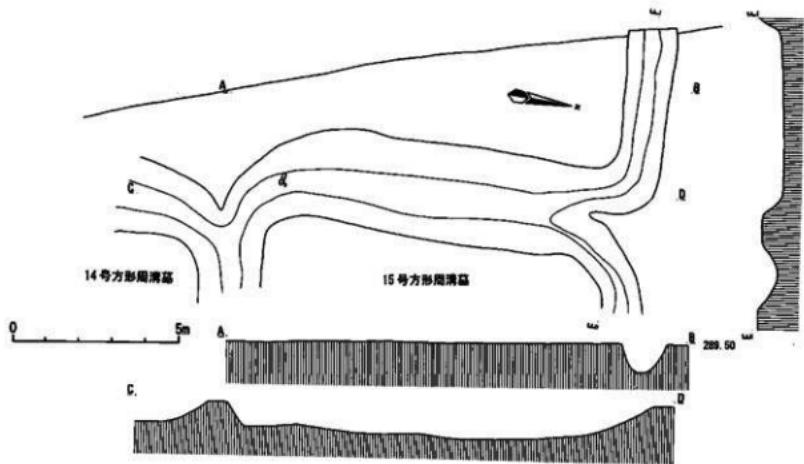
第77図 15号方形周溝墓 ($S=1/150$)

17号方形周溝墓(第79図)

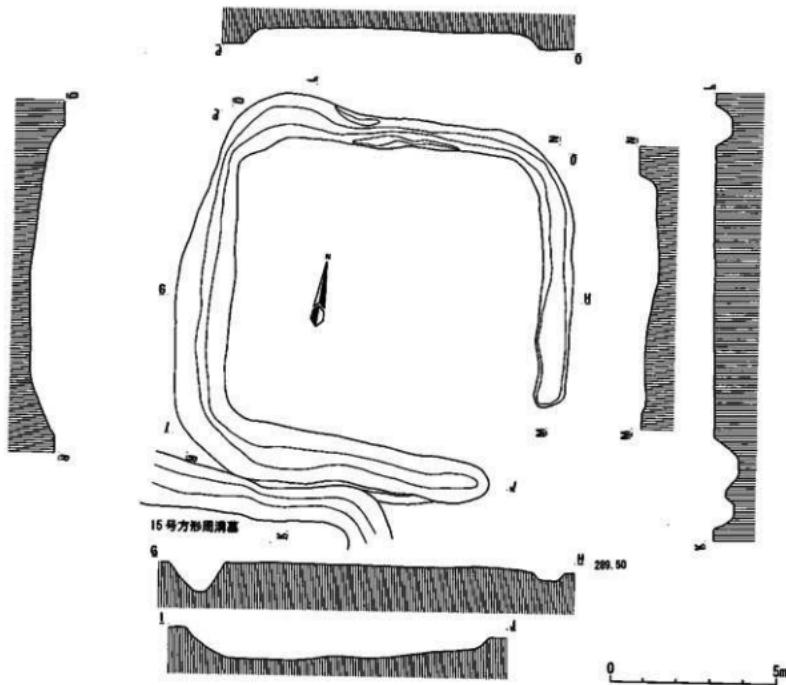
(位置) 17号方形周溝墓は、Ⅲ区(H～J-29～31)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では北側のグループに属し、確認できたⅢ区の方形周溝墓群の中では最も北端にある。南側には15号方形周溝墓が周溝を密着するように存在するが、東側・西側・北側には遺構はない。

標高は方台部の中心付近で高度288mを測る。

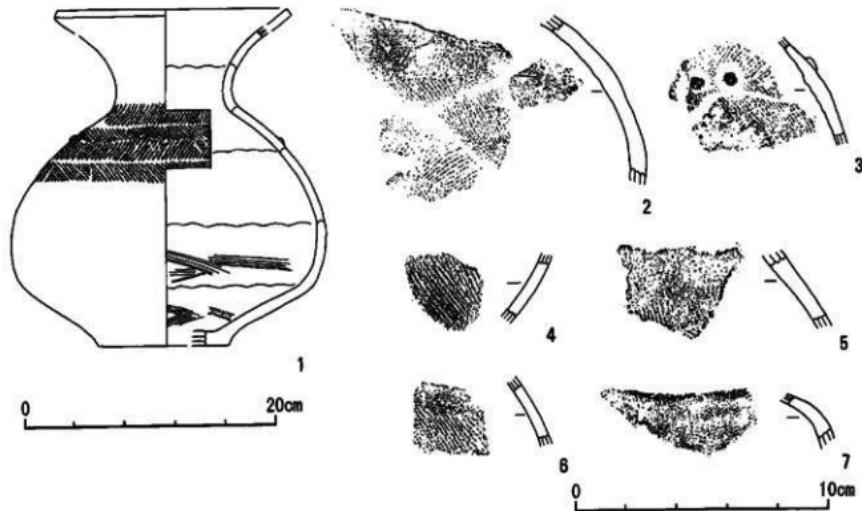
(規模と形態) 17号方形周溝墓の規模は、周溝を含む外側で東西12.0m・南北11.4m、周溝を含まない内側の方台部で東西9.3m・南北8.6mを測る。この測量値は、17号方形周溝墓がほぼ正方形に近い形の方形周溝墓であることを示している。また、17号周溝墓の規模を十五所遺跡の他の方形周溝墓と比較すると、全体の平均値より、外側の東西で1.7m・南北で1.9m、内側の東西で0.8m・南北では1.4mそれぞれ小さい。一方、平均規模が全体よりも幾分大きいⅢ区に限ってみても、外側の東西で2.9m・南北で2.6m、内側の東西で1.8m・南北で2.1mそれぞれ小さい。それらの測量値と比較値からすると、17号方形周溝墓は、Ⅲ区内だけに限らず、遺跡全体の中でも小型の一つに数えられる。



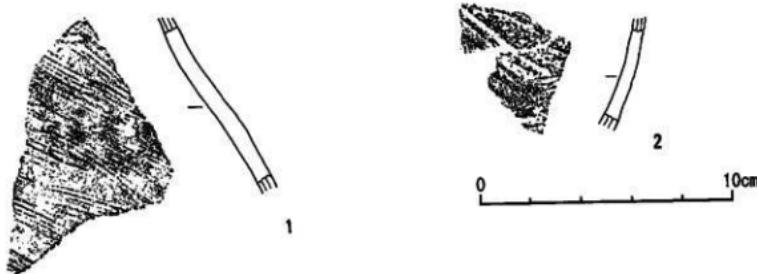
第78図 16号方形周溝墓 ($S=1/150$)



第79図 17号方形周溝墓 ($S=1/150$)

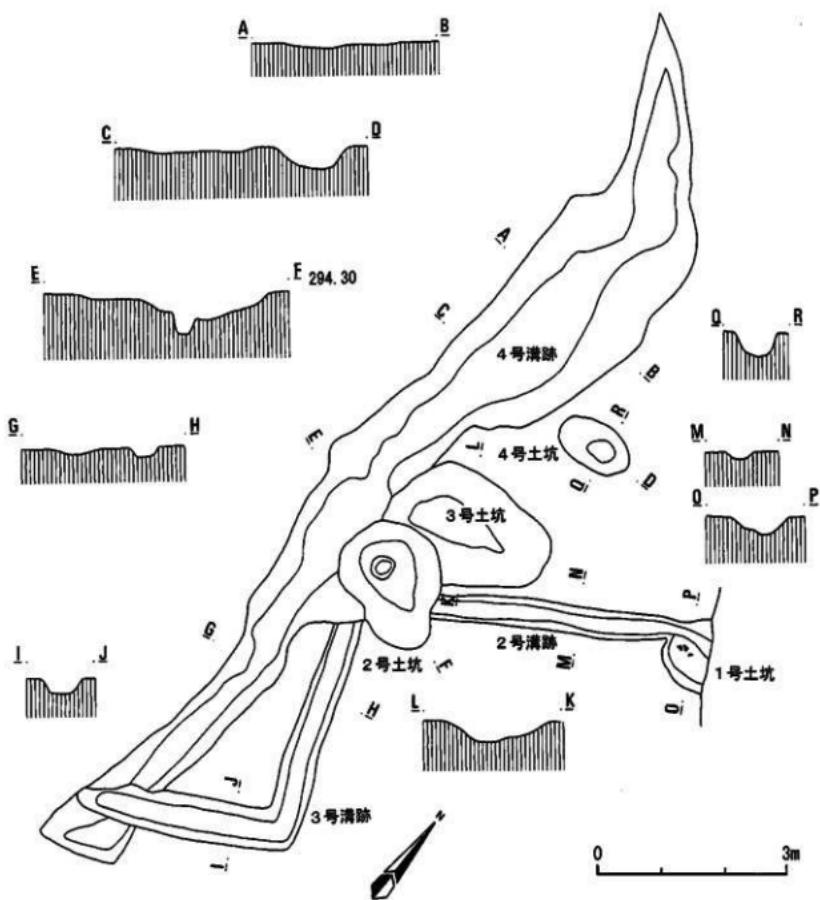


第80図 15号方形周溝墓出土遺物(S=1/4・1/2)

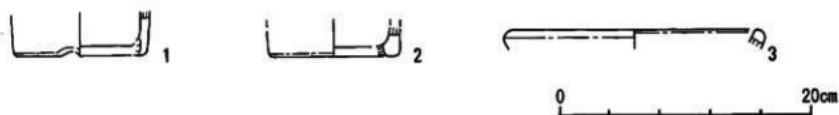


第81図 16号方形周溝墓出土遺物(S=1/4)

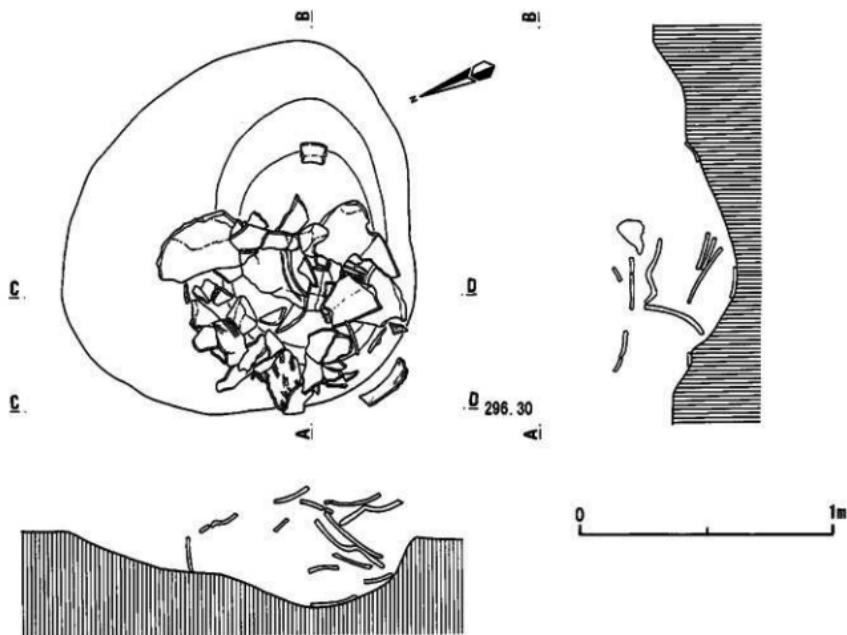
17号方形周溝墓の形態を細部にわたって見直すと、溝幅と周溝の形状に特記すべき事象がある。17号方形周溝墓の周溝は、東溝と北溝の溝幅が狭く、西溝と南溝の溝幅が広い。それぞれの溝幅は、東溝で0.9~1.0m・北溝で0.7~0.9m(一部の例外的な彎曲部を除く)、西溝で1.5~1.7m(一部の例外的な収縮部を除く)・南溝で1.1~1.6mを測る。また、南溝は15号方形周溝墓と共有関係にある周溝である。そのためには、特殊な形状をしているが、詳細については15号方形周溝墓の箇所を参照されたい。さらに、北溝中央部北側の溝壁と南側の溝壁は、それぞれテラス状の形態をしている。本遺跡の方形周溝墓の周溝壁にテラスを有する部分は、隣接する方形周溝墓と周溝を共有していることがその要因となっている。しかし、17号方形周溝墓の北溝は共有関係にないばかりか、前述したように17号方形周溝墓の北側には方形周溝墓は存在していない。そのため、17号方形周溝墓北溝がテラス状になった要因は判明しない。溝の深さは、東溝と北溝が40~55cm、西溝と南溝が60~90cmを測る。南溝は15号方形周溝墓と共有関係にあるので、他の部分より深くなることは共有周溝を持つ方形周溝墓に共通する特徴であるが、西溝の深度は例



第82図 1～4号土坑、2～5号溝跡 (S=1/80)



第83図 1号土坑出土遺物 (S=1/4)



第84図 5号土坑(S=1/20)

外的である。西溝の最高深度92cmは、17号方形周溝墓内の最高深度でもある。しかし、これも前述したように西側には遺構はない。そのため、この要因も判明できない。

陸橋部は、南東隅に1ヵ所だけを確認できる。東溝と南溝に挟まれた陸橋部の最も狭い部分で、2.5mを測る。遺物はほとんど出土していない。

18号方形周溝墓(第68・72図)

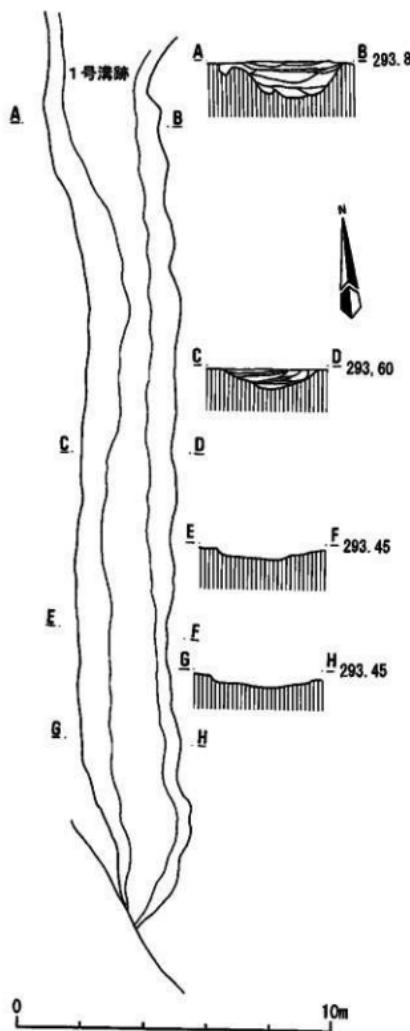
(位置) 18号方形周溝墓は、Ⅲ区(J~K-22~23)グリッドに位置する。南北の2グループに大別できるⅢ区の方形周溝墓群の中では、北側のグループの南端にある。東側を12号方形周溝墓と周溝を密着して隣接している。

調査区域の関係から、18号方形周溝墓の確認は周溝のごく一部だけに終わったために、方台部の標高を測ることはできなかった。

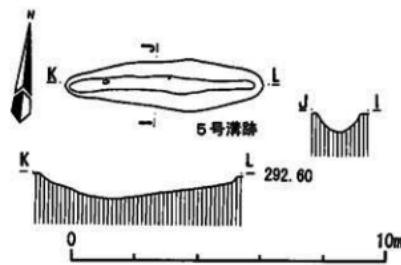
(規模と形態) 上記のように、18号方形周溝墓は東溝の一部を確認したに止まつたので、遺構全体としての規模は明確にはできなかった。確認できた部位は東溝の北部分の深さと形状のみで、深さがおよそ100cmを測り、形状はU字形であった。この数値を隣接する12号方形周溝墓と比較すると、深さがおよそ2倍あることが注目される。つまり、そこからは、18号方形周溝墓が12号方形周溝墓よりも大きな規模を有するものであることが推察される。陸橋部は確認できなかった。遺物は僅かな破片が数点出土している。

第3節 土坑と出土遺物

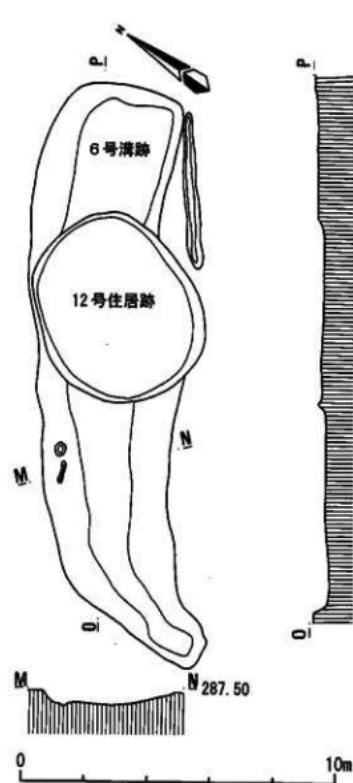
I区の北寄りから1~4号土坑が発見された。遺物は1号から僅かな陶器片が出土したのみであるが、こ



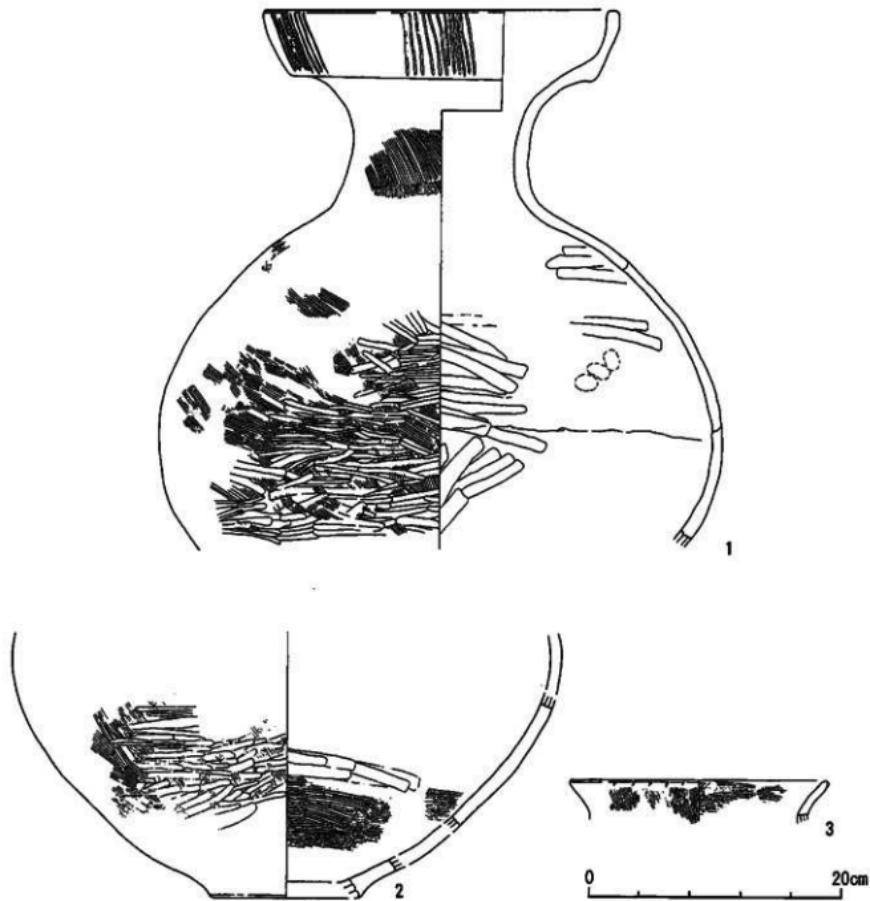
第85図 1号溝跡 ($S=1/160$)



第86図 5号溝跡 ($S=1/160$)



第87図 6号溝跡 ($S=1/160$)



第88図 5号土坑出土遺物 (S=1/4)

これら4基の土坑は、その覆土が漆黒に近く比較的現代に近い時代のものと考えられる。

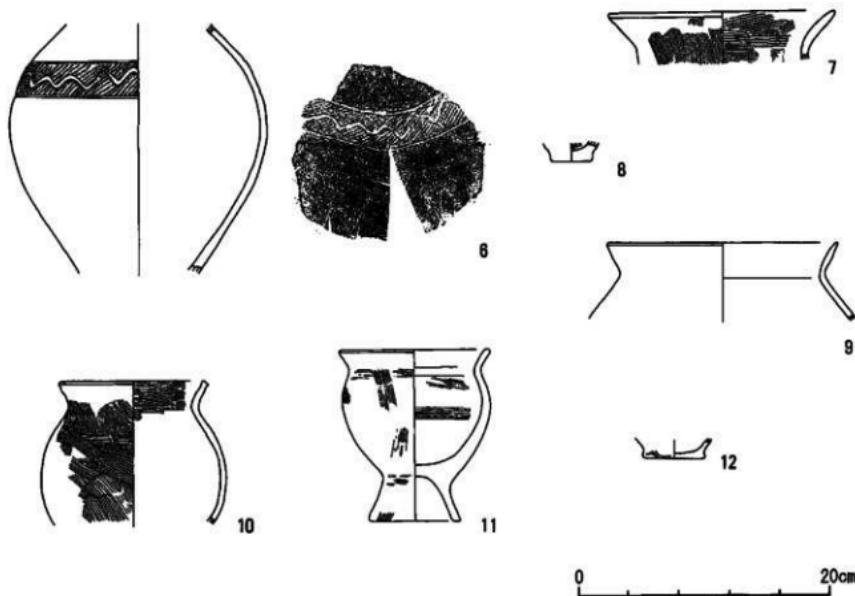
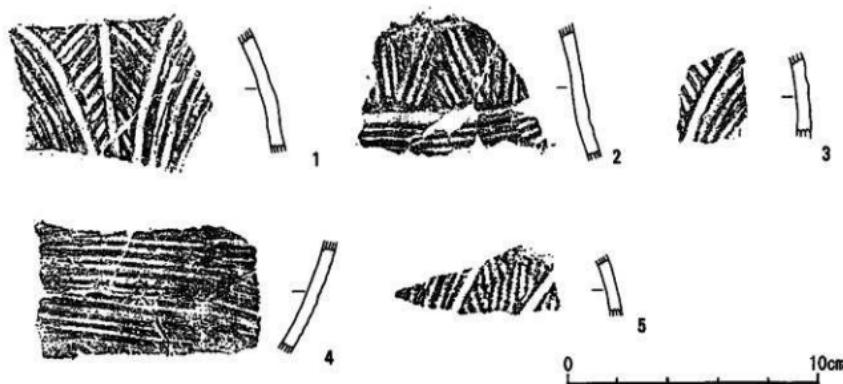
1号土坑(第82・83図)

(形状・規模) 1号住居跡と重複しており、重複部分については正確な形状は不明である。全体では円形プランを呈するものと思われる。規模は直径が1m前後で深さが40cm程であると推測される。壁は緩やかに立ち上がっている。

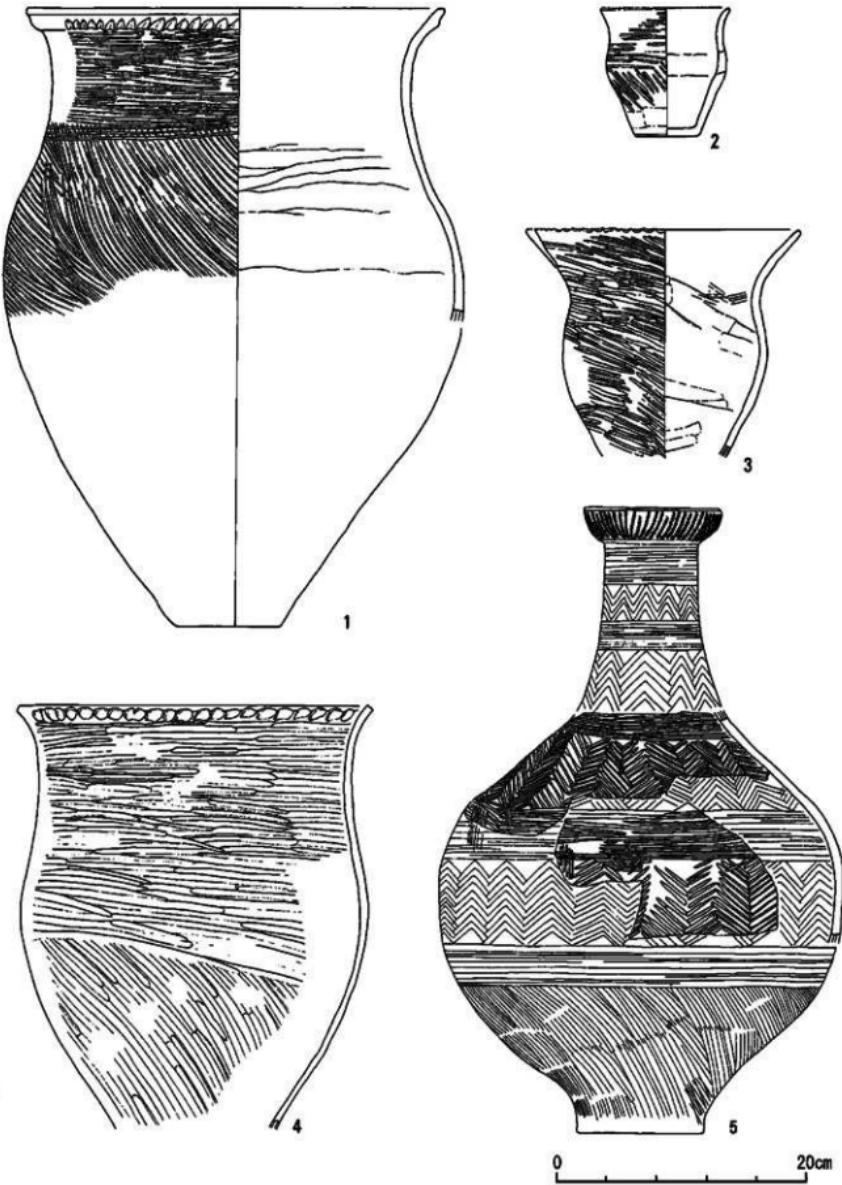
(出土遺物) 近世の陶器片が出土している。時代的には1号住居跡より新しいものであろうが、1号住居跡との重複部分のプランは確認できなかった。

2号土坑(第82図)

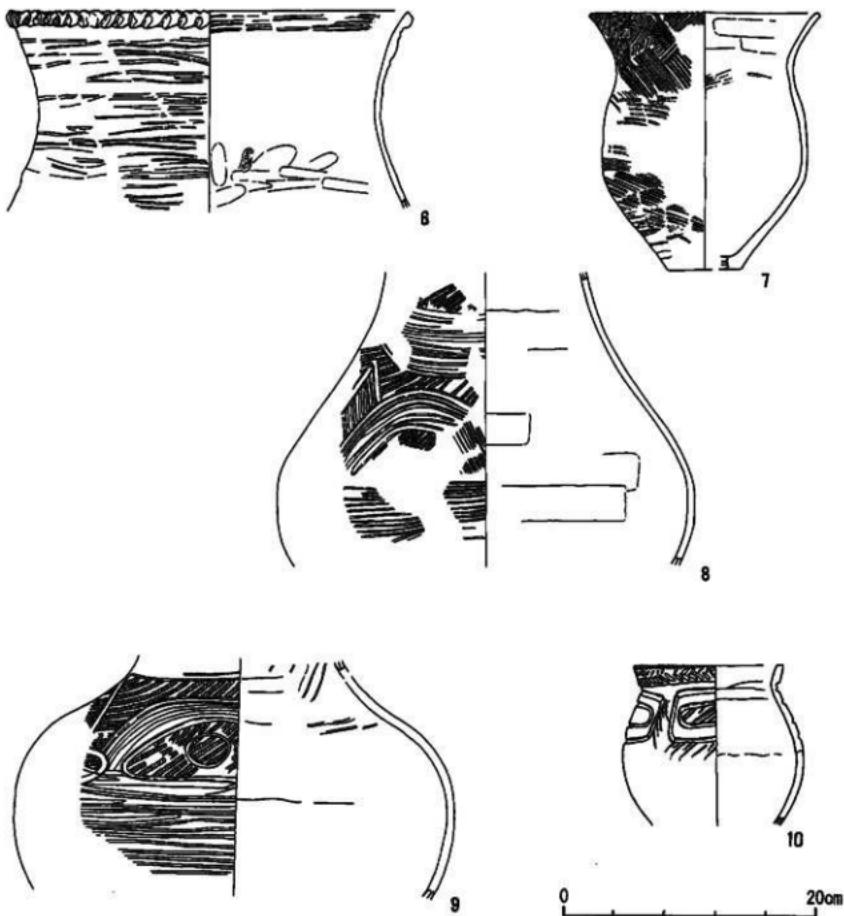
(形状・規模) 不整橢円形プランを呈し、規模は東西200cm×南北150cmを測る。底面に直径30cm、深さ30cmほどの一段深い竪穴が掘られている。壁はとても緩やかに立ち上がっており皿状に近い。



第89圖 溝跡出土遺物 ($S=1/4 \cdot 1/2$)



第90図 グリッド出土遺物(1) ($S=1/4$)



第91図 グリッド出土遺物(2) ($S=1/4$)

(出土遺物) 出土遺物は発見されなかった。

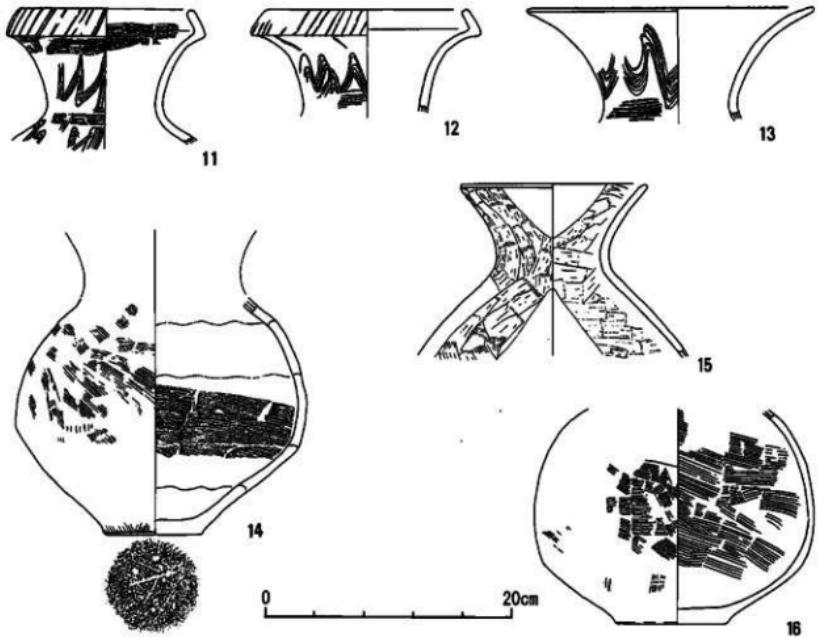
3号土坑(第82図)

(形態・規模) 不整楕円形プランを呈し、規模は東西280cm×南北200cmを測る。深さは50cm程度である。壁は緩やかに立ち上がっている。

(出土遺物) 出土遺物は発見されなかった。

4号土坑(第82図)

(形態・規模) 楕円形プランを呈し、規模は東西120cm×南北80cmで深さは50cmを測る。壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。



第92図 グリッド出土遺物(3) ($S=1/4$)

(出土遺物) 出土遺物は発見されなかった。

5号土坑(第84・88図)

(形状・規模) II区のE-2グリッドにおいて単独で発見された土坑である。不整円形プランを呈し、規模は東西130cm×南北150cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、途中に一段テラスを有する。深さは30cmを測る。

(出土遺物) バラバラに潰れたような状態で、完形品ではないが壺形土器が2個体分と壺形土器片が出土している。

第4節 溝跡と出土遺物

本遺跡からは6条の溝跡が検出されている。

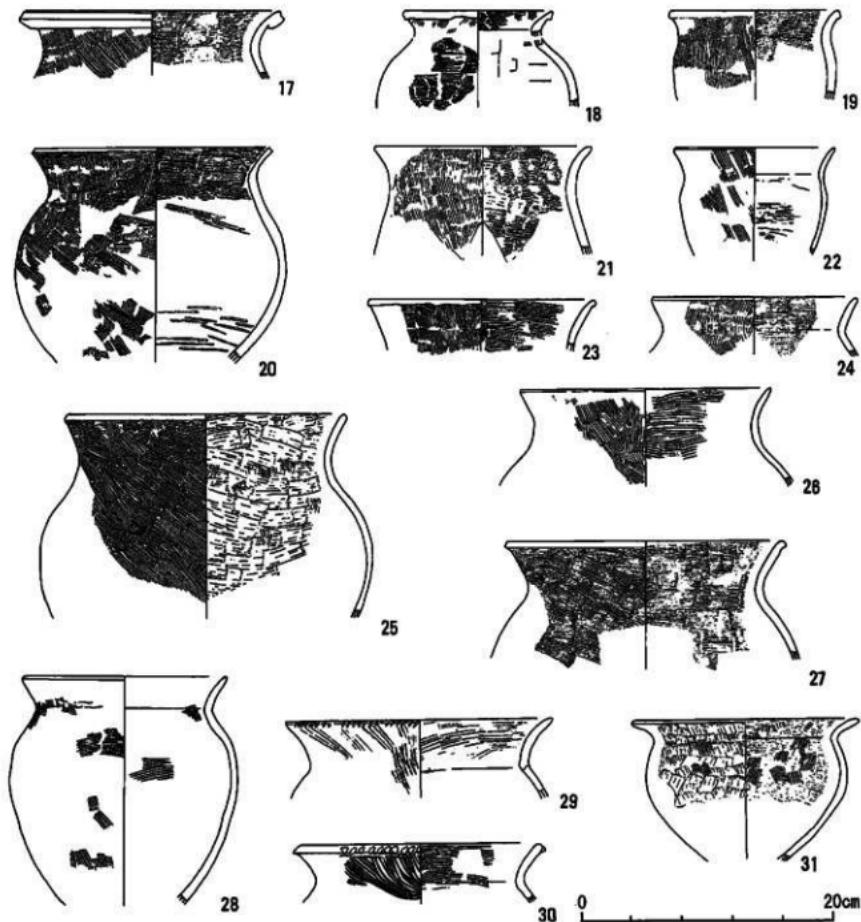
南北に平行に走る1号溝跡と4号溝跡は、その始まりと終わりの状況が判りづらい遺構であった。何らかの水路あるいは流路と考えられるものである。

5号溝跡は当初方形周溝墓の一部かと考えられたが、周囲を精査したにもかかわらず、連続するあるいは関連を有するような他の溝跡を見ることができなかった。

2号溝跡と3号溝跡は1~4号土坑と同じ覆土を有しており、比較的新しい時期の遺構と考えられる。

1号溝跡(第85・89図1~5)

ちょうど南北の方向に走る幅2m前後、長さ30mの範囲で確認された溝跡である。砂が幾層にもわたって堆

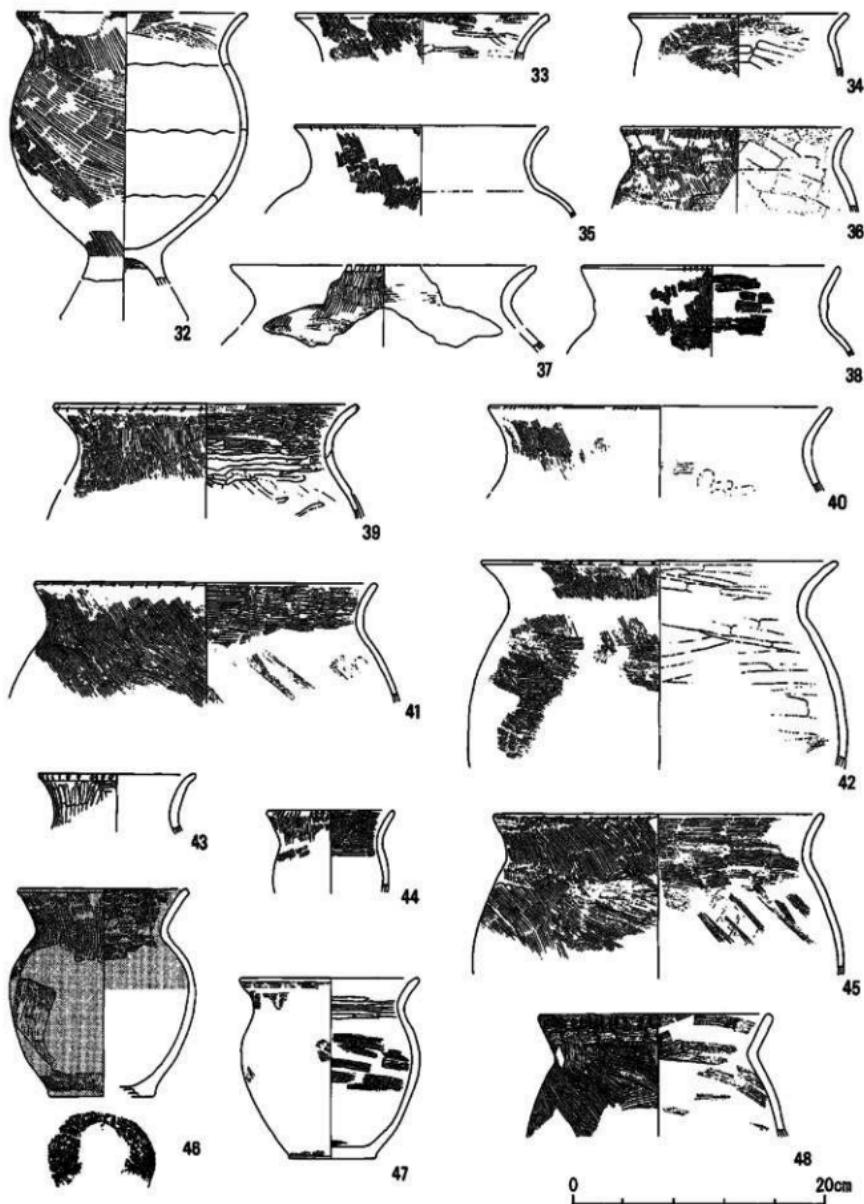


第93図 グリッド出土遺物(4)(S=1/4)

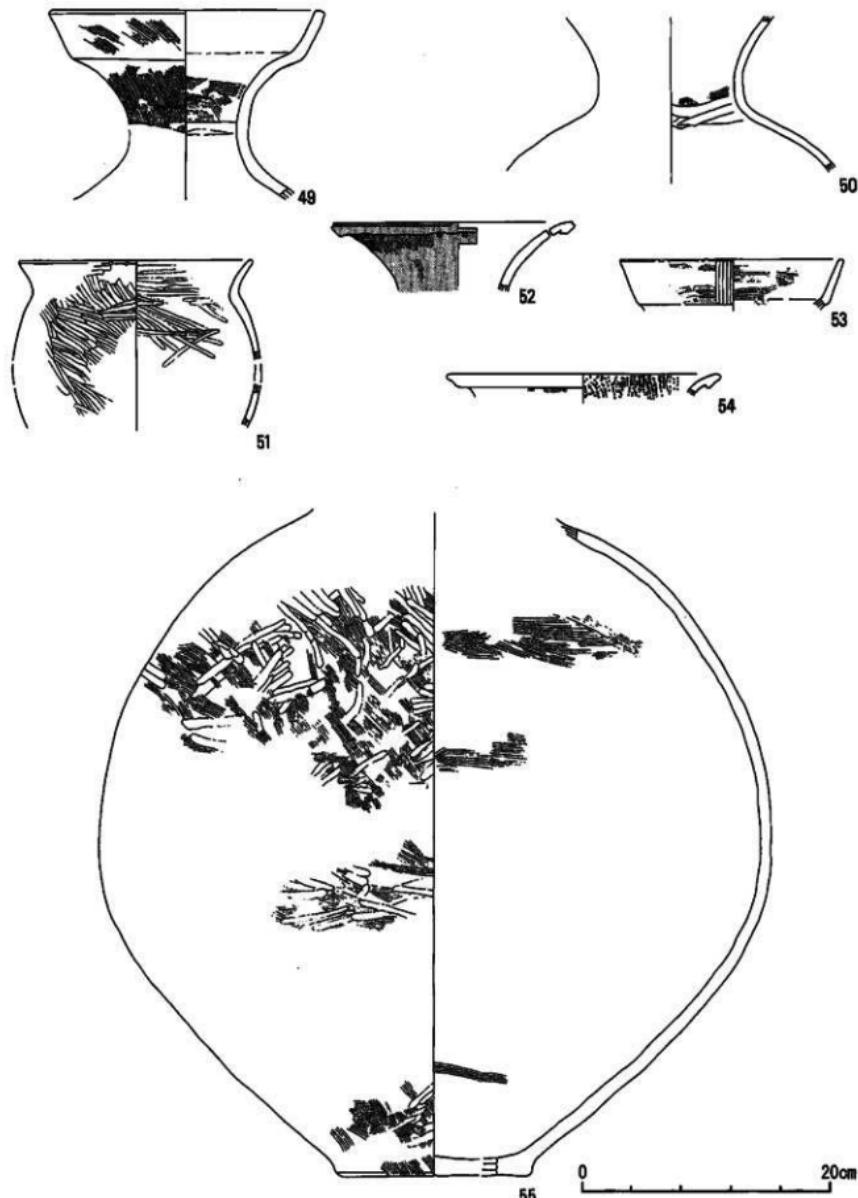
積しており、水が流れていた痕跡が認められる。西側の調査区域外から始まって、北へ延び、30mほどで形状が不明になってしまう。底面の南北の高低差は実際にはあまり無くて平坦である。最も壁が高いのは北側で約1mを測る。これに対して南側が一番壁は低く20cm前後を測る。人工的なものであるか判断が難しい「遺構」である。溝跡からは弥生時代中期の土器片のみが出土している。

2号溝跡・3号溝跡(第82図)

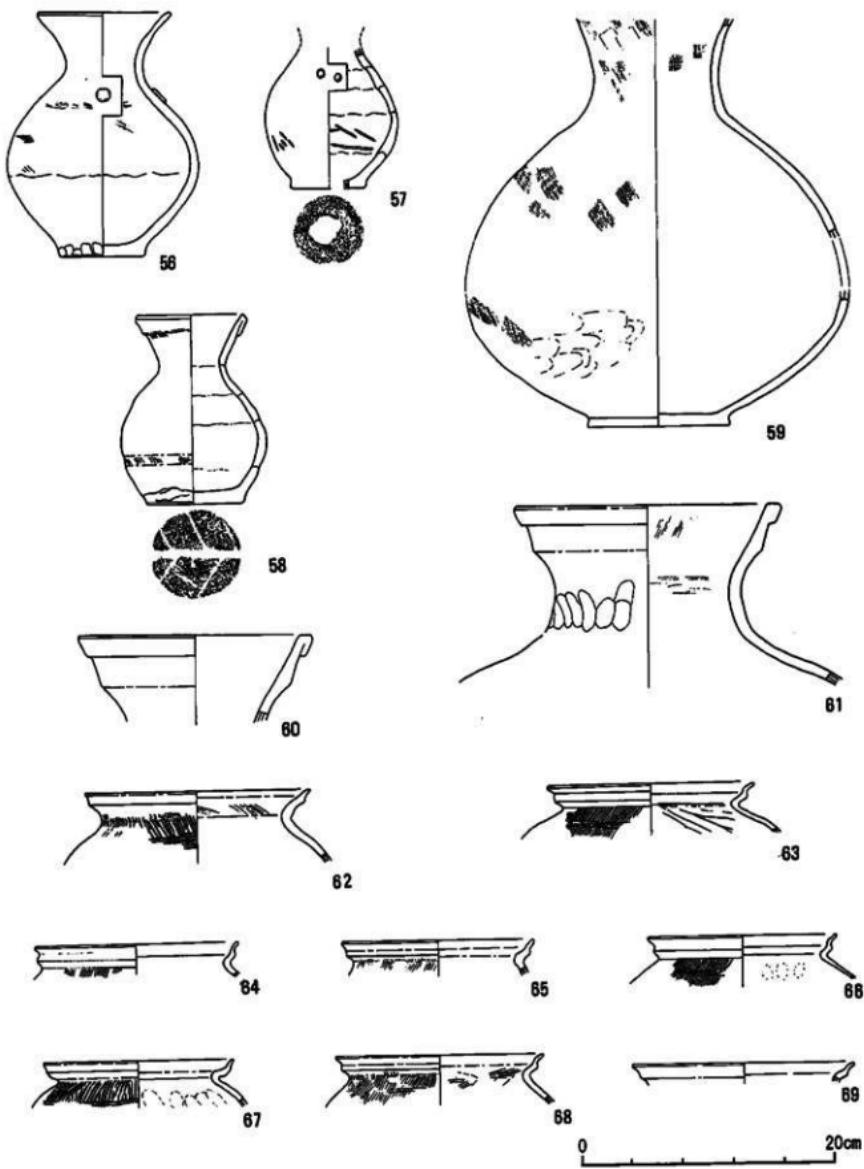
覆土の状況から見て1~4号土坑と同時期の溝跡と考えられ、比較的新しい時代の所産であろう。発掘時の都合で2号と3号の二つの遺構に分けたが、本来一本の溝跡であったと思われる。機能についてはクランク状に屈折した様相などから考えると、地境を示す溝ではなかったかと推測される。共に幅は0.5~1mで深さは20~40cmを測る。出土遺物は皆無であった。



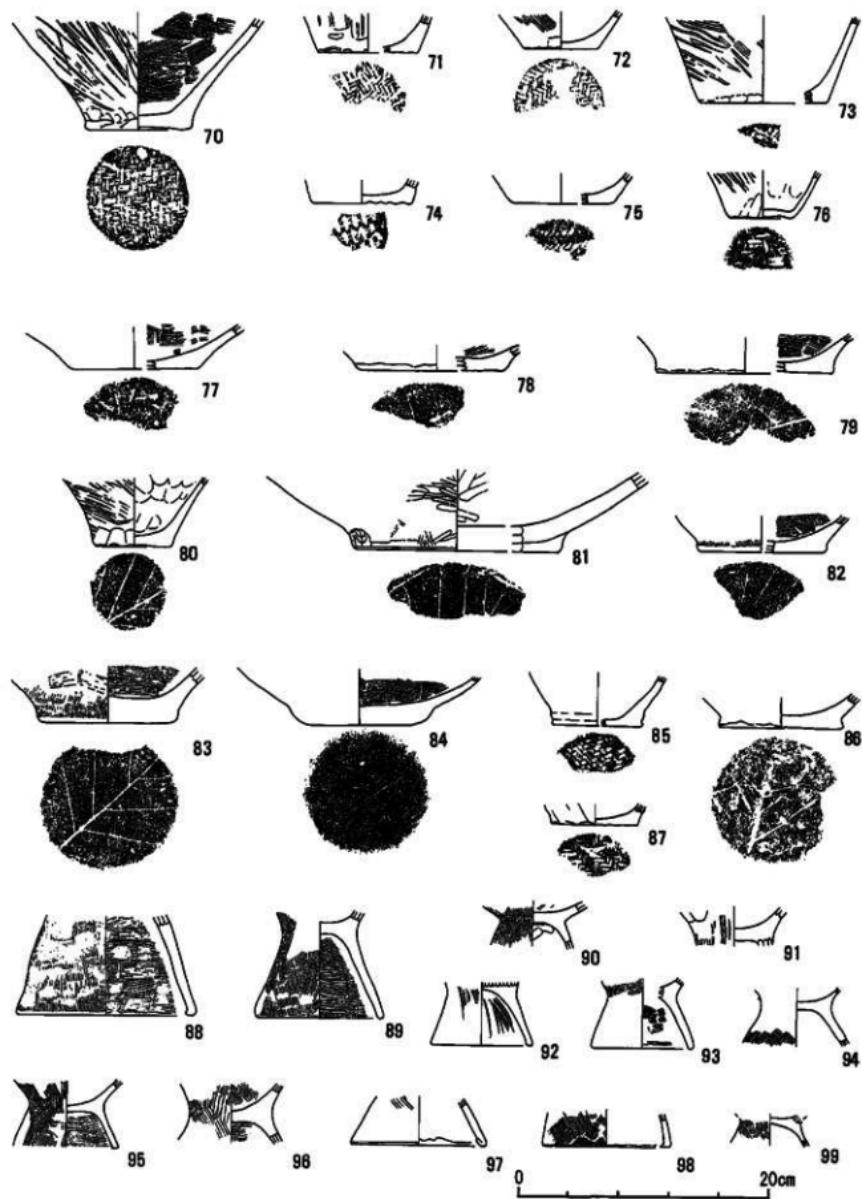
第94図 グリッド出土遺物(5) (S=1/4)



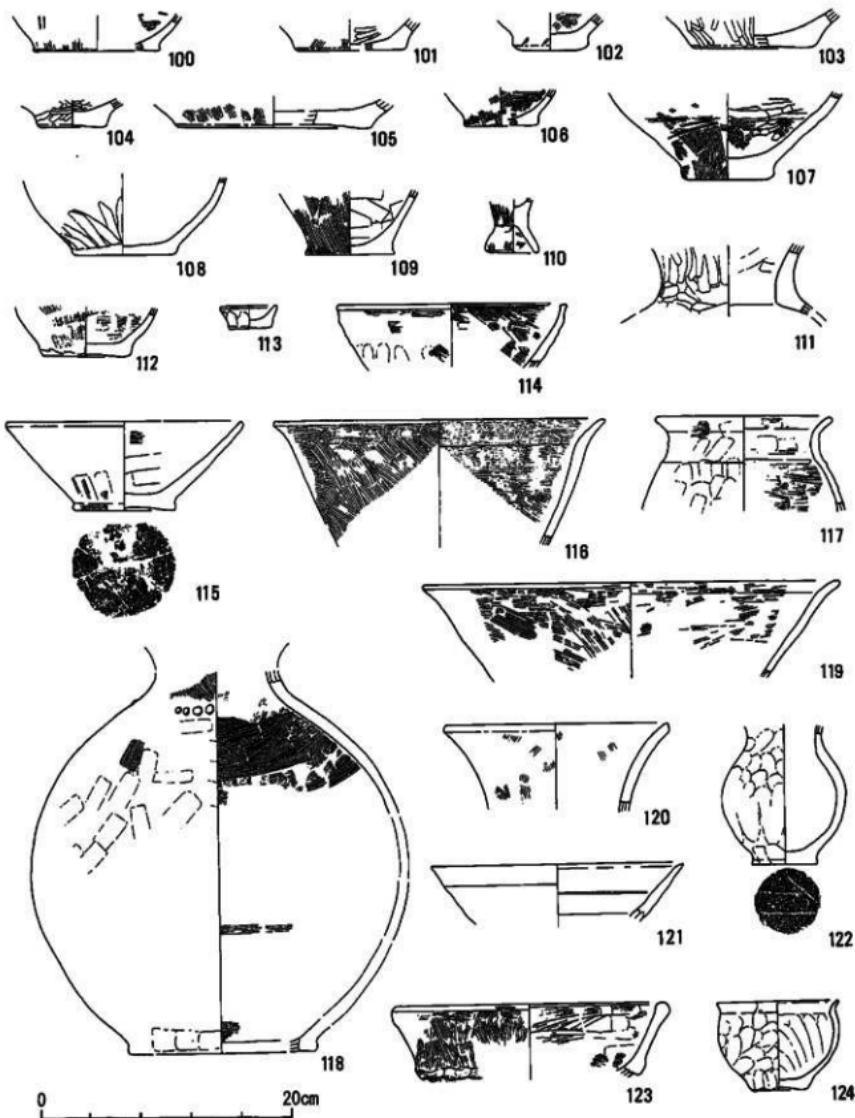
第95図 グリッド出土遺物(6) ($S=1/4$)



第96図 グリッド出土遺物(7) (S=1/4)

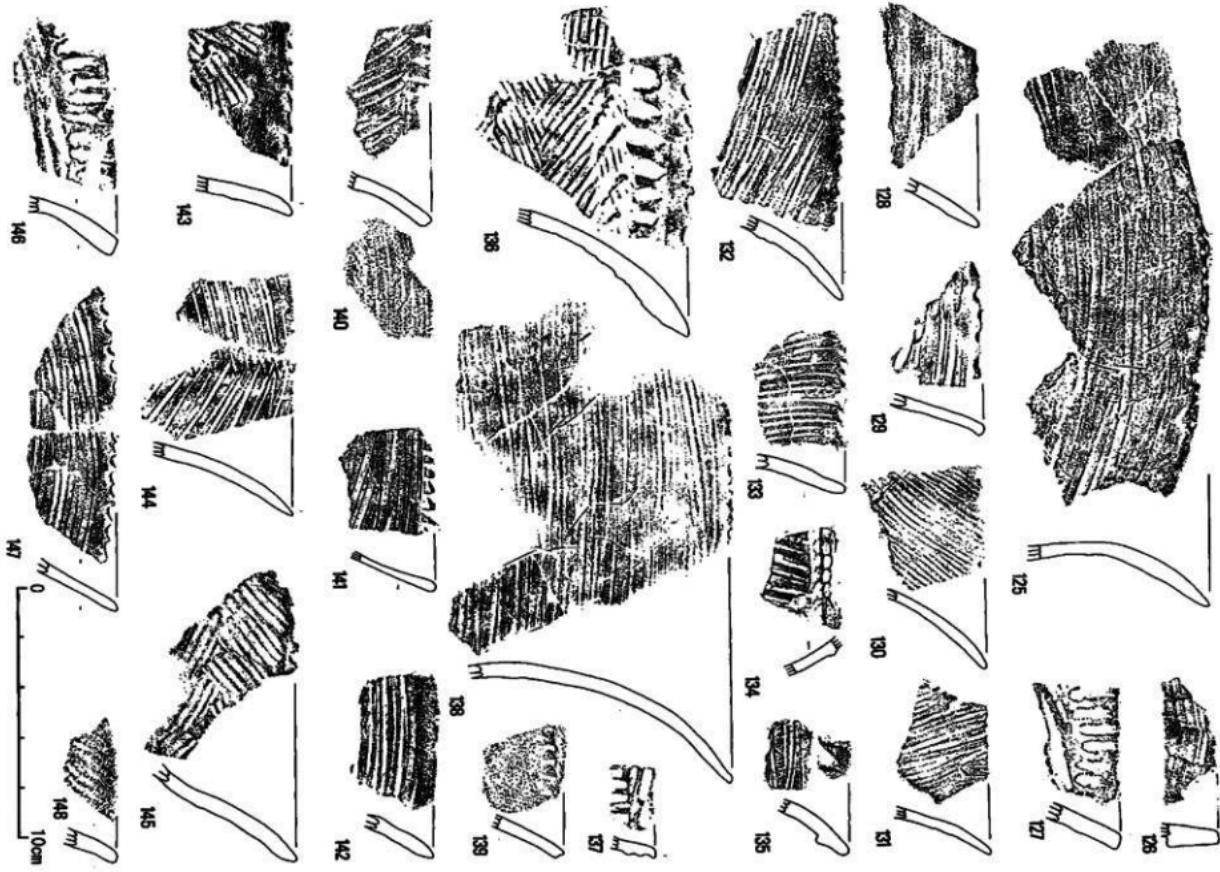


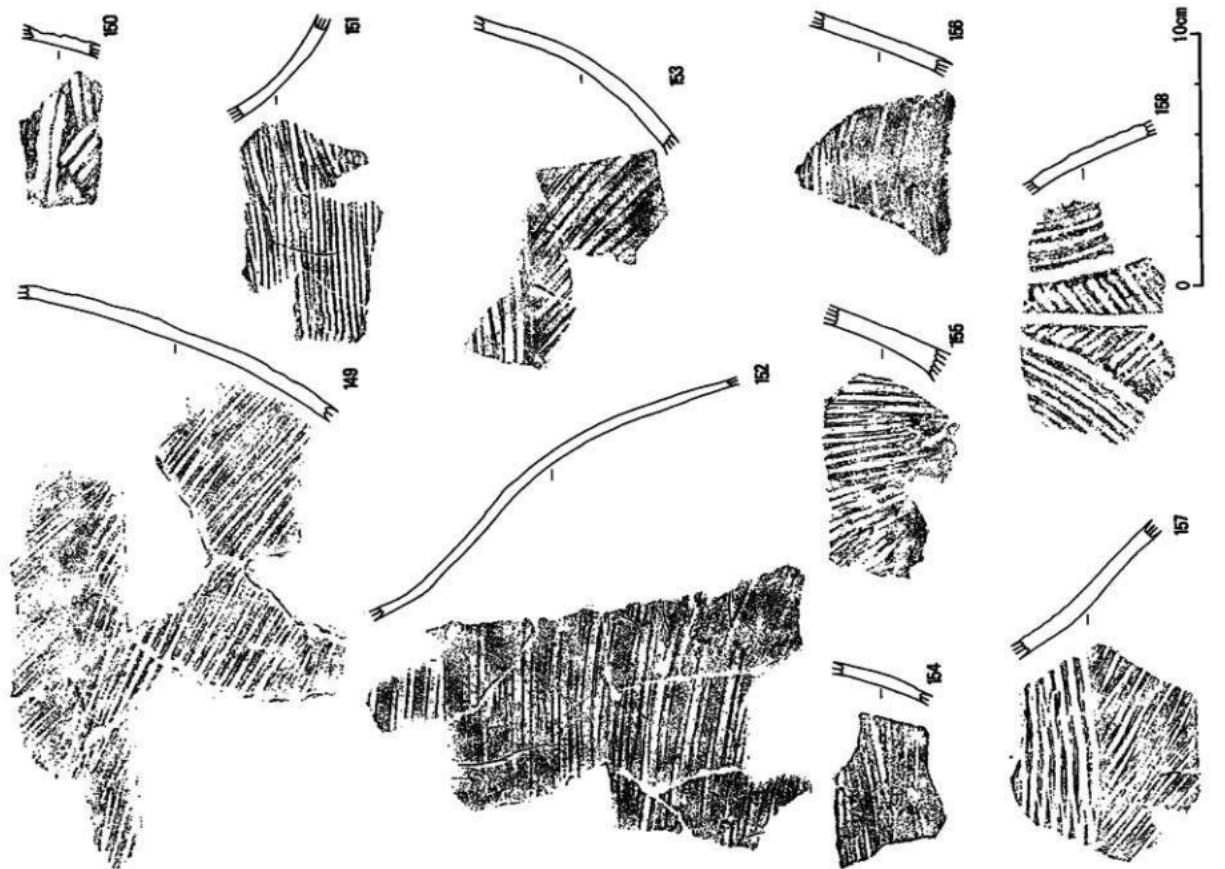
第97図 グリッド出土遺物(8) (S=1/4)



第98図 グリッド出土遺物(9) (S=1/4)

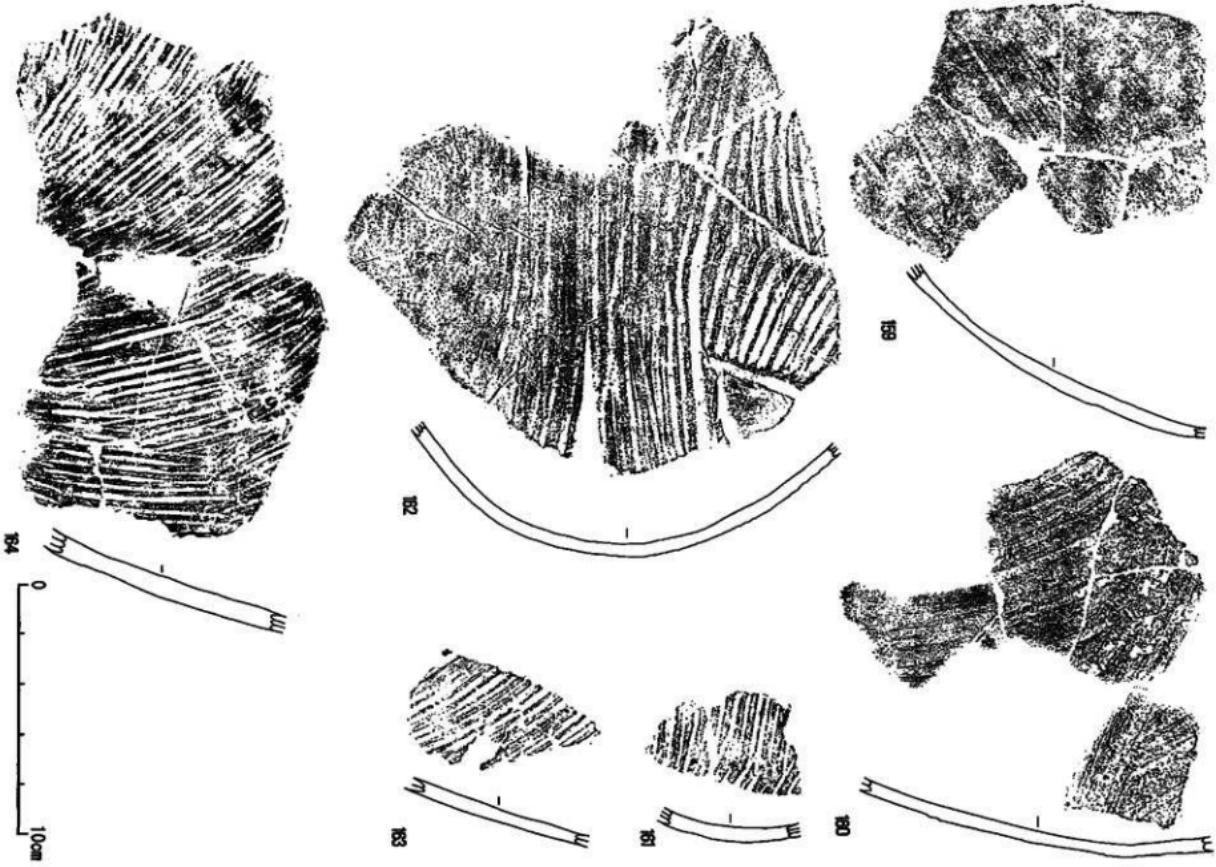
第99図 グリッド出土遺物(10)(S=1/2)



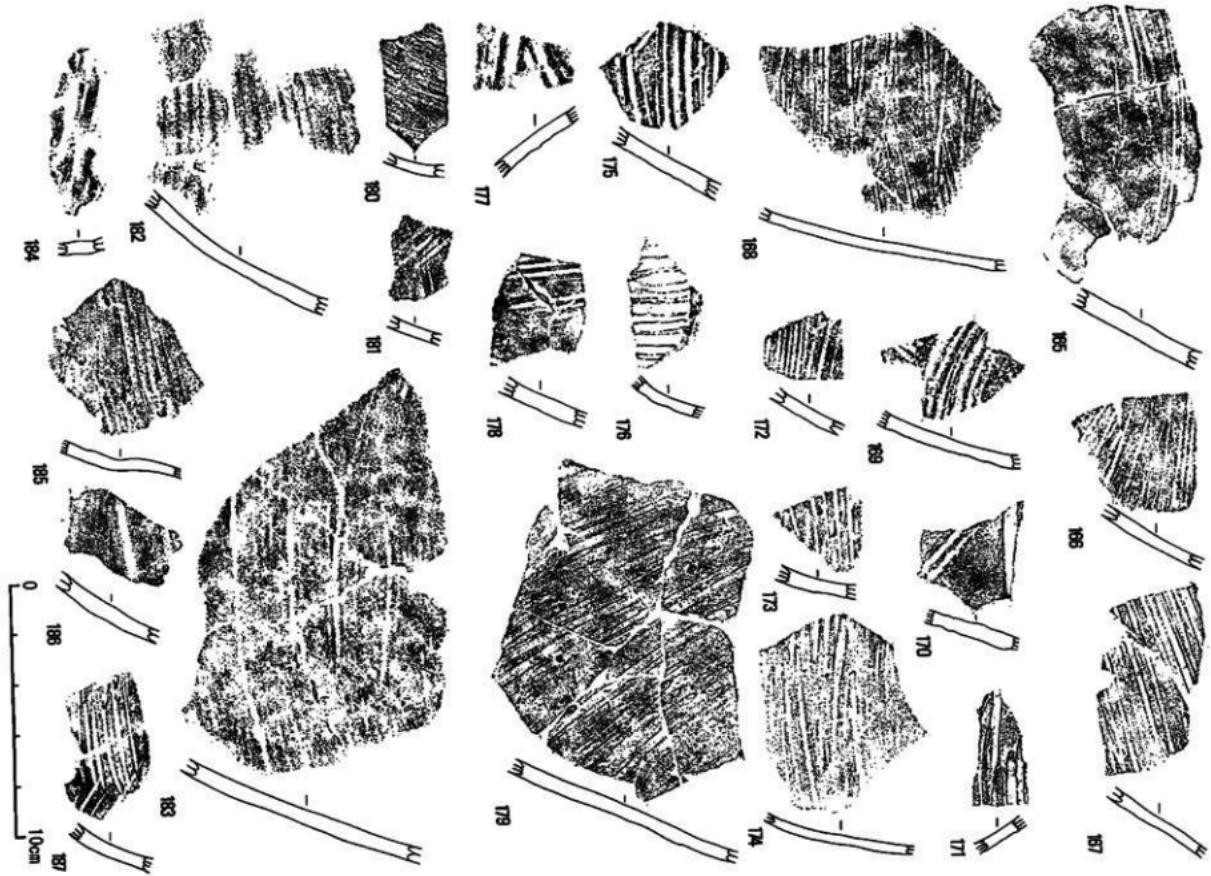


第100図 グリッド出土遺物(11)(S=1/2)

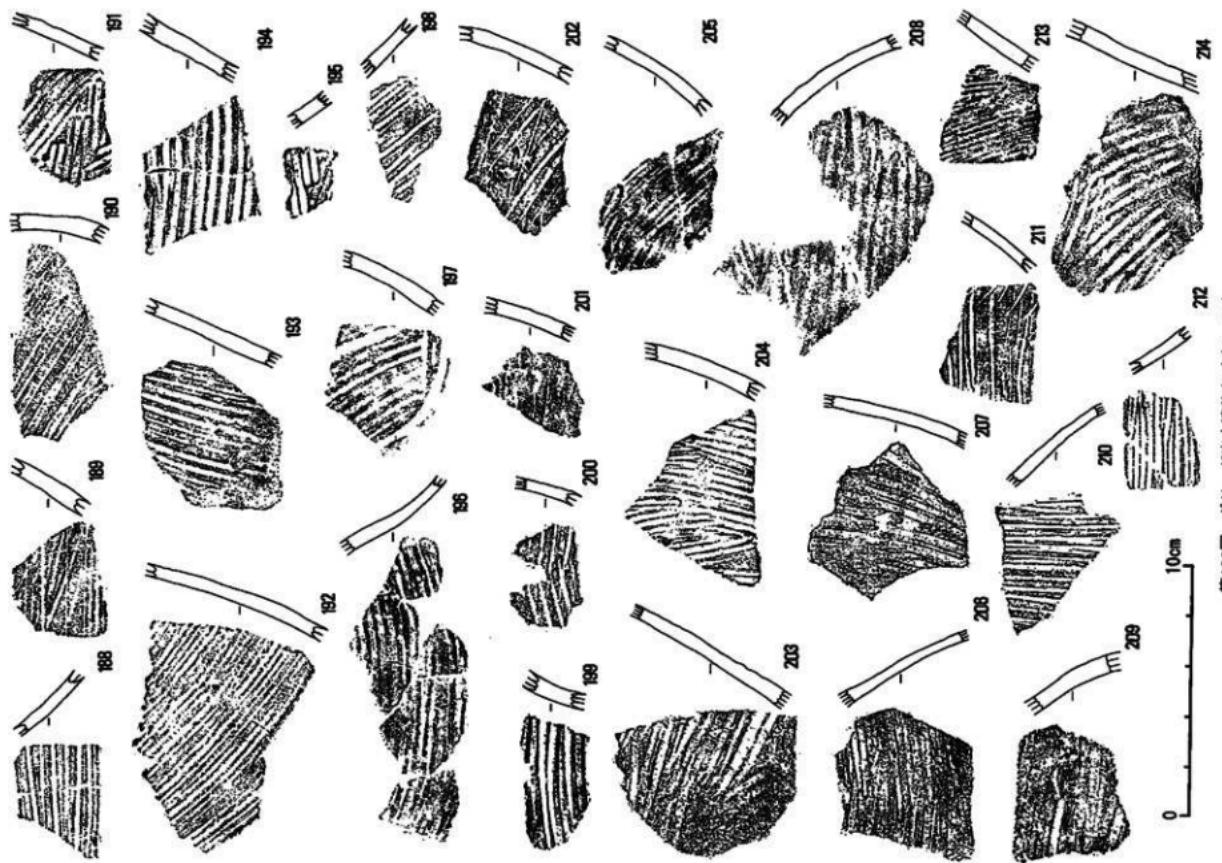
第101図 グリッド出土遺物(12)(S=1/2)

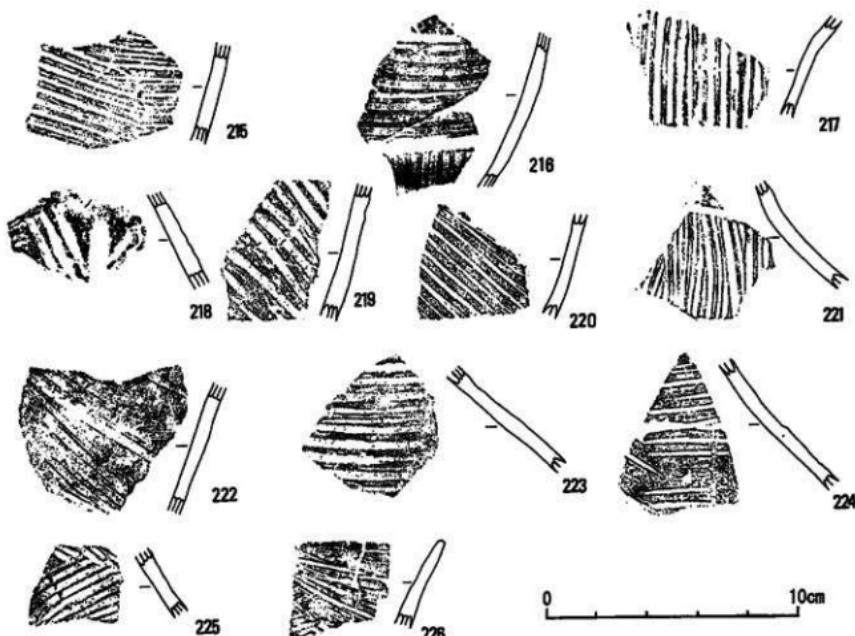


第102図 グリッド出土遺物(13)(S=1/2)



第103図 グリッド出土遺物(14)(S=1/2)





第104図 グリッド出土遺物(15)(S=1/2)

4号溝跡(第83・89図6~9)

1号溝跡とほぼ平行して南北に走る。また1号溝跡と同様に溝の始まりと終わりが明確ではなく、人為的に掘られたものかどうかも判別し難い。それも深さが20cmにも満たないために、さらに状況が判りづらくなっている。覆土は砂が多く水が流れていた痕跡を示している。弥生時代の壺形土器、甕形土器等が出土している。

5号溝跡(第86・89図10~12)

9号方形周溝墓の南側で確認された長さ6m、幅が最も広いところで1mの直線的な溝跡である。溝の断面はU字型を呈し、最も深い所で深さ90cmを測る。溝がほぼ東西方向に走っている上に形状も整っていたため、当初方形周溝墓の一部ではないかと考えた。そのため周囲を精査して関連性のある遺構を探したのであるが、本溝跡以外の遺構は発見できなかった。築造途中で放棄された方形周溝墓のような印象を受ける。台付甕形土器が1個出土している。

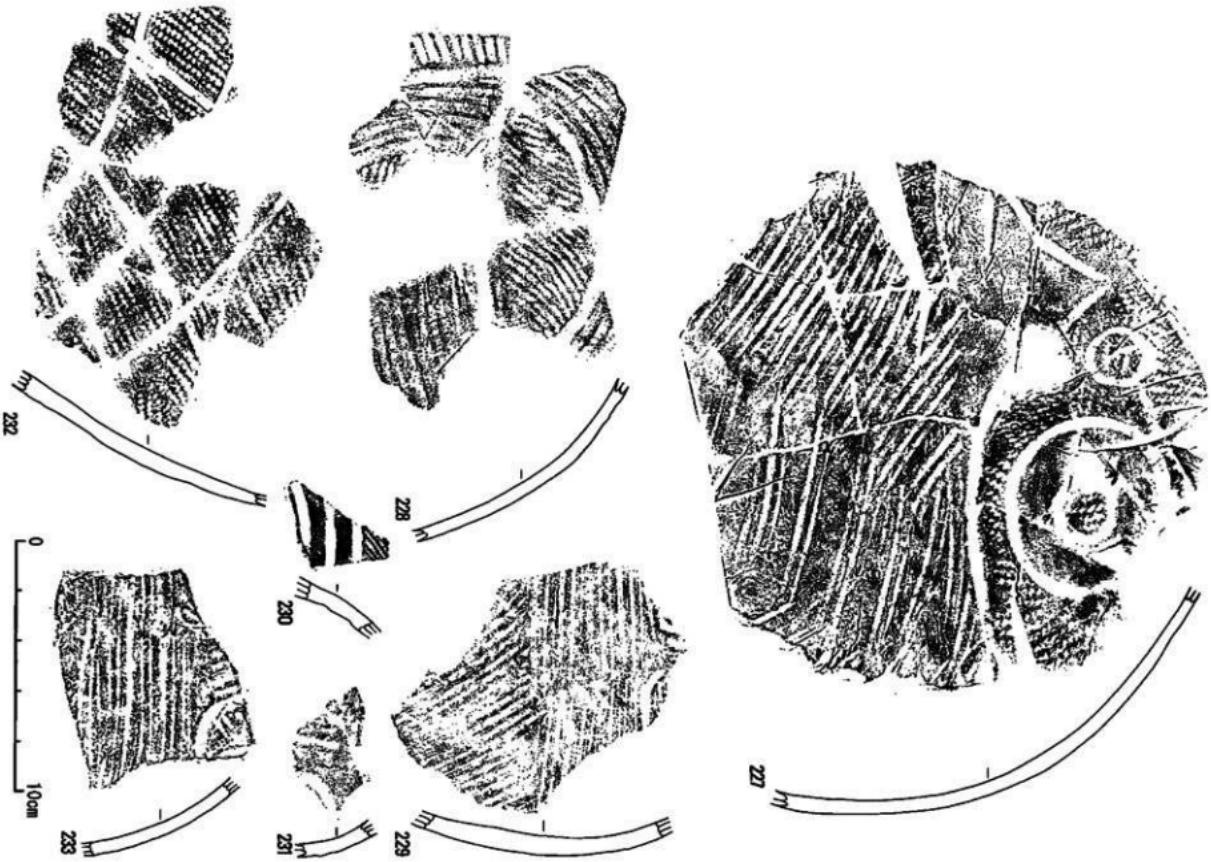
6号溝跡(第87図)

当遺跡の最南端で確認された溝跡である。溝跡というよりは自然の細長い窪地という印象である。漆黒に近い覆土が薄く覆っていた。12号住居跡が切り込んでいる。出土遺物は皆無である。

第5節 その他の遺構と出土遺物

十五所遺跡のI区では地表下約2~3mの砂質土層から弥生時代中期の遺物がおよそ2個所でまとまって

第105図 グリッド出土遺物(6)(S=1/2)



第106図 グリッド出土遺物(17)(S=12)

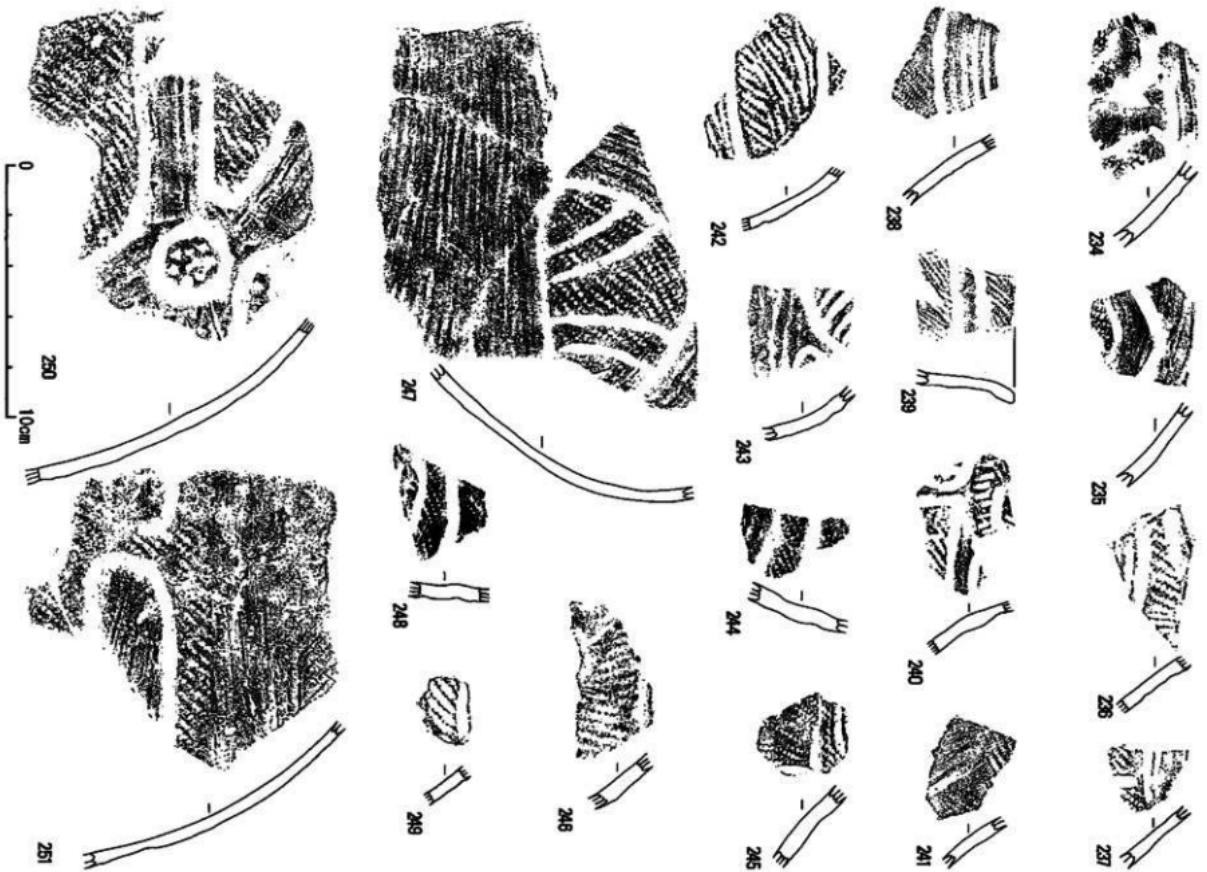
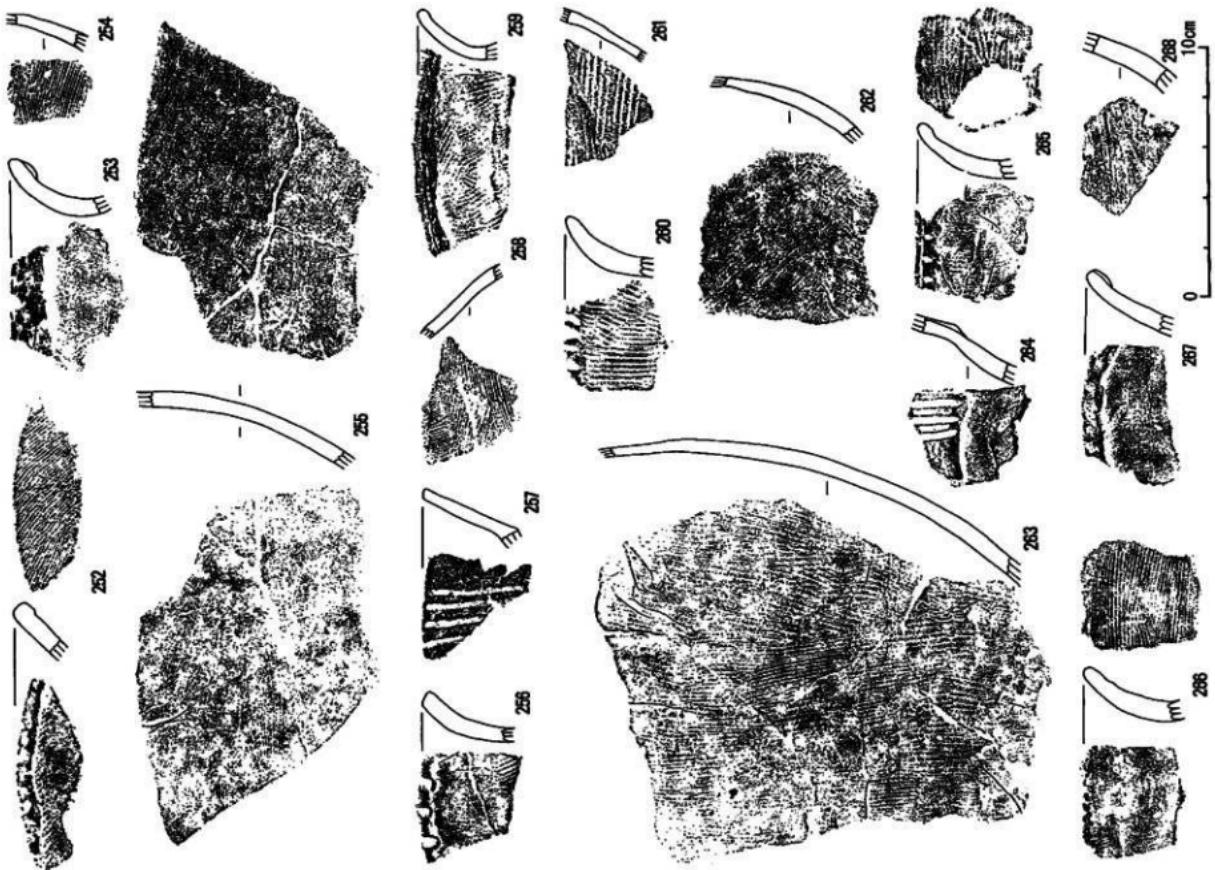
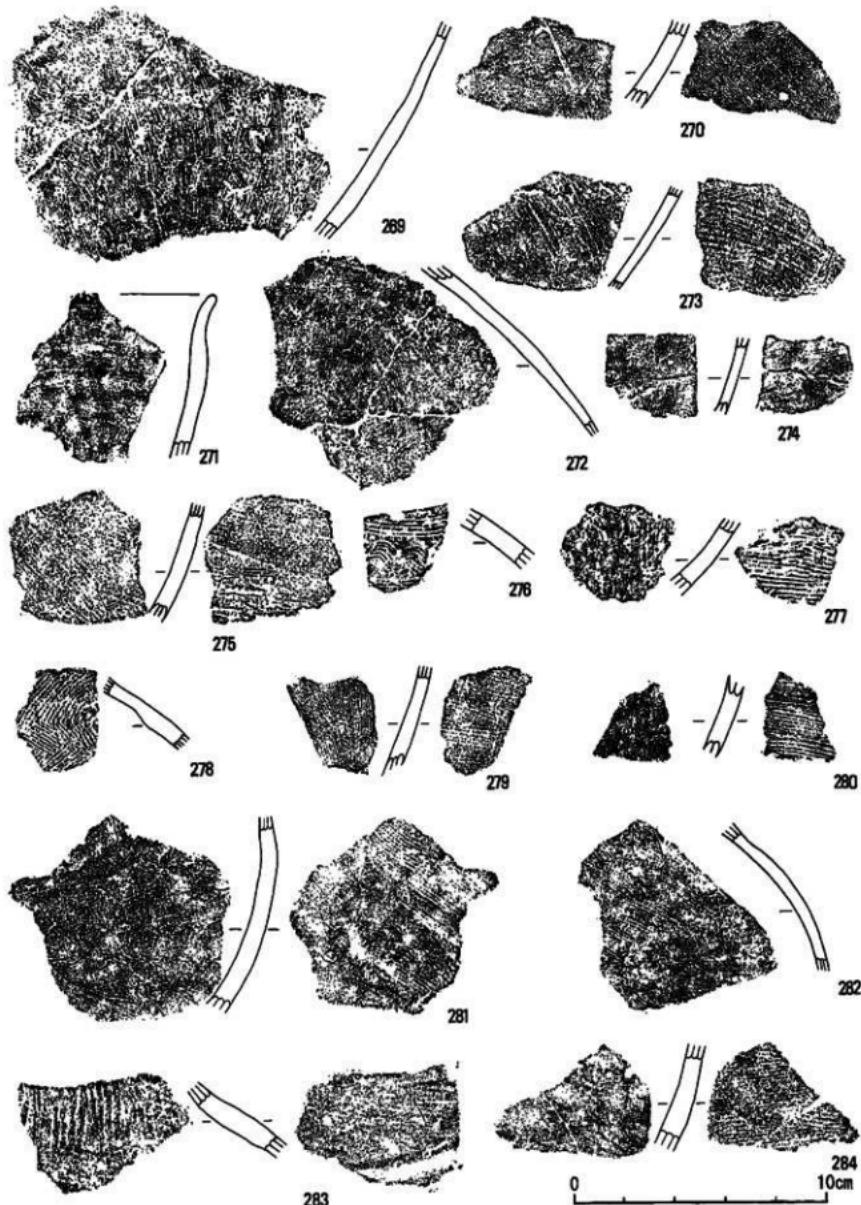
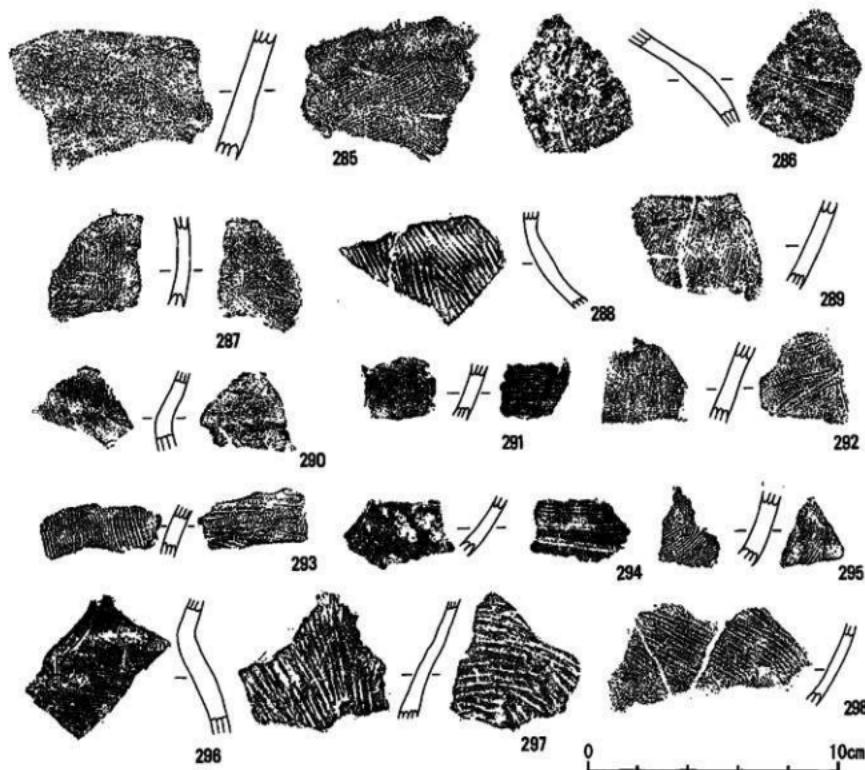


図107 總107圖 グリッド出土遺物(18)(S=1/2)





第108図 グリッド出土遺物(19) ($S=1/2$)



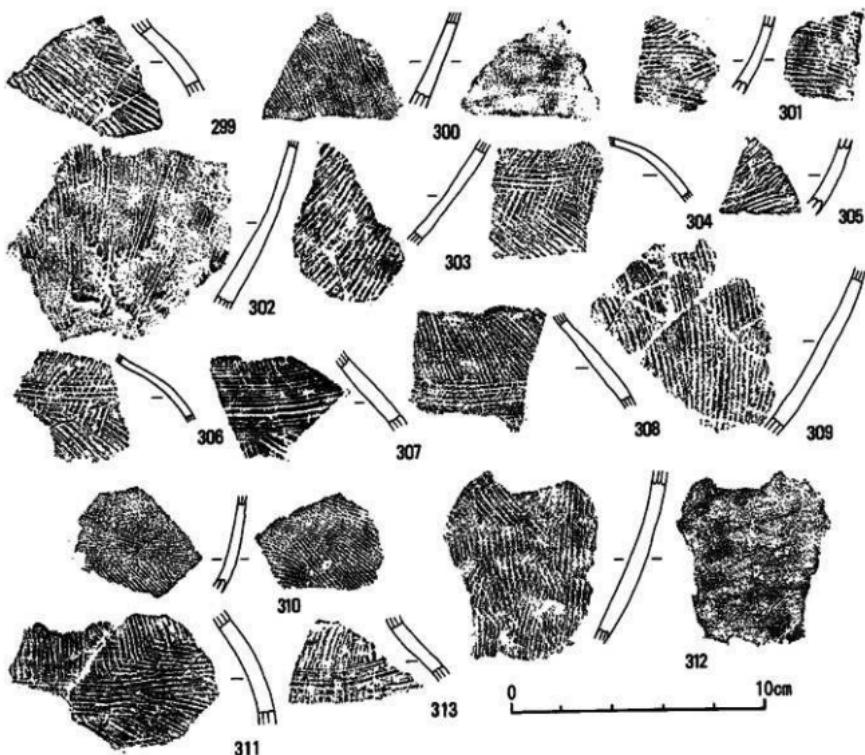
第109図 グリッド出土遺物(20)(S=1/2)

出土している。そこでは土器片や石器類以外に焼土や赤色顔料も発見されており、単なる遺物包含層というよりも方では済まない状況を示している。住居跡や土坑などのような具体的な造構は確認されなかつたものの、何らかの生産活動が行われていたことは間違いないことである。これらについての詳細な分析「まとめ」の章で後述されるため、ここでは概要を記しておく。

弥生時代中期遺物集中区I（第116図）

I区の中で比較的南寄り、グリッド番号でE一チ・E一リ・F一チ・F一リの隣接する4つのグリッドを中心に多量の土器片や礫・石器類が出土している。その他に焼土や多量の赤色の顔料と考えられるものも確認されている。とくにF一チで確認された焼土では、その焼土を中心に直径約4mほどの円を描くように土器片や礫・石器類が散布している。このすぐ南側で赤色顔料と思われる塊が2箇所存在しており、何らかの作業空間が形成されていたと考えられる。

なお、この集中区で出土した赤色塗彩された壺形土器の顔料と、遺跡から出土した赤色物質を科学分析した。その結果双方とも「パイプ状ベンガラ」という点で一致した結論が導き出されているが興味深い。



第110図 グリッド出土遺物(21)(S=1/2)

弥生時代中期遺物集中区II(第117図)

I区の中で比較的北寄り、グリッド番号でいうとD-12・D-13・E-12・E-13・E-14の隣接する5つのグリッドを中心に多量の土器片や砾・石器類が出土している。その他に焼土が6箇所で確認されている。前述の集中区Iと比べると遺物の出土状態に一定の雰囲気は積極的には認めることはできないが、やはり何らかの作業空間であったと考えるのが妥当であろう。

第6節 グリッド等出土土器

本遺跡では遺構外から多くの土器が出土している。第90図～第110図までが遺構外のグリッド出土としてグリッド単位で取り上げた土器である。一部に表面採集したものも含まれている。また前述した弥生時代中期遺物集中区の土器群も基本的にはグリッド単位で取り上げており一覧表の中に出土グリッドは表示してある。

方形周溝墓などの遺構内からは出土した例が見られなかったのであるが第92図11・12のような長野県の中島式に酷似する壺形土器なども出土している。また当遺跡の方形周溝墓確認面の上層には漆黒に近い土層が堆積しており、その中からはS字状口縁の台付壺形土器が多く確認できた。この黒色土層は方形周溝墓の溝に落ち込むように堆積しており、S字状口縁の段階では方形周溝墓の溝は完全には埋まりきっていなかったことが判明している。

第5章 まとめ

第1節 十五所遺跡出土の弥生時代中期前半の石器群

記載

十五所遺跡の弥生時代中期前半の土器群に伴って、石鎌1点、抉り入り石器2点、楔形石器7点(黒曜石製4点、粘版岩製3点)、使用痕ある剥片3点(いずれも黒曜石)、石核5点(いずれも黒曜石)、黒曜石原石4点、粘版岩剥片7点、黒曜石剥片26点、赤色円盤1点が出土した。ここではまず、個々の石器の記載を行なう。

石鎌(第111図1)

有柄鎌である。先端、基部を欠損し、かえり部の端部も欠けている。長さ3.4cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmである。灰色のガラス質安山岩で、望月氏の分析により下呂石と同定された(P113~P117参照)。扇端部側3分の1ほどのところに肩があり、身部中央では両側縁部がやや開く。かえり部の抉りがかなり強く、凹基となっている。剥離のありかたを観察すると、先端部、身部中央、抉り部、柄部の4つの部分の剥離群に両面とも区分できる。身部中央の剥離群が最も古く、先端部と抉り部の剥離群に切られている。両面とも右縁部の剥離群が新しく、左縁部およびそれぞの裏面の剥離群を切っている。すなわち、錯交状に剥離したと考えられる。左縁部の剥離群はその前面に階段状剥離が両面ともみられる。先端部剥離群は裏面左、裏面右、正面左、正面右の順番で剥離が進んでいる。正面左右縁部や裏面右縁部では肩の形成にかかる剥離が比較的大きく、意図的に抉る様子が窺われる。なお、裏面左では前面に階段状剥離は連続する点、身部中央と近似する。抉り部では、裏面右、正面左、正面右、裏面左の順番で剥離が行なわれるが、いずれも一枚の剥離で力強く抉りが入れられている。この抉り部の剥離の後に柄部分の剥離が行なわれる。1点のみの石鎌であるが、剥離の在り方から把握できることは、この形態がはっきりした意図のもとに形成され、偶然に形成されたり刃部のつけかえなどにより2次的に形成されたものではないといえることである。この形態の意義については後述する。

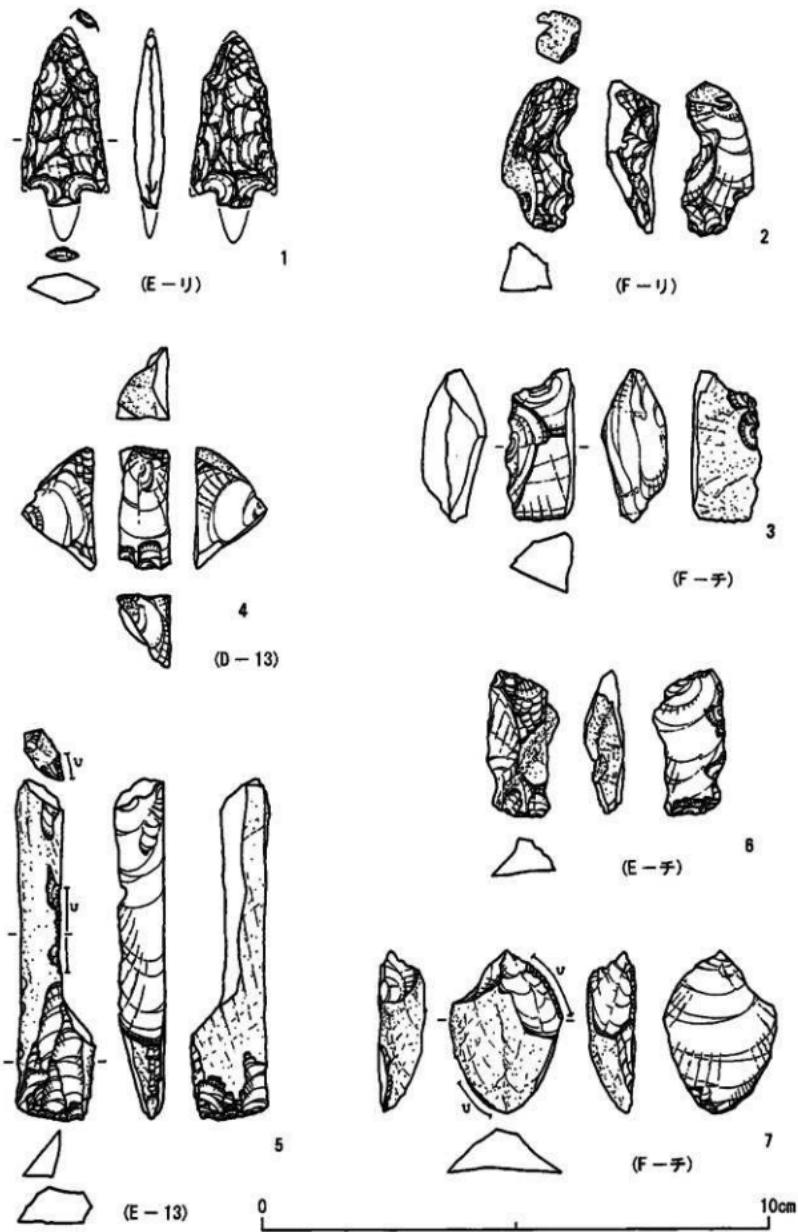
抉り入り石器(第111図2・3)

剥片の刃縁部に比較的大きな剥離で抉りを入れた石器として図示した2点を認定した。2は、黒曜石製の縦長剥片の右刃縁部に主剥離面側から数枚の剥離で抉りを入れたもので、その剥離以前に主剥離面に平坦な剥離を行なっている。3は1枚の剥離で抉りを入れるいわゆるクランクトンノッチに近似するが、正面右の折断面に切られているので、折断以前の形態は不明である。黒曜石製。なお、1、2ともに楔形石器の可能性もある。2では正面左側に潰れ状の細かな剥離が連続し抉りの剥離群を切っている。これらと抉りの剥離群が対極をなす楔形をなしていた可能性がある。また、3では正面左の1枚の大きな剥離と裏面右上方の細かな剥離が一体のものと考えると折断以前にこれらと対極をなす剥離が存在していた可能性もある。

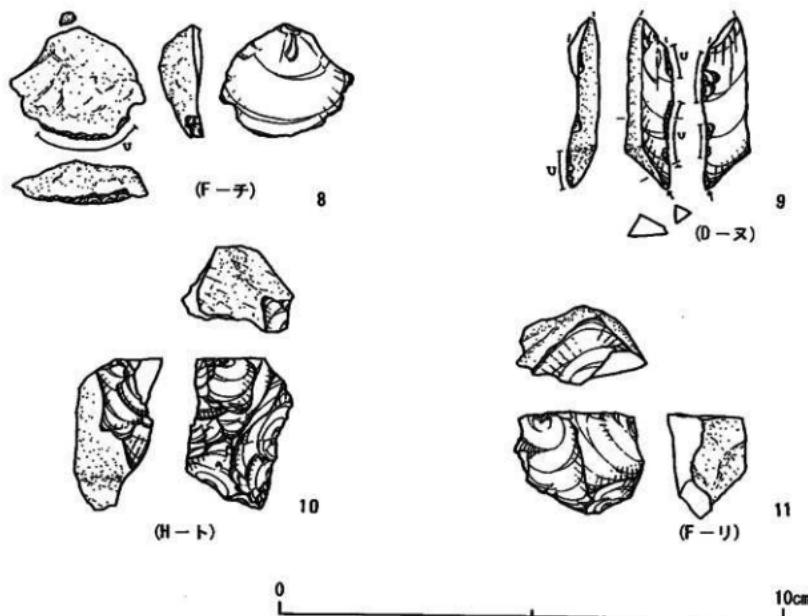
楔形石器(第111図4~7、第113図12~14)

第111図4~7は黒曜石製の楔形石器である。4は図右面を主剥離面とする剥片を利用し、剥片を折断するように対極剥離をおこなったものである。5は棒板状の原石を利用し対極剥離を行なっているが、上方からの剥離は素材を大きく縦に分断してしまっている。6は縦長状の剥片を縦に利用している。7は長楕円の剥片を利用している。いずれも、自然面を広くもっている点に注意。

第113図12~14は粘版岩製の楔形石器である。12は石器の長軸を横にして対極剥離を行なっており、大小の剥離のほとんどは調整剥離ではなく対極剥離で生じたものと考えられる。最終的に右図左下方からの矢印の方向からの剥離で大きく破壊している。なお上方の小規模剥離の群は潰れ状である。また、左図左上方や右図右上方の一体の剥離の存在から、長軸方向にも対極剥離があった可能性も考えられる。13は長軸を縦に利用して対極剥離を行なっている。14は大型の横長剥片を利用し、打点側とその反対縁部と対極剥離を行なっていると思われる。両縁部とも潰れ状の剥離であり、あるいはこの両縁部を利用して、なにかを押し切ったり、ソーリングで切ったりといった作業に使われた可能性も否定できない。これを取ると横刃形石器ということになるが、ここでは上方から折断面の存在から、12同様にかなり大きな力で対極剥離されていると判断し、楔形石器と分類した。なお、右図左縁部がえぐられているように見えるが、剥離の在り方をみると偶然えぐり状になっ



第111図 弥生時代石器(1) (S=1/1)



第112図 弥生時代石器(2) (S=1/1)

たものと思われ意図的なえぐりではないことを強調したい。

なお、第113図12については、中山誠二氏によって金属顕微鏡による使用痕観察がなされたが、光沢などは確認されなかった。横刃形石器の可能性をもとめての観察であったが、その可能性は低いとの教示を得た(中山誠二1997「山梨県の石器組成の変遷」「農耕開始期の石器組成」4、国立歴史民俗博物館)。使用痕ある剥片(第112図8・9)

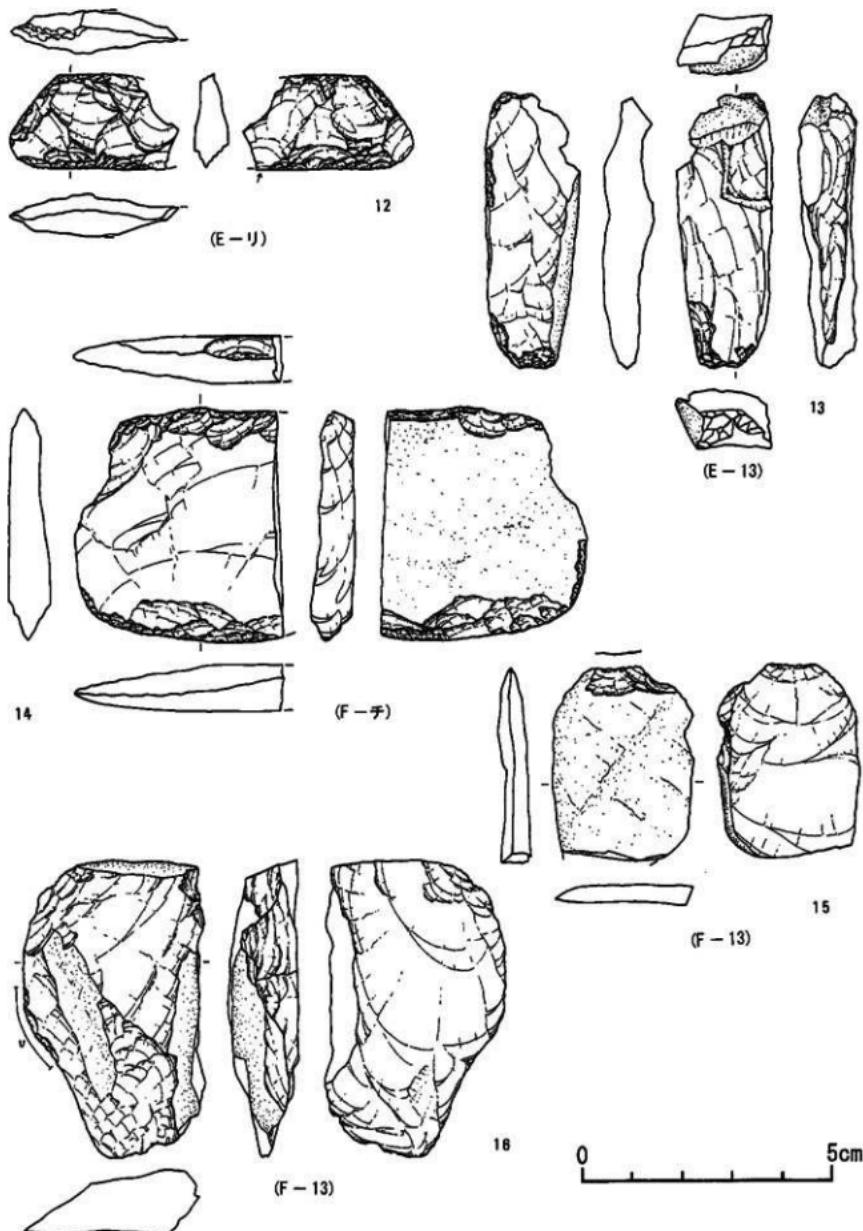
使用痕ある剥片の例として2点を図示した。8は黒曜石製の貝殻状の横長剥片の端部に主剥離面側から弧状に連続する微細剥離がみられる。多くは階段状であり、あたかも撞器のような形態、特長をもつ。9は黒曜石の縦長剥片の縁部と尖った端部に微細剥離がみられる。刃縁部のものは両面にみられ、ソーキングの動作によるものの可能性がある。尖った端部には矢印方向からの撞状の微細剥離がみられ、あたかも石錐として使用されたようにみえる。

石核(第112図10・11、第114図17)

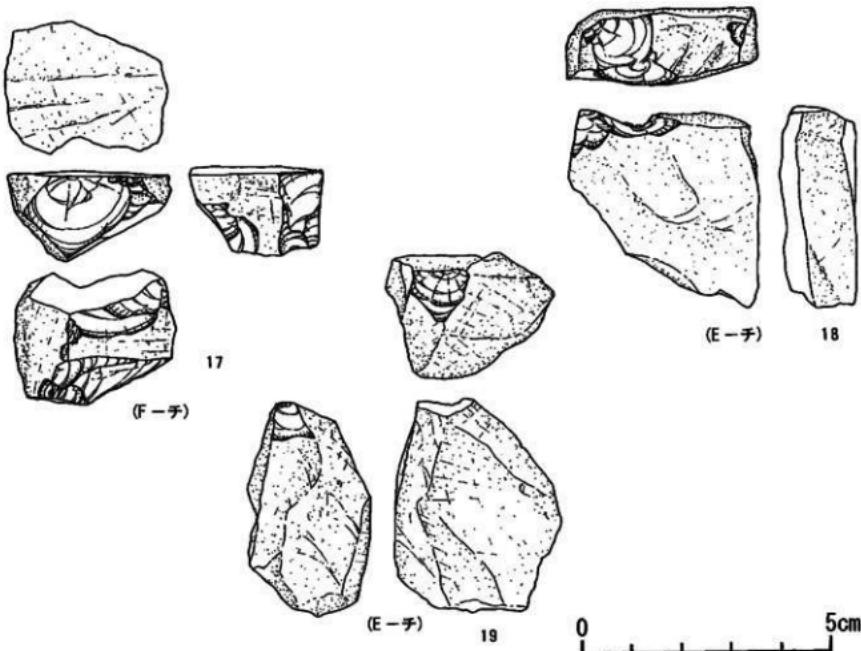
石核の例を3点示した。いずれも黒曜石である。10は背面全体が自然面で、作業面では上下と右方向からの剥離作業が行なわれている。11も同様であるが、打面部分が作業面ともなっているので、正面の剥離作業面を打面とした90度打面を転位した作業面が存在していたと考えられる。第114図17ではさらに複雑で正面の作業面を打面とした下図の作業面と、正面とは反対側に90度打撃方向が異なる作業面が設定されている。このように、黒曜石の剥片剥離は作業面を90度転位しながら進められているようだが、必ず背面に自然面を残すように剥離を行なっている点注意される。

粘版岩剥片(第113図15・16)

粘版岩の石器は以上のとおり楔形石器のみであるが、なお多くの大型剥片が存在する。15は打面が破碎し線状となった縦長剥片である。16も打点が破碎している。正面右縁部には主剥離面とは90度打撃方向が異なる剥



第113図 弥生時代石器(3) (S=2/3)



第114図 弥生時代石器(4)(S=2/3)

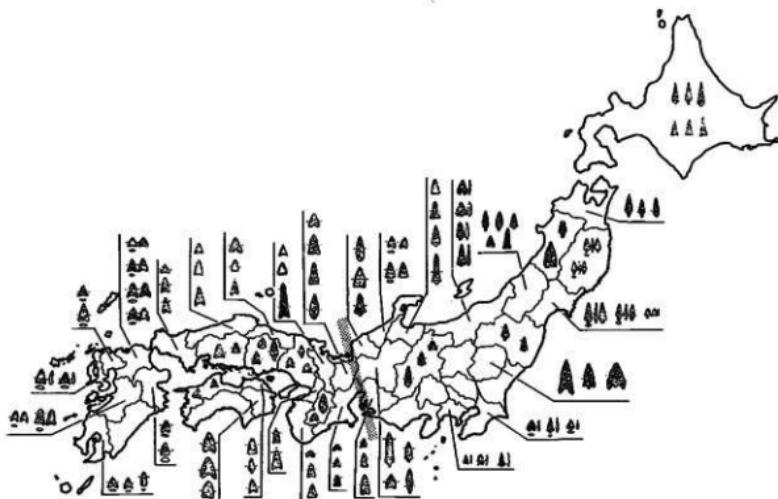
離群が残存している。大型剥片も黒曜石同様な剥離手順であったかもしれない。なお、16では正面左縁部に若干の微細剥離がみられ、使用痕ある剥片としてもよいかもしれない。

黒曜石原石(第114図18・19)

18は最大長7.7cm、最大幅5.3cm、厚さ2.3cm、重さ93gで、ほぼ全面を風化剥離面で覆わたいわゆるズリ石である。方形板状の形態。端部に2枚の剥離がみられる。19は最大長7.1cm、最大幅5.4cm、厚さ3.8cm、重さ116gで、ズリ石である。塊状の形態。18同様に端部に2枚の剥離がみられる。剥離は18、19とともに打撃方向を90度違えており、剥片剥離の手順と共通するが、剥離自体は十分な剥片が得られるものではなく、完全な原石状態をこの剥離で解除するような象徴的な意味をもつものかもしれない。なお、第114図18・19の原石と第114図17の石核(重さ5.2g)は隣接するF-チ・E-チグリッドでまとまって出土しており注目される。また、このほかにF-13グリッド出土で最大長4.3cm、最大幅3.7cm、厚さ2.1cm、重さ24gのズリ石で1枚の小剥離がある原石、F-トグリッド出土で最大長2.6cm、最大幅2.5cm、厚さ2.3cm、重さ9gのズリ石で1回の加撃で分割されたものがある。

分布

石鎌はE-リ、抉り入り石器のうち第111図2および第112図11の黒曜石石核がF-リ出土と土器の集中分布区域からはずれて分布している。F-チ、E-チの土器集中区域内に第114図の黒曜石石核や原石、第113図4の粘版岩楔形石器、第112図8の黒曜石使用痕ある剥片のはか黒曜石剥片や黒曜石原石1点が焼土を取り囲むように分布する土器群と渾然一体として分布している。その周囲のH-トの第112図10の黒曜石石核のはか、黒曜石剥片が分散して分布している。この土器集中区域には粘版岩剥片は1点しか存在しない点が注目される。E-14の土器集中区域には周囲に若干の黒曜石剥片が分布するのみである。E-13の密集度の高い土器集



第115図 弥生I～III期併行期の石器の形態分布
(国立歴史民俗博物館編1997「農耕開始期の石器組成」より作成：網点
は有柄縄南限ラインを示す)

中区域では第111図5の黒曜石楔形石器や、第113図13の粘版岩楔形石器がその脇に位置している。F-15の密集度の高い土器集中区域には石器が見当らない。F-14、F-13の散漫な土器の分布区域では、その南側のF-13の区域で第113図15・16の粘版岩剥片をはじめとする粘版岩剥片が5点分布している。周囲には黒曜石石核1点や黒曜石剥片1点が見られる程度で、この区域の粘版岩剥片の集中は注目される。

このように、石器は土器の分布と渾然一体として分布する傾向が強いが、石器の伴わない土器集中区域や、黒曜石製石器を中心とした原石をも保有する土器集中区域、粘版岩剥片を集中的に保有する土器集中区域などがある存在し、それぞれ作業内容の場の存在が推定される。また、原石、石核の集中分布はその場がキャッシュとしての意味合いをもつ可能性を示しており、回帰的な遺跡の利用が考えられる。

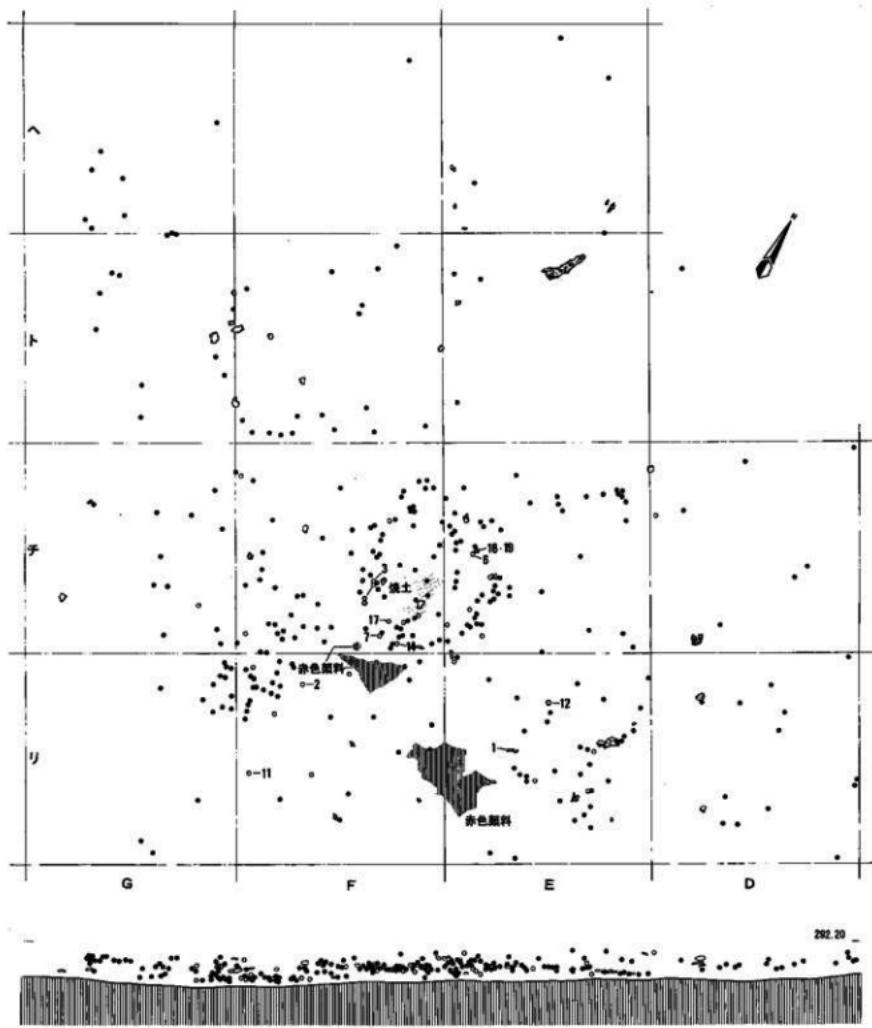
石器組成

石器1点は単独出土であり、黒曜石剥片も石器の素材となるようなものも存在するが石器作りを行なったかはいまひとつ不明確である。むしろ、使用痕ある剥片の存在が示すように、剥片をこの遺跡で行なわれたなんらかの作業に使用したという性格が強いように思われる。挟り入り石器や搔器的あるいは石錐的な使用痕ある剥片、楔形石器と工具としての性格が考えられる石器群である。特にこの遺跡を特長づけるのは楔形石器である。黒曜石製と粘版岩製の2種類の楔形石器がありそれぞれ分布域を異にしている機能の場を違えていることから、違った対象に機能していたことが考えられる。

こうした状況から考えて、生活に必要な道具作りなどを中心的に行なったキャンプ的な遺跡と思われる。黒曜石原石の集中出土が示すように、回帰的な利用が考えられる遺跡と考えられる。

有柄縄の由来

第111図1に示した特長的な石器について、その形態の分布地域を検討したい。第115図は国立歴史民俗博物館の「農耕開始期の石器組成」(1997)から各県の弥生I～III期の石器をひろったものである。これで指摘できる点は、有柄縄の分布地域が北海道から福井、岐阜、愛知のラインまでということと、十五所遺跡と同様な形態の石器は明確なものは福井、岐阜、新潟にみられる点である。おそらく東海地域から北陸にかけての分布域を



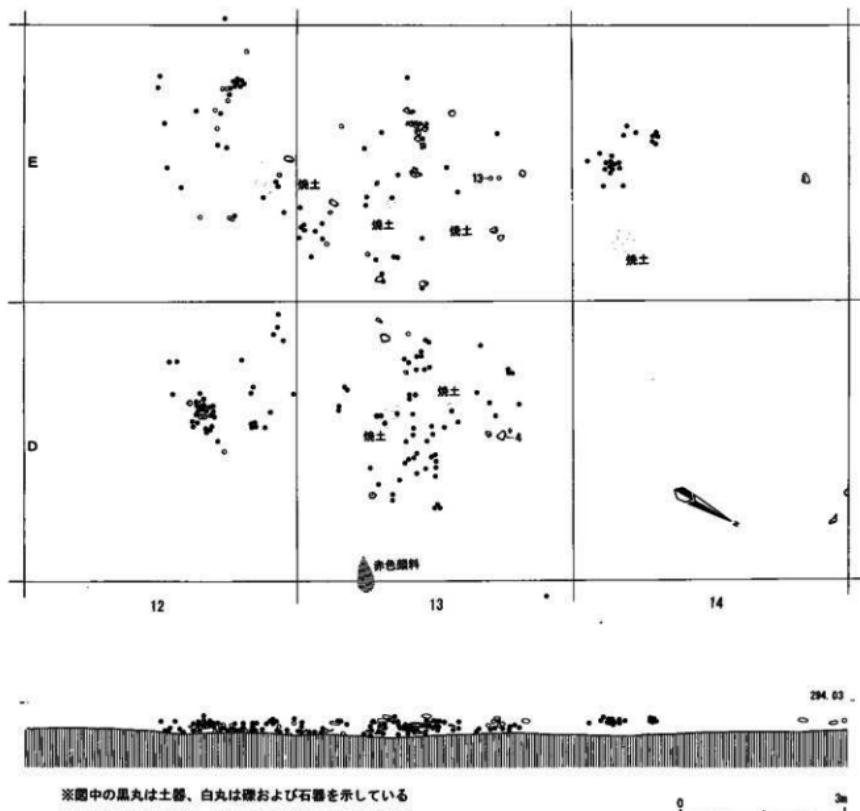
*図中の黒丸は土器、白丸は碟および石器を示している

*図中の番号は第111~114図中の遺物番号を示している

282-29

40

第116図 弥生時代中期の遺物出土状況(1)



※図中の黒丸は土器、白丸は漆および石器を示している

※図中の番号は第111～114図中の遺物番号を示している

第117図 弥生時代中期の遺物出土状況(2)

もつ形態と思われる。このことは、石材が下呂石である点と整合的である。

北日本地域における石錐の有柄錐化については縄文時代前期後半から明確になり、時期を追うごとに多くなり晩期には他を圧倒することが工藤竹久氏によって分析されている(工藤竹久1979「北日本における縄文時代狩獵用具変遷の意義」『考古学ジャーナル』No.170)。この傾向は弥生時代前半までに福井、岐阜、愛知ラインまでおよび、さらに弥生IV・V期では近畿、四国、山陽地域にも及ぶようである。これは、この時期の寒冷化に伴い北の型式の南地域への進出と理解できる。これは、農耕文化の北上とは逆の現象であり、その整合性についての論議が必要である。

なお、凹基錐は弥生時代前半では関東、北陸地域までが分布域で、九州地域は最後まで凹基錐のみの分布地域であった。すなわち、弥生時代においては凹基錐は南の要素と考えることができる。このほか、各地域には複数の形態の石錐を同時にもっているようであり、こうした石錐の形態分布、型式分布の意義付けが問われるところである。

第2節 十五所遺跡の方形周溝墓をめぐる問題点

県内における十五所遺跡方形周溝墓群の位置(第118～120図)

弥生時代から古墳時代にかけて方形(四角形)に溝を巡らせて墓の範囲を確定していく葬法、という観点で方形周溝墓という表現を用いたい。

『方形周溝墓はその変容の中に、在地の伝統的な墓制を取り込んでいる場合が予想される』また『方形周溝墓とそれ以前の墓制とは、従来考えられてきたように周溝墓の波及と同時に入れ替わるのではなく、外来の方形周溝墓のなかにそれぞれの伝統的な墓制を吸収しつつ、独自なものとしていく過程をみることができる。』(黒沢、1996)それ以降も葬法としては伝統差や地域差を多く有しながら推移していったものと予想できる。山梨県内の方形周溝墓の調査例を概観して十五所遺跡の例がどのような箇所に位置づけられるのか考えてみたい。

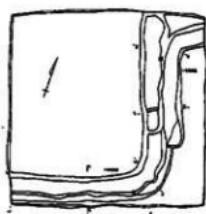
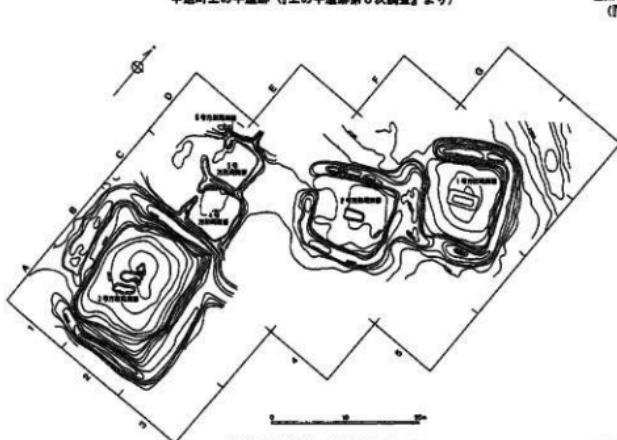
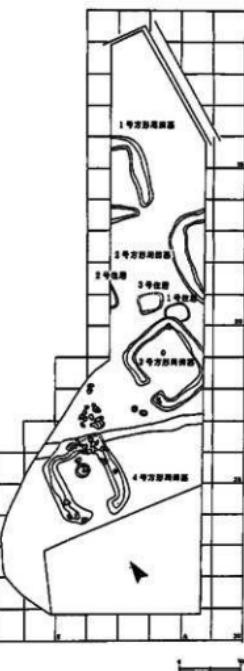
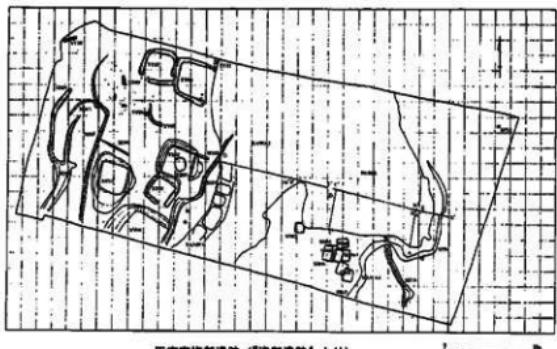
本県で最も古い時期の方形周溝墓が確認されているのは中巨摩郡敷島町金の尾遺跡の例である(末木、1987)。弥生時代中期末から後期前半にかけての集落遺跡で、すでにこの段階から方形周溝墓間の規模で大小の差がかなり明確に現れていることが目を引く。また集落の中で墓域と居住域の分離状態も現れ始め、また一部に墓跡群が形成される様子が看取できるが、全体としては住居跡と墓跡が距離を空けずに配置されている。この金の尾遺跡と同時期の類例は、まだ発見されていない。

この次の弥生時代後期後半に入った段階では、中巨摩郡甲西町住吉遺跡(新津ほか、1981)の例があげられる。報告書では明言を避けて「溝状遺構」と表現されているが、明らかに方形周溝墓であろう。しかし残念なことに調査範囲が狭く、1基のみではその墓跡の集落内における位置関係までは把握できない。

住吉遺跡の次の段階には県内では類例が増加する。韮崎市坂井遺跡(山下、1998)、西八代郡三珠町一条氏館跡遺跡(清水、1988・和田、1993)、東八代郡中道町上の平遺跡(中山、1987a・小林ほか、1991・末木ほか、1994)などがあげられる。坂井遺跡は調査面積が狭いものの、連結した2基の方形周溝墓が確認され、墓跡群の存在を連想させる。更に一条氏館跡遺跡の例になると多数の方形周溝墓が密集して群をなして形成され、所々に墓跡同士の連結・重複を見ることができる。なお全体図を見ると周溝墓と住居跡に多くの重複関係が確認できるが、それら住居跡はほとんど縄文時代のもので、弥生時代の例は1号住居跡のみであり、それも周溝墓との先後関係は不明となっている。これらの周溝墓群に呼応する集団の居住域(住居群)は墓跡群の存在する台地とは別の場所に存在する可能性が指摘されている。

上の平遺跡は本県では最多・最大規模の方形周溝墓群が発見されており、その立地条件、つまり本県における最も古い段階の古墳が数多く存在する地域であることから注目度の高い遺跡となっている。また墓跡間の規模にも大きな格差を生じている点の重要性が指摘されている(中山、1989)。この遺跡では広範囲に調査が実施され、120基以上の方形周溝墓が発見されている。なお遺跡の集落構造についての分析が過去為されている(中山、1987b)が、当時周囲で確認されていた住居跡の数は極めて少ない状況だったため、説得力に欠けるのは仕方のないものであろう。上の平遺跡とその周囲では、今日まで県や地元中道町で数多くの遺跡の発掘調査が実施されてきており、それらの成果を統合する作業が早急に求められる。いずれにしても、その規模や數から見て上の平の方形周溝墓群は複数の集落に連関する「共同墓地」であることは明白である。また遺跡周辺、遺跡周囲にこの「共同墓地」を造営していた幾つかの集落遺跡が存在することも間違いのないものであろう。

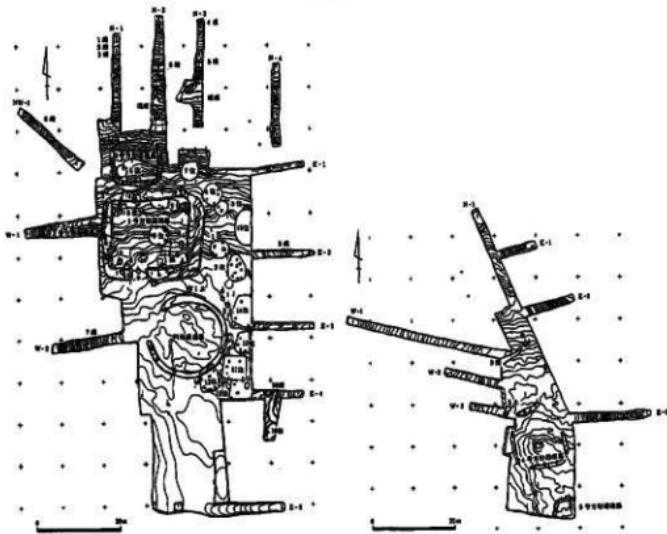
この上の平遺跡の方形周溝墓群造営終了直後に古墳の発生(中道町小平沢古墳あるいは大丸山古墳)を見るわけであるが、古墳時代に入ても方形周溝墓という葬制が県内各地で維持されている。北巨摩郡長坂町北村遺跡(小宮山、1996)、韮崎市坂井南遺跡(山下、1988)、甲府市塙部遺跡(小野ほか、1996)、甲府市櫻田遺跡(高野、1995)、甲府市桜井畠遺跡(中山ほか、1990)、西八代郡三珠町上野遺跡(堀之内、1989)、塩山市西田遺跡(山崎・坂本、1978)、塩山市下西畠遺跡(石神、1997)など数多い。これらの例で気が付く点がある。まず前段階の上の平等などに比べると遺跡における周溝墓の規模も數も縮小している点がある。そしてその割には周溝墓付近に居住空間(住居群)が設定されていない点、確認できない点である。この後者の関係は、古墳と同時期の集落遺跡との関係に似ている。またこれら古墳時代になっても方形周溝墓が残存する地域には、古墳自体がほとんど造営されていない傾向がある。この現象を『古墳を頂点とした階層社会の中に弥生時代以降の系譜的な墓制をある一定の階層に組み込んだもの』(中山、1989)と考えるか、あるいは、古墳を頂点とする権力が及ばぬ地域で(内容が変質しながらも)伝統的葬制を維持していた集団が多く存在していたものなのか、この疑問



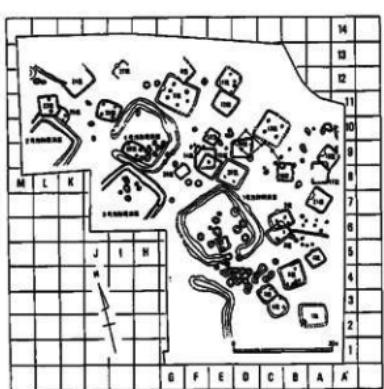
第118図 山梨県内の方形周溝墓(1)



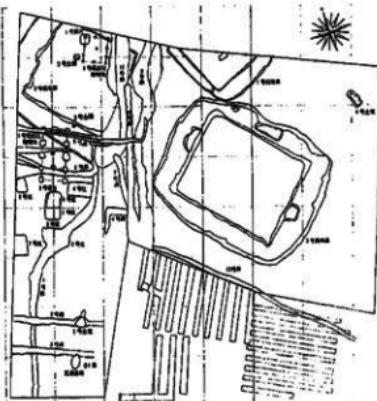
金島町金の尾遺跡（『金の尾遺跡』より）



三郷町上野遺跡（『上野遺跡』より）

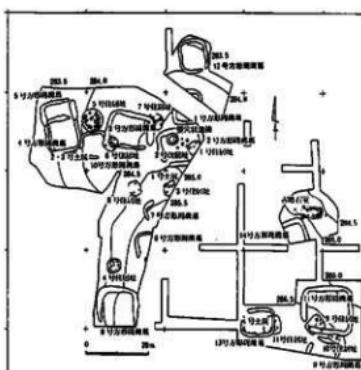
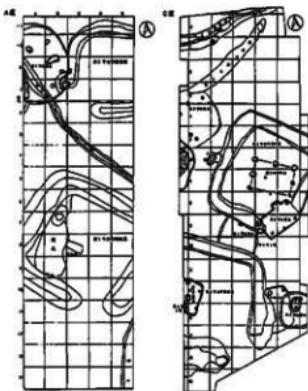


甲府市桜田遺跡（『桜田遺跡』より）

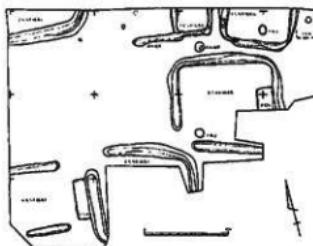
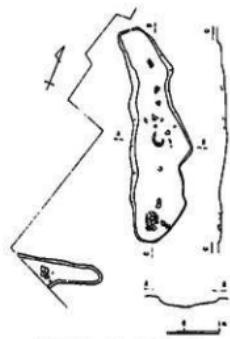
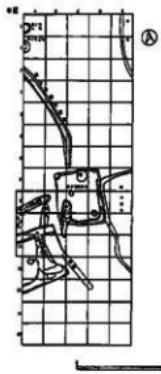


甲府市桜井桜井遺跡A地区（『桜井桜井遺跡A・C地区』より）

第119図 山梨県内の方形周溝墓(2)



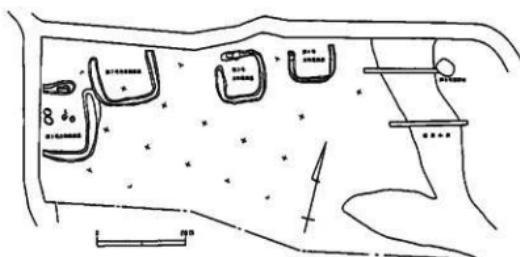
三珠町一条氏館跡遺跡（『一条氏館跡遺跡 第4次調査報告』より）



三珠町一条氏館跡遺跡（『一条氏館跡遺跡』より）

塩山市西田遺跡（『西田遺跡』より）

甲西町住吉遺跡（『住吉遺跡』より）



塩山市坂井南遺跡（『坂井南遺跡』より）

第120図 山梨県内の方形周溝墓(3)

を解くことは極めて難しい課題ではないだろうか。

以上大まかに県内の方形周溝墓の調査例を見てきたが、十五所遺跡は時期的にも内容的にも一条氏館跡遺跡に最も近いものと考える。上の平遺跡も近い関係と思えるが、周溝墓間規模の格差や造営終了時期などの点を見ると、十五所ではさほどの規模の格差が見られないし、造営の終了時期も上の平より若干早いようである。居住域については十五所Ⅲ区ではかなりの数の住居跡(9基)が確認されているが、Ⅰ区では1基のみで周溝墓との関連を論ずるだけの資料は無い。ただし方形周溝墓と重複している住居跡は全て周溝墓の方が造営が新しいという事実が判明している。

I区墓群とⅢ区墓群の意味

従来、方形周溝墓の研究の中で「墓群」とか「墓道」という概念が頻繁に利用されている例が多く見られる。例えば中道町上の平遺跡に関しては「極めて近接したこの地域に少なくとも四つの墓群からなる集団墓が(中略)形成されたことになる。一つの墓群はさらに10基前後の幾つかの単位群によって構成され、墓道などによってあらかじめ区分され、選地された地点に特定の集団が系統的に造営を行っている様相が復元される。特に(中略)遺跡東側のA墓群は(中略)一列ないし二列に連なる単位群が、推定される墓道に沿って整然と配置されている。」(中山、1989)というように表現される。しかし「墓道」があることによって「墓群」ができたのか、「墓群」が形成された結果「墓道」なるものが出来上がったのか、という問題もさることながら、多くの遺跡での例を見ると、主として方形周溝墓群の平面的観察によってのみ「群」や「道」が想定されている場合が多い。これはかなり主観的な想定であり、他の人間が観察すれば別の結果が出たり、あるいはもとより群分けなど不可能ではないか、と思われるものも存在する。より多くの人間が納得できる、平面的な観察は勿論それ以外のより多くの要素を求めるながら群分けをしなければ「群」の存在を実感できない。そう考えるのは筆者だけだろうか。

十五所遺跡では、幅約50m前後という制約された調査範囲ではあったものの、僅かではあるがこの疑問に答える調査結果を得ることができた。平面的観察からすれば、確かにⅣ区という無遺構区域を挟んでⅠ区とⅢ区というほぼ同時期の二つの「墓群」が識別できる。これを単に「単位集団」あるいは「集落」や「家族」あるいは「世帯」の違いと解釈することは容易だが、具体的にどのような差異が存在しているのだろうか。

次ページの表は十五所遺跡で検出された18基の方形周溝墓の一覧表である。一覧の内容は、方形周溝墓の規模、ブリッジの位置、溝の断面形の差、供獻土器と思われる土器の数、溝の重複・共有の有無等について記してある。これを見るとⅠ区とⅢ区の二つの群は多くの点で差異を示していることが明瞭である。まず最も顕著に差が出ている点が三点ある。

①Ⅰ区ではブリッジの方位に統一性が無いが、Ⅲ区では確認されたものは全てが南東隅である。

②Ⅰ区の周溝墓の溝断面形は全てU字形であるのに対してⅢ区のものはV字形を基本としてU字形も混在している。

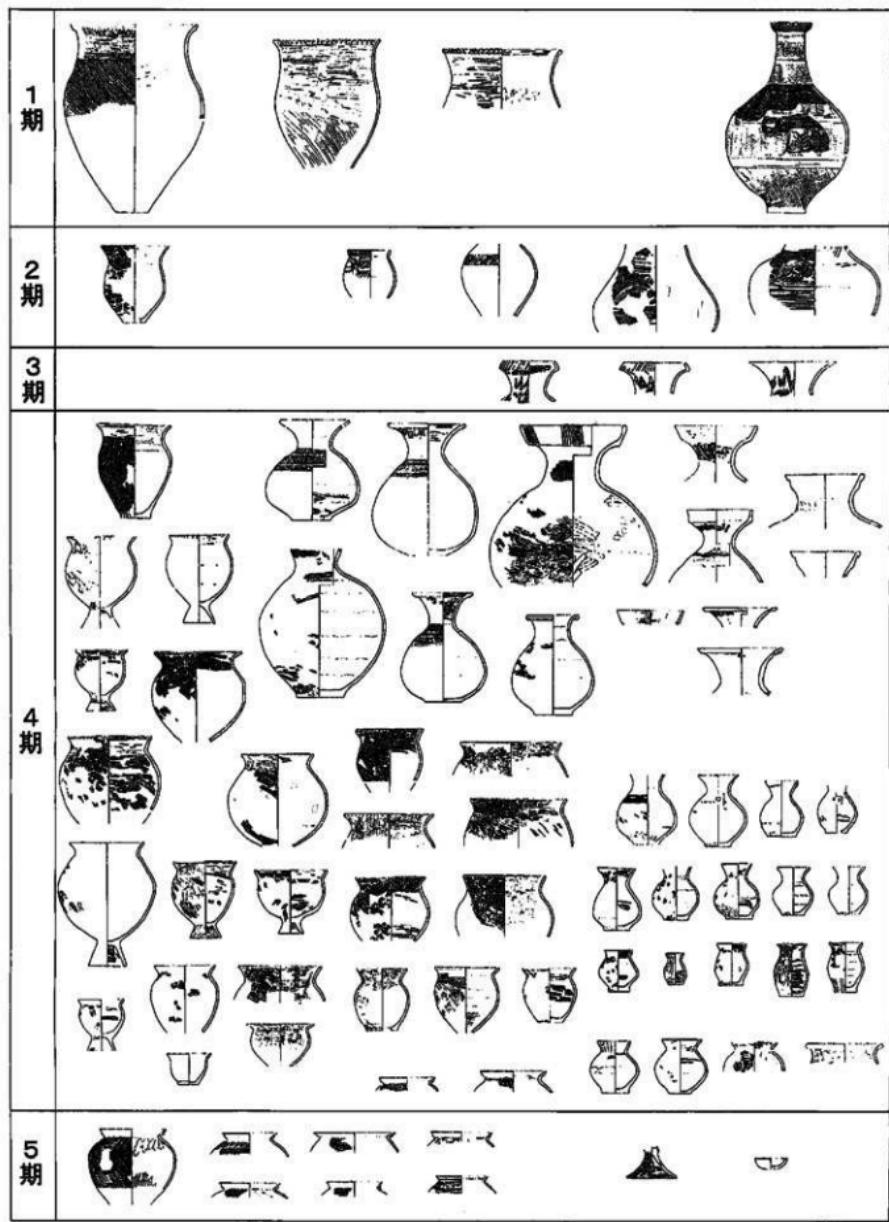
③Ⅰ区では周溝墓同士が他の周溝墓をギリギリ避けて造営されている。つまりそれぞれが孤立して造営されている。それに対しⅢ区では、溝を共有し合ったり、重複し合ったりで連結している。つまり完全に孤立している周溝墓は存在しない。

これら以外にも周溝墓から出土している供獻土器と思われる土器の量が、Ⅰ区の方がⅢ区より圧倒的に多いことが上げられる。Ⅰ区の1号～3号墓は土器は無いが、上部が既にかなり削平されており、それが出土土器の量にも影響しているかもしれない。また僅かな差であるがⅠ区の平均規模が東西×南北・12.4m×12.6mであるのに対し、Ⅲ区は14.9m×12.9mで、平面観察でも全体的にⅢ区の墓跡の方がⅠ区よりやや大きめである。

Ⅰ区とⅢ区はそれぞれの群の中で更に近接して造営されているグループが存在しているようであるが、この墓群全体を観察できない状況でそのような分析をしても無意味であろう。それよりも重要なことは、この二つの群の差は、墓の造営方法の規範の差、葬送儀礼の差を示しているものと考えられることにある。これは周溝墓群の規模から考えても「家族・世帯」の差というより「単位集団・集落」の差と考えるのが妥当であろう。異なる墓の造営方法と葬送儀礼を有する複数の集団が近接して墓地を造営している状況が後にどのような経緯を経て物見塚古墳(松浦ほか、1983)や東丹保Ⅳ区古墳(保坂、1995)を生み出していくのか考えていくことが今後の重要な課題となるだろう。

調査区	墓No.	規模(外側) 東西×南北(m)	ブリッジ	溝断面		供獻土器の数 (一括土器)	溝重複 及び 溝共有	備考
				V	U			
I	1	X11.7			○			
	2	10.1×10.3	南東隅		○			
	3	X10.5			○			墳丘有
	4	11.0×10.1	北東隅		○	●		墳丘有
	5	11.1×10.9	南東隅		○	●●●●●●		
	6	16.6×17.4	北東隅		○	●●●●●●●●		
	7	X14.5			○	●●●●●		
	8	12.9×15.0			○	●●●●●●●●		
	9	12.8×13.2	北西隅		○	●●●●●●●		3号住
II	10	14.9×15.7	南東隅	○	○	●●●●●	○	15号住・主体部
	11	15.0×13.1	南東隅	○			○	13号住・14号住
	12	12.2×11.7	南東隅	○	○		○	
	13	18.2×18.5	南東隅	○	○		○	
	14	16.8×15.2	南東隅	○	○		○	
	15	15.0×13.0	南東隅	○	○	●	○	
	16	X13.5	南東隅	○	○		○	
	17	12.0×11.4	南東隅	○	○		○	
	18	X		○		●	○	

十五所遺跡方形周溝墓一覧表



第121図 十五所遺跡土器変換図(弥生～古墳)

10号方形周溝墓主体部について(第62図)

十五所遺跡の方形周溝墓の中で唯一主体部と考えられる遺構が10号墓から発見された。それも遺体を葬った豎穴の周囲に柱穴と思われる方形の小豎穴を等間隔に設置しているものである。主体部の周囲に等間隔に配置された6基の方形の柱穴には柱痕は見られない。6基の中で南東隅の豎穴は方形と長方形の二つの豎穴が重複した状態である。また主体部の東側に円形の小豎穴が1基、主体部より南東にやや離れた場所に2基の方形小豎穴が見られる。いずれも柱痕は無い。

主体部の覆土下層には焼土粒子や炭が多く含まれ、主体部壁面は一部焼けて焼土が形成されている。また主体部の西端の底面には広い範囲で板状の木炭が見られる。主体部の豎穴は周溝墓の中心からやや南西に片寄っているものの、主軸が周溝墓と一致している点や出土している土器片が周溝墓と同時期である点から考えて、周溝墓に伴うものと考えて間違いないであろう。主体部周囲の6基の小豎穴は主体部を覆う何らかの施設に附随したものと考える。上屋が存在したのか、単に布状のもので周囲を囲んだのか、判断する材料は無い。ただ言えることは、主体部で何らかの木材等を燃焼させて燃え尽きる前に土で埋めた。その結果炭化物が形成されたのである。自然科学分析の結果では木材は木棺というよりも敷物であった可能性が指摘されている。特定の集団の特異な葬送儀礼を示していることは確かであるが、全国的にも他に類例が全く存在しないために、とくに今後の十五所遺跡周辺での他の周溝墓の調査結果に期待したい。

出土土器について(第121図)

十五所遺跡の方形周溝墓から出土した土器は、概ね本県で弥生時代後半のものと考えられている一群である(中山、1993)。更に時期を限定すれば、弥生時代終末と表現してよいものであろう。畿内編年でいえば庄内式(古)段階とほぼ一致する時期と思われる。一部の周溝墓でS字状口縁の變形土器片を出土している墓跡が存在している(1号墓等)が、これは先にも記したように、方形周溝墓の確認面より上面にS字状口縁土器を包含する黒色土層が存在し、この層が埋まりきっていない周溝墓の溝に落ち込んで、発掘時に取りあげられたものである。純然と墓跡と伴う時期のものとして確認されたS字状口縁の土器は皆無である。

十五所遺跡の方形周溝墓から出土している土器群は、全体としてその量が極めて少ない。I区の墓群はまだ良い状況であるが、III区の墓群からはほとんど出土していない。その少ない土器群の中でも、比較的古い段階のものと思われる結節繩文を伴う壺形土器を出土しているのが9号墓と15号墓であり、これらの墓跡は土器から見て本遺跡の中では古い段階の墓跡と考えてよいものであろう。しかし確認されている合計18基の墓跡の時期差を土器の上から考えていくことは極めて難しいことである。I区とIII区の両墓群は、大局的には極めて限られた時間内(一世紀未満)に、ほぼ同時に造営されていたものと考える。

出土土器は少ないので、十五所遺跡の方形周溝墓出土土器の中で際だっている例が幾つかある。ひとつは口唇部に刻みを付けられた變形土器群である。それらには完全な形のものもあれば、残った部分から形状を推測できるものが多く、ほとんどが台付壺である。6号墓から唯一完全な形で台の付かない例が発見されているが、形状が少々特異で他の台付壺の体部の形状とは様相を異なる。またこれら刻みの付いた台付壺と対峙するように単純口縁で口唇に刻みを有しない台付變形土器も相当数出土している。

もう一つの際だった例は、高さ15cm前後の小型壺形土器である。これらは出土するときは必ず複数個発見されており、最も多いのは8号墓の6個(完形あるいは括土器以外も含め)である。やはり何らかの葬送儀礼に用いられたものであろうが、同一製作者と積極的に判断できる例は無い(中山、1993)。口縁はほとんど単純口縁であるが、一例だけ遺構外から複合口縁のものが発見されている(第96図58)。また墓跡から出土したものボタン状貼付文や繩文が施されている例は存在しない。

十五所遺跡出土の弥生時代から古墳時代にかけての土器群についてその時期的変遷を示したものが第121図である。1期と2期は前節で触れているような石器製作址が存在した弥生時代中期に属する時期である。葬送に関した遺構は全く発見されていない。3期は信州伊那谷方面から流入したと思われる弥生後期の「中島式土器」をあてた。十五所遺跡の方形周溝墓造営の時間枠は、おおよそ次の4期のみに集約するものであろう。5期では住居跡が確認されている。

【引用参考文献】

- ・石神孝子1997「下西畠遺跡」『山梨県埋蔵文化財センター年報14』山梨県埋蔵文化財センター
- ・伊藤正彦1997「韋崎市の弥生時代後期から古墳時代前期の様相—坂井南遺跡を中心として」『山梨県考古学協会誌』第8号山梨県考古学協会
- ・小野正文ほか1996「塩部遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第123集
- ・黒沢浩1996「第一章 弥生墓制の中の方形周溝墓」山岸良二編『関東の方形周溝墓』同成社
- ・小林広和ほか1991「上の平遺跡—第1・2・3次調査」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第59集
- ・小林正春1996「弥生時代中部山岳—中島式土器」「日本土器事典」雄山閣出版株式会社
- ・小宮山隆1996「北村遺跡」長坂町教育委員会
- ・清水博1988「一条氏館跡遺跡」三珠町教育委員会
- ・末木健1987「金の尾遺跡・無名塚(きつね塚)」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集
- ・末木健ほか1993「東山北遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第79集
- ・末木健ほか1994「上の平遺跡—第6次調査ほか」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第94集
- ・関根孝夫ほか1985「六科丘遺跡」櫛形町教育委員会
- ・高野玄明1995「櫻田遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第105集
- ・中山誠二1987a「上の平遺跡—第4・5次調査」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第29集
- ・中山誠二1987b「弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造」「研究紀要4」山梨県埋蔵文化財センター
- ・中山誠二1989「中部・関東地方の弥生集団墓の構成について」『山梨考古学論集Ⅱ』山梨県考古学協会
- ・中山誠二ほか1990「桜井畠遺跡A・C地区」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第54集
- ・中山誠二1993「甲斐弥生土器編年の現状と課題—時間軸の設定」「研究紀要9」山梨県埋蔵文化財センター
- ・新津健ほか1981「住吉遺跡」甲西町教育委員会
- ・保坂和博1995「大師東丹保遺跡2」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第102集
- ・堀ノ内泉1989「上野遺跡」三珠町教育委員会
- ・松浦有一郎ほか1983「物見塚」櫛形町教育委員会
- ・山崎金夫・坂本美夫1978「西田遺跡—第1次発掘調査報告書」山梨県教育委員会
- ・山下孝司1988「坂井南遺跡」韋崎市教育委員会
- ・山下孝司1998「坂井遺跡」韋崎市教育委員会
- ・和田豊1993「一条氏館跡遺跡—第4次調査報告」三珠町教育委員会

付編 自然科学分析

第1節 10号方形周溝墓における木材同定・土壤分析・リン分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

十五所遺跡は、御動使川扇状地の扇端部付近に位置し、発掘調査により弥生時代後期の方形周溝墓群や古墳時代前期の住居跡等が検出されている(米田・大庭, 1996)。検出された方形周溝墓のうち、10号方形周溝墓では、主体部の周囲に6つの四角い柱穴が確認され、遺体を仮に安置する施設の上屋を設置するための柱穴と考えられている。主体部は、底や壁の土が焼けており、棺の一部もしくは敷物と考えられる炭化材が認められる。また、柱穴内の土壤には、肉眼で材片を見ることはできないが、当社の経験によれば、花粉分析法で処理したプレパラート中に微細な木片として残存していることがある。このような木片が針葉樹材であれば、その組織の特徴から粋目面や板目面が顕微鏡下で観察するために、種類を明らかにすることができます。

本報告では、10号方形周溝墓から出土した木材が全て炭化しているか否かを観察するとともに、その樹種を明らかにする。また、主体部の各地点から採取された土壤試料のリン分析を行い、遺体埋納の可能性について検討する。さらに、柱穴内の土壤中について花粉分析法を応用した分析を行い、木片があるか否かを確認し、確認できた場合にはその種類を同定する。

1. 出土した木材の樹種

(1) 試料

試料は、主体部から出土した木材16点(I~X)である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

木口(横断面)・粋目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

木材は、全て炭化材であった。樹種同定結果を表1に示す。試料の中には、保存状態が良好でないために同定に至らなかったものがあった。これらの試料については、観察できた範囲で木材組織の特徴などを記し、組織が全く観察できなかった場合には不明とした。その他の炭化材は、針葉樹1種類(カヤ)、広葉樹2種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・ヤマグワ)と草本類に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・カヤ(*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたせん肥厚が認められる。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。

・ヤマグワ(*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圈部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

(4) 考察

木材は全て炭化していることから、何らかの原因により不完全燃焼したことは明らかである。主体部の床面

や壁が焼けていることから、主体部で焼かれた可能性がある。

木材には針葉樹1種類と広葉樹2種類が認められた。木材は、その出土状況から木棺または敷物と考えられ

試料名	用途など	樹種	備考
I	木棺または敷物	カヤ	
J	木棺または敷物	不明	
K	木棺または敷物	カヤ	
L	木棺または敷物	ヤマグワ	
M	木棺または敷物	カヤ	
N	木棺または敷物	不明	
O	木棺または敷物	ヤマグワ	
P	木棺または敷物	ヤマグワ	
Q	木棺または敷物	広葉樹（環孔材）	
R	木棺または敷物	ヤマグワ	
S	木棺または敷物	草本類	
T	木棺または敷物	カヤ	
U	木棺または敷物	カヤコナラ属コナラ亜属クヌギ節	Xと同一部材？
V	木棺または敷物	ヤマグワ	
W	木棺または敷物	カヤ	
X	木棺または敷物	カヤコナラ属コナラ亜属クヌギ節	Uと同一部材？

表1 樹種同定結果

ている。これまで古墳から出土した木棺については、畿内を中心に樹種が明らかにされている（島地・伊東、1988；伊東、1991）。その結果を見ると、針葉樹が使用されることが多い。針葉樹の中ではコウヤマキが最も多く、他にヒノキ・モミ・スギ等が使用されている。一方広葉樹では、クスノキが比較的よく利用されている。山梨県では、これまでに木棺の樹種を明らかにした例がほとんどないが、周辺の静岡県や栃木県の事例ではヒノキやクスノキが使用されている。今回の結果では、カヤが針葉樹という点では木棺の用材選択と傾向が類似する。しかし、一つの木棺が複数の樹種で構成される場合、底板と側板などのように、部材によって種類が異なることはある（島地ほか、1987）、一つの部材が3種類で構成される例はほとんどない。また、板材の木取りは、長辺方向が軸方向となることが多い。これらのこと考慮すると、今回の試料は短辺方向が軸方向になっている点や、部材が複数種類で構成される点で、これまでの事例とは異なっている。このことから、試料は木棺よりも敷物の可能性が高い。

2. 柱穴内覆土の分析

(1) 試料

試料は、南北それぞれ1列3本、合計6つある柱穴の内、南列中央の柱穴から採取された土壤試料1点(E)である。

(2) 方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、重液(臭化亜鉛：比重2.2)による有機物の分離を行い、微細植物遺体を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下で種類を同定する。

(3) 結果

プレパラート中には、木片と考えられる微細植物片が多数認められる他、花粉・胞子・菌類・植物珪酸体なども認められる。木片は、組織を観察できるものが少ないので、針葉樹の仮道管が確認できた。仮道管内壁には、いずれも対をなしたらん肥厚が認められることから、この針葉樹はカヤと考えられる。

(4) 考察

試料中で、木材組織を確認できたのはカヤのみであった。今回の柱穴は四角形であるが、一般に針葉樹材は仮道管を主とする単純な構造であるため、広葉樹材に比較すると角材への加工が容易である。また、カヤは主

体部から出土した木材にも確認でき、埋葬に利用されていたことが明らかである。これらの点を考慮すると、少なくとも柱の1本にカヤが利用されていた可能性がある。しかし、試料中には木材以外の植物化石も認められることから、埋積過程でカヤの微細な木片が混入した可能性も否定できない。

3. 主体部のリン分析

(1) 試料

試料は、主体部床面および覆土などから採取された土壤試料9点(A~D,F~H,Y,主体部サンプル)である。各試料の詳細は、分析結果と共に表2に記した。

(2) 方法

土壤標準分析・測定法委員会(1986)、土壤養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部農芸化学教室(1957)を参考に以下の操作工程を行った。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量(P₂O₅mg/g)を求める。

(3) 結果

分析結果を表2に示す。リン酸含量は、遺構確認面の試料が0.72mg/gで最も低い。一方、主体部では0.88~1.02mg/gの値が得られた。また、主体部底面よりも下位の土壤試料では、1.10mg/gの値が得られた。

試料	採取位置	土性	土色	P ₂ O ₅ (mg/g)
A	主体部底面	LIC	10YR4/2	0.94
B	主体部底面	LIC	10YR4/2	0.90
C	主体部底面	LIC	10YR4/2	0.88
D	遺構確認面	LIC	10YR4/2	0.72
F	主体部覆土(上層)	LIC	10YR4/2	0.96
G	主体部覆土(下層)	LIC	10YR4/2	0.96
H	焼土分布範囲	HC	10YR4/2	1.02
Y	主体部底部より下部5cm	HC	10YR4/2	1.10
主体部サンプル	不明	LIC	10YR4/2	0.96

注. (1) リン酸、カルシウムの単位は、ともに乾土1gあたりのmgで表示。

(2) 土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖

(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(3) 土性の判定は、土壤調査ハンドブック記載の野外土性の判定法

(ペドロジスト懇談改編、1984)による。

LIC: 軽塙土、HC: 塙土

表2 リン分析結果

(4) 考察

リン分析の結果は、最大値でも1.10mg/gであった。土壤に通常含有されるリン含量、いわゆる天然賦存量の調査結果(川崎ほか、1991; 天野ほか、1991)によれば、高く見積もっても3.0P₂O₅mg/g以下と考えられる。このことを考慮すると、今回の分析結果からは、リン酸の富化を積極的に支持することはできない。しかし、遺構確認面で採取した試料Dが0.72mg/gで、他の試料と比較してもとくに低い値を示していることを考慮すると、主体部のリン酸含量が何らかの要因で富化している可能性がある。主体部底部より下位でも1.00mg/gを越える値が出ていることについても、水分などと共にリン酸が下位に流亡したことを示している可能性がある。今回の方形周溝墓では、主体部に火を受けた痕跡があることから、遺体を焼いている可能性がある。遺体を焼いたことで、リン酸がより流亡しやすくなった可能性もある。しかし、遺体を焼いた場合と焼かない場合とで、埋積後のリン酸の挙動がどのように異なるか、現時点では詳細が明らかではない。今後さら

に研究を行うべき課題の一つといえよう。

＜引用文献＞

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信(1991)中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- 土壤標準分析・測定法委員会編(1986)土壤標準分析・測定法. 354p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編(1981)土壤養分分析法. 440p., 養賢堂.
- 伊東隆夫(1991)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ. 木材研究・資料, 26, p.91-189.
- 川崎 弘・吉田 淳・井上恒久(1991)九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省 農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p.: p.23-27.
- 京都大学農学部農芸化学教室編(1957)農芸化学実験書 第1巻. 411p., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会(1984)野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p., : p.39-40, 博友社.
- 島地 謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧. 296p., 雄山閣.
- 島地 謙・林 昭三・伊東隆夫(1987)鬼虎川遺跡より出土した棺材の樹種. 「鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告」, p.45-48. 財団法人東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会.
- 米田明訓・大庭 勝(1996)山梨県埋蔵文化財センター調査報告第113集 十五所遺跡Ⅰ 一般国道52号(甲西道路)改築工事・中部横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化材発掘調査概報. 山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京第二建設局.

第2節 十五所遺跡出土の赤色物質について

帝京大学山梨文化財研究所 鈴木 稔

1. はじめに

櫛形町十五所遺跡から赤色物質が塗布された土器が発見され、また、その付近に赤色物質が散布されたと見られる跡が數ヵ所発見された。それらの赤色物質を分析する機会が得られたので報告する。試料としたのはそれぞれ異なる5地点から採取された赤色物質を含んだ土5袋(各1kg前後)と赤彩された土器の一部である2個の破片(同一個体に属する)である。なお、機器使用に当たっての東京芸術大学保存科学研究室の御好意に感謝する。

2. 分析と結果

土の袋にはあらかじめA～Eの名称が付けられていたのでこれによって区別することとした(ただし、電顕写真には別のラベルを用いている)。それぞれの袋から赤色物質となるべく多く含むと思われる塊を10g前後採り、蒸発皿に入れて1週間ほど自然乾燥したあと、実体顕微鏡下で観察したところ、それぞれの皿の底に1mm程度の大きさで、断面が鮮やかな赤色を呈する粒がいくつか見られた(Dでは褐色でまとまりの悪い粒であった)。これをピンセットで取り上げ、両面テープ上に分散・固定し、金属顕微鏡を使って落射光と透過光の組合せ照明により観察した。その結果、倍率500倍でBとCに「パイプ状ベンガラ」等と呼ばれる特徴的な形態の粒子が見つかった(写真1、2はC)。長さ約10μm、直径約1μm。この他、AとEには赤色微粒子が見られ、Dでは砂粒に赤色粒子が付着しているのが認められた。

確認のため低真空タイプ走査型電子顕微鏡(日立製S-2460N型)およびこれに装備したエネルギー分散型元素分析装置(KEVEX社製DELTA PLUS型)を用いて観察した(電顕試料は光顕用と別に作成したが、蒸着はしていない)ところ、Bにパイプ状粒子が確認でき(写真3)、定性分析の結果はA～E全てにつき、鉄の強いピーク以外にケイ素、アルミニウム、カルシウム等を検出したが、水銀は検出しなかった(図1はCの定性分析結

果)ので、今回の土に見られた赤色物質は酸化鉄(主として酸化鉄(Ⅲ)、鉱物としては赤鉄鉱、いわゆるベンガラ)であると考えられる。なお、分析条件は以下の通り。加速電圧15kV、真空中度30Pa、作動距離26mm、有効時間200秒。

一方、2片の土器については実体鏡下で比較的赤色の濃い部位を各2カ所選び、測定点とした。金属顕微鏡の落射光観察で「パイプ状粒子」らしきものが見えたが、被写界深度の制約で写真撮影が困難だったので、電子顕微鏡(上記と同一条件)により観察と分析を行なった。その結果、4カ所全てで「パイプ状粒子」が確認され、その形状は土B・Cに見られたよりはやや長いものが交じるが、太さはほぼ同じであった(写真4~7)。定性分析結果も土の場合とよく似たものであった。

3.まとめ

今回、遺跡の地表面に散布されたと見られる赤色物質中に、土器に塗られた赤色物質と類似する「パイプ状ベンガラ」が見つかったことは興味深い問題を提起している。土器塗布物と散布物の同一性判定やA~Eの試料を精査して散布総量や「パイプ状ベンガラ」と微粒子の酸化鉄との組成比等を求めることが課題となる。

遺跡出土の酸化鉄系赤色物質については赤鉄鉱ばかりでなく褐鉄鉱も含めていくつもの母材が想定されるようになってきた。今後は、各種の母材選定、粉碎・焼成・水築等の製法、塗布・練り込みの技法や貯蔵法等、より具体的かつ社会的な研究が指向されるものと期待される。しかし、酸化鉄系赤色物質は土中にごくありふれたものであるうえ、顔料として精製されたものでも不均一性を持つため分析結果にはばらつきがでやすく、特に量的方面からの考察にはまだ多くの問題点を残している。そこで光学顕微鏡で比較的容易に確認できる「パイプ状ベンガラ」を指標として用いることで、遺跡内の土器付着例、地表や墳墓での散布例、容器内の貯蔵例等を系統的に調べるという手法があり得るのではないだろうか。その点、本遺跡の事例は恰好の研究対象となると思われる。

【参考文献】 上條朝宏(1997)「赤色顔料の研究(その1)ー母材に含まれるパイプ状物質についてー」『東京都埋蔵文化財センター研究論集X VI』
本田光子・永嶋正春ほか(1997)『保存科学研究集会1997研究発表要旨集』奈良国立文化財研究所

第3節 十五所遺跡出土の黒曜石産地推定報告

沼津工業高等専門学校物質工学科 望月 明彦

黒曜石産地推定法について

黒曜石の分析法として今回用いたのはエネルギー分散蛍光X線分析法である。この分析法の大きな特徴は次の2点である。ひとつは試料を破壊せずに分析できることである。試料をまったく損傷せずに測定が可能なので、考古学的に貴重な試料であっても安全に分析できることになる。二つ目の大きな特徴は測定に時間がかかることである。非破壊分析であることから、試料の前処理も洗浄を必要とするだけであるので、短時間で多くの試料を分析することができる。測定のためのコストも低いことと合わせて、遺跡から出土する膨大な黒曜石製石器の測定のためには非常に有利な分析法といえよう。

蛍光X線分析法の簡単な原理を述べよう。試料にX線(1次X線という)を照射すると、試料に含まれる元素ごとに違った波長(エネルギー)をもつX線(2次X線、蛍光X線)が発生する。発生した蛍光X線の波長(エネルギー)から含まれている元素の種類がわかり、それぞれの元素の蛍光X線強度から元素組成を知ることができる。

分析に用いた装置はセイコー電子工業社製エネルギー分散蛍光X線装置SEA-2001で、X線管ターゲットはロジウム、検出器はLi(Si)半導体検出器である。測定条件を次に示す。

電圧: 50kV

電 流: 2-30 μA

照 射 径: 10mm, 3mm

測定時間: 産地試料 500sec

遺跡出土試料 300sec

雰 囲 気: 真空

分析された元素は以下の通りである。

アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジリコニウム(Zr)

(産地推定法)

蛍光X線分析で得られるデータを用いた産地推定の方法は、分析者によって異なった方法が用いられている。推定のために用いる元素の選択の違い、蛍光X線強度を用いるか、強度から得られる元素濃度(%)を用いるかの違い、得られたデータを解析するための手法の違いなどから方法が異なってくる。

いずれの方法を用いても産地推定が可能だと考えられるが、多変量解析を用いる方法は分かりやすさという点で問題があり、種々の検討を行った結果、以下に述べる判別図法による産地推定法を開発した。

①判別図法(図による産地推定)

図に示したのが測定の結果得られる蛍光X線スペクトル図の一例である。産地推定に用いる生データは、K、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zrの7元素の蛍光X線強度である。

各元素の蛍光X線強度から次のような産地推定のための指標を計算する。

A = (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)とした時、

$$Rb\text{分率} = Rb\text{強度} \times 100 / A$$

$$Sr\text{分率} = Sr\text{強度} \times 100 / A$$

$$Zr\text{分率} = Zr\text{強度} \times 100 / A$$

$$Mn\text{強度} \times 100 / Fe\text{強度}$$

$$\log(Fe\text{強度} / K\text{強度})$$

判別図法ではZr分率を除く指標をプロットしてグラフ化する。図1-1と図1-2は中部・関東地方の黒耀石産地原石のプロットである。図1-1は横軸にRb分率、縦軸にMn強度×100/Fe強度をプロットしたものである。この図から、和田エリア、諫訪エリア、蓼科エリア、神津島エリアの産地の判別が明確である。図1-2は図1-1で不明瞭であった天城エリア、箱根エリアと高原山エリアの産地判別を行うための図である。横軸にSr分率、縦軸にlog(Fe強度/K強度)をプロットしてある。この図から箱根は畠宿群、鍛冶屋群、上多賀群、黒岩橋群、芦ノ湯群の5群に細分される。天城柏崎群は図1-1で高原山七尋沢群と図1-2で高原山甘湯沢群と重複するが、図1-1で高原山甘湯沢群、図1-2で高原山七尋沢群が明瞭に判別できることから、図1-1、図1-2の両方を用いることにより天城柏崎群、高原山甘湯沢群、高原山七尋沢群の3つの群は判別が可能となる。

遺跡出土試料について蛍光X線分析を行い、産地原石と同様のプロットを行って比較することで産地推定を行う。

実際の産地推定の過程では、パソコンのディスプレイ上に原石のプロットを赤色で示しておき、遺跡出土試料の入力済みのデータを緑で示しておく。そして今入力したばかりの遺跡出土試料のプロットを黄色で示して、そのプロットの位置に相当する産地群を読み取って、その試料の産地推定を行っている。

ここで、上記の蛍光X線強度を指標に用いる理由と長所について述べよう。

黒耀石産地を分類することの目的はあくまでも遺跡から出土した黒耀石の産地推定をすることである。いくら産地原石を正確に分類できる方法であっても、遺跡出土試料の産地推定に適用できなければ無意味である。

では、産地原石と遺跡出土試料の違いは何であろうか。産地原石は分析に適するように手を加えることができるのに対して、蛍光X線分析の最大の特徴を生かすためには、遺跡出土試料はそのまま分析しなければならない事である。汚れは洗浄によって取り除けるが、いろいろな形、厚みのまま、また、風化していてもそのまま分析しなければならない。

蛍光X線強度からファンダメンタル・パラメーター法(FP法)と呼ばれる計算方法でそれぞれの元素濃度を求

め、それらを産地推定に用いる事、グラフにした時の分散が強度比を用いた時よりも大きくなってしまう。その理由は遺跡出土試料の形状や、厚みによってFP法による結果が影響されるからである。

また、試料の厚みが薄いと軽元素(図の左側の元素)であるほど強度が大きく、重元素(図の右側の元素)であるほど強度が小さくなってしまう。その結果、FP法によって算出される元素濃度は軽元素が大きく、重元素が小さくなってしまう。しかし、指標として、図で近い位置にある(似たエネルギーを持つ)元素同士の蛍光X線強度比をとると、厚みによる影響が類似している事から強度比の変化は小さい。判別図法で用いた指標は(Rb, Sr, Y, Zr)、(Mn, Fe)、(K, Fe)の組み合わせで、離れたエネルギーの元素の強度は使用していないので、厚みによる影響は小さいと考えられる。

遺跡出土試料を測定する上でのもう一つ大きな問題は、経年変化による風化(主として水和層の形成)である。水和層による蛍光X線強度の変化は軽元素の方が重元素より大きい。ここで指標として用いる元素の中では、カリウムが影響を受けるが、Mn, Feへの影響は小さく、Rb, Sr, Y, Zrはほとんど影響を受けない。

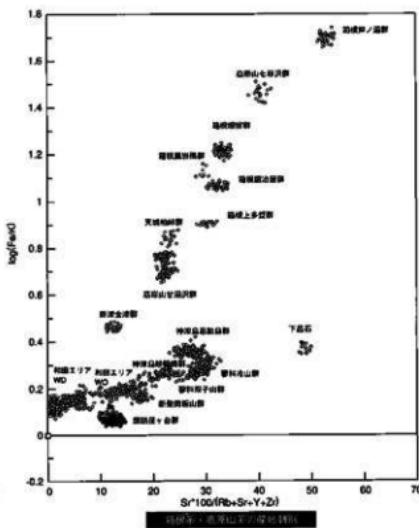
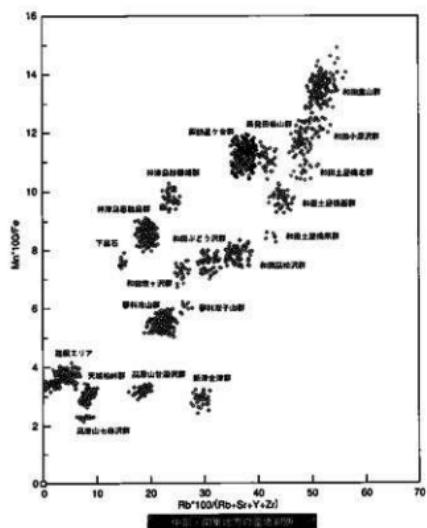
以上のように判別図法は、遺跡出土黒耀石の産地推定において形状、厚み、風化の影響を受けにくく、非常に信頼性の高い産地推定法であるといえよう。

②判別分析(多変量解析による产地推定)

判別回帰法による離地推定結果と比較するために、多変量解析の一手法である判別分析を行っている。

判別図法による産地推定結果を比較するため、ダブレット法による結果と併せて示す。判別図法では、試料の産地を推定する時は、遺跡出土試料のプロットと最も近い所にプロットされる産地をその試料の産地と判別する。言い換えれば、試料と各産地群の中心との距離を比較して、その距離がもっとも短い産地をその試料の産地としている。判別図法の場合には、縦軸と横軸だけの2次元であるが、数学的には3次元以上でも距離を計算することが可能である。判別分析では遺跡出土の各試料毎に各産地との距離(マハラノビス距離と呼ばれる)を計算する。試料との距離がもっとも小さい産地がその試料の産地である、と推定される。また、それぞれの産地とのマハラノビス距離から、試料が各産地に属する確率も計算される。確率が1に近いほど信頼性が高い推定である、といえる。

判別図法と判別分析との結果は非常に一致度が高い。和田峠1群と和田峠2群など元々類似した群の場合には異なる結果となる場合もある。このような場合は判別分析の結果を採用している。



黒曜石产地推定報告付表(1)左:図1-1、右:1-2

十五所遺跡 出土黒曜石産地推定結果報告

分析方法	エネルギー	
分析装置	セイコーインスツルメンツ SEA-2110L	
分析条件	X線ターゲット	ロジウム (Rh)
	検出器	Si (Li) 半導体検出器
	電圧	50kV
	電流	3-16μA
	雰囲気	真空
	照射系	10mm
	測定時間	180sec
分析試料	遺跡名	十五所遺跡
	黒曜石試料	48点
産地推定法	1.判別図法	
	2.判別分析	
	詳細については別添。	

推定結果	産地名	記号	試料数
	和田ぶどう沢群	WOBD	0
	和田牧ヶ沢群	WOMS	0
	和田高松沢群	WOTM	0
	和田鷹山群	WDTY	0
	和田小深沢群	WDKB	0
	和田土屋橋北群	WDTK	0
	和田土屋橋西群	WDTN	0
	和田土屋橋南群	WDTM	0
	諏訪星ヶ台群	SWHD	47
	蓼科冷山群	TSTY	0
	蓼科双子山群	TSHG	0
	天城柏艸群	AGKT	0
	箱根畠宿群	HNHJ	0
	箱根上多賀群	HNKJ	0
	箱根鍛冶屋群	HNKT	0
	箱根黒岩橋群	HNKI	0
	箱根芦ノ湯群	HNAY	0
	神津島恩馳島群	KZOB	0
	神津島砂糖崎群	KZSN	0
	高原山甘湯沢群	THAY	0
	高原山七尋沢群	THNH	0
	新発田板山群	SBIY	0
	新津金津群	NTKT	0
	下呂石	GERO	1
	不可風化など		0
	総計		48

黒曜石産地推定報告付表(2)

産地原石から分類した判別群

中部地方・関東地方の黒曜石産地を8つの系、21群に分類して報告してきたが、用いた名称が他の研究者の命名した名称と紛らわしいことから混乱を招いてきた。そこで、黒曜石産地を原石の採取地域ごとにエリアに分け、分析によって分類された群名を代表的な採取地点名で呼ぶという原則で名称を変更した。旧名称と新名称の対比は以下の表1の通りである。また、群を示す記号は原則的に

エリア名の頭2文字の頭文字十判別群名の頭2文字の頭文字

とした。和田エリアの旧男女倉系の判別群については和田のWと男女倉のOを組み合わせてWO十判別群の頭2文字の頭文字とした。また、牧ヶ沢、芦ノ湯などのヶ、ノなどは記号の頭文字には使わないこととした。従来蓼科系として一括していたものを原石試料の増加により蓼科エリア冷山群と双子山群に細分した。和田エリアの土屋橋北群、西群、南群については、今後の字名等の調査により、群名、記号が変わる可能性を併記しておきたい。

採取エリア、記号	判別群、記号	記号	旧判別群(望月による)	記号
和田 WD, WO	鹿山群 TY	WDTY	和田紳1群	WDT1
	小瀬沢群 KB	WDKB	和田紳2群	WDT2
	土屋橋北群 TK	WDTK	和田紳3群	WDT3
	土屋橋西群 TN	WDTN	和田紳4群	WDT4
	土屋橋南群 TM	WDTM	和田紳5群	WDT5
	ぶどう沢群 BD	WOBBD	男女倉1群	OMG1
	牧ヶ沢群 MS	WOMS	男女倉2群	OMG2
	高松沢群 TM	WOTM	男女倉3群	OMG3
諏訪 SW	星ヶ台群 HD	SWHD	箱ヶ姫系	KRM
蓼科 TS	冷山群 TY	TSTY	蓼科系	TTS
	双子山群 HG	TSHG	蓼科系	TTS
猪根 HN	烟宿群 HJ	HNHJ	烟宿	HTJ
	鎌冶巣群 KJ	HNKJ	鎌冶巣	KJY
	上多賀群 KT	HNKT	上多賀	KMT
	芦ノ湯群 AY	HNAY	芦ノ湯	ASY
	日金山群 HG	HNHG	日金山	HGN
	黒岩橋群 KI	HNKI	黒岩橋系A群	HKNA
	柏神群 KT	AGKT	柏神	KSW
	恩馳品群 OB	KZOB	神津島1群	KOZ1
神津島 KZ	砂錦鳩群 SN	KZSN	神津島2群	KOZ2
	甘池沢群 AY	THAY	高原山1群	TKH1
高原山 TH	七尋沢群 NH	THNH	高原山2群	TKH2

都道	エリア	採取地点、記号	判別群記号	分析数	都道	エリア	採取地点、記号	判別群記号	分析数
長野	和田 WD, WO	小瀬沢 KB	WDTY, WOKB	40	神奈川	箱根 HN	烟宿 HJ	HNHJ	71
		東餅屋	WDTY	40			鎌冶巣 KJ	HNKJ	30
		土屋橋北 TK	WDTK, WOKB	40			芦ノ湯 AY	HNAY	29
		丁字御嶺	WDTY	19			黒岩橋 KI	HNKI	10
		鹿山 TY	WDTY	50			大觀山	HNHJ, HNAY, HNKI	9
		土屋橋西 TN	WDTN	20			甘池橋	HNHJ, HNAY	11
		土屋橋南1 TM	WDTK, WOTN, WDTM	20			上多賀 KT	HNKT	30
		土屋橋南2	WDTK, WOTN, WDTM	20			日金山 HG	HNHG	12
	諏訪 SW	ぶどう沢 BD	WOBBD	22	天城 AG	東京	柏神 KT	AGKT	49
		牧ヶ沢下 BD	WOMS	21			恩馳島 OB	KZOB	49
	蓼科 TS	牧ヶ沢上	WOBBD, WOTM	33			砂錦鳩 SN	KZSN	40
		高松沢 TM	WOBBD, WOTM	39			沢尻満	KZOB	9
		星ヶ塔	SWHD	80			長浜	KZOB, KZSN	20
	蓼科 TS	星ヶ台 HD	SWHD	20	高岡山 TH	高岡山 TH	甘池沢 AY	THAY	48
		水月堂園	SWHD	20			七尋沢 NH	THNH	9
		愛草峠	TSTY	40			宮川	THNH	8
		愛草峠東	TSTY	35			自然の家	THNH	10
		冷山 TY	TSTY	33					
		流ノ湯	TSTY	29					
		双子池 HG	TSTY, TSHG	20					

1号住居跡出土主柵 (第7図)

番号	種類	法量 (cm)	測定		地土・生長・色調	備考
			岩体部	底部		
1 合付鰐	土 膜	(口)14.5 (高) -	S字口縁、ハケメ	-	(密) 密(形容、白色粒子、金雲母含む) (良) 良好 (色) 浅黄色	
	土 膜	(底) -	(内) ナデ	-		
2 合付鰐	土 膜	-	ハケメ	-	密(砂粒全む)	
	土 膜	-	(内) ナデ、衛錠虫	-	良好 赤褐色	
3 合付鰐	土 膜	-	ハケメ	-	密(砂粒、金雲母、白色粒子多数含む)	
	土 膜	8.9	(内) ナデ	-	良好 赤褐色	
4 合付鰐	土 膜	-	ハケメ	-	密(砂粒、長石、白色粒子含む)	
	土 膜	-	(内) ナデ	-	良好 赤褐色	
5 植 物	土 膜	8.5	ハケメ	-	密	
	土 膜	3.0	(内) ナデ	-	良好 浅黄色	
6 植 物	土 膜	4.0	ナデ	-	密(砂粒、金雲母含む)	
	土 膜	8.2	ハケメ	-	良好 褐褐色	
7 合付鰐	土 膜	-	ハケメ、ナデ	-	密(砂粒、金雲母含む)	
	土 膜	10.3	(内) ナデ	-	良好 赤褐色	
8 植 物	土 膜	-	条根立	-	やや悪い(小石、石炭含む)	
	土 膜	-	(内) ナデ	-	良好 黄褐色	
9 植 物	土 膜	-	ハケメ	-	やや悪い(小石、白色粒子含む)	
	土 膜	-	(内) ナデ	-	良好 暗褐色	
10 植 物	土 膜	-	ハケメ	-	やや悪い(砂粒、金雲母含む)	
	土 膜	-	-	-	良好 暗褐色	
11 植 物	土 膜	-	ハケメ	-	密(砂粒、白色粒子含む)	
	土 膜	-	-	-	良好 暗褐色	
12 植 物	土 膜	-	ハケメ	-	密(砂粒、金雲母含む)	
	土 膜	-	-	-	良好 暗褐色	
13 植 物	土 膜	-	ハケメ	-	やや悪い(砂粒、金雲母含む)	
	土 膜	-	-	-	良好 暗褐色	

2号住居跡出土土器（第9図）

語種	語義	法量	調整		語土・族・色調	語考
			音節部	重部		
1 台幹脚	土 防	(口)14.2	S字口締、ハケメ	-	(黒) 密 (砂物、白色粒子、全體含む)	
	(高) -	-	-	-	(黒) 良好	
2 書	(高) -	15.3	(内) ナデ	-	(白) 黄色	
	土 防	-	ハケメ、ナデ	-	(金) 白母、白色粒子含む	
3 座	-	9.0	墨り混(口締)	-	良好	
	土 防	-	(内) ナデ	-	赤褐色	
4 台幹脚	土 防	21.6	S字口締、ハケメ	-	密 (黑色粒子多数、全體含む)	
	(高) -	-	-	-	やや密い (白色粒子多数、全體含む)	
5 書	-	13.9	ハケメ、ヘラケズリ	-	良好	
	土 防	-	(内) ハケメ、ヘラケズリ	-	白色粒子含む	

2号住居跡出土土器（第9図）

品種	法寸 (cm)	調査		春土・促成・色 調査
		導管部	底面	
6 高杯	—	ミガキ	密(白色粒子食入)	良好 暗褐色
	—	(内)ハケメ、ヘラケズリ	—	
7 高 茎	17.4 高16.0	S字口端、ハケメ	密(金雲母、白色粒子食入)	良好 暗褐色
	—	(内)ヘラケズリ、瘤状突	—	
8 茎	—	ハケメ	密(粉粒、金雲母食入)	良好 暗褐色
	—	—	—	
9 茎	—	ハケメ	密(粉粒、金雲母食入)	良好 暗褐色
	—	—	—	
10 茎	—	ハケメ	密(粉粒含む)	良好 暗褐色
	—	—	—	
11 茎	—	ハケメ	密(粉粒、金雲母食入)	良好 暗褐色
	—	—	—	
12 茎	—	ハケメ	密(粉粒、金雲母食入)	良好 暗褐色
	—	—	—	
13 茎	—	ハケメ	密(金雲母含む)	良好 暗褐色
	—	—	—	
14 茎	—	ハケメ	密(粉粒含む)	良好 暗褐色
	—	—	—	

3号住居跡出土土器（第11図）

基 種	法 量 (cm)	調査		地 土 ・ 底 成 ・ 色 調	備考
		岩体部	底 部		
1 海 生 合 付 行 規 則 (第) 7.1	(口) - (底) - (内) ハケメ	ヘラケズリ、ハケメ	-	(底) 底(白色粘土多量含む) (底) 良好 (色) 赤褐色	
	(内) ハケメ				
2 海 生 規 則 底 10.0	-	ハケ調査ヘラミゴキ	-	良好	
	13.4	(内) ハケメ		褐色	
3 海 生 規 則 底 16.0	-	ハケメ、 口ハケによる詰み文 (内) ハケメ	-	やや悪い(石灰、白色粘土含む) 良好	
	14.0				

4号住居跡出土土器（第12図）

器 種	法 量 (cm)	調 整		施 土-後 成 色 調	備 考
		蓄水部	蓋 部		
1 育 苗	(口) -	ハケメ	-	(白) 白(白色粒子、砂粒含む)	
	(高) -		-	(銀) 銀好	
	(底) -		-	(色) 非銀色	
2 育 苗	-	ハケメ	-	青(白色粒子、金色出多數含む)	
	合計重量 10.3	(内) ナデ、ヘラケズリ	-	良好 青褐色	
3 育 苗	23.0	ハケメ、口縁毛による剥離	-	青(白色粒子含む)	
	23.8		-	良好	
	24.0	(内) ハケメ	-	良好 青褐色	

5号住居跡出土土器 (第13回)

番号	目 標	法 量 (cm)	調 整		施 土・施 成・色 調	備考
			器体部	底 部		
1	角 生	(口) - (高) - (底) 11.2	ハケメ (内) ハケメ	-	(施) やや粗い (白色粒子含む) (施) 良好 (色) 黄褐色	
	合付鉢					

6号住居跡出土土器 (第15回)

番号	目 標	法 量 (cm)	調 整		施 土・施 成・色 調	備考
			器体部	底 部		
1	角 生	(口) - (高) - (底) 11.2		-	(施) 粗 (白色粒子、石英含む) (施) 良好 (色) 黄褐色	
	(内) ハケメ					
2	角 生	-	ナデ	-	やや粗い (白色粒子多數含む) 良好 黄褐色	
3	角 生	-		-	やや粗い (白色粒子多數含む) 良好 黄褐色	
	(内) ナデ					

7号住居跡出土土器 (第17回)

番号	目 標	法 量 (cm)	調 整		施 土・施 成・色 調	備考
			器体部	底 部		
1	角 生	(口) 36.6 (高) - (底) -	ハケメ (内) ハラナデ	-	(施) 粗 (砂粒含む) (施) 良好 (色) 黄褐色	
2	角 生	-	ナデ	-	やや粗い (小石含む) 良好 黄褐色	
3	端 石	-		-		

8号住居跡出土土器 (第19回)

番号	目 標	法 量 (cm)	調 整		施 土・施 成・色 調	備考
			器体部	底 部		
1	角 生	(口) 19.0 (高) - (底) -	口縁 斜面状、平行双縫 (内) 指標痕	-	(施) やや粗い (砂粒含む) (施) 良好 (色) 黄褐色	
2	角 生	-	脊痕痕、ナデ	-	やや粗い (砂粒含む) 良好 黄褐色	
3	土 壁	10.0		-		
4	土 壁	-	ナデ	-	やや粗い (小石含む) 良好 黄褐色	
5	土 壁	-	(内) ハケメ、ヘラケズリ	-	粗 (金雲母、石英含む) 良好 黄褐色	
6	土 壁	8.0	(内) ヘラエズリ	-	粗 (金雲母、石英含む) 良好 黄褐色	
7	土 壁	-	ヘラケズリ	-	やや粗い (小石含む) 良好 黄褐色	
8	角 生	7.9	(内) ハケメ	-	粗 (小石含む) 良好 黄褐色	
9	角 生	15.5 高さ11.0	ヘラケズリ、口唇剥み文 (内) ヘラケズリ、ハケメ	-	やや粗い (金雲母、砂粒含む) 良好 黄褐色	高さ11.0 C15.5 高さ11.0
10	角 生	-		-	粗 (小石含む) 良好 黄褐色	
11	角 生	-	ハケメ	-	粗 (白色粒子含む) 良好 黄褐色	
	合付壁					

9号住居跡出土土器 (第21回)

番号	目 標	法 量 (cm)	調 整		施 土・施 成・色 調	備考
			器体部	底 部		
1	土 壁	(口) - (高) - (底) 13.8	-	ナデ (内) ナデ	-	(施) 粗 (施) 良好 (色) 黄褐色
2	土 壁	-	-	ハケメ (内) ナデ	-	粗 (小石含む) 良好 黄褐色
3	土 壁	-	-	ハケメ (内) ハケメ	-	良好 黄褐色
4	土 壁	-	-	ハケメ (内) ハケメ	-	良好 黄褐色
5	土 壁	-	-	ハケメ (内) ハケメ	-	良好 黄褐色

10号住居跡出土土器 (第23回)

番号	目 標	法 量 (cm)	調 整		施 土・施 成・色 調	備考
			器体部	底 部		
1	角 生	(口) 19.2 (高) 17.8 (底) -	ハケメ、口唇剥み文 (内) ハケメ、ナデ	-	(施) 粗 (金雲母、石英、砂粒含む) (施) 良好 (色) 黄褐色	腹板
2	角 生	23.6	ハケメ (内) ハケメ	-	やや粗い (長石、石英、砂粒含む) 良好 赤褐色	
3	角 生	-		-	やや粗い (砂粒含む) 良好 黄褐色	
4	角 生	8.5 12.4 6.0	ヘラケズリ (内) 緩斜度	-	やや粗い (白色粒子含む) やや良 明褐色	
5	角 生	11.0 13.5 7.0	ハケメ (内) ナデ、ハケメ	-	やや粗い (石英、黒曜石、砂粒含む) 良好 赤褐色	上部 腹板
6	角 生	-	ナデ (内) ハケメ	-	粗 (白色粒子含む) 良好 黄褐色	赤色 腹影
7	角 生	-		-	粗 (白色粒子含む) 良好 黄褐色	
8	角 生	-	ヘラミガキ (内) ハケメ	-	やや粗い (石英、白色粒子含む) 良好 黄褐色	反板
9	角 生	-	ハケメ (内) 緩斜度	-	やや粗い (金色粒子、小石含む) 良好 黄褐色	
10	角 生	-	ハケメ (内) ハケメ	-	やや粗い (金色粒子、白色粒子含む) 良好 黄褐色	
11	角 生	-	ハケメ (内) ハケメ	-	粗 (白色粒子含む) 良好 黄褐色	
	合付壁					

出土土器一覧表(2)

11号住居跡出土土器（第25・26回）

番号	部種	法量 (cm)	調査		樹土・生長・色調	備考
			若木部	底部		
1 冬生	(口) 24.0 (高) - (底) -	ハケメ	-	(底) 密(砂質含む) (底) 良好 (色) 緑褐色		
	11.0 5.0 6.3	(内) ハケメ ミガキ	-	やや悪い(赤色粒子含む) 良好 茶褐色		
	14.0 - -	摩耗が激しく不可用	-	悪い(砂粒多量含む) 良好 茶褐色		
4 冬生	- 高さ30.0 台面積 10.8	ハケメ (内) ハケメ、摩耗痕 ハケメクリ	-	やや悪い(白色粒子含む) やや良 茶褐色		
	- 高さ18.5 底 7.0	ハラミガキ、義文 ハケ調整後ミガキ (内) 摩耗痕	-	密(白色含む) 良好 茶褐色		
	- 7.8	ハケメ、ハケ調整後ミガキ (内) ハケメ	-	やや悪い(白色粒子、砂粒含む) 良好 赤褐色		
7 冬生	- - (内) ハケメクリ	ハケメ	-	やや悪い(砂質含む) 良好 赤褐色		
	- - -	ハケメ	-	やや悪い(砂質含む) 良好 茶褐色		
	- - -	ハケメ	-	密(小石含む) 良好 茶褐色		
10 冬生	- - (内) ハケメ	ハケメ	-	やや悪い(砂質含む) 良好 茶褐色		
	- - -	ハケメ	-	良好 茶褐色		
	- - (内) ハケメ	ミガキ	-	密(砂粒多量含む) 良好 茶褐色		
12 冬生	- - -	ハケメ	-	密 良好 茶褐色		
	- - -	ハケメ	-	良好 茶褐色		
	- - (内) ハケメ	ハケメ	-	密(白色粒子含む) 良好 茶褐色		

12号住居跡出土土器（第28図）

品種	原産地	法身量 (cm)	調整		株土・施肥・色調	備考
			基体部	底部		
1 ササニシキ	日本	(口) 20.5 (高) 34.3 (茎) 10.4 (内)	ハケメ、萬葉、ナデ ミツバチ	-	(根) 寄(白色粘子含む) (根) 良好 葉黃褐色	
2 ササニシキ	-	-	ハケメ	-	寄(小石、石灰含む) 良好 黃褐色	燃き むら あり
			(内) ナデ			
3 ササニシキ	-	-	ハケメ	-	寄(砂粒含む) 良好 黃褐色	
			-			

13号住居跡出土土器（第30図）

品目	種類	法量 (ml)	調査		地土・地成・色調	備考
			器物部	底部		
1 台付型	衛生 (内)	18.2 (高) 20.2	ハケメ	-	(急) 黒(白色仔子、全體含む)	
	衛生 (外)	8.0	(内) ヘラケズリ、ハケメ	-	(速) 良好 暗褐色	
2 直	衛生	12.6	ハケメ、ハケズリ	-	青(暗青色)	
	直	-	口唇閉鎖部 (内) ヘラケズリ	-	良好 深褐色	
3 直 裏	衛生	-	ナデ	-	青(暗青色)	
	直 裏	8.1	(内) ハケメ	-	良好 黑色	
4 直	衛生	-	-	-	青	
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 黃褐色	
5 直	衛生	-	ナデ	-	青(暗青色)	
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 深褐色	
6 直	衛生	-	ナデ	-	青(暗青色)	
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 暗褐色	

14号住居跡出土土器（第32図）

標 名	種 類	法 量 (cm)	調 査		地 土・植 生・色 調	備 考
			基 礎	底 部		
1 寄 生 重 量 (固) 15.5 (固) 16.8 (固) 7.0	ハゲメ、ヘラケズリ ミガキ	-	(施) 寄 (黒星斑寄合)			
	(内) ナデ、ハゲメ		(施) 良好			
			(色) 青褐色			
2 寄 生 合計重 量 8.0	ハゲメ	-	やや悪い (白色斑子きむ)			
	(内) ハゲメ		良好			
3 寄 生 重 量 (固) 8.2	ナデ、ハゲメ	-	赤褐色			
	(内) ハゲメ		良好			

15号住居跡出土土器（第34・35圖）

番号	種類	法規 (cm)	調整		地土・気候・色調	備考
			器体部	底面		
1 1	衛生 食 (底) 具	26.4 (高) 度	ハケメ、口唇剥み文 (内) ヘラケズリ、ハケメ	- - (内) ハケメ、ナデ	(底) やや黒い (砂粒多數含む) (底) 良好 (色) 赤褐色	
2 2	衛生 食 具	15.8 -	ハケメ、ナデ	- (内) ハケメ、ナデ	やや黒い 良好 褐色	
3 3	衛生 食 具	21.1 -	ハケメ、口唇剥み文 (内) ハケメ	- - (内) ハケメ	やや黒い (砂粒含む) 良好 暗褐色	
4 4	衛生 食 具	- -	ハケメ	- - -	やや黒い (全表面、砂粒多數含む) 良好 赤褐色	
5 5	衛生 食 具	- --	ハケメ	- -	やや黒い (全表面含む) 良好 褐色	
6 6	衛生 食 具	- -	ハケメ	- -	やや黒い (全表面、砂粒含む) 良好 暗褐色	
7 7	衛生 食 具	- -	ハケメ	- -	やや黒い (砂粒含む) 良好 暗褐色	

出土土器一覽表(3)

15号住居跡出土土器 (第34・35図)

番号	基 磯	法 量 (cm)	調 査		備考
			器体部	底 部	
8 黒 質	-	-	ハケメ	-	やや粗い (金銀母、砂粒含む) 良好 黄褐色
9 黒 質	-	-	ハケメ	-	粗い (石英混入、砂粒多量含む) 良好 黄褐色
10 黒 質	-	-	ハケメ	-	やや粗い (白色粒子含む) 良好 赤褐色
11 黒 質	-	-	ハケメ	-	やや粗い (白色粒子含む) 良好 黄褐色

1号周溝墓出土土器 (第38図)

番号	基 磯	法 量 (cm)	調 査		備考
			器体部	底 部	
1 黒 質	(D) 20.0 (高) - (底) -	ハケメ	-	(底) 密 (砂粒含む) (底) 良好 (色) 黄褐色	
2 土 質	18.0	S字口縁、ハケメ (内) ハケメ	-	密 (砂粒含む) 良好 赤褐色	
3 土 質 台付型	-	ナテ	-	密 (金銀母、砂粒含む) 良好 黄褐色	
4 黒 質	-	ハケメ	-	密 (金銀母、砂粒含む) 良好 黄褐色	
5 黒 質	-	ナテ (内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 明る褐色	
6 土 質	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 赤褐色	
7 土 質	-	ハケメ	-	密 (砂粒含む) 良好 赤褐色	
8 土 質	-	ハケメ (内) ハケメ	-	密 (砂粒含む) 良好 明る褐色	
9 土 質	-	ハケメ (内) ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 赤褐色	
10 土 質	-	ハケメ	-	密 (砂粒含む) 良好 赤褐色	

2号周溝墓出土土器 (第39図)

番号	基 磯	法 量 (cm)	調 査		備考
			器体部	底 部	
1 黒 質	(D) - (高) - (底) -	ナテ (内) ハケメ	-	(底) 密 (底) 良好 (色) 黄褐色	
2 黒 質	-	ハケメ	-	密 良好 赤褐色	

2号周溝墓出土土器 (第39図)

番号	基 磯	法 量 (cm)	調 査		備考
			器体部	底 部	
3 黒 質	-	-	ハケメ	-	密 良好 黄褐色
4 黒 質	-	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 明る褐色

3号周溝墓出土土器 (第43図)

番号	基 磯	法 量 (cm)	調 査		備考
			器体部	底 部	
1 赤 質	(D) - (高) - (底) -	ハケメ	-	(底) 密 (谷粒、金銀母含む) (底) 良好 (色) 黄褐色	
2 赤 質	-	ハケメ	-	密 (砂粒含む) 良好 黄褐色	
3 赤 質	-	ハケメ	-	密 (砂粒、金銀母含む) 良好 黄褐色	

4号周溝墓出土土器 (第44図)

番号	基 磯	法 量 (cm)	調 査		備考
			器体部	底 部	
1 土 質	(D) 20.0 (高) - (底) -	S字口縁、ハケメ	-	(底) 密 (金銀母含む) (底) 良好 (色) 黄褐色	
2 赤 質	-	口縁部沈没	-	中空の 良好 黄褐色	
3 赤 質	-	ナテ (内) ハケメ	-	中空の、(金銀母、砂粒含む) 良好 黄褐色	
4 赤 質	-	ハケメ	-	密 (砂粒含む) 良好 赤褐色	
5 赤 質	-	器底波状文	-	密 良好 明る褐色	
6 赤 質	-	ナテ	-	中空の、(砂粒含む) 良好 明る褐色	
7 赤 質	-	ナテ	-	密 (砂粒含む) 良好 黄褐色	

5号周溝墓出土土器 (第45図)

番号	基 磯	法 量 (cm)	調 査		備考
			器体部	底 部	
1 赤 質	(D) - (高) - (底) -	ナテ (内) ハケメ	-	(底) 密 (白色粒子含む) (底) 良好 (色) 黄褐色	
2 赤 質	-	ハケメ	-	密 良好 黄褐色	

出土土器一覧表(4)

5号周溝墓出土土器 (第45回)

番号	器種	法量 (cm)	調査		胎土・焼成・色調	備考
			器体部	底部		
3 3 3	盆 生 良 好	21.0 16.4 — (内) ハケメ	ハケメ	—	白(白色含む) 良好 褐色	
4 4 4	盆 生 良 好	22.5 12.0 — (内) ハラケズリ	口唇斜み文 ハラケズリ	—	やや悪い(白色含む) 良好 褐色	
5 5 5	盆 生 合付盤	15.0 12.0 (内) ハケメ	ハケメ	—	白(白色含む) 良好 褐色	
6 6 6	盆 生 良 好	23.2 — — (内) ナテ	ナテ、口唇斜み文 (内) ハケメ	—	白(小石含む) 良好 褐色	
7 7 7	盆 生 合付盤	— — (内) ハケメ	ハケメ	—	白 良好 赤褐色	
8 8 8	盆 生 合付盤	9.0 — (内) ハケメ	ハケメ	—	白(小石含む) 良好 褐色	
9 9 9	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白(小石含む) 良好 褐色	
10 10 10	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白 良好 褐色	
11 11 11	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白 良好 褐色	
12 12 12	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白 良好 褐色	
13 13 13	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白(小石含む) 良好 褐色	
14 14 14	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白(白色含む) 良好 褐色	
15 15 15	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白(砂粒含む) 良好 褐色	
16 16 16	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白 良好 褐色	
17 17 17	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白(小石含む) 良好 褐色	
18 18 18	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	木葉紋	白(小石含む) 良好 褐色	
19 19 19	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白(白色含む) 良好 褐色	
20 20 20	盆 生 良 好	— — —	ハケメ、ナテ	—	白(金屬物含む) 良好 褐色	
21 21 21	盆 生 合付盤	26.0 (内) — (内) —	ハケメ、口唇斜み文 (内) ハケメ	—	(白) 白 (白) 良好 (色) 褐色	
22 22 22	盆 生 合付盤	16.5 — —	ハケメ、ナテ	—	白 良好 褐色	
23 23 23	盆 生 合付盤	17.0 — (内) ナテ	ハケメ、口唇斜み文 (内) ナテ	—	白 良好 褐色	
24 24 24	盆 生 合付盤	22.0 — (内) ナテ	ハケメ、口唇斜み文 (内) ナテ	—	白 良好 褐色	
25 25 25	盆 生 合付盤	17.0 18.8 (内) ハケメ	ハケメ、口唇斜み文 (内) ハケメ	—	白(黑色、白色含む) 良好 褐色	
26 26 26	盆 生 合付盤	22.5 12.5 —	重り落し口 口唇斜み文あり	—	やや悪い(白色含む) やや良 褐色	

6号周溝墓出土土器 (第47・48回)

番号	器種	法量 (cm)	調査		胎土・焼成・色調	備考
			器体部	底部		
1 1 1	盆 生 良 好	26.0 (内) — (内) —	ハケメ、口唇斜み文 (内) ハケメ	—	(白) 白 (白) 良好 (色) 褐色	
2 2 2	盆 生 良 好	16.5 — —	ハケメ、ナテ	—	白 良好 褐色	
3 3 3	盆 生 良 好	17.0 — (内) ナテ	ハケメ、口唇斜み文 (内) ナテ	—	白 良好 褐色	
4 4 4	盆 生 良 好	22.0 — (内) ナテ	ハケメ、口唇斜み文 (内) ナテ	—	白 良好 褐色	
5 5 5	盆 生 良 好	17.0 18.8 (内) ハケメ	ハケメ、口唇斜み文 (内) ハケメ	—	白(黑色、白色含む) 良好 褐色	
6 6 6	盆 生 良 好	22.5 12.5 —	重り落し口 口唇斜み文あり	—	やや悪い(白色含む) やや良 褐色	
7 7 7	盆 生 良 好	8.5 13.0 (内) ハケメ	ハケメ調整全面ミガキ (内) ハケメ	—	白(白色粒子含む) 良好 褐色	
8 8 8	盆 生 良 好	8.0 14.0 6.0	ハケメ、ミガキ (内) ハケメ	—	白(白色粒子含む) 良好 褐色	
9 9 9	盆 生 良 好	7.5 11.1 6.5	ハケメ (内) 口唇斜み文、ナテ	—	白(白色粒子含む) 良好 褐色	
10 10 10	盆 生 良 好	19.7 24.4 8.0	口唇斜み文、ハケメ (内) ハラケズリ	—	白(白色粒子含む) 良好 褐色	
11 11 11	盆 生 良 好	11.0 — (内) ハケメ	ハケメ、ハラケズリ (内) ハケメ	—	白 良好 褐色	
12 12 12	盆 生 良 好	— — 7.2	ナテ	—	白 良好 褐色	
13 13 13	盆 生 良 好	— — 6.0	ナテ	—	白(小石含む) 良好 褐色	
14 14 14	盆 生 良 好	— 38.5 12.5	ハケメ調整ミガキ 萬文、円形點付文 (内) 調整底	—	白(白色含む) やや良 褐色	
15 15 15	盆 生 良 好	— — (内) ハケメ	ハケメ	—	白(砂粒含む) 良好 褐色	
16 16 16	盆 生 良 好	— — —	ハケメ	—	白 良好 褐色	
17 17 17	盆 生 良 好	— 14.5 8.0	ハケメ調整全面ミガキ (内) ハケメ	—	白(白色粒子含む) 良好 褐色	
18 18 18	盆 生 良 好	— — (内) ナテ	ハケメ	木葉紋	白(小石含む) 良好 褐色	
19 19 19	盆 生 良 好	— — 6.2	ハケメ (内) ハケメ	—	白(白色含む) 良好 褐色	
20 20 20	盆 生 良 好	— — —	ハケメ、ナテ	—	白(金屬物含む) 良好 褐色	
21 21 21	盆 生 合付盤	— — —	ハケメ	—	(白) 白 (白) 良好 (色) 褐色	
22 22 22	盆 生 合付盤	— — 9.2	ハケメ (内) ハケメ	—	白 良好 褐色	
23 23 23	盆 生 合付盤	— — 5.7	ハケメ調整全面ミガキ (内) ハケメ	—	白(黒、白色、金属物含む) 良好 褐色	
24 24 24	盆 生 合付盤	— — 4.5	ハラミガキ	—	白(白色含む) 良好 褐色	
25 25 25	盆 生 合付盤	— — 6.3	ハラミガキ (内) ハケメ	—	白(白色含む) 良好 褐色	
26 26 26	盆 生 合付盤	— — 4.0	ナテ	—	白(砂粒含む) 良好 褐色	

出土土器一覧表(5)

6号周溝墓出土土器（第47・48図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底盤	
27	棒生	-	ヘラケズリ	-	密(砂粒含む) 良好 褐色
	台付壺	9.0	(内) ハケメ	-	
28	棒生	11.8	ハケメ	-	密(小石含む) 良好 赤褐色
	台付壺	-	(内) ハケメ	-	
29	棒生	-	ヘラミガキ	-	密(白色含む) 良好 赤褐色
	台付壺	12.3	(内) ハケメ	-	
30	棒生	-	圓輪造紋	-	密 良好 暗褐色
	壺	-		-	
31	棒生	-	縄文	-	密 良好 褐色
	壺	-		-	
32	棒生	-	縄文	-	密(小石含む) 良好 褐色
	壺	-		-	
33	棒生	-	ハケメ	-	密 良好 赤褐色
	壺	-		-	
34	棒生	-	縄文	-	密(赤色粒子含む) 良好 赤褐色
	壺	-		-	
35	棒生	-	縄文	-	密(白色含む) 良好 明褐色
	壺	-		-	
36	棒生	-	縄文	-	密 良好 褐色
	壺	-		-	
37	棒生	-	縄文	-	密 良好 暗褐色
	壺	-		-	
38	棒生	-	ハケメ	-	密(砂粒、金雲母含む) 良好 暗褐色
	壺	-		-	
39	棒生	-	縄文	-	密 良好 明褐色
	壺	-		-	

7号周溝墓出土土器（第53図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底盤	
1	棒生	(口) 22.0 (底) 15.6 壺	口唇剥み文、ハケメ (内) ハケメ、ヘラケズリ	-	(口) 密(白色含む) (底) 良好 (内) 褐色
2	棒生	17.0 壺	ハケメ (内) 磨擦面、ヘラミガキ	-	密 中等良 褐色
3	棒生	19.0 台付壺	ハケメ (内) ハケメ	-	密(白色含む) 良好 褐色
4	棒生	16.5 壺	-	-	やや密(砂粒含む) 良好 黃褐色
5	棒生	7.7 台付壺	ハケメ (内) ミガキ	-	密(白色含む) 良好 褐色

7号周溝墓出土土器（第53図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底盤	
6	棒生	-	ハケメ	-	やや密(砂粒含む) 良好 黄褐色
7	台付壺	-	-	-	
8	棒生	-	ハケメ	-	やや密(砂粒含む) 良好 黄褐色
9	台付壺	-	(内) ハケメ	-	
10	棒生	17.5 壺	ハケメ (内) ハケズリ	-	やや密(砂粒含む) 良好 明褐色
11	棒生	9.0	ハケメ (内) ミガキ	-	密 良好 褐色

8号周溝墓出土土器 (第54・55図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
12	盆	-	ハケメ、ヘラケズリ	密(白色底含む) 良好 褐色	
12	蓋	6.0	-	-	
12	蓋	6.5	(内) ハラケズリ	-	
13	盆	-	ハケメ	悪い(砂粒多量含む) 良好 褐色	
13	蓋	-	(内) ハケメ	-	
14	盆	-	ハケメ	密 良好 褐色	
14	蓋	6.8	(内) ハケメ、ヘラケズリ	密 良好 褐色	
15	盆	-	ハケメ	やや悪い 良好 褐色	
15	蓋	-	-	-	
15	蓋	9.8	(内) ハケメ	-	
16	盆	-	ハケメ	密 良好 褐色	
16	蓋	-	(内) ハケメ	-	
17	盆	-	ハケメ	悪い 良好 褐色	
17	蓋	-	(内) ナデ	-	
18	盆	-	ハケメ	悪い(砂粒多量含む) 良好 褐色	
18	蓋	-	(内) ハラケズリ、ハケメ	-	
19	盆	-	ハケメ	密(白色底含む) 良好 褐色	
19	蓋	-	(内) ハケメ	-	
20	盆	-	ハケメ	密(白色底含む) 良好 褐色	
20	蓋	11.0	(内) ハケメ	-	
21	盆	-	ヘラミガキ	(白) やや悪い(砂粒含む) (白) 良好 (色) 褐色	
21	蓋	-	(内) ハケメ	木質底	
21	蓋	12.0	(内) ハケメ	-	
22	盆	-	ハケメ	やや悪い(白色底含む) 良好 褐色	
22	蓋	-	(内) ハケメ	木質底	
23	盆	-	ハケメ	密 良好 褐色	
23	蓋	-	(内) ハケメ	-	
24	盆	-	ハケメ	密(白色底含む) 良好 褐色	
24	蓋	9.0	(内) ハケメ	-	
25	盆	-	ハケメ	密 良好 褐色	
25	蓋	-	(内) ハケメ	-	
26	盆	-	ハケメ	密 良好 褐色	
26	蓋	-	(内) ハケメ	-	
27	盆	-	ハケメ	密 良好 褐色	
27	蓋	-	(内) ハケメ	-	
28	盆	-	口唇剥み文、ハケメ	密 良好 褐色	
28	蓋	-	(内) ハケメ、ヘラミガキ	-	
29	盆	-	ナデ	密 良好 褐色	
29	蓋	-	(内) 番文	-	
30	盆	-	ハケメ	密 良好 褐色	
30	蓋	-	(内) ハケメ	-	
31	盆	-	ナデ	密(金銀箔含む) 良好 褐色	
31	蓋	-	(内) ハケメ	-	

8号周溝墓出土土器 (第55・56図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
32	盆	-	義文、ハケメ	-	
32	蓋	-	(内) ハケメ	-	良好 褐色
33	盆	-	義文、円脚貼付文	-	
33	蓋	-	(内) ハケメ	-	良好 褐色
34	盆	-	義文	-	
34	蓋	-	-	-	良好 褐色
35	盆	-	ハケメ	-	
35	蓋	-	-	-	良好 褐色
36	盆	-	ハケメ	-	やや悪い(砂粒含む) 良好 褐色
36	蓋	-	(内) ハケメ	-	
37	盆	-	ハケメ	-	密(小石含む) 良好 褐色
37	蓋	-	-	-	
38	盆	-	ハケメ	-	密(金銀箔含む) 良好 褐色
38	蓋	-	(内) ハケメ	-	
39	盆	-	ハケメ	-	密 良好 褐色
39	蓋	-	-	-	
40	盆	-	ハケメ	-	やや悪い(小石含む) 良好 褐色
40	蓋	-	(内) 番文	-	
41	盆	-	ハケメ	-	(白) 密 (白) 良好 (色) 褐色
41	蓋	-	(内) ハケメ	-	
42	盆	-	ハケメ	-	良好 褐色
42	蓋	-	-	-	
43	盆	-	条文	-	密(砂粒含む) 良好 褐色
43	蓋	-	(内) 条文	-	

9号周溝墓出土土器 (第60図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1	盆	(口) 16.0 (高) 26.5 (底) 10.0	ミガキ、義文、ハケメ 円脚貼付文 (内) ハケメ、義文、縫隙	(白) 密 (白) 良好 (色) 褐色	
2	盆	9.5	全面ミガキ、ハケメ	密(白色底含む)	
2	蓋	16.5	-	良好 褐色	
3	盆	7.0	(内) ハケメ	-	
3	蓋	13.5 15.8 7.5	口唇剥み文、ハケメ ヘラケズリ (内) ハケメ、ヘラケズリ	(白) 密(白色底含む) 良好 褐色	
4	盆	11.0	ナデ	悪い(砂粒含む)	難解 しい 不明
4	蓋	-	(内) ナデ	-	
5	盆	-	ハケメ	やや悪い 良好 褐色	
5	蓋	-	(内) ナデ	-	
6	盆	8.6	(内) ナデ	-	
6	蓋	15.4 23.0 8.3	口唇剥み文、ナデ (内) 粘着底、ハケメ	悪い(白色底含む) 良好 褐色	

出土土器一覧表(7)

9号周溝墓出土土器（第60回）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
7	舟生	-	ハケメ	-	留(良石、金雲母、砂粒含む) 良好 赤褐色
	台付盤	5.4	(内) ハケメ		
8	舟生	-	全面ミガキ、ハケメ	-	やや白い(白色含む) 良好 赤褐色
	直	-	(内) ナデ、ハケメ		
9	舟生	-	ハケ調整全面ミガキ	-	白い(白色含む) 良好 赤褐色
	亞	11.4	ハケメ	木蓋底	やや良 良好 赤褐色
10	舟生	-	全面ミガキ	-	やや白い(砂粒含む) 良好 赤褐色
	直	11.4	(内) 網状底、ナデ		
	直	5.9	(内) 指揮底、ナデ、繩接底		
11	舟生	-	ハケメ	-	やや白い(石英、黄石、砂粒含む) 良好 赤褐色
	台付盤	-	(内) ハラミガキ、指揮底		
12	舟生	-	ナデ	-	やや白い(白石含む) 良好 赤褐色
	直	13.4	(内) ハケメ	木蓋底	良好 赤褐色
13	舟生	-	萬文、円周點付文	-	やや白い(石英、砂粒含む) 良好 赤褐色
	直	-	(内) ナデ		
14	舟生	-	ハケメ	-	やや白い(砂粒含む) 良好 赤褐色
	亞	-	(内) 指揮底		
15	舟生	-	萬文	-	良好 褐色
	直	-	-		

10号周溝墓出土土器（第63・64回）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1	舟生	(口) 19.8 (底) 24.4 (直) -	口唇斜み文、ハケメ	-	(底) 良 (底) 良好 (底) 明褐色
	直	6.0	(内) 指揮底、ハケメ		
2	舟生	8.5	ナデ	やや白い(白色粒子含む)	繩接底 しい
	直	12.4	ヘラケシリ(底部)	-	やや良
	直	6.0	(内) 網状底	赤褐色	
3	舟生	-	ナデ	-	良好
	直	-	(内) ハケメ	明赤褐色	
4	舟生	13.5	折り返し口縁	留(白色含む)	
	直	26.0	全面ハケ調整全面ミガキ	-	やや良
	直	9.1	(内) 網状底	赤褐色	
5	舟生	20.0	ハケメ	やや白い(小石含む)	
	台付盤	32.3	(内) ナデ、ハケメ	-	良好 赤褐色
	直	10.0	-		
6	舟生	15.0	口唇斜み文、ハケメ	-	留
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 赤褐色
7	舟生	-	ナデ	やや白い	
	直	9.8	木蓋底	-	
8	舟生	-	ナデ	留(砂粒含む)	
	台付盤	-	-	-	良好 赤褐色
9	舟生	-	ハケメ	-	良好
	台付盤	8.8	(内) ハケメ	明赤褐色	
10	舟生	-	ナデ	-	やや白い(砂粒、金雲母含む)
	直	-	-	-	良好 赤褐色
11	舟生	-	ナデ	-	留(砂粒、金雲母含む)
	直	-	(内) ハケメ	-	
12	舟生	-	ナデ	-	やや白い(砂粒含む)
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 明赤褐色
13	舟生	-	ナデ	-	留(砂粒含む)
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 明赤褐色
14	舟生	-	ナデ	-	良好 明赤褐色
	直	-	(内) ハケメ	-	
15	舟生	-	ナデ文	-	良好 明赤褐色
	直	-	-	-	
16	舟生	-	ナデ文	-	良好 明赤褐色
	直	-	(内) 条痕文	-	
17	舟生	-	ナデ文	-	良好 明赤褐色
	直	-	(内) ナデ	-	
18	舟生	-	ナデ	-	やや白い(砂粒含む)
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 明赤褐色
19	舟生	-	折り返し口縁	-	やや白い(砂粒含む)
	直	-	(内) ナデ	-	良好 赤褐色
20	舟生	-	ハケメ	-	やや白い(小石、砂粒、金雲母含む)
	台付盤	-	-	-	良好 赤褐色
21	舟生	-	ハケメ	-	(底) やや白い(小石含む) (底) 良好 (底) 赤褐色
	直	-	-	-	
22	舟生	-	ナデ	-	やや白い(砂粒、金雲母含む)
	直	-	-	-	良好 赤褐色
23	舟生	-	ナデ	-	やや白い(砂粒、金雲母含む)
	直	-	-	-	良好 赤褐色
24	舟生	-	ハケメ	-	留
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 明赤褐色
25	舟生	-	ハケメ	-	やや白い(小石、砂粒、金雲母含む)
	直	-	-	-	良好 赤褐色
26	舟生	-	ナデ	-	やや白い(砂粒、金雲母含む)
	直	-	-	-	良好 赤褐色
27	舟生	-	ハケメ	-	やや白い(金雲母含む)
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 明赤褐色
28	舟生	-	ハケメ	-	やや白い(砂粒、金雲母含む)
	直	-	-	-	良好 赤褐色
29	舟生	-	ナデ	-	留(砂粒、金雲母含む)
	直	-	(内) ハケメ	-	良好 赤褐色

出土土器一覧表(8)

10号周溝墓出土土器 (第63・64図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
30	盆	-	条文	-	青(青鉛含む) 良好 褐色
		-	(内) 条文		

11号周溝墓出土土器 (第69・70図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1	盆	(口) - (底) - (内) -	ハケメ、ヘラミケズリ (内) ハケメ	- (底) 青 良好 褐色	(底) 青 (底) 良好 (色) 黄褐色
2	盆	- 13.8	ナデ (内) ハケメ	悪い 良好 褐色	
3	盆	- 6.2	ハケメ (内) ハケメ	- 良好 褐色	青 良好 褐色
4	盆	- 合付蓋 11.4	ハケメ (内) ハケメ	- 良好 褐色	青 良好 褐色
5	盆	- 蓋	ハケメ、ヘラミガキ 振り返し口縁	- 良好 褐色	やや悪い(小石含む) 良好 褐色
6	盆	- 蓋	ハケメ 振り返し口縁	- 良好 褐色	青 良好 褐色
7	盆	- 蓋	ハケメ、ヘラミガキ 振り返し口縁	- 良好 褐色	青 良好 褐色
8	盆	- 蓋	口唇刷み文、ナデ	-	やや悪い 良好 褐色
9	盆	- 蓋	ハケメ	- 良好 褐色	青(青鉛含む) 良好 褐色
10	盆	- 蓋	ハケメ	- 良好 褐色	青 良好 褐色
11	盆	- 蓋	ナデ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(小石含む) 良好 褐色
12	盆	- 蓋	ハケメ	- 良好 褐色	青 良好 褐色
13	盆	- 蓋	条文 (内) ハケメ	- 良好 褐色	青 良好 褐色
14	盆	- 蓋	ナデ、円削輪文	-	青 良好 褐色
15	盆	- 蓋	萬文 (内) ハケメ	- 良好 褐色	青 良好 褐色
16	盆	- 蓋	口唇刷み文、ハケメ (内) ハケメ	- 良好 褐色	青 良好 褐色
17	盆	- 蓋	条文 (内) 条文	- 良好 褐色	青 良好 褐色

11号周溝墓出土土器 (第69・70図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
15	盆	-	ハケメ	-	青 良好 褐色
19	盆	-	(内) ハケメ	-	青 良好 褐色
20	盆	-	ハケメ	-	青 良好 褐色
21	盆	-	(内) ハケメ	-	(底) 青 (底) 良好 (色) 黄褐色
22	盆	-	ハケメ	-	やや悪い(小石含む) 良好 褐色

12号周溝墓出土土器 (第71図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1	盆	(口) - (底) - (内) -	ナデ (内) ナデ	本體青 (底) 青 (色) 青	(底) やや悪い(小石、全表面含む) (底) 良好 (色) 青
2	盆	- 8.4	ハケメ	-	やや悪い(全表面含む) 良好 褐色
3	盆	- -	ナデ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(小石含む) 良好 褐色

13号周溝墓出土土器 (第75図)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1	盆	(口) 13.5 (底) - (内) -	口唇刷み文、ハケメ 振り返し口縁 (内) ナデ	- (底) 青 (色) 青	(底) やや悪い(表石、長石、鉛鉱含む) (底) 良好 (色) 青
2	盆	- 7.9	ハケメ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(表石、鉛鉱含む) 良好 褐色
3	盆	- -	ハケメ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(鉛鉱含む) 良好 褐色
4	盆	- -	ナデ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(鉛鉱含む) 良好 褐色
5	盆	- -	ナデ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(全表面含む) 良好 褐色
6	盆	- -	ハケメ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(表石、鉛鉱含む) 良好 褐色
7	盆	- -	ハケメ (内) ハケメ	- 良好 褐色	やや悪い(全表面含む) 良好 褐色

出土土器一覧表(9)

14号周溝墓出土土器（第76図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1 生	（口）一 （高）— （底）8.0	ヘラミガキ （内）ヘラミガキ	ヘラ ケズリ （底）良好 （色）赤褐色	（底）良 （底）良好 （色）黄褐色	
2 生	—	ハケメ	—	密（小石含む） 良好 暗褐色	
3 生	—	ハケメ	—	やや悪い（小石含む） 良好 暗褐色	
4 生	—	ハケメ	—	密 良好 明赤褐色	
5 生	—	条文	密（金物含む） 良好 暗褐色		
5 生	—	—	—	—	

16号周溝墓出土土器（第81図）

16号周溝墓出土土器（第81図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1 生	（口）一 （高）— （底）—	ハケメ	—	（底）良 （底）良好 （色）黄褐色	
2 生	—	条文	—	密 良好 赤褐色	

18号周溝墓出土土器（第72図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1 生	（口）8.0 （高）15.3 （底）7.0	ハケメ （内）ヘラケズリ、丸棒状刷毛底 （内）ヘラケズリ、ハケメ	—	（底）密（白色粘合物） （底）良好 （色）浅青褐色	
2 生	— 合付部 5.0	ハケメ （内）ハケメ	—	やや悪い 良好 明赤褐色	

16号周溝墓出土土器（第80図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1 生	（口）18.0 （高）25.0 （底）10.0	円削鉛付文、範文 木裏底 （内）ハケメ、輪滑面	密（白色粘合物） 良好 （色）赤褐色		
2 生	—	兩文	密（小石含む） 良好 赤褐色		
3 生	—	円削鉛付文、範文	密（小石含む） 良好 赤褐色		
4 生	—	ハケメ	密（小石含む） 良好 暗褐色		
5 生	—	ハケメ	密 良好 明赤褐色		
6 生	—	兩文	密（小石含む） 良好 赤褐色		
7 生	—	ハケメ	密 良好 暗褐色		

1号土坑出土土器（第83図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1 器	（口）— （高）— （底）10.0	—	—	—	（底）密（金物含む） （底）良好 （色）褐色
2 器	— 10.0	—	—	—	密 良好 褐色
3 器	— 19.8	—	—	—	密（砂岩含む） 良好 赤褐色

5号土坑出土土器（第88図）

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考
			器体部	底部	
1 生	（口）26.8 （高）42.2 （底）—	ハケ調整器ミガキ 沈底文 （内）ヘラケズリ、輪滑面	—	（底）やや悪い（白色粘合物） （底）やや良 （色）赤褐色	
2 生	— 11.6	ハケ調整器ミガキ （内）ヘラケズリ、ハケメ	—	密（砂岩、金物含む） 良好 赤褐色	
3 生	20.6 — —	ハケメ 口器鋲み文 （内）ハケメ	—	やや悪い（砂岩含む） 良好 暗褐色	

溝出土器（第89図）

器種	法量 (cm)	調査		参考
		器形名	底部	
角生	(口) -	沈鉢	-	(8) 密(砂岩、全縫合む) (9) 良好
1	(裏)(内)	(内) ナデ	(9) 布地褐色	1号溝
角生	-	直壁状底鉢	-	密(砂岩、全縫合む)
2	-	三角形底鉢	-	良好
角生	-	沈鉢	-	密(砂岩、全縫合む)
3	-	-	-	良好
4	-	直壁	-	密(砂岩、全縫合む) 良好
5	-	周文	-	密(砂岩、全縫合む) 良好
6	-	周文、沈鉢	-	密(砂岩、全縫合む) 良好
7	18.0	(内) ナデ	(内) 布地褐色	4号溝
8	-	ハケメ	-	密
9	32	-	良好	4号溝
10	11.2	ハケメ	-	密(小石含む)
11	11.4	(内) ハケメ	-	良好
12	12.0	ハケ剥離底ミガキ	-	密(白色縫合む)
13	7.3	(内) ハケメ	-	良好
14	-	ハケメ、ナデ	-	密
15	4.8	-	-	5号溝

グリッド出土器（第90～110図）

器種	法量 (cm)	調査		参考
		器形名	底部	
角生	(口) 33.3	口縁剥離文	-	(8) 密(砂岩含む)
1	(裏)	縦島波文	-	(9) 良好
角生	10.0	斜波文、ヘラケズリ	-	(8) 布地褐色
2	10.5	-	-	良好
角生	5.0	-	-	褐色
3	22.0	斜波文、波浪剥離	-	密
角生	-	-	-	良好
4	(内) ハケメ、ヘラケズリ	口唇、指觸痕剥離	-	密
5	-	波浪状波文	-	良好
6	26.0	口唇、指觸痕剥離	-	密
7	-	波浪状波文	-	良好
8	-	波浪状波文	-	褐色
9	18.0	ハケメ	-	密
10	23.8	-	-	良好
11	-	(内) ハケメ、ヘラケズリ	-	密(小石含む)
12	-	口縁剥離文	-	良好
13	-	(内) ハケメ	-	密(砂岩含む)
14	-	口縁剥離文	-	良好
15	-	(内) ハケメ	-	密(砂岩含む)
16	-	ハケメ	-	良好
17	-	(内) ハケメ	-	密(小石含む)
18	-	ハケメ	-	良好
19	-	(内) ハケメ	-	密(砂岩含む)
20	-	ハケメ	-	良好
1	9.0	(内) ハケメ	-	密(砂岩含む)
2	11.0	ハケメ	-	良好
3	-	(内) ハケメ	-	良好
4	6.5	ハケメ	-	密(砂岩、全縫合む)
5	-	(内) ハケメ	-	良好
6	18.0	ハケメ	-	密(全縫合む)
7	-	(内) ハケメ	-	良好

出土土器一覧表(11)

グリッド出土土器（第90～110図）

番号	器種	法量 (cm)	測定		備考
			器体部	底部	
21	角生	18.0 (内) -	ハケメ	- (底) 宝 (底) 良好 (色) 黄色	N 区 G-2 G-3
22	角生	12.5	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H-口
23	角生	18.0	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (鉛物含む) 良好 褐色	表 指 F-4
24	角生	16.0	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (小石含む) 良好 褐色	I 区 D-ハ
25	角生	22.0	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (小石含む) 良好 褐色	I 区 D-二
26	角生	20.0	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (鉛物、全雲母含む) 良好 褐色	N 区 C-5
27	角生	22.0	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (小石、全雲母含む) 良好 褐色	表 指 J-2
28	角生	15.5	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 良好 褐色	N 区 G-2
29	角生	21.0	口唇剥み文	- (内) ハケメ 寶 (鉛物含む) 良好 褐色	表 指 I-16
30	角生	18.0	口唇剥み文、条文	- (内) ハケメ 寶 良好 褐色	I 区 H-口
31	角生	18.0	ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (鉛物、全雲母含む) 良好 褐色	I 区 B-二
32	角生	17.8	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (鉛物、全雲母含む) 良好 褐色	N 区 G-1
33	合付器	-	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (小石、全雲母含む) 良好 褐色	N 区 G-1
34	角生	20.0	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ やや悪い (小石、全雲母含む) 良好 褐色	N 区 I-16
35	角生	20.0	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ やや悪い (小石含む) 良好 褐色	I 区 H-口
36	角生	18.0	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ、ヘラミガキ やや悪い (鉛物含む) 良好 褐色	I 区 D-二
37	角生	24.0	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (鉛物含む) 良好 褐色	N 区 D-1
38	角生	20.5	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ 寶 (鉛物含む) 良好 褐色	N 区 J-2
39	角生	24.0	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ、ミガキ 寶 (鉛物、全雲母含む) 良好 褐色	N 区 G-1
40	角生	27.0	口唇剥み文、ハケメ	- (内) ハケメ、ミガキ 寶 (鉛物含む) やや良 褐色	N 区 G-1

グリッド出土土器（第90～110図）

番号	器種	法量 (cm)	測定		備考
			器体部	底部	
41	角生	26.5 (高) -	口唇剥み文、ハケメ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	(底) 宝 (鉛物、全雲母含む) 良好 褐色
42	角生	22.0	口唇剥み文、ハケメ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 褐色
43	角生	12.0	口唇剥み文、ハラケズリ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 赤褐色
44	角生	9.5	口唇剥み文、ハケメ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 赤褐色
45	角生	26.0	口唇剥み文、ハケメ (内) ハケメ、指壓痕	- (内) ハケメ	良好 褐色
46	角生	14.0	ハケメ (内) ハケメ	穿孔 穿孔	良好 (小石含む) 良好 褐色
47	角生	14.0 6.8	ハケメ (内) ハケメ、ミガキ	- (内) ハケメ	良好 (小石含む) 良好 褐色
48	角生	19.0	口唇部ハケに沿る剥み文 ハケメ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 (全雲母含む) 良好 褐色
49	角生	22.0	ハケメ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 (小石含む) 良好 褐色
50	角生	-	ナデ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 (小石含む) やや良好 褐色
51	角生	18.0	ミガキ (内) ミガキ	- (内) ミガキ	良好 (小石含む) 良好 褐色
52	角生	19.0	折り返し縫、ハケメ 二孔四辺足の丸孔有り	- (内) ハケメ	良好 (鉛物、全雲母含む) G-5 褐色
53	角生	18.0	口唇剥み文、ハケメ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 (鉛物、全雲母含む) 良好 褐色
54	角生	21.0	折り返し縫、ハケメ (内) 口唇剥み文	- (内) ハケメ	良好 (鉛物、全雲母含む) やや良好 褐色
55	角生	-	ハケメ、調理痕ミガキ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 良好 褐色
56	角生	10.5 19.0 6.7	ボタン状2脚給付 (開脚) ハケメ (内) ハケメ	底部 穿孔 (内) ハケメ	良好 (全雲母含む) 良好 褐色
57	角生	-	ボタン状2脚給付 (開脚) ハケメ 5.5	底部 穿孔 褐色	良好 (全雲母含む) D-3
58	角生	8.5 15.0 7.5	折り返し縫 ハケメ (内) ハケメ	底部 木葉模 褐色	良好 (鉛物、全雲母含む) G-1
59	角生	-	ハケメ、ヘラミガキ (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 (鉛物含む) G-1
60	角生	10.0	折り返し縫 (内) ハケメ	- (内) ハケメ	良好 (小石含む) 良好 褐色

グリッド出土土器 (第90~110回)

番号	器種	法寸 (cm)	調査		備考
			器物部	底部	
61	盆生	(口) 21.0 (底) - (内) -	ハラケズリ	- (底) 良好 (色) 暗色	(底) 想い (砂粒含む) I 区 1-16
62	土器	18.0	S字口縁、ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (金雲母、砂粒含む) F-2
63	甕	16.0	S字口縁、ハケメ	- (内) ハケメ	やや良 明褐色
64	土器	15.7	S字口縁、ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (砂粒含む) G-口 良 褐色
65	甕	16.0	S字口縁、ハケメ	- (内) ハケメ	想い (小石含む) G-口 良好 褐色
66	土器	14.0	S字口縁、ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (小石含む) F-4
67	甕	14.0	S字口縁、ハケメ	- (内) ハケメ	やや堅 (金雲母、小石含む) F-4
68	土器	16.0	S字口縁、ハケメ	- (内) ハケメ	やや良 明褐色
69	甕	17.5	S字口縁	- (内) ハケメ	堅 (砂粒含む) F-3 良好 褐色
70	盆生	8.0	- (内) ハケメ	ハラケズリ	堅 (金雲母、砂粒含む) G-ト 良好 褐色
71	盆生	- 7.0	- ハケメ	堅 (金雲母含む) G-ト 良好 褐色	堅 (金雲母含む) F-ト 良好 褐色
72	盆生	- 6.2	- ハケメ	堅 (金雲母含む) G-ト 良好 褐色	堅 (砂粒含む) G-ト 良好 褐色
73	甕	- 10.0	張口文	- ハケメ	堅 (金雲母含む) H-ト 良好 褐色
74	盆生	- 8.0	張口文	- ハケメ	堅 (金雲母含む) D-ト 良好 褐色
75	盆生	- 8.0	張口文	- ハケメ	堅 (金雲母含む) G-ト 良好 褐色
76	盆生	- 5.0	基文、腹張底	- (内) 張口文	堅 (金雲母含む) N 区 F-4 良好 褐色
77	盆生	- 10.0	木製底	- (内) ハケメ	堅 良好 褐色
78	盆生	- 12.0	木製底	- (内) ハケメ	堅 (砂粒含む) H 区 H-4 良好 褐色
79	甕	- 14.0	木製底	- (内) ハケメ	堅 (砂粒含む) E-2 良好 明褐色
80	甕	- 6.0	木製底	- (内) 張口文	堅 (砂粒含む) E-14 良好 褐色

グリッド出土土器 (第90~110回)

番号	器種	法寸 (cm)	調査		備考
			器物部	底部	
81	盆生	(口) - (底) - (内) ハケメ	ハケメ、ミガキ	- (底) 密 (砂粒、金雲母含む) (色) 良好 (色) 明褐色	N 区 C-7
82	盆生	- 10.0	ハケメ	- (内) ハケメ	木製底 やや良 明褐色
83	盆生	- 11.0	ハケメ	- (内) ハケメ	木製底 良好 褐色
84	盆生	- 18.0	ハケメ	- (内) ハケメ	木製底 良好 褐色
85	盆生	- 7.0	ハケメ	- (内) ハケメ	密 (砂粒、金雲母含む) F-ト 良好 褐色
86	盆生	- 10.0	ハケメ	- (内) ハケメ	木製底 良好 褐色
87	盆生	- 7.0	ハラケズリ	- (内) ハケメ	堅 (金雲母含む) F-八 良好 褐色
88	盆生	- 14.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (砂粒、金雲母含む) D-ト 良好 褐色
89	台付甕	- 10.0	ハケメ	- (内) ハケメ	密 良好 褐色
90	盆生	- 7.0	ハケメ	- (内) ハケメ	密 F-3 良好 明褐色
91	盆生	- 7.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (砂粒含む) H-ト 良好 褐色
92	盆生	- 7.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (砂粒含む) G-2 良好 褐色
93	台付甕	- 8.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (小石含む) H-1 良好 褐色
94	盆生	- 7.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (砂粒含む) H-3 良好 褐色
95	台付甕	- 8.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (金雲母、砂粒含む) E-八 良好 褐色
96	盆生	- 7.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (金雲母、砂粒含む) C-7 良好 褐色
97	台付甕	- 10.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 (金雲母含む) F-3 良好 褐色
98	盆生	- 9.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 良好 褐色
99	台付甕	- 10.0	ハケメ	- (内) ハケメ	堅 良好 褐色
100	盆生	- 10.0	ハケメ	- (内) ハケメ	I 区 D-14 良好 褐色

出土土器一覧表(13)

グリッド出土土器 (第90~110回)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考	
			器体部	底盤		
101	角生	10.0 (底) 5.0	ハケメ 網代縫 舟形 (内) ハラケズリ	- 密 良好 褐色	(底) 密 (砂質、砂粒含む) (底) 良好 (色) 褐色	H 区 E-2
102	角生	-	網代縫 舟形 5.0	密 (砂粒含む) 良好 褐色		H 区 I-17
103	角生	-	ハラケズリ	密 (砂粒含む) 良好 褐色	(底) 密 (砂粒含む) (底) 良好 (色) 褐色	H 区 F-3
104	角生	-	ハラケズリ	密 (砂粒含む) 良好 褐色	(底) 密 (砂粒含む) (底) 良好 (色) 褐色	H 区 I-17
105	角生	-	ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 C-6
106	角生	-	ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 H-3
107	角生	-	ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 K-3
108	直	7.0	(内) ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 E-キ
109	角生	-	ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 G-テ
110	直 合併型	4.2	(内) ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 E-14
111	角生	-	ハラケズリ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 F-3
112	角生	-	ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 G-テ
113	角生	4.5 7.0	ハラケズリ (内) ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 H-2
114	角生	18.0 -	ハケメ、櫛目皮 (内) ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 J-2
115	直	18.5 7.0	ハケメ、ハラケズリ (内) ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 G-2
116	角生	-	ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 E-キ
117	直	26.0	(内) ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 E-キ
118	角生	13.5	ハケメ、ヘラ網壁板 (内) ハケメ	密 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 C-9
119	角生	-	ボタン袋4個壁板粘付 ハケメ、ラミガキ (内) ハケメ	密 (砂粒含む) 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 G-2
120	直 高杯	32.5 -	ハケメ (内) ハケメ	密 (砂粒含む) 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 D-キ
121	角生	19.0	ハケメ (内) ハケメ	密 (砂粒含む) 良好 褐色	密 (砂粒含む) 良好 褐色	H 区 I-17

グリッド出土土器 (第90~110回)

番号	器種	法量 (cm)	調査		備考	
			器体部	底盤		
121	角生	20.0 (底) 5.0	ナデ	-	(底) 密 (金雲母含む) (底) 良好 (色) 褐色	H 区 D-20
122	直	-	ヘラミガキ	木葉模	やや粗い 良好 褐色	H 区 G-1
123	角生	-	ヘラミガキ	-	密 良好 褐色	H 区 G-1
124	直	9.5 7.0 4.5	ヘラミガキ (内) ナデ	-	密 (金雲母含む) 良 褐色	I 区 F-ト
125	直	-	条痕文	-	密 (金雲母、砂粒含む) 良好 褐色	I 区 C-9
126	直	-	条痕文	-	密 良好 褐色	I 区 F-ト
127	直	-	条痕文、口端一突	-	密 良好 褐色	I 区 H-ヘ
128	直	-	条痕文	-	密 (金雲母、砂粒含む) 良好 褐色	I 区 C-2
129	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (金雲母含む) 良好 褐色	I 区 F-ホ
130	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (金雲母含む) 良好 褐色	H 区 E-14
131	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (金雲母含む) 良好 褐色	H 区 E-3
132	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (金雲母含む) 良好 褐色	I 区 D-リ
133	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (金雲母、砂粒含む) 良好 褐色	I 区 H-ロ
134	直	-	条痕文	-	密 良好 褐色	H 区 F-4
135	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (金雲母、砂粒含む) 良好 褐色	H 区 F-4
136	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (金雲母含む) 良好 褐色	I 区 E-テ
137	直	-	条痕文	-	密 (金雲母含む) 良好 褐色	H 区 C-9
138	直	-	条痕文	-	密 (金雲母、砂粒含む) 良好 褐色	I 区 G-ト
139	直	-	条痕文、口唇削み文	-	やや粗い (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 H-1
140	直	-	条痕文、口唇削み文	-	密 (砂粒含む) 良好 褐色	I 区 H-1

出土土器一覧表(14)

グリッド出土土器 (第90~110回)

番号	器種	法量 (cm)	測定		備考
			器体部	底盤	
141	盆 直 腹 (底)-	-	条文、口唇刷み文	-	直 (金銀母含む) (底) 良好 (色) 明褐色
142	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (器体含む) 良好 明褐色
143	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
144	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
145	盆 直 腹 (底)-	-	条文、口唇刷み文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
146	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
147	盆 直 腹 (底)-	-	条文、口唇刷み文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
148	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
149	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
150	盆 直 腹 (底)-	-	三角削道器	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
151	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
152	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
153	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
154	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
155	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
156	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	やや粗い (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
157	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	やや粗い (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
158	盆 直 腹 (底)-	-	半月形文、蝶形文	-	やや粗い (金銀母、砂粒多量含む) 良好 明褐色
159	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	やや粗い (金銀母、砂粒多量含む) 良好 明褐色
160	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	やや粗い (砂粒多量含む) 良好 明褐色

グリッド出土土器 (第90~110回)

番号	器種	法量 (cm)	測定		備考
			器体部	底盤	
161	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母、砂粒含む) (底) 良好 (色) 明褐色
162	盆 直 腹 (底)-	-	条文、平行式縫	-	直 (金銀母、砂粒含む) 良好 明褐色
163	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 良好 明褐色
164	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (白色粒子含む) 良好 明褐色
165	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (白色粒子含む) 良好 明褐色
166	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
167	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
168	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
169	盆 直 腹 (底)-	-	半月形文、縫文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
170	盆 直 腹 (底)-	-	縫	-	直 (砂粒含む) 良好 明褐色
171	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 良好 明褐色
172	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
173	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (白色粒子含む) 良好 明褐色
174	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
175	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	やや粗い (金銀母含む) 良好 明褐色
176	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (砂粒含む) 良好 明褐色
177	盆 直 腹 (底)-	-	縫	-	やや粗い 良好 明褐色
178	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
179	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色
180	盆 直 腹 (底)-	-	条文	-	直 (金銀母含む) 良好 明褐色

グリッド出土土器（第90～110回）

標 印	器 種	法 量 (cm)	調 整		備 考
			基体部	底 部	
181	角 生	(口) (高) (底) -	条痕文	-	(底) 密(砂粒含む) (底) 良好 (色) 雜褐色
182	角 生	-	条痕文	-	(底) 密(砂粒含む) (底) 良好 (色) 雜褐色
183	角 生	-	条痕文	-	やや粗い(全表面、砂粒多量含む) 良好 雜褐色
184	角 生	-	条痕文	-	やや粗い(白色粒子多量含む) 良好 雜褐色
185	角 生	-	平行竪縫	-	やや粗い(全表面、砂粒多量含む) 良好 雜褐色
186	角 生	-	条痕文	-	やや粗い(全表面、白色粒子含む) 良好 雜褐色
187	角 生	-	条痕文	-	やや粗い(全表面、白色粒子含む) 良好 雜褐色
188	角 生	-	平行竪縫	-	やや粗い(砂粒含む) 良好 雜褐色
189	角 生	-	条痕文	-	密(全表面、砂粒含む) 良好 雜褐色
190	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
191	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
192	角 生	-	斜条痕	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
193	角 生	-	斜条痕	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
194	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
195	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
196	角 生	-	斜条痕	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
197	角 生	-	斜条痕	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
198	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
199	角 生	-	条痕文	-	密(白色粒子含む) 良好 雜褐色
200	角 生	-	平行竪縫、斜条痕	-	密(白色粒子含む) 良好 雜褐色

グリッド出土土器（第90～110回）

標 印	器 種	法 量 (cm)	調 整		備 考
			基体部	底 部	
201	角 生	(口) (高) (底) -	条痕文	-	(底) やや粗い(砂粒含む) (底) 良好 (色) 雜褐色
202	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
203	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
204	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
205	角 生	-	斜拉縫	-	密 良好 雜褐色
206	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
207	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
208	角 生	-	条痕文、斜拉縫	-	密(全表面、砂粒含む) 良好 雜褐色
209	角 生	-	条痕文	-	やや粗い(全表面、白色粒子含む) 良好 雜褐色
210	角 生	-	条痕文	-	やや粗い(全表面、白色粒子含む) 良好 雜褐色
211	角 生	-	条痕文	-	やや粗い(全表面、砂粒含む) 良好 雜褐色
212	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
213	角 生	-	ハケメ	-	密(砂粒多量に含む) 良好 雜褐色
214	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
215	角 生	-	条痕文	-	密(全表面、砂粒含む) 良好 雜褐色
216	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
217	角 生	-	条痕文	-	密(砂粒含む) 良好 雜褐色
218	角 生	-	条痕文、沈澱	-	密(底面、全表面含む) 良好 赤褐色
219	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色
220	角 生	-	条痕文	-	密(全表面含む) 良好 雜褐色

グリッド出土土器（第90～110回）

番号	器種	法量 (cm)	測定		備考
			器体部	底盤	
221	舟生	(口)一 (底)一 (蓋)一	条文、北縫	-	(底) 密(金銀母、砂粒含C) (底) 良好 (色) 暗褐色
					I 区 H・チ
222	舟生	-	条文	-	密 良好 暗褐色
					I 区 G・ト
223	舟生	-	条文	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 C・7
224	舟生	-	条文	-	密(金銀母含C) 良好 暗褐色
					I 区 H・ハ
225	舟生	-	横跡試底	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 暗褐色
					I 区 H・ハ
226	舟生	-	条文	-	密(金銀母含C) 良好 褐色
					I 区 F・ト
227	舟生	-	条文、圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 褐色
					I 区 F・13
228	舟生	-	条文、圓文、沈縫	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 F・14
229	舟生	-	条文、沈縫	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 F・14
230	舟生	-	条文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 褐色
					I 区 F・ト
231	舟生	-	沈縫	-	密(砂粒含C) 良好 暗褐色
					I 区 D・リ
232	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 F・14
233	舟生	-	圓文、条痕文	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 F・10
234	舟生	-	圓文、沈縫	-	密 良好 暗褐色
					I 区 G・リ
235	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 C・11
236	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 暗褐色
					I 区 D・14
237	舟生	-	圓文、沈縫	-	密 良好 暗褐色
					I 区 G・ハ
238	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 褐色
					I 区 H・ホ
239	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 褐色
					I 区 F・ハ
240	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(密母含C) 良好 褐色
					I 区 C・10

グリッド出土土器（第90～110回）

番号	器種	法量 (cm)	測定		備考
			器体部	底盤	
241	舟生	(口)一 (底)一 (蓋)一	圓文、斜縫	-	(底) 密(金銀母、砂粒含C) (底) 良好 (色) 暗褐色
					I 区 H・ハ
242	舟生	-	条痕文、圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 褐色
					I 区 E・ヌ
243	舟生	-	沈縫	-	密(金銀母、砂粒含C) 良好 暗褐色
					I 区 C・ロ
244	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 褐色
					I 区 H・ト
245	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 暗褐色
					I 区 E・ニ
246	舟生	-	圓文、沈縫	-	密(金銀母含C) 良好 暗褐色
					I 区 F・ト
247	舟生	-	圓文	-	密(金銀母含C) 良好 暗褐色
					I 区 D・ト
248	舟生	-	圓文	-	密(砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 H・ト
249	舟生	-	圓文	-	密(砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 G・チ
250	舟生	-	圓文	-	密(砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 C・ハ
251	舟生	-	圓文	-	密(砂粒含C) 良好 褐色
					I 区 H・ト
252	舟生	-	圓文	-	密(白色粒子含C) 良好 暗褐色
					I 区 A・ト
253	舟生	-	圓文	-	密(砂粒含C) 良好 暗褐色
					I 区 C・ハ
254	舟生	-	圓文	-	密 良好 褐色
					I 区 G・チ
255	舟生	-	圓文	-	密 良好 明褐色
					I 区 E・ハ
256	舟生	-	圓文	-	密 良好 暗褐色
					I 区 F・11
257	舟生	-	圓文	-	密(砂粒含C) 良好 暗褐色
					I 区 C・7
258	舟生	-	圓文	-	密 良好 暗褐色
					I 区 H・5
259	舟生	-	圓文	-	密(金銀母含C) 良好 暗褐色
					I 区 G・3
260	舟生	-	圓文	-	密 良好 褐色
					I 区 F・リ

出土土器一覧表(17)

グリッド出土土器(第90~110回)

回 数	品 種	法 量 (cm)	調 整		地 土・焼 成・色 調	備 考
			若 部	底 部		
25	多 生	(口) - (高) - (底) -	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 (色) 暗褐色	I 区 C - 9
	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 D - 8
	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 G - 2
26	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 D - 8
	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 I - 1
	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 H - X
27	多 生	-	口縁部笠頭、ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 C - 7
	多 生	-	ハケメ、口唇部斜み文	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 G - 2
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 H - X
28	多 生	-	ハケメ、口唇部斜み文	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 G - 9
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 H - X
	多 生	-	ハケメ、口唇部斜み文	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 G - 2
29	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 D - 2
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 G - 1
	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 E - 8
30	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 H - D
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 H - D
	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 F - 8
31	多 生	-	条痕文	-	密 (金銀母、白色粘子含む) 良好 褐色	I 区 F - 3
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (金銀母、白色粘子含む) 良好 褐色	I 区 F - 3
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 E - 8
32	多 生	-	泥頭、泥状文	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 F - 8
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 17
	多 生	-	ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 J - 2
33	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (金銀母含む) 良好 褐色	I 区 J - 2
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 J - 1
	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 D - 2

グリッド出土土器(第90~110回)

回 数	品 種	法 量 (cm)	調 整		地 土・焼 成・色 調	備 考
			若 部	底 部		
34	多 生	(口) - (高) - (底) -	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 (色) 暗褐色	I 区 G - 3
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 D - 8
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 1
35	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 1
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
36	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 17
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 J - 2
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
37	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 17
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 11
38	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 11
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
39	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 E - 2
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 E - 2
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 G - 7
40	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 G - 7
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 G - 1
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 F - 14
41	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 F - 14
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 H - X
42	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 I - 17
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 J - 2
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 J - 2
43	多 生	-	ナデ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 C - 6
	多 生	-	(内) ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 D - 2
	多 生	-	ハケメ	-	密 (小石含む) 良好 褐色	I 区 D - 2

出土土器一覧表(18)

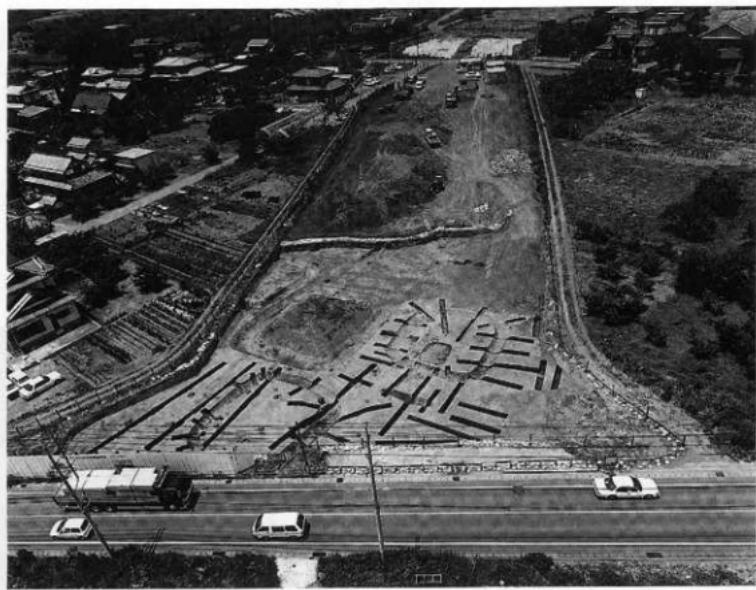
グリッド出土土器 (第90~110回)

回 数	層 組	法 量 (cm)	測定		管 号
			器外部	底 面	
301	土師 裏	(口) -	ハケヌ	-	(他) 密 (他) 良好 (他) 黄褐色
		(底) -			I 区 E・又
		(内) ハケヌ			
302	土師 裏	-	ハケヌ	-	密 (小石含む)
		-			N 区 F・4
		-			良好 黄褐色
303	土師 裏	-	ハケヌ	-	密 (白色粒子含む)
		-			N 区 F・3
		-			良好 褐色
304	土師 裏	-	S字口端、ハケヌ	-	密 (砂粒含む)
		-			N 区 F・4
		-			良好 黄褐色
305	土師 裏	-	ハケヌ	-	密
		-			I 区
		-			良好 褐色
306	土師 裏	-	S字口端、ハケヌ	-	密 (生糞母含む)
		-			N 区 F・4
		-			良好 褐色
307	土師 裏	-	ハケヌ	-	密 (砂粒含む)
		-			N 区 F・2
		-			良好 黄褐色
308	土師 裏	-	ハケヌ	-	密 (金銀母、白色粒子含む)
		-			N 区 G・1
		-			良好 褐色
309	土師 裏	-	ハケヌ	-	密 (金銀母、白色粒子含む)
		-			N 区 F・4
		-			良好 褐色
310	土師 裏	-	ハケヌ	-	密
		-			I 区
		(内) ハケヌ	-		H・又
311	土師 裏	-	ハケヌ	-	密
		-			I 区
		(内) ハケヌ	-		I-16
312	土師 裏	-	ハケヌ	-	密
		-			N 区
		-			G・1
313	土師 裏	-	ハケヌ	-	密 (砂粒含む)
		-			N 区
		-			F・3 褐色

図 版

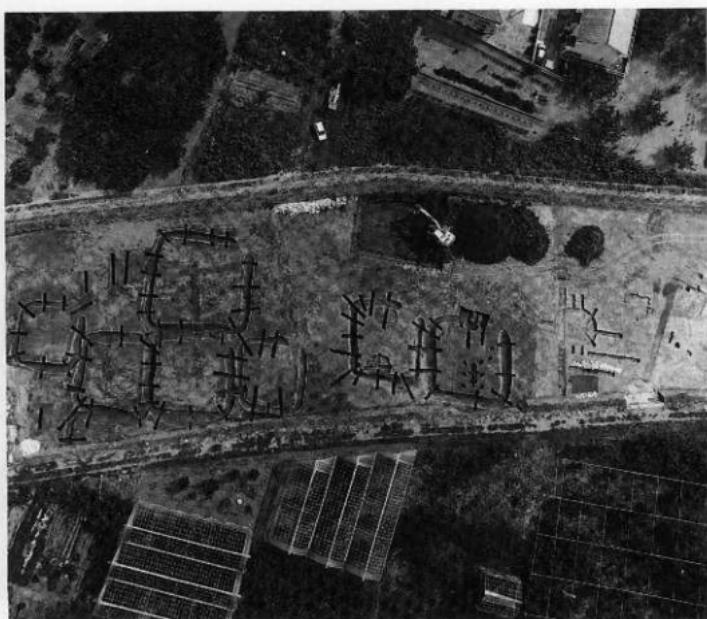


遺跡Ⅰ区南全景



遺跡Ⅰ区全景

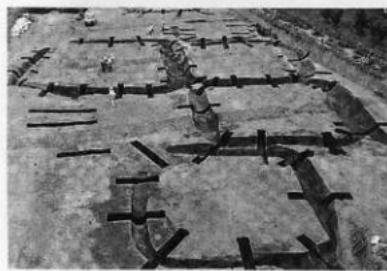
図版 2



遺跡III区全景



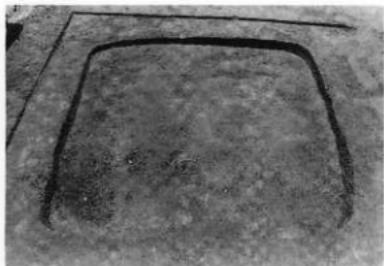
遺跡III区全景



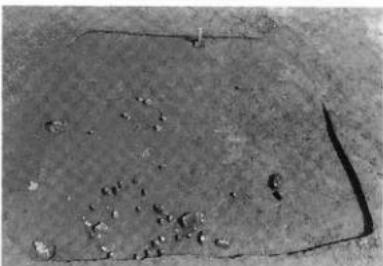
遺跡III区全景



遺跡III区全景



1号住居跡



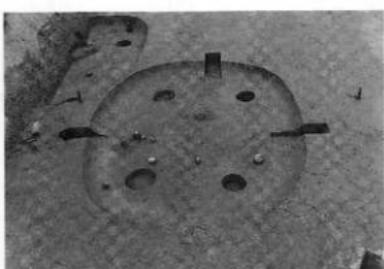
2号住居跡



3号住居跡



4号住居跡



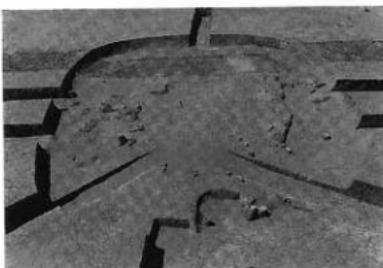
5号住居跡(南より)



6号住居跡(南より)

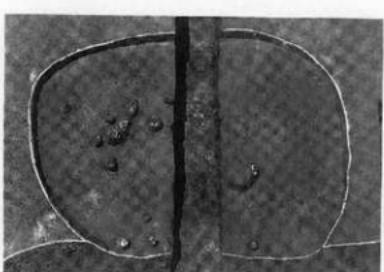
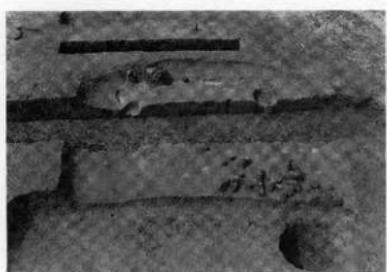
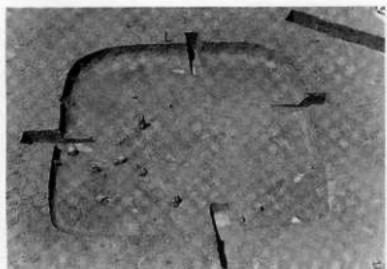


7号住居跡(南より)



8号住居跡

図版4





1号方形周溝墓



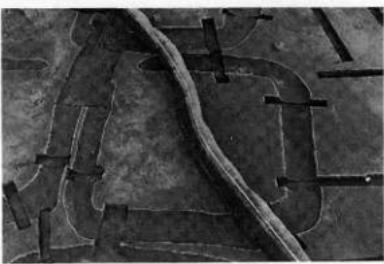
3号方形周溝墓西側セクション



2・4・5号方形周溝墓(西より)



4号方形周溝墓



4号方形周溝墓



4号方形周溝墓



5号方形周溝墓

図版 6



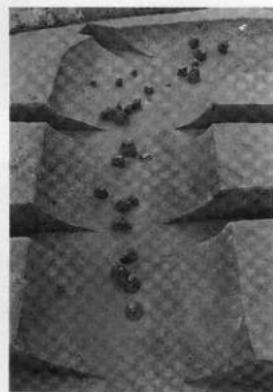
6号方形周溝墓



6号方形周溝墓遺物出土状況



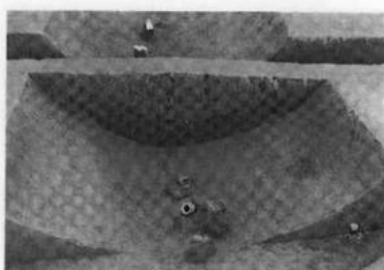
7号方形周溝墓



6号方形周溝墓遺物出土状況



7号方形周溝墓出土遺物



6号方形周溝墓 セクション



9号方形周溝墓



6号・9号方形周溝墓作業風景



9号方形周溝墓出土物状況



10号方形周溝墓(北東より)



6号・9号方形周溝墓作業風景



10号方形周溝墓作業風景

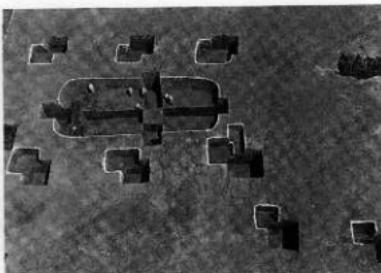


10号方形周溝墓(東より)

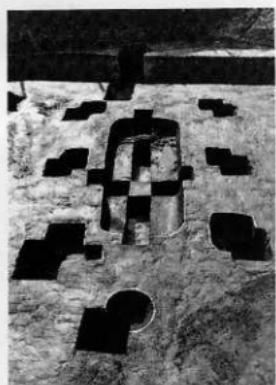
図版 8



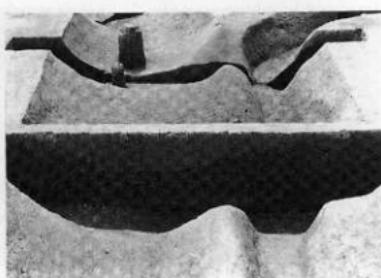
10号方形周溝墓(南より)



10号方形周溝墓主体部(南より)



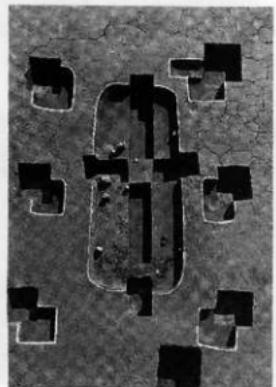
10号方形周溝墓主体部(東より)



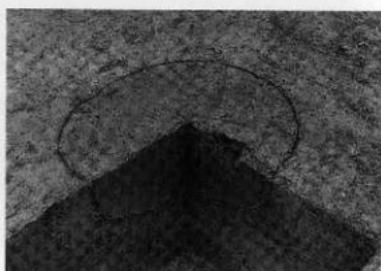
10号方形周溝墓北西部セクション



10号方形周溝墓主体部

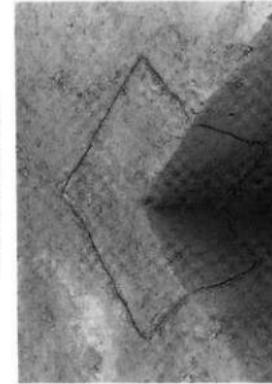
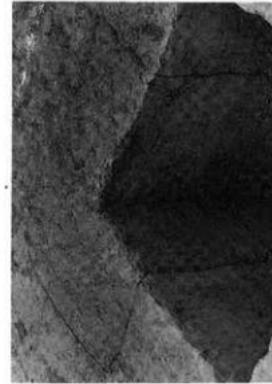
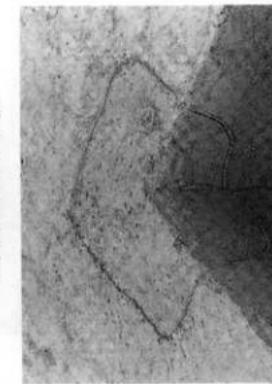
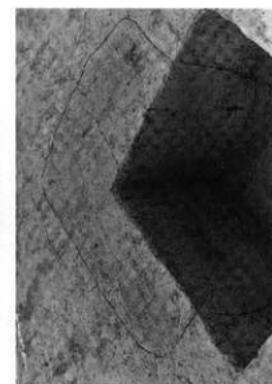
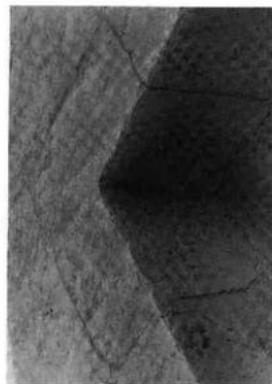
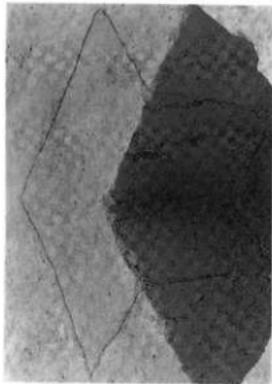


10号方形周溝墓主体部(西より)



10号方形周溝墓柱穴⑨

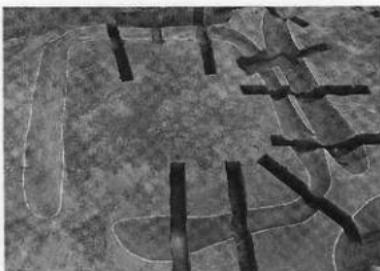
図版 9



図版10



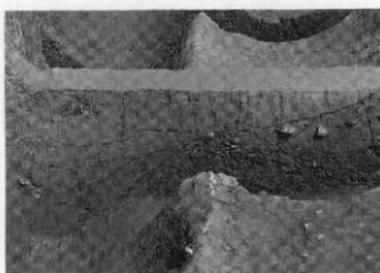
11号方形周溝墓(東より)



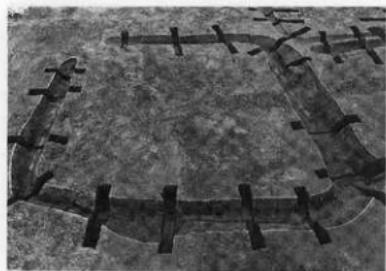
12号方形周溝墓



13号方形周溝墓



12・18号方形周溝墓セクション



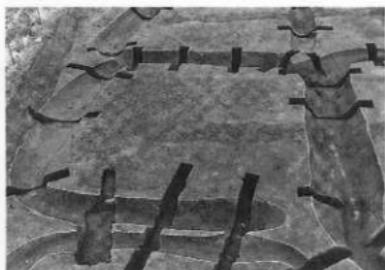
13号方形周溝墓(北より)



13・14号方形周溝墓境北部セクション



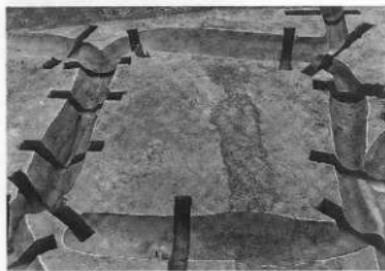
13号方形周溝墓北西部調査状況



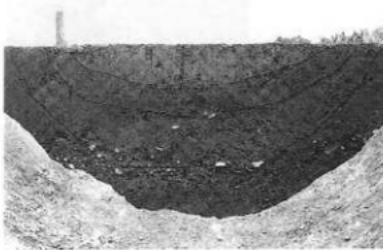
14号方形周溝墓(南より)



14号方形周溝墓北西部セクション



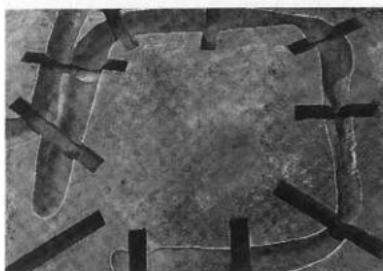
15・16号方形周溝墓(東より)



15号方形周溝墓セクション



15・16・17号方形周溝墓



17号方形周溝墓(東より)



6号溝状遺構、5号住居跡

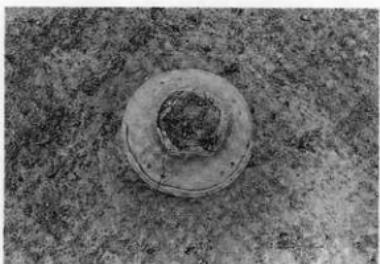
図版12



IV区G-1グリッド出土遺物



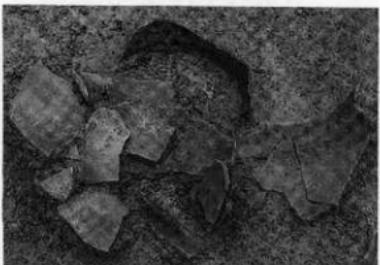
III区I-17グリッド出土遺物



IV区G-5グリッド出土遺物



IV区G-2グリッド出土遺物



IV区J-2グリッド出土遺物



IV区D-3グリッド出土遺物



1号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物



2号住居跡出土遺物



4号住居跡出土遺物



11号住居跡出土遺物

図版14



12号住居跡出土遺物



13号住居跡出土遺物



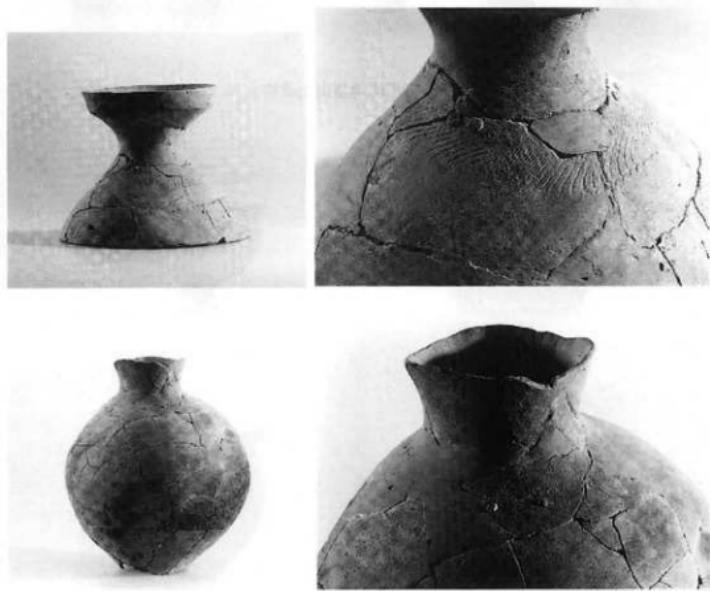
14号住居跡出土遺物



15号住居跡出土遺物



5号方形周溝墓出土遺物

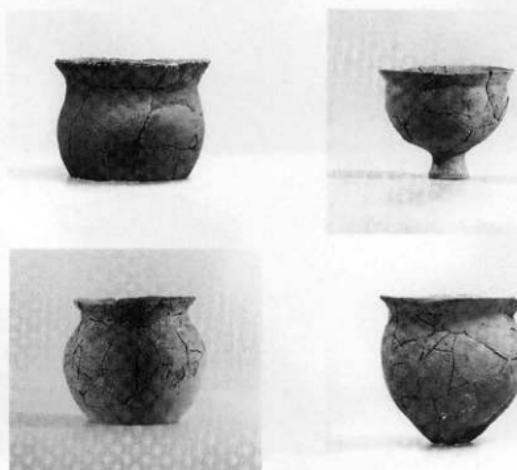


6号方形周溝墓出土遺物

図版16



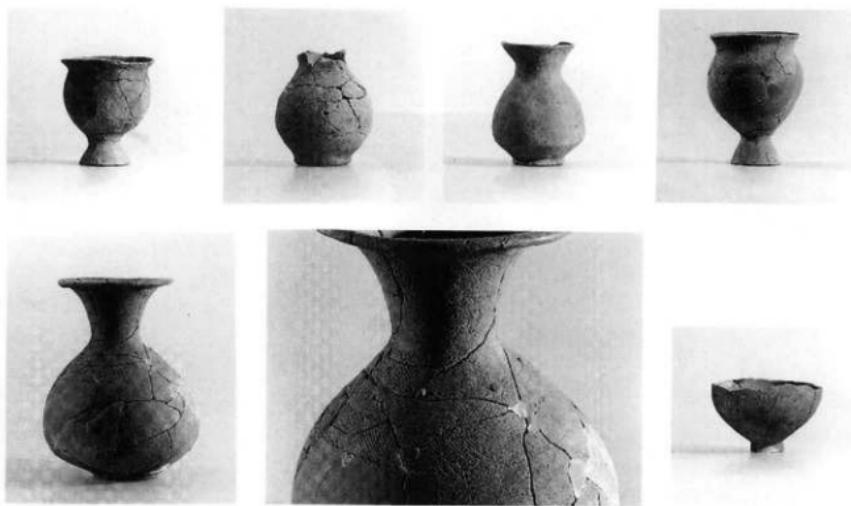
6号方形周溝墓出土遺物



7号方形周溝墓出土遺物



8号方形周溝墓出土遺物



9号方形周溝墓出土遺物

图版18



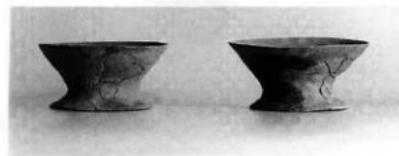
10号方形周溝墓出土遗物



15号方形周溝墓出土遗物



5号土坑出土遗物



グリッド出土遺物

図版20



グリッド出土遺物

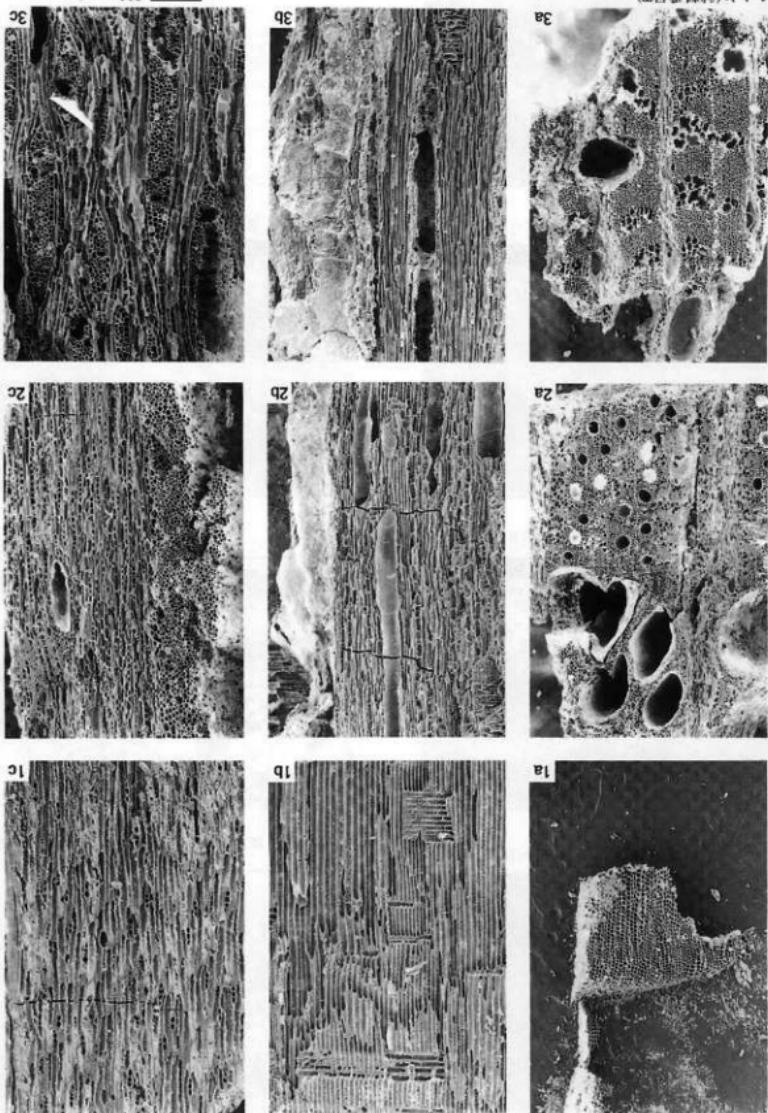
10号方形圓溝葉・木材圓皮

a : 横口、b : 縦目、c : 縦目

3. A7777 (試料番号P)

2. 2号材(試料番号U)

1. 3号材(試料番号T)



図版21

圖版22

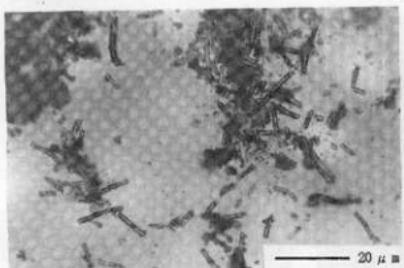


写真1 試料Cのパイプ状粒子(光顯写真、×250)

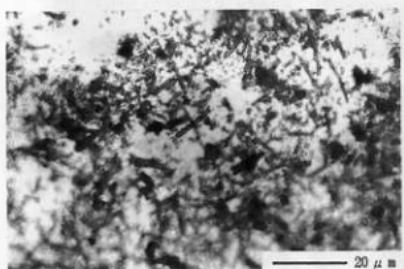


写真2 同上(別の位置)

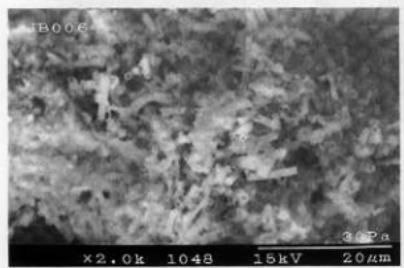


写真3 試料Bのパイプ状粒子(光顕写真、×2000)

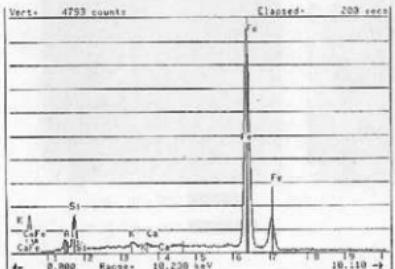


図1 試料Cの定性分析結果(×2000で小区域面分析)

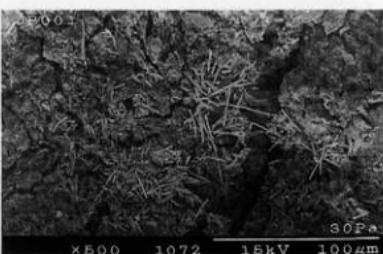


写真4 土器付着のパイプ状粒子(光顕写真、 $\times 250$)

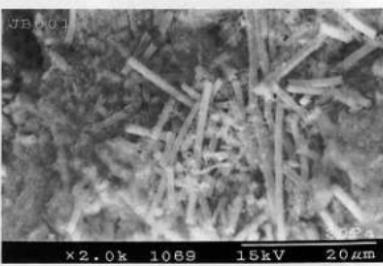


写真5 写真4の部分拡大(×2000)

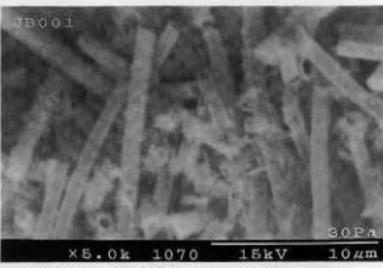


写真6 写真5の部分拡大(光顕写真、×5000)

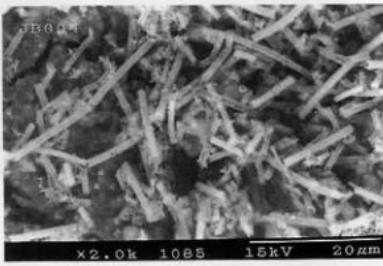


写真7 土器付着のパイプ状粒子(別の位置、×2000)

報告書概要

フリガナ	ジュウゴショイセキ
書名	十五所遺跡
副題	一般国道52号(甲西道路)改築工事および中部横断自動車道建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告第158集
編著者名	米田明訓・保坂一英・保坂康夫
発行者	山梨県教育委員会・建設省甲府工事事務所・日本道路公団東京建設局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3016
印刷所	横河グラフィックアーツ株式会社
印刷日・発行日	平成11年3月26日・平成11年3月31日
遺跡所在地	山梨県中巨摩郡御形町十五所および吉田
1/25000地図名・位置	小笠原 北緯35°37'06" 東経138°28'50" 標高290m
概要	主な時代 弥生時代中期・後期、古墳時代前期、平安時代
	主な遺物 弥生土器、土師器、石器
	特殊遺物・構造 方形柱穴列を伴う主体部を有する方形周溝墓
調査期間	平成6年5月9日～平成6年12月27日
	平成7年4月10日～平成7年12月26日
	平成8年4月15日～平成8年12月26日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告第158集

十五所遺跡

—一般国道52号(甲西道路)改築工事および
中部横断自動車道建設に伴う発掘調査報告書—

印刷日 平成11年3月26日
 発行日 平成11年3月31日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行 山梨県教育委員会
 建設省甲府工事事務所
 日本道路公団東京建設局
 印刷 横河グラフィックアーツ株式会社
 甲府市高室町155番地 横河電機(株)甲府事業所内
 TEL 055-243-0548
 URL : <http://www.yokogawa.co.jp/YGA/>

